

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅸ

角 地 田 遺 跡
平 遺 跡

2009

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅸ

かく ち だ
角 地 田 遺 跡
たいら
平 遺 跡

2009

新潟県教育委員会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京を基点に上越新幹線高崎駅から分岐し、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・小浜市を経て大阪市に至る総延長700kmの新幹線鉄道です。全面開通により、北陸地方と関東圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に伴って実施した糸魚川市大字小見に所在する角地田遺跡、平遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査によって角地田遺跡では古代・中世の遺物が出土し、平安時代の遺構が見つかりました。これらの遺構・遺物から10世紀後半と11世紀には集落が営まれていたものと思われます。また、出土品の墨書・刻書土器の「臣」から集落名の大字「小見」は10世紀後半まで遡るものと推測されます。平遺跡では断続的に古代から近世までの遺物が見つかりましたが、いずれも洪水等の再堆積による遺物散布地と推定されます。

西頸城郡旧能生町では、これまで発掘調査が行われた例がほとんどなく、貴重な古代の資料を提供できたものと考えています。

これらの発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大なご協力とご理解をいただいた糸魚川市教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで格別なご配慮をいただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線建設局、同能生鉄道建設所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成21年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

例 言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字小見字木下132番地1ほかに所在する角地田遺跡、同じく大字小見字横枕258番地ほかに所在する平遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は北陸新幹線建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委）が独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線建設局（以下、鉄道運輸機構）から受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。埋文事業団は、発掘調査作業および関連諸工事を株式会社みくに考古学研究所に委託し、埋文事業団の管理・監督のもと平成19年5月から9月にかけて実施した。発掘調査面積は、角地田遺跡が2,135㎡、平遺跡が700㎡である。
- 4 航空写真の撮影は、株式会社スカイサーベイに委託した。
- 5 整理及び報告書作成にかかる作業は、当該年度に埋文事業団の管理・監督のもと株式会社みくに考古学研究所が行った。
- 6 出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記記号は、角地田遺跡は「07カクチ」、平遺跡については「07平」とし、出土地点・遺構名・層位等を併記した。
- 7 本書で示す方位はすべて真北である。
- 8 引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に掲載した。「第Ⅲ章4 自然科学分析」については、引用文献を節末に掲載した。
- 9 「第Ⅲ章4 自然科学分析」はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 10 輸入陶磁器については山本信夫氏（金沢大学埋蔵文化財センター）に、珠洲焼、瀬戸・美濃焼は水沢幸一氏（新潟県胎内市教育委員会）にご教示をいただいた。
- 11 本書の執筆は、高橋保雄（埋文事業団調査課課長代理）の指導のもと、實川順一（株式会社みくに考古学研究所 研究室室長）、長澤展生（同 主任研究員）、田中一穂（埋文事業団調査課嘱託員）が行い、實川順一が中心となって編集にあたった。執筆分担を以下に示す。
第Ⅰ章Ⅰ…高橋保雄
第Ⅰ章2・第Ⅲ章2…實川順一・長澤展生
第Ⅲ章3E 文字資料…田中一穂
第Ⅳ章…實川順一
上記以外…長澤展生
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示と協力をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。（五十音順、敬称）
相羽重徳 荒井秀規 安藤正美 金子拓男 木島 勉 笹沢正史 佐藤雅一
高島英之 水沢幸一 山岸洋一
糸魚川市教育委員会 糸魚川市大字小見町内会

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	2
1) 角地田遺跡	2
2) 平 遺 跡	4
C 整 理	4
D 調査・整理体制	4

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺環境

1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7
A 周辺の遺跡	7
B 能生地区の古代・中世	9
1) 古 代	9
2) 中 世	10

第Ⅲ章 角地田遺跡

1 調査の概要	13
A グリッドと調査区の設定	13
B 基本層序	13
C 遺構と遺物の検出状況	16
2 遺 構	17
A 概 要	17
B 記述の方法	17
C 遺 構 各 説	18
1) 掘立柱建物	18
2) 柵	19
3) 土 坑	19
4) 配石遺構	20
5) 溝	20
6) 性格不明遺構	21
7) 柱 穴	22
8) 杭	22
3 遺 物	23
A 概 要	23
B 記述の方法	23
C 遺物の分類	24
1) 平安時代の土器・陶磁器の分類	24
2) 中世陶磁器の分類	28
D 遺物各説	29
1) 土器・陶磁器	29
2) 土 製 品	35
3) 鉄関連遺物	36
4) 石 製 品	36
5) 木 製 品	36
E 文字資料	37
1) 木簡について	37
2) 墨書土器について	37
3) 「臣」の墨書土器について	40
4) 「臣」の墨書土器のまとめ	42

4	自然科学分析	44		
A	はじめに	44	B 試料	44
C	分析方法	44	D 結果	45
E	考察	50		
5	まとめ	55		
A	出土遺物について	55		
	1) 10世紀の土器・陶磁器	55	2) 11世紀代の土器	56
B	検出遺構と遺跡の性格	57		
	1) 遺構の時期的変遷	57	2) 遺跡の性格	61

第IV章 平 遺 跡

1	調査の概要	62		
A	調査区と調査方法	62		
B	基本層序	62		
C	遺構と遺物の検出状況	64		
2	遺物	65		
3	まとめ	65		
	〈要約〉	66		
	〈引用・参考文献〉	67		
	〈角地田遺跡遺構観察表・遺物観察表〉	69		
	〈平遺跡遺物観察表〉	84		

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第12図	角地田遺跡	管状土錘法量グラフ	35
第2図	角地田遺跡 確認トレンチの位置と本調査範囲(1)	3	第13図	角地田遺跡	墨書・刻書土器	38
第3図	平遺跡 確認トレンチの位置と本調査範囲(2)	3	第14図	角地田遺跡	墨書・刻書土器分布	39
第4図	能生周辺の地形	6	第15図	下宿内山遺跡	出土「臣」墨書土器	40
第5図	遺跡分布図	8	第16図	角地田遺跡	「臣」崩し字の分類	41
第6図	遺跡周辺の更正図	11	第17図	角地田遺跡	花粉化石群集の層位分布	46
第7図	角地田遺跡 基本層序	14	第18図	角地田遺跡	植物珪酸体含量の層位分布	48
第8図	角地田遺跡 遺物重量分布図(Vc層出土遺物)	16	第19図	角地田遺跡	花粉化石・植物珪酸体・木製品の切片顕微鏡写真	54
第9図	角地田遺跡 遺構の形態分類図	17	第20図	角地田遺跡	食膳具の法量	56
第10図	角地田遺跡 古代の土器器種分類概念図(1)	25	第21図	角地田遺跡	遺構変遷図(1)	58
第11図	角地田遺跡 古代の土器器種分類概念図(2)	26	第22図	角地田遺跡	遺構変遷図(2)	59
			第23図	平遺跡	基本層序	63

表目次

第1表	遺跡一覧表	8	第8表	角地田遺跡	器種構成比率(包含層)	33
第2表	能生町の近世石高推移	11	第9表	角地田遺跡	中世陶磁器の集計表	34
第3表	角地田遺跡 1区の土層説明	13	第10表	角地田遺跡	花粉分析結果	46
第4表	角地田遺跡 2区の土層説明	15	第11表	角地田遺跡	植物珪酸体含量	48
第5表	角地田遺跡 遺構の形態分類表	17	第12表	角地田遺跡・平遺跡	樹種同定結果	49
第6表	角地田遺跡 器種構成比率(SK)	30	第13表	平遺跡	土層説明	62
第7表	角地田遺跡 器種構成比率(SD・SX)	31				

図版目次

[図面図版]

図版1	角地田遺跡	位置と周辺地形図	図版18	角地田遺跡	遺構個別図(11) 性格不明遺構 柱穴
図版2	角地田遺跡	遺構全体図(1)	図版19	角地田遺跡	遺構個別図(12) 柱穴 杭
図版3	角地田遺跡	遺構全体図(2)	図版20	角地田遺跡	遺物実測図(1)
図版4	角地田遺跡	遺構分割図(1)	図版21	角地田遺跡	遺物実測図(2)
図版5	角地田遺跡	遺構分割図(2)	図版22	角地田遺跡	遺物実測図(3)
図版6	角地田遺跡	遺構分割図(3)	図版23	角地田遺跡	遺物実測図(4)
図版7	角地田遺跡	遺構分割図(4)	図版24	角地田遺跡	遺物実測図(5)
図版8	角地田遺跡	遺構個別図(1) 掘立柱建物	図版25	角地田遺跡	遺物実測図(6)
図版9	角地田遺跡	遺構個別図(2) 掘立柱建物 柵	図版26	角地田遺跡	遺物実測図(7)
図版10	角地田遺跡	遺構個別図(3) 掘立柱建物	図版27	角地田遺跡	遺物実測図(8)
図版11	角地田遺跡	遺構個別図(4) 掘立柱建物 柵	図版28	角地田遺跡	遺物実測図(9)
図版12	角地田遺跡	遺構個別図(5) 掘立柱建物	図版29	角地田遺跡	遺物実測図(10)
図版13	角地田遺跡	遺構個別図(6) 土坑	図版30	角地田遺跡	遺物実測図(11)
図版14	角地田遺跡	遺構個別図(7) 土坑 柱穴 溝	図版31	角地田遺跡	遺物実測図(12)
図版15	角地田遺跡	遺構個別図(8) 配石遺構 溝	図版32	角地田遺跡	遺物実測図(13)
図版16	角地田遺跡	遺構個別図(9) 溝	図版33	角地田遺跡	遺物実測図(14)
図版17	角地田遺跡	遺構個別図(10) 溝 性格不明遺構	図版34	平遺跡	遺物実測図

[写真図版]

- 図版35 角地田遺跡 遠景 近景
図版36 角地田遺跡 全景 基本層序
図版37 角地田遺跡 遠景 全景 1区完掘 基本層序 掘立柱建物(1)
図版38 角地田遺跡 掘立柱建物(2)
図版39 角地田遺跡 掘立柱建物の柱穴
図版40 角地田遺跡 掘立柱建物と柵の柱穴 土坑(1)
図版41 角地田遺跡 土坑(2)
図版42 角地田遺跡 土坑(3) 配石遺構
図版43 角地田遺跡 溝(1)
図版44 角地田遺跡 溝(2)
図版45 角地田遺跡 溝(3)
図版46 角地田遺跡 溝(4)
図版47 角地田遺跡 溝(5)
図版48 角地田遺跡 溝(6)
図版49 角地田遺跡 溝(7) 性格不明遺構(1)
図版50 角地田遺跡 性格不明遺構(2)
図版51 角地田遺跡 柱穴
図版52 角地田遺跡 杭(1)
図版53 角地田遺跡 杭(2) T1～T3完掘 基本層序
図版54 角地田遺跡 土器(1)
図版55 角地田遺跡 土器(2)
図版56 角地田遺跡 土器(3)
図版57 角地田遺跡 土器(4)
図版58 角地田遺跡 土器(5)
図版59 角地田遺跡 土器(6)
図版60 角地田遺跡 土器(7)
図版61 角地田遺跡 土器(8)
図版62 角地田遺跡 土器(9) 土製品
図版63 角地田遺跡 鉄関連遺物 石製品 木製品
図版64 角地田遺跡 墨書土器 刻書土器 木簡
図版65 平遺跡 基本層序 遺物出土状況 完掘
図版66 平遺跡 土器 木製品

第 I 章 序 説

1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道である。東京駅を基点として、上越新幹線高崎駅で分岐し、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・福井県小浜市などを經由し、東京都と大阪市を結ぶ路線である。総延長700km（東京・高崎間の105kmは上越新幹線と供用）のうち、高崎・長野間は既に平成9（1997）年10月に開業している。その後、平成10年3月には長野市を基点とし、長野県飯山市を経て上越市に至る長野・上越間の延長60kmの工事実施計画が認可された。

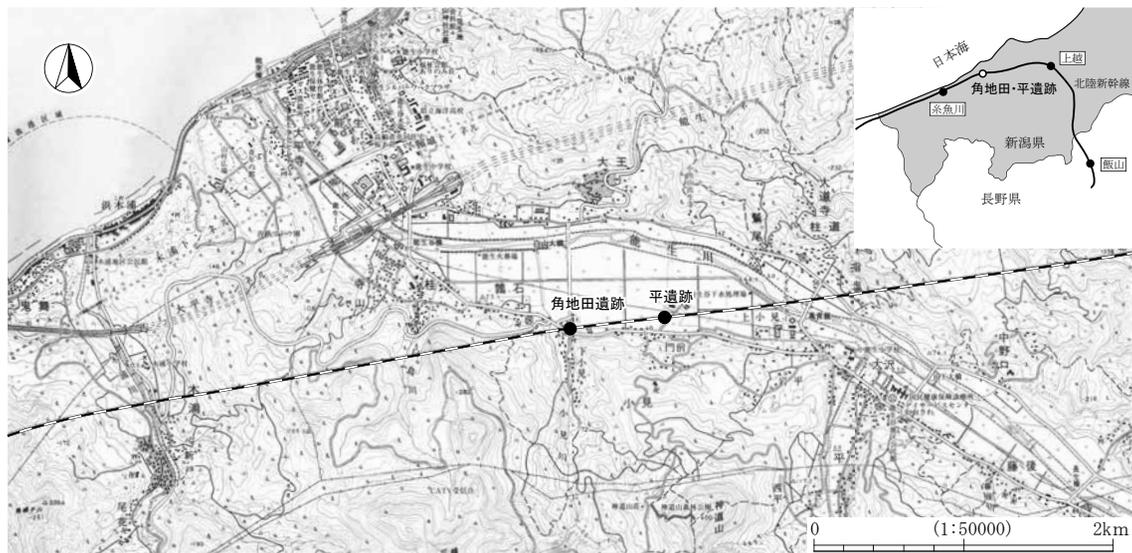
一方、上越市から富山市までの約110kmの区間は、平成5年9月に糸魚川・魚津間が新幹線鉄道規格路線として工事実施計画が認可され、平成13年4月には上越・糸魚川間及び新黒部・富山間の新規着工が認可された。

これを受けて、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

平成14年3月に鉄道運輸機構から上越・糸魚川間37kmの分布調査の依頼を受け、平成14年4月に県教委が調査を実施した。その結果、周知の角地田遺跡を含む12地点で遺物を採集した。さらに地形的特徴から遺物採集地以外の地点も含め、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等は不明であるものの、今後、試掘確認調査を実施して取り扱いを判断する必要があると回答した。

平成15年9月、鉄道運輸機構から糸魚川市小見地内の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。平成15年11月、平成16年11月、平成18年10月の試掘確認調査の結果、角地田遺跡は1,900㎡、平遺跡は2,810㎡の本発掘調査が必要と回答した。

試掘確認調査の結果を受けて、鉄道運輸機構は県教委に対し両遺跡の発掘調査の実施を要望した。平成18年3月、鉄道運輸機構から県教委が受託し、同年5月から埋文事業団が本発掘調査に着手した。



第1図 遺跡の位置

(国土地理院発行 平成14年「名立大町」平成15年「横」1:25,000原図)

2 調査と整理作業

A 試掘確認調査

角地田・平遺跡の試掘確認調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が、北陸新幹線法線や消雪基地・坑外設備予定地を対象として、平成15・16～19年度に実施した。調査対象面積は合計で30,458㎡に及び、その内訳は、15年度8,660㎡、16年度11,270㎡、18年度10,400㎡、19年度128㎡である。

調査は、調査対象範囲内に任意にトレンチを設定し、バックホーや人力で掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。さらに土層堆積状況、トレンチの位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。

調査の結果、新幹線法線の200k020m～200k120mの範囲には、古代の遺構・遺物が良好に残存し、角地田遺跡は本発掘調査の対象となった。面積は1,900㎡である。また、199k500m～199k620mの範囲は遺構・遺物の検出はあったが、次年度に作付けが行われるなどの制約から、検出遺構の帰属時期が明確に出来ないなど調査が不十分となった。そのため、当区域を平遺跡として再度確認調査を行うこととなった。調査対象面積は2,810㎡である。なお、18-9～13トレンチの消雪基地、15-2～8トレンチの坑外設備予定地と199k620m～200k020mの範囲は、検出遺構や出土遺物が希薄であることから、本発掘調査対象外とした。

B 本発掘調査

1) 角地田遺跡

調査の経過 本発掘調査は、平成19年5月1日～9月6日にかけて実施した。調査区は、調査の便宜を図るため、本遺跡の東側の一段低い低地を1区、その上段の扇状地上を2区とした。2区はさらに、中央の基本層序セクションベルト（8A～8Bグリッド西側）を境として、その東側を2区A、西側を2区Bに区分した。さらに、北陸新幹線橋脚建設予定地をT1～T3と仮称した（第7図）。

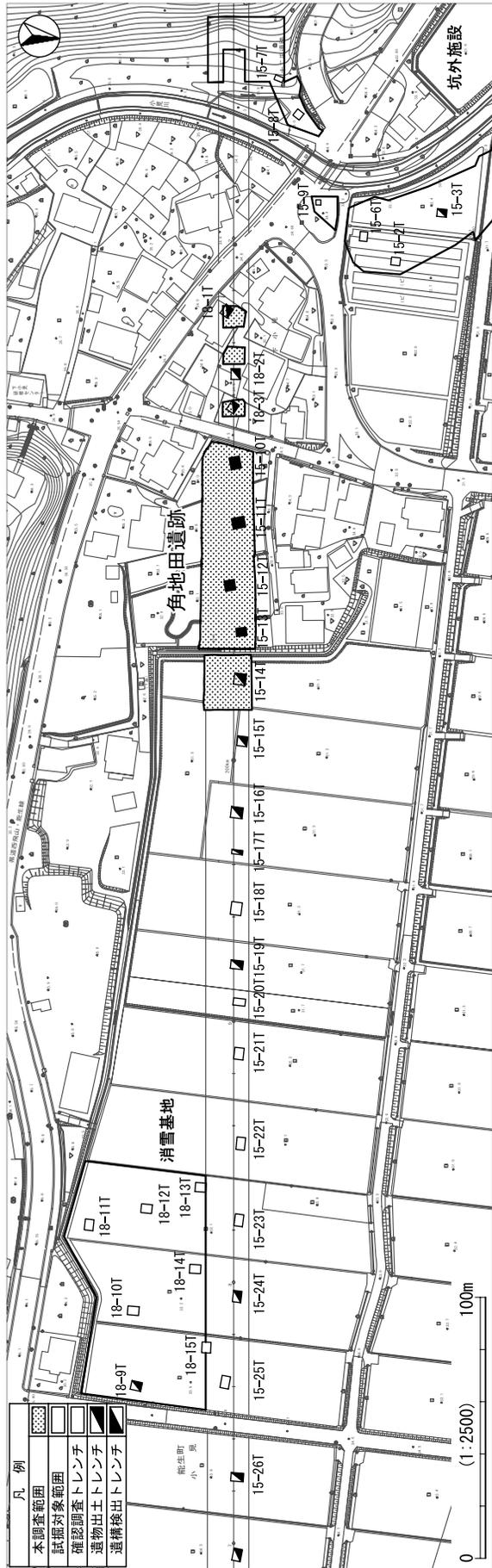
調査は5月初旬、暗渠工事から着手し、同月15日には、表土除去を開始した。発掘調査は5月21日から本格化し、作業員45名（3班編成）を投入して1区と2区の包含層掘削を開始した。同月24日にはT1～T3の開渠掘削と包含層掘削も開始し、1区・2区、T1～T3の3地区が同時並行の作業を行った。

その後、6月7日にT1～T3の調査が終了し、6月下旬の27日には1区の発掘調査も完了した。

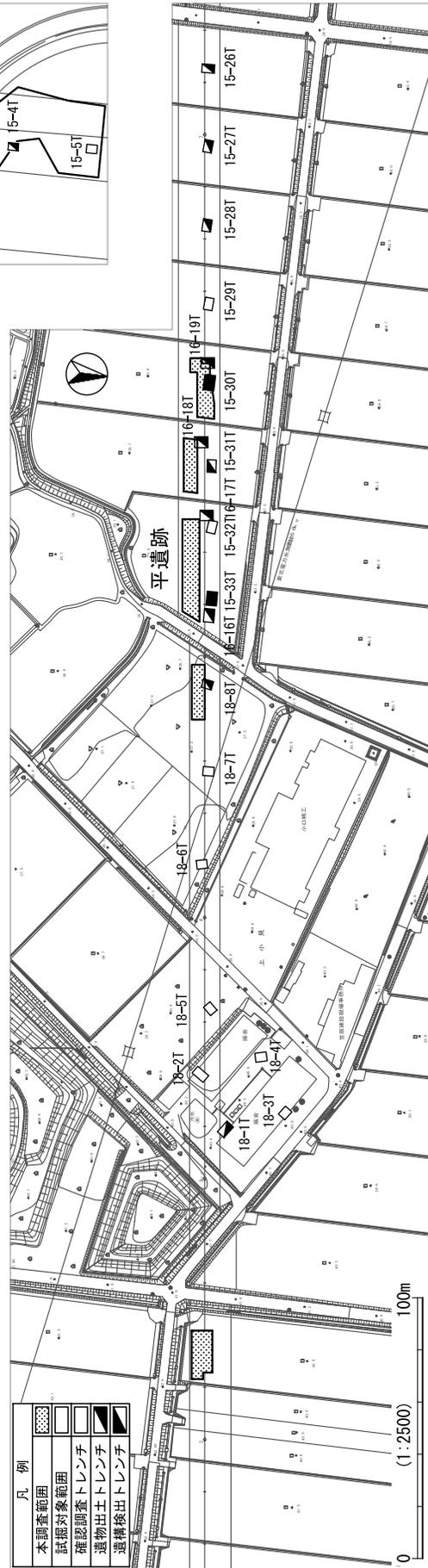
7月以降は角地田遺跡の主体である2区を中心に遺構調査を行ったが、当初終了の予定であった7月末日の終了が困難となった。そのため鉄道運輸機構、県教委、埋文事業団の三者で協議を行い、調査の延長を決定した。8月上旬、VI層上面の遺構調査の大部分が終了し、8月10日に航空写真撮影を行った。

その後は、礫層を覆土とする大規模な溝（SD853）の検出・掘削、地山面であるVI層以下の掘下げを行うとともに、再度、掘立柱建物の配列確認作業を行った。8月29日、県教委の終了確認を受け、9月6日には地山面以下の土層堆積状況を確認するための深掘りや、残務処理を終え現場を撤収した。そして、9月7日に調査区を鉄道運輸機構に引き渡した。

発掘調査の方法 表土剥ぎは、調査員立会いの下、バックホーを用い慎重に行った。包含層及び開渠はホソを用い慎重に掘削し、遺構確認等はデルタホーを用い検出に努めた。土層断面等の図化は基本的に手作業で行い、遺構の平面図等はトータル・ステーションを用いてデジタルによる測量図面を作成した。遺物の取り上げは、基本的に、小グリッドあるいは遺構単位で行ったが、遺物が集中するSK577・698等では、トータル・ステーションによる遺物ドット化を図った。遺跡の完掘写真は、ラジコンヘリコプターに



第2図 角地田遺跡 確認トレンチの位置と本調査範囲(1)



第3図 平遺跡 確認トレンチの位置と本調査範囲(2)

2 調査と整理作業

よる空中写真の撮影を行い、各方角からの俯瞰写真などを撮影した。

2) 平 遺 跡

平遺跡の確認調査は平成19年5月15日～8月1日にかけて実施した。北陸新幹線法線内（199k500m～199k620mの範囲）の東側法線に沿って調査区を5か所設定し、それぞれを101区～105区と呼称した（第23図）。発掘調査は101区から重機を用い表土除去を行い、人力による遺構・遺物の確認を行った。また、土層の堆積状況、調査区の位置、遺物の出土状況を図面や野帳、写真に記録した。

調査は排水作業が終了した6月26日から本格化した。101区から開始し、遺物包含層で古代の遺物を得るに至った。6月29日、102区の調査に着手し、遺物包含層の上面で遺物がやや集中する川跡を検出し、7月初旬には、103区に調査の主体を移した。同区では、遺構の検出は無かったが、混入ながら古代の遺物が出土している。同月11日には104区の調査に入り、整地層の下部に近世陶磁器が出土し、打たれた杭（くい）や柵（しがらみ）なども検出した。しかしながら、これらの遺構は、出土遺物や土層堆積状況、周辺の聞き取り調査から近代以降の所産と判断した。その後、7月25日に104区を完掘し、102区～104区の調査は完了した。翌日、105区の調査を開始した。遺構の検出は無かったが、出土遺物には古代の須恵器や木製品があった。8月1日、同区を完掘し、埋め戻し作業を行い、翌日鉄道運輸機構に引き渡した。以上の結果、平遺跡の一部を遺物散布地として認識するに至った。

C 整 理

角地田遺跡と平遺跡の整理は並行して行った。遺物の水洗、注記、接合・復元作業、遺構図面・記録類等の整理は、調査現場で発掘調査と並行して行った。9月から報告書作成の作業を本格化させ、遺構の仮図版作成、遺物実測・トレース、遺物の分類、計量・計測等を順次行い、12月から遺構図面のデジタルトレース、観察表の作成、遺物写真撮影（ニコンD50を使用）、図版作成・原稿執筆等を行った。

D 調査・整理体制

試掘確認調査と本発掘調査及び整理作業は、以下のような期日と体制で行った。

【平成15年度試掘確認調査】

調査期間 平成15年11月4日～14日、12月8日～12日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 麟一）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 黒井 幸一（事務局長）

長谷川二三夫（総務課長）

藤巻 正信（調査課長）

庶 務 高野 正司（総務課班長）

調査指導 寺崎 裕助（調査課課長代理）

調査担当 石川 智紀（調査課班長）

調査職員 片岡 千恵（調査課嘱託員）

【平成16年度試掘確認調査】

調査期間 平成16年11月1日、5日～11日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 麟一）
 調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 管 理 黒井 幸一（事務局長）
 長谷川二三夫（総務課長）
 藤巻 正信（調査課長）
 庶 務 高野 正司（総務課班長）
 調査指導 山本 肇（調査課課長代理）
 調査担当 滝沢 規朗（調査課班長）
 調査職員 片岡 千恵（調査課嘱託員）

【平成18・19年度試掘確認調査】

調査期間 平成18年10月31日、11月6日、8日～10日、平成19年4月9日
 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
 調 査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
 管 理 波多 俊二（事務局長 平成18年度）
 木村 正昭（事務局長 平成19年度）
 斎藤 栄（総務課長）
 藤巻 正信（調査課長）
 庶 務 長谷川 靖（総務課班長）
 調査担当 田海 義正（調査課班長）
 調査職員 田中 一穂（調査課嘱託員）

【本調査・整理作業】

調査期間 平成19年5月1日～平成20年3月31日
 調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
 調 査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
 管 理 木村 正昭（事務局長）
 斎藤 栄（総務課長）
 藤巻 正信（調査課長）
 監 督 高橋 保雄（調査課担当課長代理）
 庶 務 長谷川 靖（総務課班長）
 支 援 組 織 株式会社 みくに考古学研究所
 現場代理人 貝瀬 功
 現場世話人 関 健二
 調査担当 實川 順一（研究室室長）
 調査職員 長澤 展生（主任研究員）
 桑原 健（研究員）
 補 助 員 今成 京子・江口 邦雄・貝瀬あゆみ・桑原 淳子・富沢由美子

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺環境

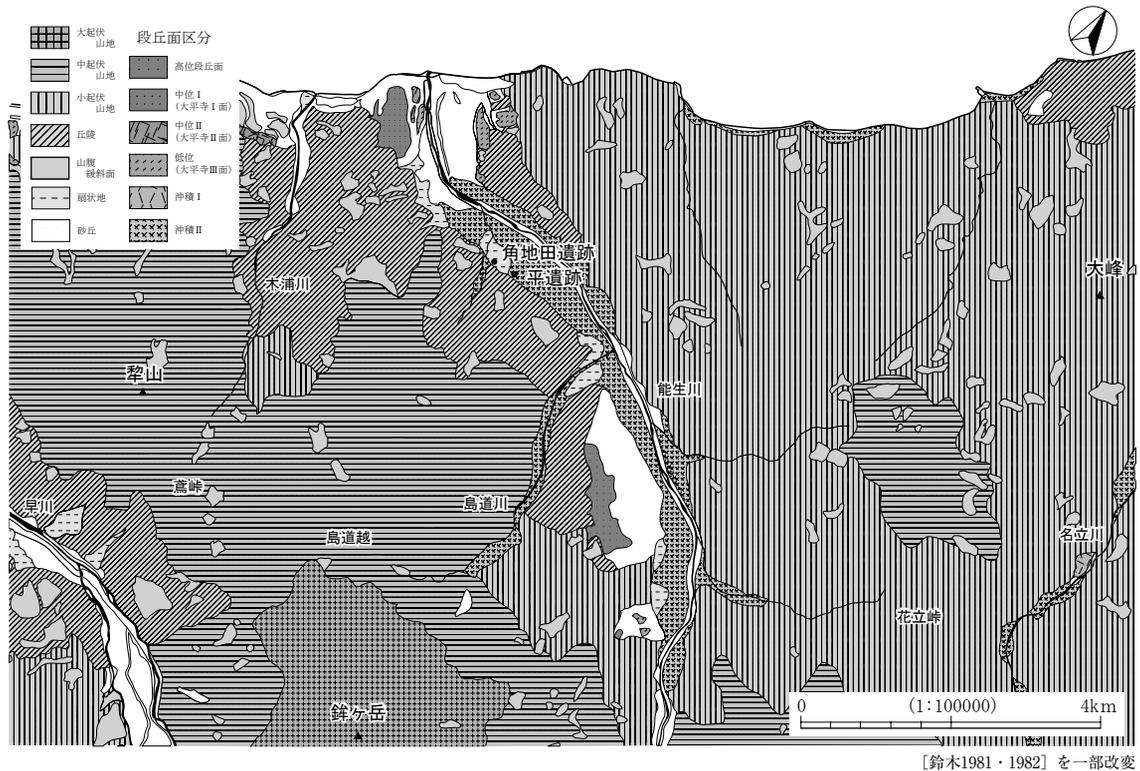
1 地理的環境

遺跡の位置と地形的特徴 角地田遺跡と平遺跡は、糸魚川市能生地区の大字小見および大字平に所在する。平成16年の合併以前は西頸城郡能生町に属し、その東は旧名立町と、西は糸魚川市早川地区と接していた。新潟県西部地域は、姫川流域に沿って、日本列島の地質構造を東西に分断する「糸魚川－静岡構造線」が走り、新第三紀層からなる「フォッサ・マグナ」地帯が広がっている。角地田遺跡や平遺跡周辺は、まさにこの「フォッサ・マグナ」地帯の中にあり、それを地質的背景とした西頸城山地と呼ばれる山地・丘陵性の地形を発達させている（第4図）。

西頸城山地には、その南方の長野県境付近の火打山（2462m）を頂点とし、放射状にのびる幾つかの尾根筋を生成している。そのうち、不動山（1430.1m）－花立峠－大峰（464.7m）へと至る連なりと、銚ヶ岳（1316.3m）－鳶峠－犁山（751.1m）へと至る山地・丘陵の連続は、能生川と早川・名立川両流域との分水嶺をなして、徳合浜や鬼舞へと至り、急傾斜の海食崖となって日本海に張り出している。

能生地区周辺に見られるこのような西頸城山地の地形は、フォッサ・マグナの硬い第三紀層と日本海の浸食によって、切り立つ崖がそのまま海へと落ち込む西頸城独特の地理的景観を生成した。火打山から連なる分水嶺の谷間は、能生川、早川といった河川によって開析され、「能生谷」や「早川谷」などと呼ばれる深い谷を刻み、谷底に狭隘な沖積低地を生み出した。

能生地区周辺の地形は、こうした西頸城山地や丘陵が地勢の大部分を占め、海食崖と狭小な沖積平野を



第4図 能生周辺の地形

地形的特徴としている。それは、時に人の往来を阻み「天下の險」と言われる北陸道の難所を生み出す大きな地理的要因となった。

フォッサ・マグナと周辺地形 西頸城山地に見られる地形的特徴は起伏に富んだ地形にあり、それは新第三紀の堆積層からなるフォッサ・マグナの地質的構造を反映している〔鈴木1981・1982、戸根ほか1987〕。能生地区周辺の西頸城山地において、前述の鉾ヶ岳－鳶峠－犁山へといたる分水嶺には、起伏量400～200mの中起伏山地が特徴的に分布し、一帯は相対的に新しい新第三紀の安山岩質溶岩（谷浜層）などが堆積する。一方の不動山－花立峠－大峰の分水嶺一帯は、起伏量が少ない小起伏山地が特徴であり、その周辺は相対的に古い新第三紀の泥岩や砂岩（名立層）などから構成されている。

また、西頸城山地が広がる能生とその周辺地域は、新第三紀堆積岩起源の地滑り地帯としても広く知られ、馬蹄形の滑落崖と階段状の緩斜面を特徴とする地滑り地形が無数に分布している〔鈴木1981・1982、高野ほか1986〕。これも、フォッサ・マグナを背景とする当地域の地形的特徴のひとつであり、広範な中起伏山地・丘陵に狭小かつ平坦な丘陵緩斜面を形成している（第4図）。

このように、能生地区周辺の分水嶺にみる山地の起伏量や地滑り地形に代表される丘陵緩斜面は、フォッサ・マグナの地質的構造を背景としており、西頸城山地一帯の地形的特徴の成因となっている。

段丘面について 能生谷周辺の遺跡が形成される地形は、フォッサ・マグナを成因とする丘陵緩斜面だけではない。能生川流域などの河川流域に分布する小規模な段丘面にも多数認められ、緩斜面をなす地滑り地形とともに、縄文・古代の遺跡が立地する貴重な平坦面となっている。段丘面は中位から低位に対比される洪積段丘（大平寺Ⅰ～Ⅲ面相当）と沖積段丘（高田面相当）からなり、能生川流域を中心として小規模ながら発達している〔鈴木1981・1982〕（第4図）。能生谷とその周辺は、前述のような起伏に富む丘陵性の地形的広がりを見せる一方、こうした遺跡が形成される段丘面や丘陵緩斜面を小規模ながらに発達させる地理的環境下にある。

2 歴史的環境

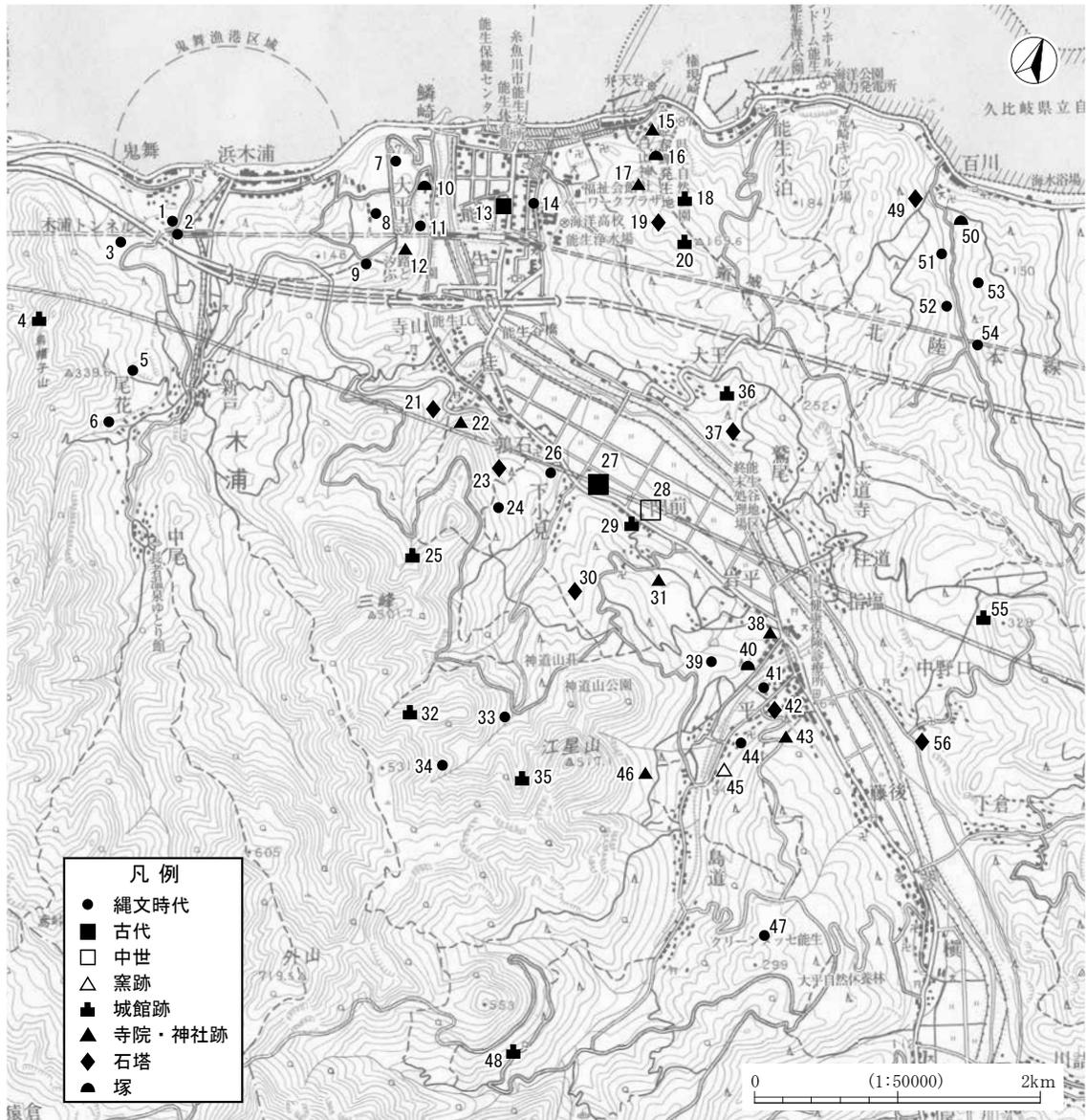
角地田遺跡の所在する糸魚川市能生地区には、能生川流域を中心として縄文時代から中世までの遺跡が多数存在する（第5図）。その大部分は縄文時代の遺跡であり、特に能生川左岸の中位・低位段丘面や丘陵緩斜面に多い。弥生時代以降の遺跡分布は希薄であり、沖積低地に分布する古代・中世の遺跡が少数周知化されているに過ぎない。縄文時代の遺跡分布に比べ、遺跡数の減少が著しい。ここでは、能生川流域を中心とした能生地区の遺跡を紹介し、ついで、文献などに見える古代・中世の動向を概観する。

A 周辺の遺跡

縄文時代 角地田遺跡や平遺跡周辺の縄文時代の遺跡は、能生川流域を中心に分布している。なかでも右岸の低位段丘面に立地する井ノ上遺跡（14）は、古くからその存在が知られ〔斎藤1937〕、能生周辺では最古となる縄文時代早期末葉の好資料が出土している〔室川ほか1986、寺崎1997〕。

縄文時代中期～後期は、能生地区で最も遺跡数が増加し、能生川流域には中期を主体とした前述の井ノ上遺跡や春日平遺跡（24）〔室川ほか1986〕、十二平遺跡（25）〔秦ほか1990〕などが分布している。このうち十二平遺跡は、能生川左岸の丘陵緩斜面に立地する遺跡で、竪穴住居24軒を検出した環状集落とされる。出土遺物には中期前葉～後期前葉の多量の縄文土器とともに、玉造関連遺物や磨製石斧製作関連遺物が出

2 歴史的環境



国土地理院「高田西部」〔糸魚川〕1:50000原図

第5図 遺跡分布図

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	鬼舞	15	能生白山旧神社跡	29	小見館跡	43	東晃寺跡
2	鬼舞Ⅱ	16	坪山経塚	30	龍光寺の五輪塔	44	山の上
3	石田	17	坪山の寺院跡	31	飯寺跡	45	井の口焼窯跡
4	木浦城址	18	乳母が懐館跡	32	差卸館跡	46	白山神社跡
5	菊干山	19	神家山石塔群	33	葎沢	47	大平
6	殿村	20	能生城址	34	西すまき	48	番屋跡
7	大平寺北	21	大法院跡の石塔群	35	殿屋敷（平城）	49	百川阿弥陀堂の石塔群
8	大平寺西	22	寺屋敷（大法院跡）	36	小出山の館跡	50	ハシドの封塚
9	布引	23	明福寺の五輪塔	37	小出山出生寺の石塔群	51	上の山
10	大平寺の一石一字経塚	24	春日平	38	大神社	52	大上
11	大平寺南	25	小見城址	39	隠殿	53	上野
12	寺院跡	26	十二平	40	森本封塚	54	金剛野
13	内の間	27	角地田	41	中江	55	中野口城址
14	井の上	28	平	42	大沢の五輪塔	56	双源寺の五輪塔群

第1表 遺跡一覧表

土し、その量と質で注目されている〔秦^{ほか}1990、寺崎1997〕。

また、能生川流域以外でも、木浦川流域の鬼舞遺跡（1）や鬼舞Ⅱ遺跡（2）〔戸根^{ほか}1987〕、百川流域の金剛野遺跡（54）〔室川^{ほか}1986〕、筒石川流域の平畑遺跡〔小島^{ほか}1983〕が該期の遺跡として知られている。これらは段丘面や丘陵緩斜面に立地する遺跡で、金剛野遺跡では1973年の分布調査で硬玉製磨製石斧（玉斧）が採取されている〔小島^{ほか}1983〕。また、1982年に発掘調査が実施された平畑遺跡では、中期前葉から後期前葉の縄文土器や、硬玉製大珠などの玉造関連遺物が出土している。

角地田遺跡や平遺跡周辺では、以上のような中期を主体とした遺跡が、段丘面や丘陵斜面部に集落遺跡を形成し、多くが硬玉製大珠などの玉造関連遺物を伴っている。

弥生・古墳時代 角地田遺跡や平遺跡周辺では、弥生・古墳時代の遺跡は極めて少なく、その様相は明らかでない。かろうじて古墳時代前期の土師器が井ノ上遺跡（14）〔室川^{ほか}1986〕で出土しているが、弥生時代に至っては皆無に等しい。

古代・中世 角地田遺跡や平遺跡周辺の古代・中世遺跡は、能生川流域に点在するが、その多くは前述の縄文時代の遺跡において少量の遺物が出土するにとどまる。これらは丘陵緩斜面や段丘面に立地する遺跡であり、井ノ上遺跡、十二平遺跡（26）などが代表的な事例である。一方、内の間遺跡（13）や角地田遺跡（27）、平遺跡（28）〔室川^{ほか}1986〕などは沖積低地に立地する遺跡である。しかしながら、沖積地に存在する古代・中世の遺跡は、未だ少数の分布にとどまっている。

能生地区では、以上のほかに、中世の寺院跡や城館跡などが分布している。明福寺（23）、大沢（42）、龍光寺（30）などの五輪塔や飯寺（31）、東晃寺（43）などの真言宗寺院跡がある。これらは、現鶉石集落から大沢集落にかけての丘陵緩斜面や段丘面に存在し、やや集中した分布傾向を示す。周辺の城館跡としては小見館跡（29）や平城（35）などが知られている〔室川^{ほか}1986〕。

海岸部では、当遺跡周辺の徳合沖や名立沖の海底で、中世の珠洲焼や須恵器の水瓶が揚陸されている〔室岡1972、伊藤^{ほか}1975、春日2007〕。古代・中世の海路による移動を示す可能性があり注目される。

B 能生地区の古代・中世

1) 古代

奈良・平安時代の能生 古代の新潟県域は、越^{こし}（高志）の一部であった。越^{のち}の国域は後の越前・越中・越後を含む広大な領域であり、奈良時代の7世紀中葉には阿賀野川以北を含んでいたものと推測されている。7世紀末の越の3分割、大宝2（702）年の越中4郡（頸城郡・古志郡・魚沼郡・蒲原郡）の越後編入〔米沢1980〕、和銅5（712）年の出羽国の成立（出羽郡の分立）を経て、越後の国域が成立する。奈良時代の能生地区は、こうして成立した越後の領域にあった〔山田1986〕。

平安時代には、延長5（927）年の『延喜式』や承平年間（931～937）に成立した『和名類聚抄』によって、頸城郡などの越後7郡の存在が知られる。そのうち、頸城郡には「沼川郷、都宇郷、栗原郷、荒木郷、板倉郷、高津郷、物部郷、五十公郷、夷守郷、佐味郷」の郷名がみえ、能生地区を含む西頸城の広い区域は、沼川郷に比定されている〔青木1976、山田1986〕。

沼川郷の成立時期については、今のところ上記の『和名類聚抄』以外には文献上になく、不明とせざるを得ないが、頸城郡の成立は、奈良時代の天平勝宝4（752）年の造東大寺司牒の「頸城郡胆君郷」、天平勝宝年中（749～757）の東大寺正倉院御物の庸布の「久正郡夷守郷」などの郡・郷名の記載から、少なくとも8世紀半までに遡るものと考えられる。

2 歴史的環境

このように奈良・平安時代の能生とその周辺は、こうした断片的な文献資料から、頸城郡に属し、少なくとも10世紀前葉には沼川郷の郷域に含まれていたものと推測される。

なお、『北越風土記節解』などの文献には、「鶉石郷」の郷名が見られる。この「郷」については、『能生町史』〔室川ほか1986〕などの解釈のように、現大沢集落周辺を指す「大沢郷」の呼称があることや、これらが後世の記述であることから、正式の行政単位ではなく、「さと」の意味で用いられたものと考えられる。

能生地区の式内社 10世紀初頭の『延喜式』によれば、頸城郡に存在する式内社として13社の記載がみえる。このうち沼川郷に所在した可能性がある神社には、奴奈川神社、大神社、佐多神社、水嶋磯部神社、江野神社、青海神社、圓田神社の9社がある。能生谷周辺にもこれら式内社の論社がある。能生の白山神社(14)、平の大神社(38)、筒石の水嶋磯部神社がそれで、能生白山神社には、平安時代後期とされる銅造十一面観音立像が残っている〔室川ほか1986〕。なお、同神社については、「式外神社越後春日・布河両社等」(康和2年)の記述に見える式外神社に充てる見解もある〔青木1976〕。

鶉石駅について 北陸道の難所として広く知られた西頸城一帯には、古代の駅路が設置されていた。『延喜式』は、越後国内の駅として11駅を記し、そのうち滄海、鶉石、名立の3駅が西頸城に所在したと考えられる。北陸道は小路に格付けされ、各駅には原則として駅馬5疋が配置された。滄海駅では8疋となるが、これは親不知・子不知と呼ばれる北陸道最大の難所を通過するためと考えられている。

こうした西頸城3駅の所在地や各駅を結ぶ駅路のルートについては、文献・考古・歴史地理学のそれぞれによって検討されている。例えば、能生地区に存在したとされる鶉石駅の所在地と駅路のルートを具体的に示したものとして、駅路を海岸沿いに北上するルートと想定し、鶉石駅を大平寺周辺の段丘面上と推測するもの〔小林1978〕、内陸の山越えルートを想定し、現鶉石集落に隣接する小見周辺(角地田遺跡周辺)をその所在地と推測するもの〔金子1990〕、あるいはさらに内陸のルートを取り、駅を大沢周辺に想定するもの〔青木1976〕などがある。

以上のように、鶉石駅の所在地をはじめとして、滄海駅から名立駅までの駅家の位置や駅路のルートは、見解の一致を見ておらず、最近刊行された上越市史でも未解決の問題となっている〔相沢2004〕。

周辺の地名 ここで、角地田遺跡や平遺跡を中心とした能生川流域の字名をみると、島道川との合流地点付近の大字平から大沢にかけて、柱道、島道などの道を付す地名が認められる。またこれより北には大道寺、楨などの地名も見える。このうち大道寺付近は、慶長3(1598)年の検地帳に見える大道村の可能性がある。大道、仙道、車路などの地名は、古代駅路に関係するものとは限らないが、古代駅路の沿道に認められる地名であり注目されている〔木下1996、中村2000〕。名立周辺にも名立川中流域の右岸に車路の地名が見える。能生川流域やその周辺では、道に関する地名が多く見られる。

2) 中 世

中世の能生 越後国では、11世紀後半～12世紀にかけて中世的荘園が出現した。古代律令制度以来の郡・郷に代表される行政区画が解体し、新たに郷・保などを単位とする中世的所領が出現する。平安時代に沼川郷の領域であった能生周辺も、中世には国衙領の沼川郷(保)や名立保が成立した〔荻野1983〕。

沼川郷は能生周辺や糸魚川市域と推測され〔花ヶ前1976、青木1976〕、文安6(1449)年の天津神社懸仏の「越後国 沼河保一宮 天津社」の墨書や、明応8(1499)年の能生白山神社所蔵梵鐘の銘文「越後国沼川保内 能生泰平寺」から、少なくとも15世紀後葉までには沼川保と呼ばれるようになっていた。

2 歴史的環境

沼川郷（保）では、鎌倉時代の13世紀初頭頃に越後守護の流れをくむ北条宗長が地頭となり、14世紀中葉の南北朝の騒乱期には、早川谷に越後守護の一族である三宝寺上杉氏が拠点をかまえた〔山田1987、高橋2004〕。この時期には、康永4（1346）年の「村山高直軍忠状」などによって村山氏、禰智氏、仁科氏といった西頸城に拠点をもち土豪らの活躍が知られている。村山氏は、建武元（1334）年に隆義が圓田保（上早川とする説もあるが、所在地は不明）の地頭職を与えられ、後裔（信義、義親）は後述のように能生筒石に拠点を置いた〔室川ほか1986〕。禰智氏は、糸魚川市根知を本拠とする土豪とされ、鎌倉時代以降に土着したものと推測されている〔高橋2004〕。

15世紀に入り南北朝の騒乱が収束すると、早川谷では前述の三宝寺上杉氏が没落し、代わって山本寺上杉氏が不動山城に入り拠点を置いた。そして、戦国時代には永正の乱で越後守護上杉房能とともに活躍する〔山田1987〕。戦国期の能生谷周辺は、「安国寺文書」の永正8（1512）年7月条によって、越後守護家が相続する安国寺領であったことが知られ〔花ヶ前1976〕、「源姓村山氏系図」からは、前述の村山隆義の後裔である信義・義親が16世紀前葉頃に筒石城主となったことがわかる。また、永禄8（1565）年に村上義清が根知城に入ると、同年には子の国清が能生の徳合城主となり、後には名立に拠点を移した〔花ヶ前1997〕。同じ頃、糸魚川城主・勝山城主になったという萩田氏は、能生の土豪といわれ、小見の龍光寺にその墓とされる五輪塔がある〔室川ほか1986〕。近隣には小見館跡が存在し、萩田氏の居館と推測されている〔長原1969〕が、その確証は今のところ見出せない。

能生の寺院跡 能生谷には、多数の寺院・寺院跡が存在する。特に角地田遺跡や平遺跡の存在する小見・平周辺には、『能生谷村誌』が、廃寺となった小見の飯寺、平の善正寺、大沢の円満寺や東晃寺といった真言宗寺院を伝える。明治28年の土地更正図には、字名として飯寺、善正寺が見える（第6図）。

曹洞宗寺院としては、小見の門前に龍光寺があり、萩田氏の墓とされる五輪塔を伝えている。長享2（1488）年に僧万里集九が能生に滞在した際、能生川河口付近の太平寺に逗留し、同年12月に龍光寺を訪れている。そのとき、麓にある集落を眺め感慨に耽っている〔室川ほか1986〕。

小見・平周辺の更正図 明治28年の更正図によれば、角地田遺跡や平遺跡周辺は大字小見に属していた（第6図）。字名では、平遺跡周辺にタテ、アゼチノ町、源内四郎といった人名や町のつくものが見られる。図示してないが、大字平から大字大沢の間にはさらに中屋敷・善正寺などの地名も見られる。更正図を観察する限りでは、短冊形の地割は認められないが、タテ周辺は前述のように館跡として周知され、『奴奈川史』では戦国時代以前の特徴を示す五輪塔の集積が認められたという〔長原1969〕。地割も台形状の張り出しから丘陵に向かって平行する区画が見られる。こうした特徴は、鶉石の字アタリ周辺でも認められ、隣接の明福寺には五輪塔の存在が知られている。周辺には居町の地名も見える。

また、京塚から西の下川原にかけては、幾重にも能生川の旧流路の蛇行を示す地割が残されており、能生川が氾濫する不安定な区域だったことを示している。

小見周辺の村高 最後に近世の能生川流域の村高について簡単に触れておきたい。能生谷周辺では古くからのまとまった記録には、延宝7年（1679）のものがある。それによれば、延宝から天和にかけて鶉石・小見・平村などは、2倍以上の石高増加が見られ、能生川左岸の村では小見村の219石を筆頭に平村の118石、島道村の114石が続いている。同様の増加は右岸の村々にも認められ、能生町の249石を筆頭として柱道村の104石などが倍増している。慶長の検地帳が残る大王村、大道村は、残念ながら延宝の記録がなく比較できない（第2表）。また近世の新田村は空熊新田のみで、ほかは本田村である。近世の能生谷では、17世紀後葉まで大きく開発の余地を残していたことがわかる〔室川ほか1986〕。

第三章 角地田遺跡

1 調査の概要

角地田遺跡は、能生川左岸の現在の下小見集落にあり、背後には三峰（501.7m）、江星山（517.1m）と連なる丘陵地帯が広がる。丘陵地帯からは小見川が北へと流れ、狭小な沖積低地を形成し、鶉石集落の北方で能生川と合流する。小見川は、谷出口では小規模ながらに扇状に広がる台地状の地形を形成し、その堆積物は緩やかな斜面地をなしている。当遺跡はこうした小見川の右岸に形成された扇状地上に立地している。調査地点の微地形は、扇状地形を反映して北と東へ傾斜し、標高30.5～33mの間にある。以下は、こうした扇状地に立地した角地田遺跡の調査概要である。

A グリッドと調査区の設定

角地田遺跡の本発掘調査の調査区は、北陸新幹線法線内と橋脚建設予定地3地点からなる。法線内は調査区西側の一段低い下段の1区と、調査区の大半を占める上段の2区からなる。更にその西には、1区画8×7m前後の橋脚建設予定地があり、各区をT1～T3と呼称した。

グリッドの設定は、法線の中心線の200K020m（2C）と200K200m（20C）を結ぶ直線を基準ラインとして設定した。それぞれの座標値は、2CでX=120584.282、Y=-44039.909、20CでX=120562.852、Y=-44218.624である。基準ラインと直交するグリッド南北軸は、真北から6°50′47″西偏している。

グリッドは、10×10mの大グリッドを設定し、東西軸に東から1～20までのアラビア数字を、南北軸に南からA～Dのアルファベットを付し、「5B」や「11C」などのように数字・アルファベットの順で組み合わせる表示した。大グリッドには2×2mの小グリッドを設定し、南東隅から北西隅へ1～25のアラビア数字を付し、「5B22」などのように大グリッドの後ろに連続して表記した（図版2参照）。

B 基本層序

本遺跡の土層断面の観察による基本層序は、表土から遺構確認面までに、1区はⅠ～Ⅲ層を、2区はⅠ～Ⅵ層をそれぞれ確認した。1区と2区の土層の対応関係は、その間に走る用水のために把握することが出来ず、不明とせざるを得ない。したがって、1区のⅠ～Ⅲ層は2区の同名の土層と識別するために、1区に限り「1区Ⅰ層」と層の前に地区名を付すこととした。1区・2区の基本層序の土層説明は、それぞれ第3表と第4表に示した。

1区の基本層序は、地形の起伏が少なく、各層が安定的に堆積している。このうち1区Ⅱ層が遺物包含層で、遺構の検出面は1

層位	色調	しまり	粘性	土層の所見	
1区Ⅰ	表土	あり	あり	耕作土	
1区Ⅱ	暗オリーブ灰色土	5GY4/1	あり	あり	粘質土 炭化物を少量含んでいる。古代・中世の遺物包含層である。
1区Ⅲ	オリーブ灰色土	2.5GY5/1	あり	あり	粘質土 2区の基本土層との対応関係は不明。
1区Ⅳ	暗緑灰色土	7.5GY4/1	あり	あり	粘質土 2区の基本土層との対応関係は不明。
1区Ⅴ	オリーブ灰色土	2.5GY5/1	あり	あり	粘質土 2区の基本土層との対応関係は不明。
1区Ⅵ	オリーブ灰色土	5GY6/1	あり	あり	粘質土 2区の基本土層との対応関係は不明。

区Ⅲ層のオリーブ灰色の粘質土であった。本地区では、土層確認トレンチによって、Ⅲ層以下のⅣ～Ⅵ層までを識別してい

第3表 角地田遺跡 1区の土層説明

1 調査の概要



第7図 角地田遺跡 基本層序

る。これら地山面以下の土層も、2区の層序との対応関係は不明である。土層説明は、第3表にI～III層とともに示してある。

2区の基本層序は、I～VI層までがほとんど攪乱を受けず良好な堆積を示している。遺物包含層はV層で、特にVc層は概ね11世紀前葉～後葉を主体とする古代・中世の遺物を包含し、2区～T3までの全域にはほぼ安定的な堆積を示している。

また、遺物包含層のVc層直下と遺構確認面のVI層との間には、主に6～8A～Cグリッド（特にSD853周辺）に、不安定で極めて薄い（層厚2cm前後）細礫を多く含む土層（Vd層）を検出した。Vd層はSD728・729・853・896・897の覆土でもあり、SD853などの遺構の立上がり付近において層厚があり、図上にはその周辺でだけ確認できる。しかしながら、Vd層はこうした遺構覆土との間に切れ目がなく、連続的に堆積しているため、SD853やSD729の覆土として表現されている（図版17 土層断面117-117'の2層、(1)層に対応）。発掘現場での所見では、Vd層は薄く不安定とはいえ面的な拡がりを持つ土層である。加えて、本土層を覆土とするSD853では直径10cm以上の礫を多量に含んでいるため、Vd層の形成が土石流によるものである可能性が考えられる。

なお、当該区域で検出された遺構の大部分（Vd層を覆土にもつSD729・853などを除き）は、このVd層を

層位	色調	しまり	粘性	土層の所見	
I a	褐灰色	10YR5/1	あり	あり	耕作土
I b	褐灰色土	10YR4/1	あり	あり	耕作土 I a層よりしまりがある。
II a	にぶい黄橙	10YR6/4	あり	あり	粘質土 5C以東、10Cグリッドなどに部分的に堆積する。灰白色粒子、炭化物、小礫を少量含む。
II b	にぶい黄橙	10YR6/4	あり	あり	粘質土 T1～T3、2区西半の8～11Cグリッドに堆積する。灰白色粒子、炭化物、小礫を含む。灰白色粒子や小礫の含有量はII a層よりも多い。
III a	灰褐色土	7.5YR4/2	あり	あり	粘質土 2区西半の8A～8Cグリッド以東に堆積する。灰白色粒子、炭化物、小礫を含むが、III b以下のIII層より含有物の量が少ないのを特徴とする。
III b	灰褐色土	7.5YR4/2	あり	あり	粘質土 ほぼ調査区の全面にわたって安定的に堆積する。灰白色粒子・ブロックを多く含む。調査区壁面で、近世陶磁器が採取されている。
III c	明黄褐色土	10YR6/6	あり	あり	粘質土 7A～C以東に主に堆積する。III b層よりも少ないが、灰白色粒子、炭化物、小礫を含む。
III d	灰黄色土	2.5Y7/2	あり	あり	シルト層 8～11Cの調査区西半の北側に部分的な堆積を示す。他のIII層よりしまりがある。
IV a	灰褐色土	7.5YR4/2	あり	あり	粘質土 地形的にやや落ち込む11Cグリッドを中心に部分的に堆積する。灰白色粒子や炭化物が微量ながら含まれている。
IV b	黒褐色土	10YR3/1	あり	あり	粘質土 地形的にやや落ち込む11Cグリッドを中心に局所的な堆積を示す。灰白色粒子や炭化物が含まれている。
V a	灰黄褐色土	10YR5/2	あり	あり	粘質土 11Cや7・8A～Cグリッドに局所的に分布する。灰白色粒子や炭化物が含まれる。遺物包含層で、古代・中世の遺物が少量出土している。
V b	褐灰色土	10YR4/1	あり	あり	粘質土 11Cグリッドなど極めて局所的に堆積している。灰白色粒子や炭化物が含まれる。遺物の出土は極めて少ない。
V c	黒褐色土	10YR3/1	あり	あり	粘質土 T3や2区の全域に堆積する遺物包含層で、古代・中世の遺物を多量に包含する。灰白色粒子や炭化物が含まれる。
V d	褐色土	10YR4/6	あり	あり	6～8A～Cグリッドの本層とVC層の間に細礫が極めて薄く堆積している（Vd層）。この細礫層は、SD729やSD853の立上がり付近では相対的に層厚が厚くなる。きわめて薄いためSD729や853の立上がり付近でのみ図示（土層断面117-117'や118-118'の1層、(1)層に対応する）。部分的にVI層の粘質土が混在する。
VI	灰黄褐色土	10YR6/2	あり	あり	粘質土 T1～T3、2区の全域に堆積している。遺構確認面である。極めてまれだが遺物が出土する。
VII	青灰色土	5B5/1	あり	あり	粘質土 11Cグリッドでは、局所的に黒褐色となり炭化物を包含する。遺物は出土しない。
VIII	青灰色土	10BG5/1	弱	弱	しまり、粘性に欠けるシルト層で、遺構調査での土層断面などで確認され、2区の広域に堆積が認められる。
IX	灰色土	7.5Y5/1	弱	あり	粘質土 しまりに欠ける。炭化物を少量含んでいる。色調が暗い暗色帯。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X	青灰色土	10BG5/1	弱	弱	しまり、粘性に欠けるシルト層で、深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。VIII層に類似の土層である。
X I	明オリーブ灰色土	5GY7/1	弱	弱	粘質土 礫層のX II層の上に堆積するもので、深掘りトレンチ3（第7図②）でのみ確認した。
X II a	青灰色土	10BG5/1	強	なし	砂層 やや粒子が粗い砂をベースとし、礫を少量含んでいる。深掘りトレンチ3（第7図②）でのみ確認した。
X II b	灰色土	7.5Y5/1	強	なし	砂礫層 やや粒子が粗い砂をベースとし、礫を多く含んでいる。深掘りトレンチ3（第7図②）でのみ確認した。
X II c	灰色土	N4/1	強	なし	礫層 礫を極めて多量に含む。深掘りトレンチ3（第7図②）でのみ確認した。
X II d	にぶい褐色土	7.5YR5/3	強	なし	礫層 礫を極めて多量に含む。調査区南側のSD853やSX2の土層断面で確認された（土層断面118-118'、120-120'）。
X III	青灰色土	10BG6/1	弱	強	粘質土 しまりに欠け、粘性に富む。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X IV	青灰色土	10BG5/1	弱	強	粘質土 しまりに欠け、粘性に富む。暗色帯をなし、炭化物を少量含んでいる。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X V	青灰色土	10BG6/1	弱	強	粘質土 しまりに欠け、粘性に富む。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X VI	青灰色土	10BG6/1	弱	強	粘質土 しまりに欠け、粘性に富む。暗色帯をなし、炭化物を少量含んでいる。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X VII	青灰色土	10BG6/1	弱	なし	シルト層 しまりに欠ける。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X VIII	灰色土	N5/1	弱	なし	砂層 しまりに欠ける。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X IX	青灰色土	10BG6/1	弱	なし	シルト層 しまりに欠ける。本層の下部はやや色調が暗く細分できる可能性もある。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X X	緑灰色土	5G6/1	弱	強	粘質土 しまりに欠け、粘性に富む。粒子の細かい砂を少量含んでいる。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X X I	青灰色土	10BG5/1	弱	なし	砂層 しまりに欠ける。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。
X X II	青灰色土	10BG6/1	弱	強	粘質土 しまりに欠け、粘性に富む。深掘りトレンチ2（第7図②）でのみ確認した。

第4表 角地田遺跡 2区の土層説明

1 調査の概要

切って構築されているものと判断している。本土層を覆土とするSD853では10世紀中葉の好資料が出土しており、遺物包含層のVc層に11世紀代の遺物が多いことと矛盾しない。

以上のほかに、調査の終盤で深掘りトレンチ1～3を設定し、VI層以下の堆積を確認した（第7図②・⑩・⑫）。VII・IX・XIV層で暗色の土層を検出したが遺物などの出土はない。土層説明は、第4表にその所見や土層説明を示した。なお2区の基本層序は、T1～T3の層序と対応している。

C 遺構と遺物の検出状況

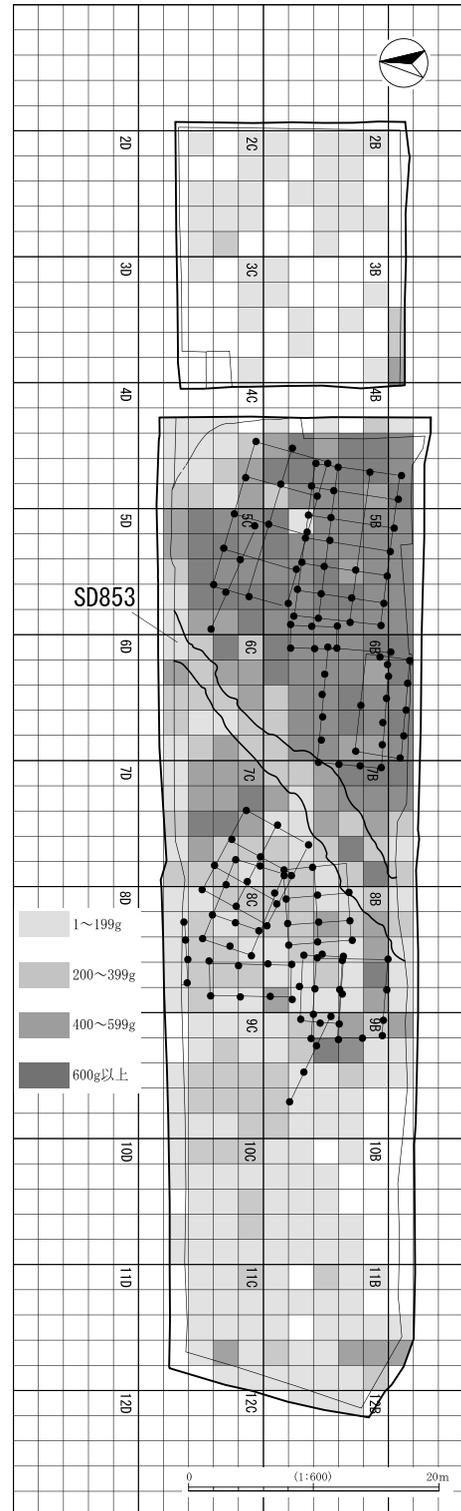
遺構の分布 本遺跡では、掘立柱建物や溝、土坑をはじめとする多数の遺構を検出した。検出遺構の大多数は、遺構の切合いや出土遺物からVd層堆積後の形成（11世紀前葉～後葉主体）と考えられる。ここではこうした11世紀代を主体とする検出遺構の分布を説明する。

本遺跡で検出された遺構はその大部分が2区に集中している（図版2）。特に8B、8Cグリッドの東側に集中的に検出され、この区域では柱穴や掘立柱建物、溝、耕作溝、土坑など本遺跡の主要な遺構が分布している。またVd層によって埋没したSD853（溝A群）は、6Bグリッドから8Bグリッドにかけて存在するが、Vc層の検出遺構はこの遺構が埋没した区域では、相対的に少なくなる。

出土遺物の分布 出土遺物は、11世紀前葉～後葉にかけての土師器食膳具を主体とする遺物が、遺物包含層のVc層を中心として出土している。第8図は、Vc層で出土した遺物の重量分布を示したものである。それより下位のVd層でも、それを覆土とするSK514、SD728・729・853に10世紀中葉の出土遺物があるが、それ以外の地点や遺構には遺物はなく、同図ではVd層の遺物分布を示していない。

それによれば、11世紀前葉～後葉を主体とする遺物の分布傾向は8B、8Cグリッド以東に多くなっているが、SD853の遺構プラン周辺では分布が希薄となっている。

こうしたSD853周辺に見られる遺物の分布傾向は、11世紀代を中心としたVc層の遺物廃棄が、10世紀中葉以降にSD853が埋没した後も、SD853周辺を意識して廃棄した可能性を意味する。先述のように、Vc層はSD853覆土（Vd層）の上位に形成された遺物包含層であり、SD853の遺構プランの上部でもVc層が安定的に堆積し、攪乱も受けてはいない。したがって、SD853埋没後もその周辺が区画性を維持していた可能性が遺物の分布傾向から示唆される。



第8図 角地田遺跡 遺物重量分布図（Vc層出土遺物）

2 遺 構

A 概 要

検出された遺構はいずれも古代に属し、Vd・VI層を遺構確認面として掘立柱建物12棟、柵（さく）2列、土坑15基、溝94条、性格不明遺構8基、配石遺構1基、柱穴363基、杭29基を検出した。これらは、遺構の検出面や出土遺物から、大きく10世紀中葉と10世紀後葉～11世紀後葉に2分される。前者は、遺物包含層（Vc層）直下のVd層を覆土とするもので、溝7条と配石遺構1基がある。後者は、Vd層・VI層を確認面とした遺構で、上記遺構の大部分に相当する。

ここでは、本遺跡で検出された遺構のうち、代表的なものを抽出し紹介する。

B 記述の方法

遺構名称 遺構の種類と略称は、掘立柱建物=SB、柵（さく）=SA、土坑=SK、溝=SD、性格不明遺構= SX、配石遺構=SS、柱穴=Pとした。遺構番号は、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号を付した（例えばSX1、P2、P3、SD4…）。溝などでは、当初別遺構として遺構名称を付したものでも調査の過程で同一と判明したのがあり、それらについては後に番号を統一した。掘立柱建物や柵（さく）は、以上とは別にそれぞれ独立して番号を付した（例えばSB1・SB2…、SA1・SA2…）。

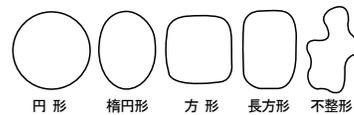
記述の方法 遺構の説明は本文・図面図版・写真図版・観察表を用いて行なう。本文では観察表で示せない所見などを優先し、遺構の規模や形状などは観察表に示し、可能な限り記載の重複を避けた。ただし、重要度の高いと思われる遺構は、本文でも個別説明をする。遺構の写真は、重要な遺構や残存状況が良好な遺構を優先的に掲載したため、個別図にある遺構のすべてを網羅していない。

観察表 観察表は種別ごとにまとめ、個々の遺構の位置・形態・規模・他遺構との切合い関係・出土遺物等を記した。遺構の平面形や断面形の呼称は、和泉A遺跡の分類〔荒川ほか1999〕に基づき記載した（第9図、第5表）。遺構の長軸方位は、長軸を基準として真北からの角度を表記した。例えば東偏50°ならば「N-50°-E」とし、西偏ならば「N-50°-W」とした。断面図や遺構図版に示した各土層の色調は、『新版 標準土色帳』〔小山・竹原2005〕を使用した。

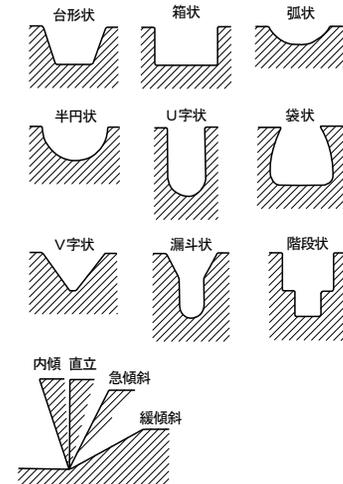
平面形態	
円形	長径が短径の1.2倍未満のもの
楕円形	長径が短径の1.2倍以上のもの
方形	長径が短径の1.2倍未満のもの
長方形	長径が短径の1.2倍以上のもの
不整形	凹凸で一定の平面形を持たないもの
断面形態	
台形状	底部に平坦面を持ち、緩やかから急角度に立上がるもの
箱状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立上がるもの
弧状	底部に平坦面を持たない皿状で、緩やかに立上がるもの
半円状	底部に平坦面を持たない碗状で、急角度で立上がるもの
階段状	階段状の立上がりを持つもの平面長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立上がるもの
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の2段階構造からなるもの
不整形	凹凸で一定の断面形を持たないもの

第5表 角地田遺跡 遺構の形態分類表

平面形態の分類



断面形態の分類



第9図 角地田遺跡 遺構の形態分類図

C 遺構各説

1) 掘立柱建物 (図版5・6・8～12・37～40)

合計12棟になる。すべて2区にあり、Vd層上面やVI層で検出された。これらは、長軸方向の方位から4群に分類される。1群は長軸方向が西偏90°前後のもので、SB1・4・5・7・8が該当する。2群は長軸方向が西偏70～80°のもので、SB2・9・10が相当する。3群は長軸方向が西偏6°のものでSB3・11が該当する。4群は長軸方向が東偏86°前後を示すものでSB6・12がある。

掘立柱建物の構造は、SB1(1群)、SB2(2群)、SB6(4群)、SB9(2群)が総柱建物で、これら以外はすべて側柱建物である。総柱建物は1、2、4群に存在し、このうちSB1とSB2の面積は、70㎡を超える大型のものである。中型(35～50㎡)にはSB9、小型(30㎡以下)にはSB6がある。側柱建物は、1群のSB5・7・8、2群のSB10、3群のSB3・11があり、中型のSB7以外は小型の建物である。

掘立柱建物の各群と、ほかの遺構との切合い関係は、1群にはSB1が雨落溝と考えられるSD575が伴う可能性があり、この雨落溝がSD541～543、SD571～574の耕作溝と切合い、SD575が新しい。同群のSB4はSD559と切合い関係にあり、SB4が新しい。またSB7はSX18と切合い、SB7が新しい。

2群はSB2がSD575と切合い、SB2が新しい。同群のSB9は、東西方向に長軸を持つSD552と切合い関係にあり、SB4がそれより古い。

3群はSB3がSB1の雨落溝の可能性のあるSD575や耕作溝(SD541～543、SD571～574)を切って構築している。4群はSB7がSX18、SD11と切合い、SB7がいずれも新しい。

なお、掘立柱建物と溝A群(後述)の覆土となっているVd層との前後関係は、SB4～6・9・10～12の柱穴が、これを切っていると判断される。ほかのSB1～3・7・8は、出土遺物やSK577などとの切合い関係などから、Vd層より新しいものと判断される。

SB1 (図版5・8・37～39) 面積83.0㎡となる大型の総柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.7～2.3m、梁行方向で1.8～2.6mを測る。梁行は北側1間が狭く、拡張された可能性が考えられる。本遺構にはSD575が近接して存在し、雨落溝として伴う可能性がある。SB2と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合い関係では、SK577、SD576・867・869と切合い、本遺構がSK577より古く、それ以外より新しい。P668・663に分割材の柱根(332)が残存し、遺物はP589(1・3)、P590(2)、P747(5)、P785(4)から出土したものを図示した。

SB2 (図版5・9・37～39) 面積72.8㎡の大型の総柱建物で、柱間寸法はほかの掘立柱建物より大きく、桁行方向で2.8～3.1m、梁行方向で2.9～3.1mを測る。SB1、SA1と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合い関係では、SX647、SD575と切合い、本遺構が新しい。P638には分割材の柱根(334)が残存し、遺物はP613(7)、P621(6)、P653(8)から出土したものを図示した。

SB3 (図版5・10・37～39) 面積6.5㎡の小型の側柱建物である。本遺跡で検出された掘立柱建物では規模が最小で、柱間寸法は桁行方向で1.7～2.05m、梁行方向で1.7～1.85mを測る。SB4と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いでは、SD575(SB1の雨落溝の可能性のある)やSD576と切合い、本遺構が新しい。P579・809に分割材の柱根(333)が遺存し、出土遺物は9(P579)を図示した。

SB4 (図版5・10・37～39) 面積46.3㎡の中型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.7～1.9m、梁行方向で1.6～1.75mを測る。SB3・5と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合い関係では、SK698、SD559・680・696・853と切合い、SK698より古く、SD559・680・696・853より新しい。

P687・896に分割材の柱根（331）が残存し、遺物はP692（10）、P687（11）から出土したものを図示した。

SB5（図版5・10・37～40） 面積28.4㎡の小型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.8～2.1m、梁行方向で最大2.44mを測る。SB4と重複するが、新旧関係は不明である。P705・843に分割材の柱根（335、336）が残存する。出土遺物は細片のため図示していない。

SB6（図版6・11・37・38） 面積30.4㎡の小型の総柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.6～2.3m、梁行方向で2.3～2.8mを測る。SB9・10と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いではSD853、P234と切合い、これらより新しい。遺物はP225（12）から出土した土師器碗を図示した。

SB7（図版6・11・37・38） 面積35.6㎡の中型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.3～2.5m、梁行方向で1.9～2.1mを測る。SB8、SA2と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いでは、SX18、SD11と切合い、本遺構が新しい。遺物はP267（13）から出土した土師器碗を図示した。

SB8（図版6・11・37・38） 面積16.9㎡の小型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で2.4～2.9m、梁行方向で1.4～1.7mを測る。SB7、SA2と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いでは、SD248と切合い、本遺構が古い。出土遺物は図示していない。

SB9（図版6・12・37・38） 面積42.0㎡の中型の総柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.8～2.7m、梁行方向で2.8～3.1mを測る。SB6・10と重複するが新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合い関係ではSD522、P214と切合い、本遺構が古い。出土遺物はP231（14）、P827（210・211）の土師器碗・鉢を図示した。

SB10（図版6・12・37・38） 面積27.9㎡の小型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.7～3.1m、梁行方向で1.9～2.3mを測る。SB6・9と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いでは、SD221と切合い、本遺構が新しい。出土遺物は図示していない。

SB11（図版6・12・37・38） 面積16.5㎡の小型の側柱建物である。柱間寸法は桁行方向で1.8～2.5m、梁行方向で2.5～2.7mを測る。ほかの遺構との切合いでは、SD248と切合い、本遺構が古い。出土遺物は細片のため図示していない。

SB12（図版6・12・37・38） 調査区の壁際付近で検出され、遺構の大部分は調査区外に延びる。建物構造は不明であり、桁行3間以上となる可能性がある。柱間寸法は配列方向で1.5～1.8mを測る。出土遺物は細片のため図示していない。

2) 柵（さく）（図版5・6・9・11・37・38・40）

SB2とSB7・SB8に重複するSA1とSA2の計2基を検出した。いずれもⅥ層を遺構確認面とする。ともに長軸が西偏70°前後を示し、掘立柱建物2群と同じである。これらの柱間寸法はSA1がSB2に匹敵し、2.2～3.0mを測る間隔が大きいものである。ほかの遺構との切合い関係では、SA1とSD545が切合い、SA1が新しい。またSA2はSD12と切合うが、SA2が古い。なお、SA1はSB2、SA2はSB7・8と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はP626出土の15・16を図示した。

3) 土 坑（図版4・5・13・14・40～42）

合計7基を検出した。図示したものはSK1・188・514・577・582・591・698である。このうちSK514は、覆土上層にⅤd層が堆積しているため、ほかの土坑より古く、後述するSD853など（溝A群）と同時期の遺構と考えられる。SK514以外は、すべてⅤd層を切って構築している。

2 遺 構

このうち、SK1やSK577・698は、覆土に炭化物を多量に含むもので、比較的多数の土師器小椀あるいは小皿が出土した。遺構の形状は、SK1は不整形だが、SK577・698はほぼ円形で深さも30～36cmで類似した形状となっている。SK1・698の覆土から人頭大の礫が比較的多数出土し、いずれも被熱して覆土内に散在していた。覆土はすべて土壌を洗浄したが、鉄関連遺物等の検出はなかった。遺物の出土状況は、SK1・577で潰れた状況の小椀も存在するが、複数重ねられた状況ではなく、大半は土坑内に同一個体の破片が散在する状況であった。

SK188は平面形が楕円形を呈し、断面形が台形状となるものである。土師器小椀(28)が見込みを上面に向け、潰れることなく出土した。それと供伴する有台椀(29)は同一個体の破片が、土坑覆土内の2か所に分散していた。SK591は断面が弧状を呈する浅い土坑で、良好な灰釉陶器皿(52)が出土している。灰釉陶器皿は、SA1のP626と接合関係にある。出土遺物は、17～27(SK1)、28・29(SK188)、30～50(SK577)、51(SK582)、52(SK591)、53～66(SK698)を図示した。

4) 配石遺構(図版5・15・42)

検出された配石遺構は、SB2と重複するSS1とSD853の覆土で埋没したSS2がある。SS1は発掘調査での遺構名称で配石遺構となっているが、遺構を構成する礫に規則性が看取されず、礫が集積したものと考えられる。下部に、土坑等の検出はない。SS1には、集積した礫の間に須恵器甕(69)が挟まっていた。ほかの67・68はSS1のごく近辺で出土したものである。

SS2は、SD853の遺構の立上がり付近から基底面にかけて検出された。礫層(Vd層)によってSD853とともに埋没している。その南側では、SD853の遺構の立上がりラインに沿うように、大型(長軸60cm前後)の礫と小型(長軸20～30cm前後)の礫を配置する。SD853の基底面付近では、大型礫以外は散在している状況であった。出土遺物は砥石のB類(318)があり、極めて大型でSS2の近辺(図版15)で出土した。

5) 溝(図版5・6・15～17・43～49)

溝は、遺物包含層のVc層の直下に形成されたVd層を覆土とするA群と、それを切込むものなどのB群に区分できる。A群はSD728・729・853・867・869である。B群は上記以外の溝の大部分と考えられる。また、B群のうちSD541～543・571～574は、検出状況から耕作溝として一括した。

A群(図版5・6・16・17・47～49) 本群は、掘込みや基底面が不整形で起伏に富むSD728・729・853と直線的で2条が並行するSD867・869がある。前者は自然形成と考えられるもので、SD729とSD853は並行し、SD728はSD729の南端から分岐し北西方向へと続く。覆土はVd層を起源とする礫層からなる。

これに対してSD853は、その覆土が6層に区分され、2・4層の礫層ばかりでなく1・3層のような粘質土と混合する土層も堆積していた。礫層は拳大以上のものが含まれており、堆積要因として土石流が推測されるが、1・3層が挟在するため、2度以上に渡り堆積した結果、埋没した可能性が高い。なお、SD853の2層(2'層)は、土層断面117-117'(図版17)の観察ではSD728・729の覆土へ連続し、さらにSD853の1層の上部にも、不安定な薄い堆積をなしていた。この薄い礫層は層厚2cm前後と薄いため、表示できなかった。出土遺物はSD728・729では土師器の細片が少なからず混在し、SD853では双耳瓶(165)のような良好な遺存率を示す個体も存在していた。出土遺物は覆土の上下で取り上げたが、接合関係は層位を越えて多数認められた。

SD867・869は、ともにSS2の東から北東方向へ2条が並行して存在している。発掘調査の所見では、

SD867とSD869の間では、地山面の硬化等変質は認められなかった。

A群の出土遺物は、SD867・869にはなく、SD729 (130~132) とSD853 (135~168) がある。

B群 (図版5~7・15~18・43~47) 本群は、A群を埋没させたVd層を切ると考えられるものだが、Vd層の堆積が及ばない区域でも、出土遺物などから本群に帰属するものと推測される。

B群のうちSD14・15は、断面形が台形状を呈するもので、平面形は緩やかに蛇行している。このうちSD15は、地形のコンター線に沿って北東方向に延びる溝である。SD15とは切合い関係にあり、SD15が古い。

SD247・248・521・522・548は、断面が弧状・台形状・半円状を呈し、急斜度の立上りを示すものである。これらは直線的に連なり、長軸方向がほぼ同方向を示す。このうちSD247とSD521、SD248とSD522は並行して存在する。いずれも覆土に共通性があり、Vb層~Ⅲb層に対比される灰色系粘質土とその直下のVc層に対比される黒褐色系の粘質土が堆積する。特にVb~Ⅲb層に対比される覆土の層厚が厚く、Vc層堆積後も暫く開口していた可能性がある。長軸方向は西偏81~84°を示す。これらと切合う遺構には、SB8・9・11、SD554・559、杭18があり、杭18が新しく、それ以外はすべて古い。

SD523は、断面形が台形状を呈する浅い溝である。ほかの遺構との切合いでは、B群ではSD15やSD522と切合い、本遺構が古い。また、多数の管状土錘が集中して出土した (図版16・44)。

SD532・545・715は、後述の耕作溝を構成するSD541などと同様の長軸方向 (西偏78°前後) を示すものである。また、これに直交する長軸方向 (東偏22°) を持つSD554は、その南でほぼ直角に折れてSD532などと同様の長軸方向を示す。このうちSD532・545は、杭23・24・28・29が並行して打ち込まれている。これらと同様の長軸方向を持つものは、ほかにSD646・650・697がある。このうちSD697の覆土とその周囲では、土師器小椀 (120~125) が集中して出土した (図版14・47)。

SD559は、本遺跡では少数の長軸方向が南北 (西偏17°) を示すもので、SD532などと同様に幅が狭く浅い溝である。本遺構にほぼ並行して、杭15~20・25が打込まれている。SB4、SD548・550・696と切合い、SB4、SD548が新しく、ほかは古い。

SD575・576は、SB1の西側に位置するもので、平面形が東側に折れる特徴を持つ。特にSD575はSB1に伴う可能性があり、雨落溝の可能性もある。ほかの遺構との切合いは、SD575はSB3より古く、耕作溝 (SD541~543・571~574) より新しい。SD576は、SB1・SB3・SK577より古く、SD867・869より新しい。

以上のほかにSD11・12・221・550・689・680・696・803は、断面図を図示した。

B群の出土遺物は、SD221 (87) ・521 (88~90) ・548 (103・104) ・522 (91~98・317) ・523 (99~102・300~304) ・575 (114~116) ・576 (110~113・319) ・554 (105~107) ・650 (118) ・646 (117) ・680 (119) ・697 (120~125) ・715 (126~129) ・803 (133・134) を示した。

耕作溝 (図版5・16・45) SD541~543・571~574は、並行する溝が密集する耕作溝を構成する。これらはSD541・543・571・573のように長軸方向が西偏77~80°のもの、SD542・572・574のような長軸方向が西偏86~87°を示すものに分かれる。ほかの遺構との切合いは、SD575 (SB1の雨落溝の可能性が有る)、SB3と切合い、SB3、SD575が新しい。出土遺物は、SD571の108・109を図示した。

6) 性格不明遺構 (図版6・7・17・18・49・50)

総数8基のうちSX2・3・17・18・102・104・647の7基を図示した。これらはVI層を遺構確認面とするもので、検出された区域にはVd層は確認されていない。

2 遺 構

このうちSX17・18は、浅い不整形な遺構で、その近辺には遺物が比較的集中して出土していた。特にSX18は、遺構確認時に、すでにSX18の範囲外にまで遺物が分布していた。それ以外の区域では、遺物の出土が極めて少なく、SX18とその周辺に出土遺物の分布域を形成する（図版18・50）。

SX3はその規模と形状から自然流路と推測されるが、SX3一帯は明治28年の更正図に見える流路跡の直近に位置している（第6図）。また、2区東のSX647は、凡そ1/3が攪乱を受けているが、緩やかに1区に向かって傾斜しており、自然形成の落ち込みと推測される。

性格不明遺構とほかの遺構との切合いは、主要なものでは、SX18がSB7とSX647がSB2と重複し、SB2とSB7が新しい。出土遺物は、SX3（169～174）・17（184）、SX18とその周辺（175～183）、SX104（188）・647（185、187）にある。以上のほかに、SX2・102・104を図示したが、これらの詳細は観察表を参照いただきたい。

7) 柱 穴（図版5～7・18・19・51）

8A～Cグリッド以東で集中的に検出された。柱穴の大半は、覆土に細礫層（Vd層）の堆積がないことや出土遺物などから、Vd層堆積後に構築されたものと考えている。

柱穴は、規模と形状で3種に区分できる。1類は、長軸30cm前後、深さ30cm～50cm前後のもので、P163・214・234・819などを図示した。2類は、長軸50cm～60cm前後、深さ40cm以上の規模の大きいもので、P512・519を図示した。3類は、長軸50cm～60cm以上、深さ30cm以下の浅いもので、P121・622・624・629を図示した。このうち、1類の柱穴は、本遺跡で検出された柱穴の大多数を占めるもので、SB1・3～8・10～12、SA2などの掘立柱建物や柵列の柱穴の大部分を占める。規模の大きい2類は、柱痕が確認されたP512をはじめ、SB2やSA1などの柱間寸法が3mにおよぶ掘立柱建物や柵列に多く認められる。3類は配列を持つものは認められないが、P629では比較的平坦な基底面付近に礫が集積していた。

これら柱穴とほかの遺構との切合いは、主要なものでは、1類のP214・234・330・819が、それぞれSB9・6、SX18、SK577と切合い、P234がSB6より古い、ほかはいずれも新しい。2類では、P512とP519が溝A群のSD782やSD729と切合い、いずれもSD728・729より新しい。

柱穴の出土遺物は、P121（189）・163（190）・214（191）・256（192・193）・319（194）・330（195）・512（196・197）・519（198～202）・624（203）・622（204～206）・629（207～209）の出土資料を図示した。

8) 杭（図版5・19・52）

29基を検出し、その内遺存状況の良好な14基（杭12～20・23～25・28・29）を図示した。これらはすべて掘込みが無く、地山面に直接打込まれていたものである。このうち杭12～14・16～20・25は、SD538・559に沿って分布する。また、杭23・24・28・29は、並行するSD545とSD532に沿って検出されている。杭とほかの遺構との切合いは、杭18が断面145-145'（図版19）から、SD548よりも新しいと判断される。これらの杭木は、杭13（337）・18（338）・23（339）・24（340）・28（341）を図示した。

3 遺 物

A 概 要

角地田遺跡では、10世紀中葉～11世紀を中心とした、古代後半～中世にかけての遺物が多数出土した。出土遺物は平箱で44箱と多く、その大半は11世紀前葉～後葉に所属する。出土遺物の内容は、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、製塩土器、青磁、緑釉陶器などの土器・陶磁器（39箱）のほか、管状土錘（1箱）、椀形鍛冶滓などの鉄関連遺物（1箱）、石製品（1箱）、下駄・木簡などの木製品62点がある。また、少量ながら古代9世紀代の遺物や、中世12世紀以降の輸入陶磁器や珠洲焼などもある。

さらに、10世紀中葉に遡る越州窯系の青磁や、「臣」と墨書された土師器などもあるなど、遺跡の性格や位置付けを行う上で注目すべき遺物も出土している。以下、本遺跡の古代・中世の出土遺物の分類を行い、各時期の代表的な遺物を抽出し、その特徴を説明する。

B 記述の方法

掲載遺物 本遺跡の出土遺物は多量であり、そのすべてを報告書（本書）に掲載することは不可能である。したがって、報告書への掲載遺物の抽出は、分類を通して得られた器種や時期を代表する典型例を中心とした。遺物の図化は、そうした典型的遺物のうち残存率が良好な遺物や、破片資料でも遺物の器形や特徴が把握できるものを優先的に掲載した。また、土器の図化にあたっては、器形を重視する該期の遺物特性を考慮し、破片資料であったとしても極力器形の復元に努めた。

遺物の記述 本書の遺物の記述は、本文と観察表の両者を併用する。しかしながら、本書では、個々の遺物の所見は観察表を重視する方針をとり、本文の記述は観察表との重複を避けるように努めた。特に一括資料となる可能性が高いSD522・853などの遺構内出土遺物は、組成や概要の記述を中心に行った。またその際には、可能な限り組成の一覧表を示した

観察表 本書に図示した遺物の法量や、土器の調整等の所見については、巻末の観察表に一覧表として示した。観察表の項目は、土器、管状土錘、石製品、鉄関連遺物、木製品のそれぞれで作成した。ここでは、特に土器の観察表項目のうち「胎土」と「調整等の所見」について説明する。

「胎土」は、土器・土製品の胎土に含まれる含有物を記入した。含有物は、石英、長石、チャートのほか、雲母、海綿骨針、砂粒、礫がある。これらはそれぞれ「石」、「長」、「チャ」、「雲」、「骨」「砂」、「礫」と略して観察表に示した。このうち、砂粒・礫としたものは、石英、長石、チャート、雲母、以外の含有物を一括したもので、「礫」は砂粒よりも粒子が大きいものを示す。また、上記以外で、白色を呈する粒子が含まれるものがあり、これを「白」と記した。

こうした含有物が含まれるのは須恵器、土師器、灰釉陶器、珠洲焼であり、含有物の記入はこれらを対象とするが、古代・中世陶磁器のうち、輸入陶磁器、瀬戸・美濃焼については、胎土にこうした含有物が含まれることが極めて稀であることから、色調のみを示した。

「調整等の所見」では、土器に施された調整と古代・中世陶磁器に施された釉薬の色調を記入した。記入にあたって、調整に切合いが認められる場合、「→」の記号でその前後関係を示した〔春日2003〕。例えば『カキメ→タタキ』は、カキメ、タタキの順で調整が行われたことを示す。

C 遺物の分類

ここでは古代・中世の土器・陶磁器を分類する。本遺跡の土器・陶磁器は、無台碗や小碗・小皿を主体とする土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、輸入陶磁器などで構成される。これらは、大きく組成の大部分を占める土師器食膳具からなる一群と12世紀以降の珠洲焼や陶磁器からなる一群に分離できる。ここでは、前者を平安時代の土器・陶磁器、後者を中世陶磁器として分類し記述する。前者には、11世紀代の小碗、小皿を主体とする土師器食膳具が含まれる。

1) 平安時代の土器・陶磁器の分類

平安時代の土器・陶磁器の分類では、西頸城方面の古代の土器編年〔春日1998〕や頸城平野での11世紀代までを扱った考察〔鈴木1993、春日1997、笹沢2003〕、土師器の法量変化を主眼とした中世の側からの編年〔水沢2005〕などを参考とした。以下に、土器・陶磁器の分類を示す。

須 恵 器

食膳具の無台杯や有台杯、貯蔵具の長頸瓶や横瓶、甕などがある。以上のほかに双耳瓶、凸帯付四耳壺などの特殊な器種も加わり、須恵器の器種組成を構成する。これらは本遺跡では、客体的な出土だが、10世紀中葉のSD853の遺構一括資料や包含層資料にも見られ、本遺跡の出土遺物の古い部分をなす。以下はこうした本遺跡の須恵器の分類である。

無台杯 本遺跡の無台杯は、底部の調整を基準として、回転ヘラ切りのⅠ類と回転糸切りのⅡ類に分類できる。Ⅰ類は更に器形によって細分が可能である。Ⅰa類は、底径が8cm以上のもので口縁部の立上がり急なものである(237)。これに対してⅠb類は、底径が7cm代の小さいもので、口縁部の立上がり緩くなっているものである(238)。胎土や器形などの特徴からⅠ類は佐渡小泊窯産、Ⅱ類は頸城丘陵産と推測される。

有台杯 有台杯は、高台径の大小によって分類できる。Ⅰ類は高台径が10cm前後の大形のもの(240)、Ⅱ類は底径6.5cm前後の小形のもの(241)である。胎土の特徴からいずれも西頸城丘陵産と推測される。

杯 蓋 少量の出土のため細分はしない。本遺跡で出土したものは、いずれも口縁部が三角形状となる退化した形状のもので占められる(242)。

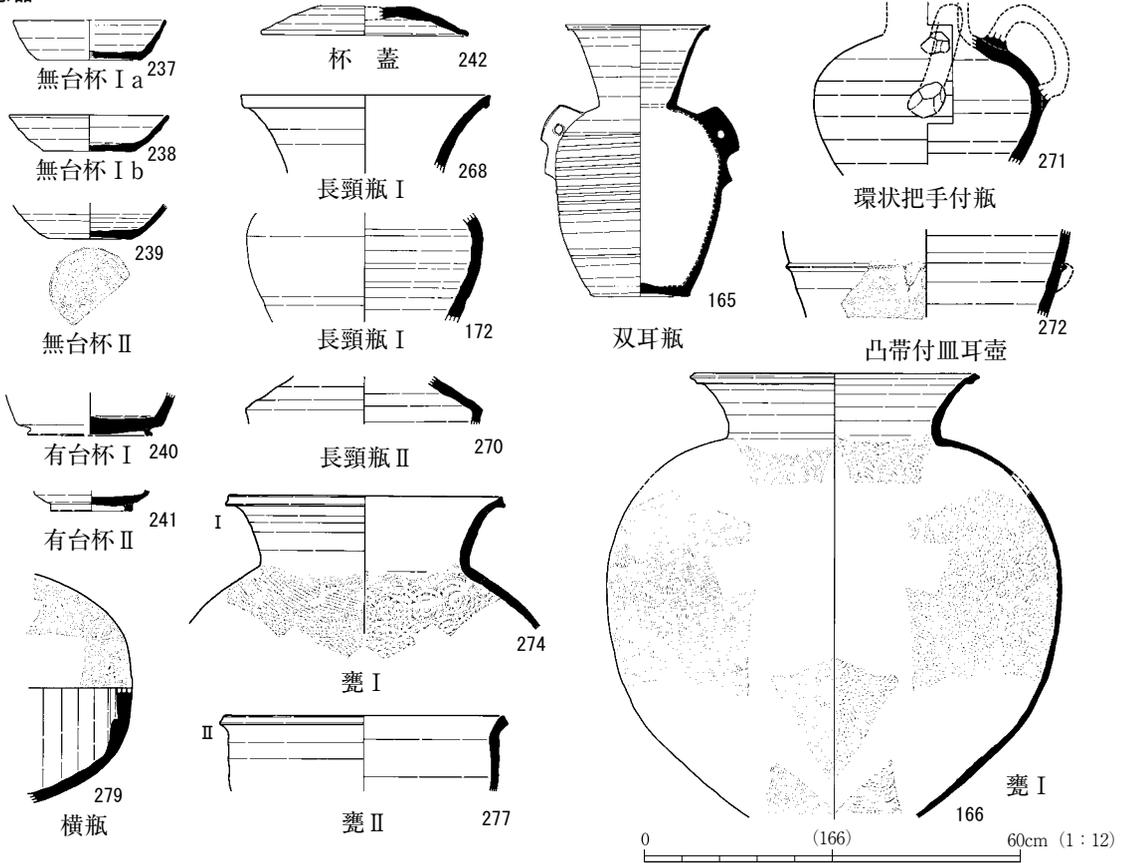
瓶・壺類 長頸瓶(172・268・270)、環状把手付長頸瓶(271)、双耳瓶(165)、凸帯付四耳壺(272)、横瓶(279)がある。このうち、長頸瓶は体部の器形を基準にⅠ類とⅡ類とに分類した。Ⅰ類は体部の肩がまるくなるものである(172・268)。Ⅱ類は体部の肩が強く屈曲するもので、270の1点が確認できた。

甕 本遺跡の甕は、器形で大きく2分できる。Ⅰ類は、本遺跡の甕の大部分を占める器種で、体部が球胴状を呈するものである(166・274)。Ⅱ類は、極めて少量で、体部の肩がなくそのまま底部に至る器形となるものである(277)。277の胎土は軟質で、ほかの甕の胎土とは異質である。

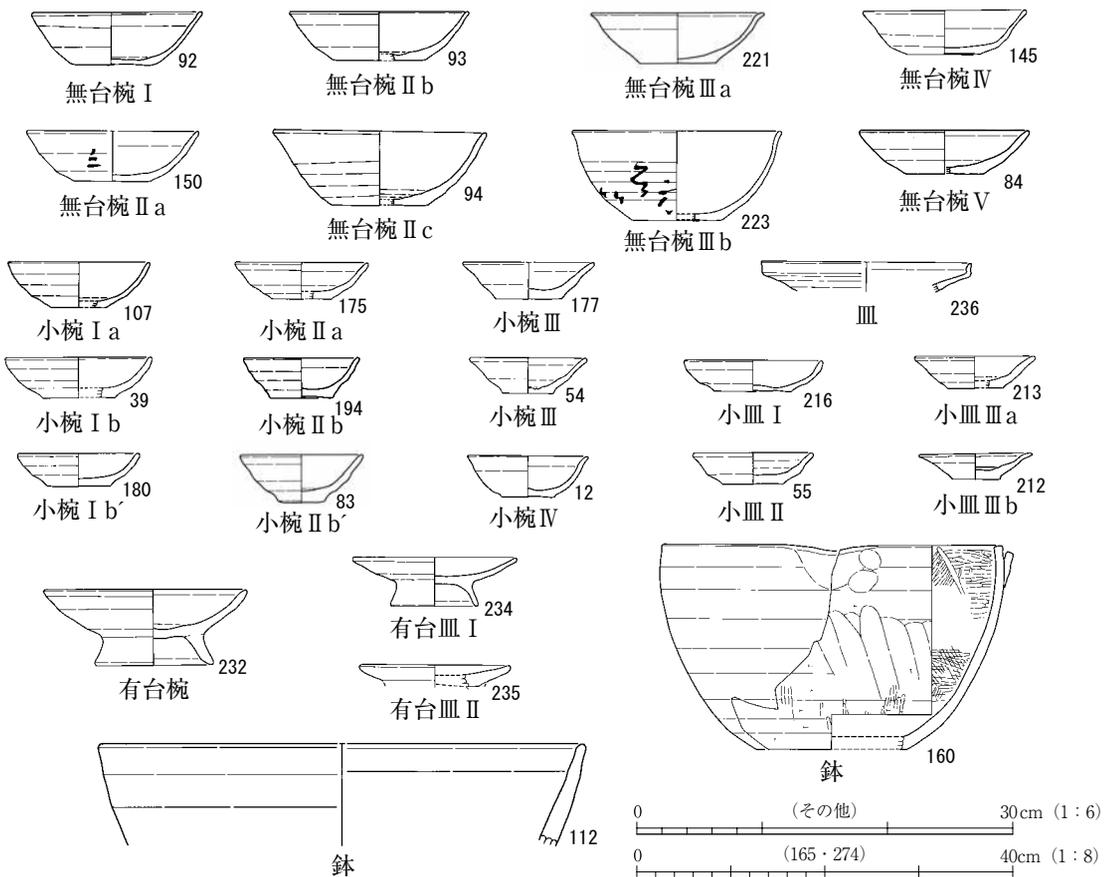
土 師 器

無台碗、小碗・小皿を主体とする食膳具や長甕、小甕、鍋の煮炊具からなる。土師器の器種組成では、食膳具が圧倒的で、小碗・小皿の存在が特徴的である。後述のSD522やSD853、SK 1・577・698、SX18

須恵器

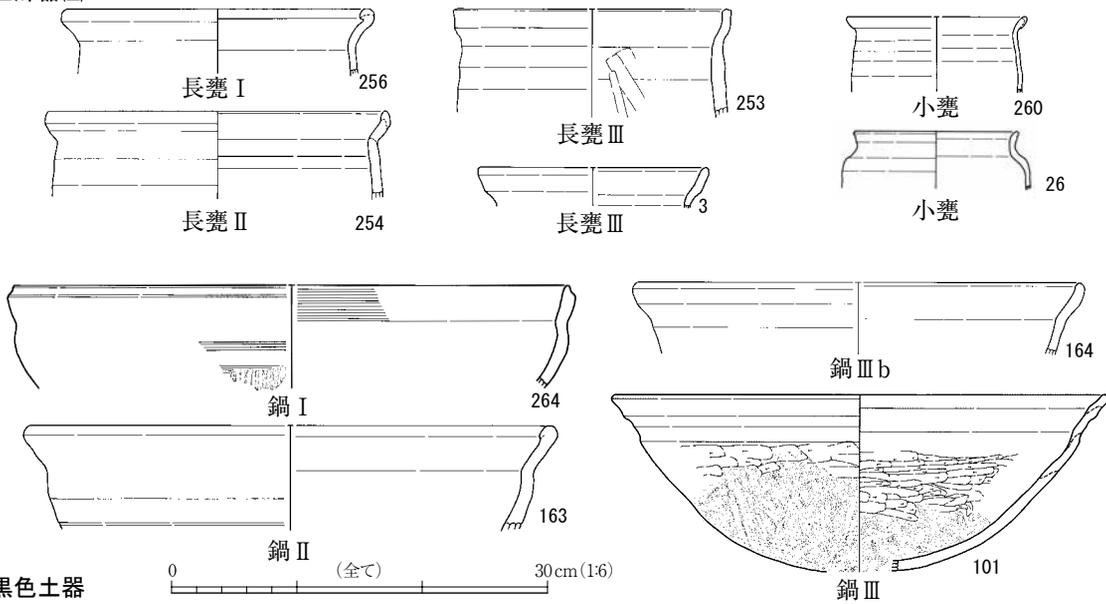


土師器(1)

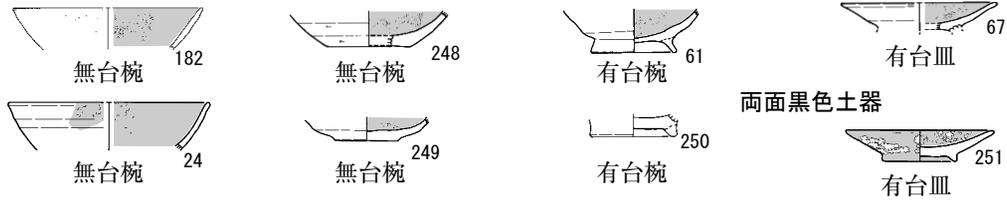


第10図 角地田遺跡 古代の土器器種分類概念図(1)

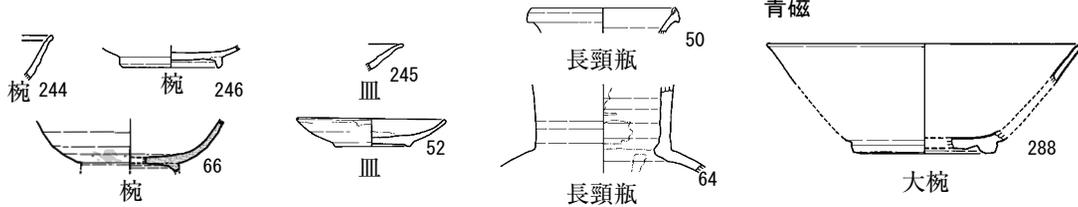
土師器(2)



黒色土器



灰釉陶器



第11図 角地田遺跡 古代の土器器種分類概念図(2)

では、無台椀、小椀・小皿などを主体とする良好な遺構一括資料が出土し、大きく10世紀中葉から後葉の無台椀を特徴とする一群と11世紀前葉～後葉の小椀・小皿を主体とした一群を認識した。さらに、11世紀代の土師器は、小椀・小皿などの様相によって、3期に細分化が可能である。ここでは、無台椀や小椀・小皿を中心とした土師器の分類を行う。

食 膳 具

無台椀 土師器無台椀は、SD522や礫層からなるVd層を覆土に持つSD853などで出土した。一部遺物包含層からも出土しているが、その量は少ない。無台椀は、食膳具の無台器種のうち、口径12cm前後以上のもので、器形の特徴からI～VI類に分類できる。

I類は、口縁部が外反しないもので、92のように直線的に立上がるものなどがある。本遺跡では少量の出土である。II類は、口縁部が外反傾向にあるもので、法量(口径)で3細分できる。IIa類は口径12～13cm前後(150)、IIb類は口径14cm前後(93)、IIc類は口径16cm以上のもの(94)である。このうちIIa類やIIb類には、径口指数27前後の身が浅いものと、33前後の身の深いものがあり、IIc類には身の深いものが認められる。

Ⅲ類は、口縁部が強く外反するもので、法量によって2分できる。Ⅲa類は口径12～13cm前後のもので、221のように体中位で弱く括れてそこから外反する形状のものが含まれている。Ⅲb類は、口径16cm以上のもので、径口指数42に達する223などがある。

Ⅳ類は杯の器形に近いもので、口縁部が直線的で相対的に短いものである(145)。Ⅴ類は、後述の小椀・小皿などと供伴するもので、相対的に底径が大きく身が浅い特徴がある。器壁が厚く、口縁部の立上がりもほかより緩い(84)。Ⅵ類は以上の分類に該当しないものを一括したものである。

小 椀 食膳具の無台器種のうち凡そ口径11.5cm以下で、後述の小皿より相対的に身の深いものをここでは小椀に分類する。器形と口径などによってⅠ類～Ⅳ類に分類できる。

Ⅰ類は椀形を呈するもので口縁部が外反しないものである。Ⅰ類は器形などの特徴によって以下のように細分した。Ⅰa類は、口径11cm代のもので、後述のⅠb類よりも相対的に底径が小さく、身も深いものである。また器壁も薄く、無台椀Ⅰ・Ⅱ類が小椀化したものとも考えられる(107)。Ⅰb類(39)は、口径11.5cm～9cm代を含むもので、9cm代の小径のものは、Ⅰb'類(180)とした。Ⅰb類は、Ⅰa類より身が浅く、底径が大きくなる特徴があり、底部の器壁も厚くなり、厚底化の傾向が見られる。

Ⅱ類は、口縁部が外反し、底部と口縁部の間で屈曲するものである。本類は身の浅いⅡa類(175)と、身が深いⅡb類(194)に2分され、Ⅱb類はさらに底径が相対的に大きいⅡb類(194)と底径が小さく厚底の傾向が進行したⅡb'類(83)とに細分が可能である。Ⅱa類は、後述のⅢ類と比較して、底径が大きい傾向が認められ、Ⅲ類よりも古い様相と考えられる。

Ⅲ類は、外反する口縁部までが直線的になりつつあるもので、底径が大きいもの(177)と小さくなるもの(54)とが存在する。底径の小さいものは、底部の立上がりが急で、側面が平高台のような形状となる。54には柱状化の兆しが認められる。

Ⅳ類は、上記の基準に含まれないもので、体部が丸味をもって外反する器形のもの(12)などがある。

小 皿 径口指数23前後以下のものを小皿とした。口径11cm代～9cmまでが含まれ、前述の小椀より相対的に身が浅くなっているものである。器形からⅠ～Ⅲ類に細分できる。Ⅰ類は、口縁部が外反せず、胴部が湾曲する特徴がある(216)。Ⅱ類は、外反する口縁部と底部の間に屈曲するもの(55)で、Ⅲ類と比較して底径が大きい傾向がある。Ⅲ類は、胴部から外反する口縁部が直線的になるもので、Ⅱ類より底径が小さい特徴がある。本類は法量によって2分でき、器高が相対的に高いⅢa類(213)と、低くより中世的な皿状の器形となっているⅢb類(212)が認められる。Ⅲb類の212はⅢa類より厚底となっている。

皿 上記の小皿のほかに、口縁部が垂直に立ち上がる皿がある(236)。2点出土している。

有台器種 土師器の有台器種には、有台椀(232)と有台皿(234・235)がある。有台椀は前述の小椀などと伴出し、232のように脚が高いものが見られる。有台皿は、234のような脚の高い高台がつくものや235のように口縁部までが直線的となるものが存在する。前者を有台皿Ⅰ類、後者をⅡ類とする。

鉢 本遺跡では少なからず確認できる。器形は多様であり、SD853で出土した160のような内湾する口縁部に片口がつくものや112のように内湾せず椀状となるものなどがある。器形復元できるものが少なく、ここでは細分しない。

煮 炊 具

長 甕 口縁部の形状でⅠ類～Ⅲ類に区分できる。Ⅰ類は口縁部が丸く収まるもので、内面への肥厚が顕著で、本遺跡では特徴的に認められる(256)。Ⅱ類は口縁部を摘上げるが、先端が丸く収まるものである(254)。Ⅲ類は口縁部が有段状となるもので、口縁部の立上がりが垂直気味となるもの(253)や立上が

3 遺物

りが緩い(3)ものなどがある。

小甕 小甕は長甕同様その出土量は少ない。260のように口縁部の外面を肥厚させるものや26のように器形が壺に近くなるものがある。

鍋 本遺跡の煮炊具のなかでは最も出土量が多く、口縁部の形状で細分される。Ⅰ類は口縁部が摘上げられ、口唇部が尖がるものである(264)。本遺跡ではこのような口縁部は少数である。Ⅱ類は口縁部を丸く収めるもので、内面への肥厚が著しいⅡa類(163)と微弱なⅡb類(164)とがある。本遺跡では後述のⅢ類とともに定量認められる。Ⅲ類は斜傾した口縁部が有段状となるもので、口唇部の摘上りが退化し丸く収まる。同類の図示はSD523の101のみだが、小破片では少なからず確認できる。

黒色土器

無台椀(248・249)、有台椀(61・250)、有台皿(67)が存在する。口縁部から底部までが残存する個体がほとんどなく、法量の傾向はつかめない。分類は口縁部が残存した椀類と底部の無台椀と有台椀が識別できる。椀類の法量は、口縁部の破片から口径15~17cmが確認できた。無台椀は、底部付近の体部外面をロクロケズリする丁寧なつくりのもの(248)と底部に糸切り痕を残し、底部付近の体部外面がロクロナデのままのもの(249)が見られる。有台椀は、相対的に高い高台のもの(61)と台形状の低いもの(250)がある。いずれも数量が少なく、ここでは特徴を述べるにとどめる。有台皿についても量が少ないが、67を図示した。以上のほかに、両面黒色土器の有台皿(251)が出土している。

施釉陶器

施釉陶器は、灰釉陶器(52・66・244・245・246)と緑釉陶器(243)がある。本遺跡では灰釉陶器が圧倒的で、緑釉陶器は細片が3点確認されたにすぎない。

灰釉陶器は、有台椀と皿、長頸瓶が確認できる。少量の出土だが、SK698などで土師器小椀・小皿などと出土している事例がある。有台椀には、口縁部内面に沈線がめぐるもの(244)や高台が三日月状となるもの(246)や三角形状となるもの(66)などがある。ほかに段皿(245)や皿(52)などの食膳具、長頸瓶(50・64)が存在する。長頸瓶などの瓶類の破片資料は少なくない。

その他

上記以外の該期の土器・陶磁器には、輸入陶磁器の青磁椀や製塩土器がある。輸入陶磁器は、越州窯系の青磁大椀で、本遺跡では1個体を確認した(288)。分類は山本信夫の研究成果[山本2000]に拠った。製塩土器は、本遺跡では、器形が判明する資料は存在しない。したがって、以下の記述では個々の特徴を示すにとどめ、ここでは分類しない。

2) 中世陶磁器の分類

中世陶磁器の出土は非常に少ないことから、独自の分類は行わず、先行の研究成果に依存し、本文や観察表の記述を行う。輸入陶磁器の青磁や白磁は、森田勉や山本信夫の大宰府周辺での成果[森田1982、山本2000]、珠洲焼の器種や時期区分は吉岡康鴨の編年[吉岡1994]、大宰期の瀬戸・美濃焼は、藤澤良祐の一連の研究[藤澤1986・2005]を典拠とした。

D 遺物各説

1) 土器・陶磁器

掘立柱建物の出土土器 (図版20・54-1~14)

掘立柱建物ではSB1~4・SB6・7・9の柱穴内から出土した遺物を図示した。大部分が小破片であり、遺物の器形全体が把握できるものは非常に少ない。

SB1 (図版20・54-1~5) 土師器では小椀(1)、有台椀(2)、長甕(3)があり、須恵器には甕(4)がある。ほかに製塩土器(5)の口縁部破片がある。このうち、1は口径11.6cmの小椀(Ⅳ類)の可能性が高く、胴部が括れずに口縁部が外反する器形的特徴がある。2は有台椀の底部で脚の高い高台が特徴的で、こうした1・2のような特徴をもつ食膳具は、SK577出土資料にも見られる。これらが出土した柱穴は、1・3がP589、2がP590、4がP785、5がP747である。

SB2 (図版20・54-6~8) 土師器小椀(6)、無台椀(7)、鍋(8)がある。このうち6(小椀Ⅰb類)の口径は10.6cmを測り、SB1出土資料の1よりも小さい。器厚が厚い特徴がある。鍋の8は、口縁部の先端が強く摘上げられる鍋Ⅰ類に相当するものである。これらが出土した柱穴は6がP621、7がP613、8がP653である。

SB3 (図版20・54-9) 9は土師器小椀の底部資料で、底径が小さく器厚もやや厚い特徴があり、小椀Ⅰb類の底部の可能性はある。P579から出土している。

SB4 (図版20・54-10・11) 10は土師器無台椀、11は有台椀に分類されるものであろう。特に11の口縁部は、器壁が厚く、本遺跡で出土している他の有台椀と同様の特徴を示す。これらが出土した柱穴は、10がP692、11がP687である。

SB6 (図版20・54-12) 12は土師器小椀のⅣ類で、底部側面が平高台のように急角度に立上がる特徴がある。底部が厚底化し、口径も9.4cmと小さくなっている。P225から出土している。

SB7 (図版20・54-13) 13はSB3の9と同様の特徴を持つ小椀の底部で、厚底化の傾向が認められる。P267から出土している。

SB9 (図版20・54-14) 14は土師器無台椀で、口縁部が外反しないⅠ類に帰属させておく。P231から出土している。

柵(さく)の出土土器 (図版20・54-15・16)

柵(さく)では、SA1の出土遺物を図示した。15・16ともに、土師器小椀Ⅰb類に相当し、器壁が厚いのが特徴である。底部形状は、その側面が急角度に立上がる。P626(15)、P617(16)から出土している。

土坑の出土土器 (図版20~22・54・55-17~66)

本遺跡の土坑では、SK1・577・698などから比較的良好なまとまりが得られた。ここではこれらの遺構出土資料を中心に、出土遺物の説明を加える。

SK1 (図版20・54-17~27) 小椀・小皿を主体とする土師器が多量に出土した。口縁部残存率計測法による個体数の集計(第6表)では、総計234/36個体のうち、食膳具が229/36個体(97.9%)を占める。食膳具は土師器(232/36個体、99.1%)が圧倒的に多く、少量の黒色土器(2/36個体、0.9%)を伴う。食膳具の底部残存率計測法による集計では、無台器種が449/36個体、有台器種(柱状高台を除く)が14/36個体で、無

3 遺 物

台器種が96.9%と他を圧倒している。

このような本遺構で大多数を占める土師器無台器種の様相は、19の小椀Ⅰb類、17や18の小椀Ⅱa類、20の小椀Ⅲ類からなる。このうち17・18は、器高が3.0cm以下と低く器厚も厚くなり、口縁部の器形がⅢ類のように直線的になりつつある。いずれも口径は10cm台で、20が口径10.0cmと本類の最小である。

以上のほかに、本遺構の出土遺物には、土師器無台椀や有台椀の底部（21～23）や黒色土器（24・25）、土師器小甕（26）、鉢（27）などがある。

SK577（図版20・21・54・55-30～50） 土師器小椀を主体とする土器が出土した。口縁部残存率計測法による個体数の集計（第6表）では、総計712/36個体のうち、食膳具が707/36個体（99.2%）を占める。食膳具は、口縁部残存率計測法の対象資料のすべてが土師器（707/36個体、99.2%）である。食膳具の底部残存率計測法による集計では、無台器種が1006/36個体、有台器種（柱状高台は皆無）が137/36個体で、無台器種が88%と他を圧倒している。

土師器無台器種は、口径の大きい無台椀（30・32）と10～11cm前後の小椀（31・33～43）からなる。無台椀は、口縁部が外反傾向の32（Ⅱa類）や口径が14cmを超える30（Ⅵ類）などが見られる。これらは、後述の小椀よりも器壁が薄く、底部も厚底化していない特徴がある。一方、小椀は、口縁部の立上りが直線化しつつある35（Ⅲ類）以外は、すべてⅠb類で占められている。Ⅰb類（31・33・34・36～43）は、内湾気味に立上がる口縁部と、立上りが急斜度で、側面観が平高台状となる底部に特徴がある。また、器壁も厚くなる傾向がある。

以上のほかに、土師器では、大型の無台椀の底部（44）、有台椀（45・46）、鉢の底部（47）、鍋の体部（48）などがある。また、須恵器の甕の破片（49）や灰釉陶器の長頸瓶（50）なども出土している。

SK698（図版21・22・55-53～66） 土師器を主体とした遺物が多量に出土した。小径（口径9cm前後）となった小椀・小皿が組成に加わっている特徴がある。口縁部残存率計測法による個体数の集計（第6表）では、総計427/36個体のうち、食膳具が421/36個体（98.6%）を占める。大部分が土師器（419/36個体、98.1%）であり、食膳具の底部残存率計測法による集計では、無台器種が254/36個体、有台器種（柱状高台は皆無、黒色土器11/36個体、3%を含む）が48/36個体で、無台器種が84.1%と他を圧倒している。

本遺構の食膳具は、口径9cm前後の小椀Ⅱb類（53）、同Ⅲ類（54）、同Ⅳ類（56）や小皿Ⅱ類（55）、口径12.7cmの無台椀Ⅴ類（57）の無台器種に加えて、土師器有台椀（58～60）や黒色土器有台椀（61）、灰釉陶器有台椀（66）といった有台器種が見られる。小椀や小皿の特徴は、小皿Ⅱ類（55）のように口縁部の外反が顕著で器高が低いものや、小椀Ⅲ類（54）のように口縁部が直線的に立上がるものがある。

有台器種のなかでは、66の灰釉陶器有台椀があり、底部内面の糸切痕が残り、内外面ともに無釉となっ

SK1				SK577				SK698			
種別	器種	口縁部残存率/36	比率(口残値)%	種別	器種	口縁部残存率/36	比率(口残値)%	種別	器種	口縁部残存率/36	比率(口残値)%
土師器	無台椀・小椀・小皿	215	91.8	土師器	無台椀・小椀・小皿	698	98	土師器	無台椀・小椀・小皿	402	94.2
土師器	有台椀・皿	10	4.3	土師器	有台椀・皿	9	1.2	土師器	有台椀・皿	16	3.8
土師器	鉢	2	0.9	土師器	鉢	0	0	土師器	鉢	1	0.2
土師器	長甕	0	0	土師器	長甕	0	0	土師器	長甕	0	0
土師器	小甕	5	2.1	土師器	小甕	0	0	土師器	小甕	3	0.8
土師器	鍋	0	0	土師器	鍋	0	0	土師器	鍋	1	0.2
黒色土器	無台椀	0	0	黒色土器	無台椀	0	0	黒色土器	無台椀	0	0
黒色土器	有台椀	0	0	黒色土器	有台椀	0	0	黒色土器	有台椀	0	0
黒色土器	椀類	2	0.9	黒色土器	椀類	0	0	黒色土器	椀類	2	0.4
灰釉陶器	有台椀	0	0	灰釉陶器	有台椀	0	0	灰釉陶器	有台椀	0	0
灰釉陶器	長頸瓶	0	0	灰釉陶器	長頸瓶	5	0.8	灰釉陶器	長頸瓶	2	0.4
	総計	234	100		総計	712	100		総計	427	100

第6表 角地田遺跡 器種構成比率（SK）

ている。以上のほかに、土師器小甕 (62) や須恵器甕 (63・65)、灰釉陶器長頸瓶 (64) が出土している。

その他の土坑出土土器 以上に示した資料のほかに、SK188 (28・29) やSK582 (51)、SK591 (52) の土坑出土資料を図示した。このうち、SK591出土の灰釉陶器の皿 (52) は、高台が低い三角形状を呈するなど、相対的に新しい様相をもつ。胎土から東濃産と推測される。

配石遺構出土土器 (図版22・55-67~69)

SS1の礫間やその周辺で出土したものである。黒色土器有台皿 (67) や須恵器甕 (68・69) を図示した。このうち67の黒色土器有台皿は、底部から口縁部までの立上りが短くなっている。

溝出土土器 (図版22~26・55~59-70~168)

検出された溝では、SD11・15・522・554・697・853に比較的良好な遺物のまとまりが得られた。特にSD853の遺物の量は、他のどの遺構よりも多く一括資料として期待される。ここでは、上記遺構の出土遺物を中心に説明する。

SD11 (図版22・55-70~74) 出土遺物の量は少ないが、小椀や小皿を中心とした土師器で構成されている。70~72は、土師器小椀・小皿で、いずれも体部中位で弱く屈曲し、外反して口縁部に至る器形である。相対的に70・72は身が深く小椀Ⅱa類に、71は小皿Ⅱ類に分類される。このほか、土師器有台椀 (73) や黒色土器無台椀 (74) が伴出している。

SD15 (図版22・56-81~86) 土師器小椀Ⅱa類 (81・82)、小椀Ⅱb類 (83) といった口径が10cm前後のもの、口径13.2cmの無台椀Ⅴ類 (84) や有台椀 (85) からなる。このうち、81や82の体部中位で弱く屈曲するものは、SD11にも見られる。また、83の底部は、厚底かつ小径となっており、底部からの立上りが高くなっている特徴がある。以上のほかに、胎土から佐渡小泊産と推測される須恵器無台杯Ⅰ類 (86) が出土しているが、混入遺物の可能性が高い。

SD522 (図版22・56-91~98) 出土遺物は、後述のSD853覆土中の遺物が再堆積した可能性がある。型式学的にもSD853出土遺物との差は明瞭でない。91~97の土師器無台椀と98の須恵器長頸瓶がある。土師器無台椀は口縁部の外反が顕著でなく、無台椀Ⅰ類 (91・92) と無台椀Ⅱa類 (97)、Ⅱb類 (93)、Ⅱc類 (94) とがある。「臣」と墨書された可能性をもつ95・96も無台椀Ⅰ類かⅡ類に帰属するものであろう。墨書土器については後述する。

SD522				SD853				SX18周辺			
種別	器種	口縁部残存率/36	比率(口残値)%	種別	器種	口縁部残存率/36	比率(口残値)%	種別	器種	口縁部残存率/36	比率(口残値)%
須恵器	無台杯	0	0	須恵器	無台杯	5	0.7	土師器	無台椀・小椀・小皿	133	94.4
須恵器	瓶・壺類	5	2.6	須恵器	瓶・壺類	15	2	土師器	有台椀・皿	4	2.8
須恵器	甕	0	0	須恵器	甕	6	0.8	土師器	鉢	0	0
土師器	無台椀	172	90.6	土師器	無台椀	709	92.3	土師器	長甕	0	0
土師器	有台椀	10	5.3	土師器	有台椀	0	0	土師器	小甕	0	0
土師器	鉢	1	0.5	土師器	鉢	10	1.3	土師器	鍋	0	0
土師器	長甕	0	0	土師器	長甕	4	0.5	黒色土器	無台椀	0	0
土師器	小甕	0	0	土師器	小甕	0	0	黒色土器	有台椀	0	0
土師器	鍋	0	0	土師器	鍋	7	0.9	黒色土器	椀類	4	2.8
黒色土器	無台椀	0	0	黒色土器	無台椀	0	0	灰釉陶器	有台椀	0	0
黒色土器	有台椀	0	0	黒色土器	有台椀	0	0	灰釉陶器	長頸瓶	0	0
黒色土器	椀類	1	0.5	黒色土器	椀類	6	0.8	総計		141	100
灰釉陶器	有台椀	0	0	灰釉陶器	有台椀	0	0				
灰釉陶器	長頸瓶	0	0	灰釉陶器	長頸瓶	0	0				
製塩土器	—	1	0.5	製塩土器	—	5	0.7				
総計		190	100	総計		767	100				

第7表 角地田遺跡 器種構成比率 (SD・SX)

3 遺 物

口縁部残存率計測法による個体数の集計（第7表）では、総計190/36個体のうち、食膳具が184/36個体（96.8%）を占める。食膳具は、大部分が土師器（183/36個体、96.3%）であり、食膳具の底部残存率計測法による集計では、無台椀が250/36個体、有台椀が12/36個体で、無台椀が95%と他を圧倒している。

SD554（図版23・57-105-107） 出土量は少ないが、土師器小椀のⅠa類（105-107）がある。器壁が薄く、底部の厚みなど、小椀のⅠb類と比較して未発達である。

SD697（図版24・57-120-125） 前述のSK577とともに土師器小椀Ⅰb類が主体を占める。120-123が該当し、口径は10.7cm前後である。以上のほかに、122の土師器鍋や124・125の有台椀が出土している。

SD853（図版24-26・57-59-135-168） 土師器無台椀を主体とする遺物が多量に出土した。口縁部残存率計測法による個体数の集計（第7表）では、総計767/36個体のうち、食膳具が730/36個体（96.8%）を占め、底部残存率計測法による集計の結果では、土師器無台椀が997/36個体（97%）、黒色土器無台椀が31/36個体（3%）、有台椀が4/36個体（0.3%）と有台椀が圧倒的に少ない。

土師器食膳具の様相は、口縁部の外反傾向が弱い無台椀Ⅱ類（137-144・150）が主体的で、底径が大きい杯状の器形を呈するⅣ類（135・145・148・149）、その他を一括したⅥ類（146）が加わる。口縁部の外反が顕著な型式学的に新しいⅢa類（136・147・151）は、本遺構では客体的な出土である。また、極めて少量ながら、これらより法量が小さい小椀Ⅰb類（口径11.5cm）の出土（153）もある。

以上のほかに、155-157の墨書土器、158・159の黒色土器無台椀、160の鉢、161-164の鍋、165の双耳瓶、166の須恵器大甕、167・168の製塩土器などが出土している。このうち165の双耳瓶は、把手や器形などの特徴が、北陸西部（富山以西）などの同器種と類似している。

その他の出土土器 このほか前述した溝以外に、SD12（75・76）、SD14（77-80）、SD221（87）、SD521（88-90）、SD523（99-102）、SD548（103・104）、SD576（110-113）、SD575（114-116）、SD646（117）、SD650（118）、SD680（119）、SD715（126-129）、SD729（130-132）、SD803（133・134）を図示した。

以上のうち、SD521では、土師器無台椀Ⅲa類（89）とともに小破片ながら、佐渡小泊産と推測される須恵器無台杯（88）が出土している。同資料の口縁部の傾きは緩やかである。SD523では、良好な土師器鍋（101）があり、頸部の括れが弱く、微弱な段をもつ口縁部となっている（鍋Ⅲ類）。SD576やSD646には、「臣」と墨書された可能性がある土師器無台椀（110・117）があり、ともに口縁部が外反する特徴がある。このうち110は無台椀Ⅱ類に、117は無台椀Ⅲa類と推測される。

耕作痕出土土器（図版23・57-108・109）

耕作痕を構成する溝（SD541-543・571-574）のうち、SD571の出土遺物を図示した（108・109）。108は土師器無台椀、109は土師器有台椀である。

性格不明遺構の出土土器（図版26・27・59・60-169-188）

ここでは、比較的良好な資料的まとまりを示すSX18周辺を中心に、出土遺物の説明を行う。

SX18周辺（図版26・59・60-175-183） 小椀などの土師器食膳具が主体をなす。口縁部残存率計測法による個体数の集計（第7表）では、総計141/36個体のすべてが食膳具で、大部分は土師器無台器種（133/36個体、94.4%）である。食膳具の底部残存率計測法による集計でも、無台器種が64/36個体、有台器種（柱状高台は皆無）が14/36個体（黒色土器有台椀、6/36個体を含む）であり、無台器種が82%を占める。

土師器小椀の様相は、相対的に古い要素をもつ小椀Ⅰb類(178)やⅠb'類(180)が含まれるとともに、相対的に新しい器形的特徴を持つ小椀Ⅱa類(175・179)やⅢ類(176・177)が組成する。

以上のほかに、土師器有台椀(181)や黒色土器有台椀(183)や黒色土器椀類(182)などもある。

その他の出土土器 SX18以外にも、SX3(169~174)、SX17(184)、SX104(188)、SX647(185~187)の出土遺物を図示した。

このうちSX3では、土師器無台椀Ⅱa類(169)とともに、土師器長甕Ⅰ類(170)や須恵器長頸瓶(172)、須恵器甕Ⅰ類(173)が出土している。170は171・174と同一個体となる可能性がある。SX17出土の土師器有台椀(184)の高台は三角形状となり、胴部から口縁部にかけての器壁も厚い。SX647では、底部に糸切痕を残す須恵器無台杯Ⅱ類(185)や瓶類の底部(186)、土師器鍋Ⅰ類(187)が出土している。このうち185は、胎土から西頸城丘陵産の可能性がある。SX104出土の須恵器無台杯Ⅰb類(188)は、胎土や器形などの特徴から佐渡小泊産と推測される。

柱穴出土土器 (図版27・61-189~211)

本遺跡では、柱穴からも良好な土師器椀が出土した。このうち、P519(198~202)、P622(204~206)、P629(207~209)には、土師器小椀・小皿の好資料がある。P519では、土師器小椀Ⅰb類(198)とともに、小皿Ⅰ類(200)や口縁部が直線的に立上がる小皿Ⅲa類(199)が伴出している。ほかに土師器有台椀(201)があり、同資料の高台は三角形状となり、その基部が椀の中心近くに達している。

P622でも土師器小椀Ⅰb類(204)とともに小皿Ⅰ類(205)や有台椀(206)が出土した。P629では207~209の土師器小椀Ⅰb類が出土し、このうち208の口縁部は垂直方向に立上がる特徴がある。それ以外の207・209は、径高指数26と身が浅い特徴がある。

以上のほかに、P319の土師器小椀Ⅱb類(194)やP330の土師器小皿Ⅲa類(195)などの口径9~10cmの新しい様相を帯びた一群もある。また、P256やP827では、土師器小椀Ⅰb類(192)、無台椀Ⅵ類(210)とともに、193や211の鉢が伴出している。

平安時代の包含層出土土器 (図版28~31・60~62-212~298)

包含層出土土器の組成 (第8表) 包含層から出土した土器・陶磁器は、極めて多数である。口縁部残存率計測法による集計では、総計14526/36個体中、土師器が13952/36個体を数え、すべての土器の96%に及んでいる。このうち土師器食膳具は、13609/36個体(97.5%)と土師器の大部分を占め、底部残存率計測法による集計では、無台器種(27659/36個体)が、有台器種(2013/36個体)よりはるかに高率の存在(93.2%)で

種別	器種	口縁部残存率 /36	比率(口残値)%	種別	器種	口縁部残存率 /36	比率(口残値)%	種別	器種	口縁部残存率 /36	比率(口残値)%	種別	器種	口縁部残存率 /36	比率(口残値)%
須恵器	無台杯	166	1.14	土師器	無台椀・小椀・小皿	13349	91.9	黒色土器	無台椀	67	0.46	灰釉陶器	有台椀	5	0.03
須恵器	有台杯	9	0.06	土師器	有台椀	103	0.71	黒色土器	有台椀	6	0.04	灰釉陶器	皿	17	0.12
須恵器	杯蓋	35	0.24	土師器	有台皿	22	0.15	黒色土器	有台皿	2	0.01	灰釉陶器	段皿	2	0.01
須恵器	鉢	12	0.08	土師器	皿	6	0.04	黒色土器	有台皿	2	0.01	灰釉陶器	長頸瓶	10	0.07
須恵器	瓶・壺類	56	0.39	土師器	鉢	129	0.89	黒色土器	椀類(両面黒色)	2	0.01	灰釉陶器計		34	0.23
須恵器	壺蓋	3	0.01	土師器	長甕	109	0.75	黒色土器	有台皿(両面黒色)	9	0.06	製塩土器	—	113	0.78
須恵器	甕	55	0.38	土師器	小甕	67	0.46	黒色土器	有台皿(両面黒色)	9	0.06	青磁	椀	5	0.03
須恵器計		336	2.3	土師器	非ロクロ甕	3	0.01	黒色土器計		86	0.58	総合計		14526	100
				土師器計	鍋	164	1.13								

第8表 角地田遺跡 器種構成比率(包含層)

あることを示している。

須恵器は土師器につぐ個体数だが、全体の2.3%にすぎない。食膳具の杯類（175/36個体、61%）や貯蔵具の壺・瓶類（56/36個体、19%）、甕（55/36個体、19%）が多い。黒色土器は食膳具からなり、底部残存率計測法による集計では、無台碗が251/36個体（77%）で、有台碗の74/36個体（23%）を圧倒している。黒色土器はほかに両面黒色土器の碗・皿があるものの1%に満たない。灰釉陶器は個体数が少く（0.23%）、皿（17/36個体、50%）と長頸瓶（10/36個体、29%）が見られる。

食膳具（図版28・60・61-212~252） 遺物包含層から出土した食膳具には、土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器がある。このうち土師器には、小皿Ⅲb類（212）や同Ⅲa類（213・214）、同Ⅰ類（216・217）、小碗Ⅰb類（215・218）、無台碗Ⅱa類（220）、同Ⅱb類（222）、同Ⅲa類（221）、同Ⅲb類（223）、同Ⅳ類（219）、有台碗（232・233）、有台皿Ⅰ類（234）、有台皿Ⅱ類（235）、皿（236）、鉢（252）がある。また、無台碗の口縁部や底部、有台碗には「臣」などと墨書された可能性がある224~227・231があり、同様の文字と推測される刻書の228~230もある。刻書は焼成以前に刻まれたものである。

以上のうち、小皿Ⅲb類の212は、同類の213・214などと比べて器高が低く、底径も小さい。また、底部側面の立上がり急角度で、厚底の傾向も顕著となっている。有台皿においても、235（有台皿Ⅱ類）は口縁部が短く、直線的に立上がるものとなっている。

無台碗では、SD522やSD853にも見られる無台碗Ⅱa類（220）のほかに、10世紀後半以降に更に顕著となる口縁部の外反傾向〔笹沢1998〕が、221（Ⅲa類）や223（Ⅲb類）といった個体に認められる。223には蛇行した墨書が認められる（後述）。

須恵器食膳具は、無台杯Ⅰa類（237）、同Ⅰb類（238）や底部に糸切り痕を残す同Ⅱ類（239）、有台杯Ⅰ類（240）、有台杯Ⅱ類（241）、杯蓋（242）がある。以上のうち237や238は、胎土や器形などから佐渡小泊産、239や241は頸城丘陵産と推測される。

黒色土器は、無台碗（247~249）、有台碗（250）、両面黒色土器の皿（251）がある。このうち無台碗の249は、底部側面のケズリを行わず、切り離しの糸切り痕をそのまま残す。底部の器形は小碗Ⅰb類と類似している。250の有台碗は、高台が低い台形状を呈している。

施釉陶器は、緑釉陶器の碗（243）や灰釉陶器の有台碗（244・246）、段皿（245）がある。このうち243の緑釉は、濃緑色を呈し京都産の可能性もある。244の灰釉陶器は、口縁部の内面に細い沈線がめぐると特徴的なものである。245の段皿は、胎土から東濃産の可能性もある。

煮炊具（図版29・61-253~267） 前述のように少量の出土で、図示できる資料に限られるが、ロクロ整形の土師器長甕、小甕、鍋を確認できる。口縁部残存率計測法による集計では、非ロクロ系の甕も存在するが、極めて少なく図示に至らない細破片であった。長甕Ⅰ類（256）、同Ⅱ類（254・255）、同Ⅲ類（253）、小甕（259・260）、鍋Ⅰ類（261~263・265）、Ⅱa類（264）がある。また、長甕の体部（257・258）、鍋の体部（266・267）はタタキを施すもので、体部の特徴を示すものとして少量を図示した。

貯蔵具（図版30・62-268~280） 須恵器や灰釉陶器がある。須恵器には、長頸瓶Ⅰ類（268・269）、同Ⅱ類（270）、環状把手付長頸瓶（271）、凸帯付四耳壺（272）、甕Ⅰ類（273~276）、甕Ⅱ類（277）、横瓶

種 別	器 種	点 数	備 考
青磁	碗	1	龍泉Ⅰ類
白磁	碗	5	Ⅳ類
白磁	皿	1	D群
青白磁	碗か皿	1	
輸入陶磁器計		8	
珠洲焼	甕	8	
	壺(T種)	5	
	壺(R種)	1	
	片口鉢	1	
珠洲焼計		15	
瀬戸焼・美濃焼	天目茶碗	1	大窯
総計		24	

第9表 角地田遺跡 中世陶磁器の集計表

(279)がある。灰釉陶器には長頸瓶(280)が少量組成する。加えて、須恵器の瓶類(278)と推測されるが、線刻された破片資料がある。描かれた内容は不明である。

製塩土器(図版30・62-281~287) 少なからず出土しているが、細片が多く器形が判明するものはない。287の底部は、直径20cmにもなる大型のものである。

平安時代の輸入陶磁器(図版30・62-288) 越州窯系の青磁大椀で、本遺跡では本資料1個体のみ出土である。山本分類のⅠ類2ウに相当するもので、10世紀中葉に位置付けられる〔山本2000〕。

包含層出土の中世陶磁器(図版31・62-288~298)

中世陶磁器 12世紀以降の中世陶磁器が少量出土している。破片数による集計では、青磁や白磁などの輸入陶磁器(8点)、珠洲焼(15点)が組成の主体である(第9表)。これらの時期は、12世紀以降に位置付けられる白磁(289)、青磁(291)や珠洲焼(294~298)、15世紀代の白磁(290)と珠洲焼(293)、16世紀後葉~17世紀初頭の瀬戸・美濃焼(292)に分けられる。12世紀以降では、大きい玉縁をもつ白磁椀(289)があり、山本分類の椀Ⅳ類〔山本2000〕に位置付けられる。これとほぼ同時期の龍泉窯系の青磁椀(291)は、山本分類のⅠ類-2あるいは4類に相当するものであろう〔山本2000〕。

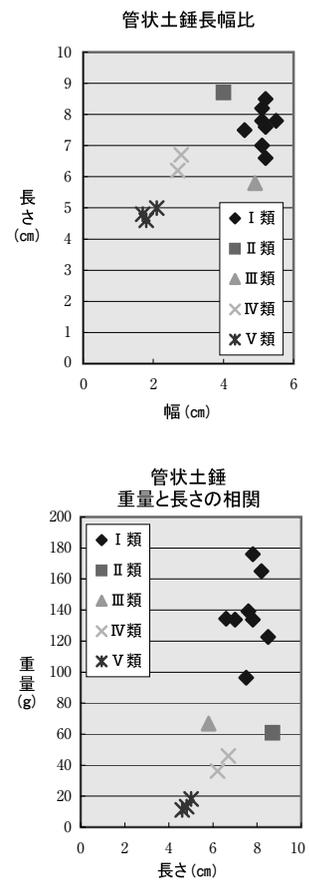
また、これらに並行するものとして、細密な叩き目が施された珠洲焼のⅠ期の甕(294・295・297・298)や壺T種(296)がある〔吉岡1994〕。15世紀の白磁皿(290)は、その器形から森田編年のD群〔森田1982〕と考えられる。珠洲焼Ⅴ期の片口鉢(293)は、密に施文された卸目が特徴的である。瀬戸・美濃焼の天目茶椀(292)は、大窯4期(16世紀後葉~17世紀初頭)と推測される〔藤澤2005〕。

2) 土製品(図版31・62-299~304)

管状土錘が多数出土している。総計299点の出土であるが、1個体が完存するものは非常に少なく、重量が計量できるものは限られている。Ⅰ~Ⅴ類に形態分類した。Ⅰ類は長さ7~8cm、最大径5cm前後のものである(299~307)。Ⅱ類はⅠ類より細身のもので、長さは8.7cmに達する(308)。Ⅲ類は短い円柱状を呈するもので、長さは5.8cmとⅣ類の長さに近い(309)。Ⅳ類は長さ6cm台の細型のものである(310・311)。Ⅴ類は長さ4.5cm前後の小型で細型のものである(312~314)。

第12図は、これらⅠ~Ⅴ類の法量(長さと最大径)との相関、長さ重量との相関(Ⅱ・Ⅲ類は重量不明)を示したものである。Ⅱ類とⅢ類の資料数を増やす必要があるものの、法量の相関グラフでは類単位のまとまりが認められる。また、重量との相関では、Ⅰ類は130~140g、Ⅳ類は40g前後、Ⅴ類は20g未満と対応関係が認められる。孔径との相関は、Ⅰ類は1.5cm前後、Ⅱ類が1.1cm、Ⅲ類が2.0cm、Ⅳ類が0.8~0.9cm、Ⅴ類が0.5cm前後となり各類と孔径は対応関係を示している。また、Ⅰ・Ⅲ類は最大径がほぼ同一で、孔径も太い。これに対してⅡ・Ⅳ・Ⅴ類は孔径が細く、形態の特徴が類似している。したがって、本遺跡の管状土錘は、孔径の太いⅠ・Ⅲ類と相対的に細いⅡ・Ⅳ・Ⅴ類とに区分される。

これらの管状土錘は、SD14(299)、SD523(300~307)、遺物包含層



第12図 角地田遺跡 管状土錘法量グラフ

3 遺 物

(305~314) で出土している。このうちSD523では、管状土錘のI類のみが非常に狭い範囲で集中的に出土した(図版16の遺物分布図参照)。同遺構の管状土錘は比較的残存状況もよく、周辺では土師器鍋(101)が出土している。

3) 鉄関連遺物(図版31・63-315・316)

腕形鍛冶滓2点を図示した。ほかに羽口の小破片も存在するが、図化していない。中型の腕形鍛冶滓(315)と小型の腕形鍛冶滓(316)とがあり、このうち315は、裏面に炉床土が付着している。いずれも遺物包含層から出土している。

4) 石 製 品(図版32・63-317~322)

石製品は7点と極めて少なく、すべて砥石に分類される。素材となる礫の形状を大きく残し1~2面の砥面をもつA類(317・319~322)と多面体を呈するB類(318)がある。A類は、317・319のように敲打痕を残すものや321のように筋状の擦痕が認められるものがある。また、320には、断面が直線的となる砥面が形成されている。

一方、B類は、318の1点のみの出土である。同資料は非常に重く、長軸方向の6面以上が砥面となっている。また、SS1の近辺で配石を構成する礫とともに検出され、SD853の覆土(礫層)に埋没していた。

なお、図示資料の素材はすべて砂岩である。これらは、SD522(317)・853(318)・576(319)の遺構出土資料と、320~322の遺物包含層出土資料がある。

5) 木 製 品(図版32・33・63-323~341)

木製品 木製品は非常に少ない。しかしながら、木筒(323)、箸(324)、用途不明木製品(325)、下駄(326・327)、横櫛(328)、留具用の綴じ皮(329・330)がある。このうち木筒(323)には符録と「急々如律」の墨書から、呪符木筒と判断される(後述)。下駄は差歯下駄の歯(326)と台(327)がある。櫛(328)は横櫛で、全面に黒色の漆が塗られている。綴じ皮(329)は、幅約1.5cm程の帯状の樹皮がゼンマイ状に巻かれたものである。なお、P234(326)以外は、すべて遺物包含層から出土している。

柱 根 6点(331~336)を図示した。いずれも樹芯を外し、四面を加工した分割材を用いている。断面形は、やや歪んだ台形状を呈するもの(331~333)や方形となるもの(335)などがある。柱底の側面観は、偏逆三角形を呈するもの(331・332)や平坦となるもの(333・335・336)などがある。樹種は、キハダ(331~333)、クリ(334)、スギ(335・336)が確認できる。

これらは、SB1-P668(332)、SB2-P638(334)、SB3-P809(333)、SB4-P687(331)、SB4-P705(335)、SB4-P843(336)の基底面などに残存していたものである。

杭 木 杭は1~28の合計28基が確認され、そのうちの杭13(337)・18(338)・23(339)・24(340)・28(341)の5点を図示した。いずれも上部が欠損する。

木取りは、丸木取り(337・338)やミカン割り(339)、半割り(340・341)がある。杭底の側面観は、偏逆三角形(337~339・341)や逆三角形(340)となり、加工はいずれも先端に向かって鋭角に仕上げられている。樹種はすべてクリである。

E 文字資料

今回の調査で木簡1点と墨書土器33点が出土している。木簡は点数が少ないため、多くに言及することはできないが、墨書土器は小破片でありながら示唆的な資料が見られ、字体変化の可能性や本遺跡が所在する地名とも関連する可能性が考えられる。

1) 木簡について

【釈文】

(符録) 急々如律 ×

(142) × (32) × 3 型式

7B24グリットのVc層から出土した(図版32・63・64-323)。木簡は上下と縦方向に大きく4つに分断されている。上端部は原形のまま、やや丸味を帯びている。上端から約3cmと約5.5cm付近で横方向に折れるが、自然によるものであろう。木簡の右側面は欠損していないが、左側面は符録割書の約半分しか墨痕は残っていないので、おそらく約1/4～1/3を失ったと考えられる。全体を通じて切断のための刃物痕跡は見いだせないでおそらく、木簡は土圧や洪水など自然条件により各断片が左右に分割されたと推測される。

オモテ面の表面調整は、全般に良く残り平滑である。それに対して、ウラ面は全く確認できず、当初から調整を施していない可能性も考えられる。

墨痕は下断片の方が残りがよい。それでも肉眼での判読は困難で赤外線カメラを用いた。一方、上断片は一層墨痕が薄れており、赤外線カメラを使用してようやく見出せるほど薄い。

冒頭の符録については割書で書かれている。墨痕が希薄なことや左側面の欠損により完全に残っていないため判読しがたいが、比較的明瞭な右行とほぼ同じ墨痕が左行にも確認される。

符録の下に当たる上断片と下断片の切断部には「急」の墨痕がかかる。上断片に残る「急」の上半分は墨痕が薄い、下断片の「心」(シタゴコロ偏)は明瞭に赤外線カメラで確認される。符録と思われる墨痕と、「急々如律令」の一部が確認されたことから本木簡は呪符と判断される。文字内容からは中世の可能性も想定されるが、共伴遺物や土層観察など調査所見から古代の木簡であると推定される。

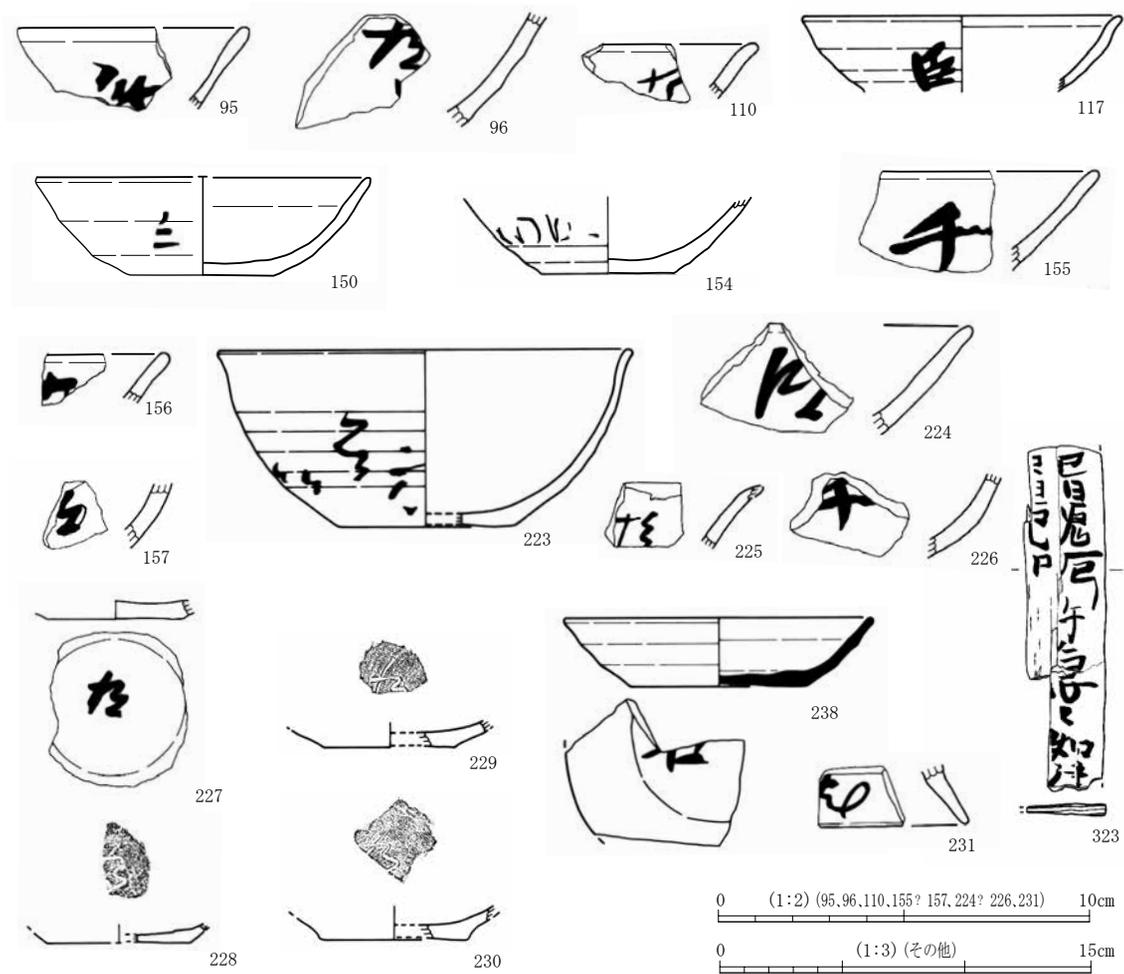
次に、この呪符木簡がどのような呪いに用いられるのかが問題となる。大宮司朗氏の著書で道教系[大宮2002]、『修験道章疏』第1・2巻で修験道系[日本大蔵経編纂会2000]、沖縄に現存する呪符(霊符)をまとめた山里純一氏の研究[山里2004]などで、該当するものを求めたが、符合する霊符は見出せていない。

新潟県内における「急々如律令」の呪符木簡の出土遺跡でも¹⁾、中世に関するものが多く、明確に古代と考えられるものは新潟市(旧黒埼町)緒立C遺跡しか見いだせない。よって、本呪符木簡に関しては、符録の種類や、そこから分かる呪いの具体的な内容などほとんど明らかにできなかった。

2) 墨書土器について

墨書土器30点、ヘラ書3点、合計33点が出土した(第13図)。これらはVc層とする古代・中世の遺物包

1) 奈文研『木簡データベース』の検索による。



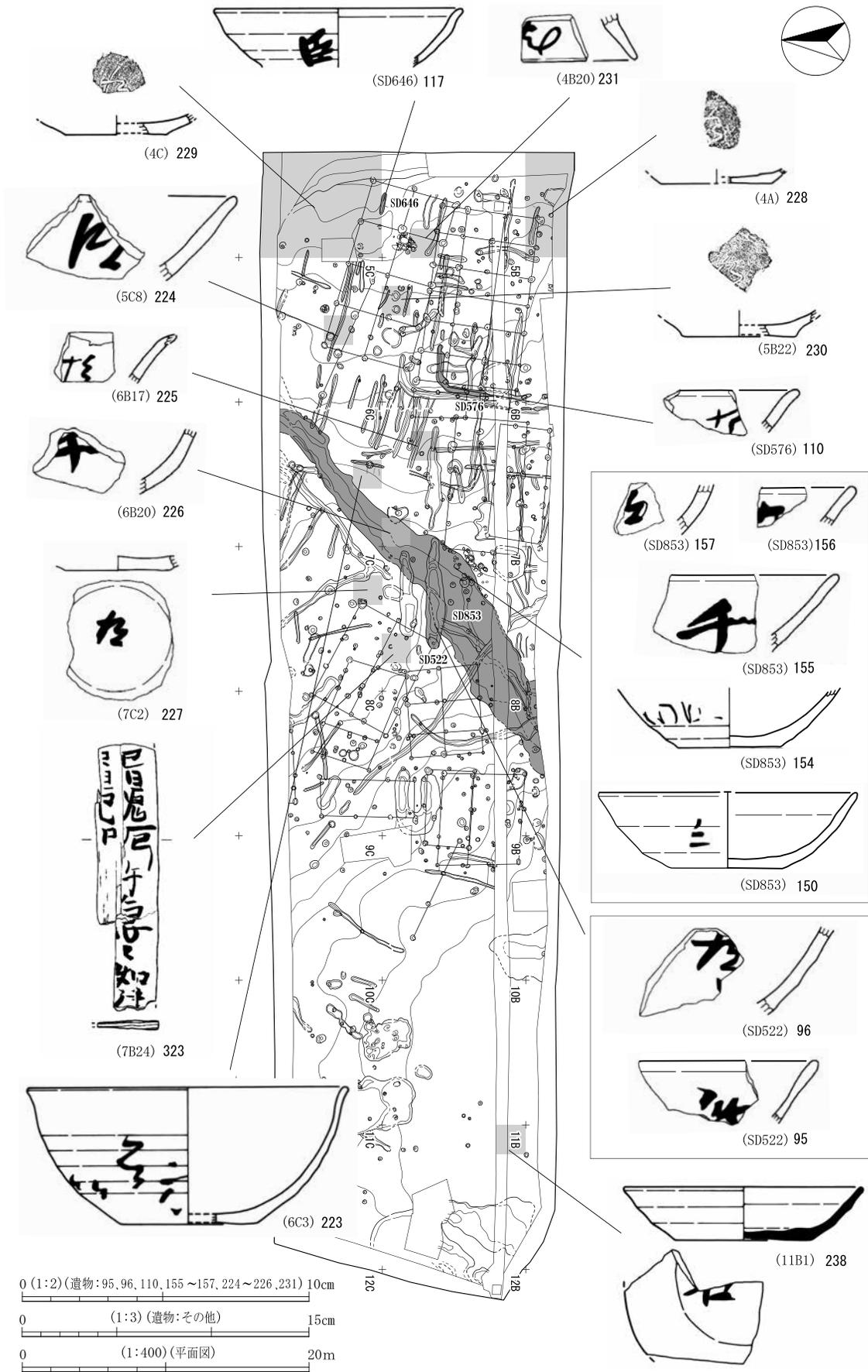
第13図 角地田遺跡 墨書・刻書土器

含層と遺構内からはほぼ同量出土している。遺構は主にSD853とSD522からの出土で、SD522はその底部より出土している。相伴遺物などから10世紀中葉頃と考えられる。本章で記されているように、当該期に人の居住を示す遺構が少ないので、調査地点は集落の縁辺付近と考えられている。特にSD853は土石流などによって埋没した可能性も推測されているので、これらの墨書土器は南側の山麓付近に所在した遺跡本体から流入した可能性も考えられる¹⁾。

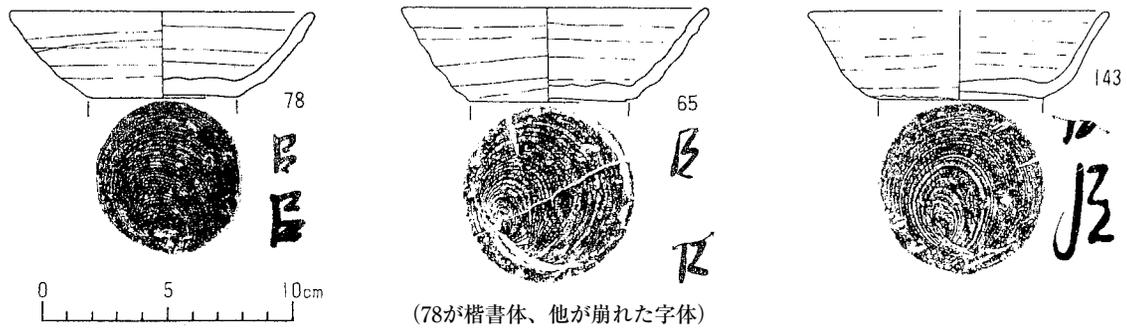
土器の種別では須恵器は238の1点だけで、残りはすべて土師器である。これが地域的特徴なのか、時期的特徴なのかは明確にできていない²⁾。墨書部位は底部外面に墨書された227・238・231を除いて、体部外面に正位で墨書される共通性がある。一方、ヘラ書文字はすべて底部内面に刻まれている。したがって、墨書部位の共通性は本遺跡出土の墨書土器の一つの特徴といえる。判読された文字は「臣」「臣カ」16点、「臣」の一部の可能性ある墨痕7点、「千」2点、墨点や墨線だけで判読できないものが8点である。「千」(155・226)についても、体部外面に正位で墨書する。2点の出土地点は近接するとはいえ、226は包含層からの出土に対して155はSD853からの出土という相違点もある。筆致をみると、文字を書き

1) 厳密に言えば、墨書土器が使用された原位置からは離れてしまったものであるが、近隣集落からの流入であるため、本遺跡の所在する地域との関係を勘案する上では、問題ないと思われる。

2) 糸魚川市教委によって調査された同市山崎A遺跡では土師器廃棄土坑内から大量の土師器に混じって、墨書された土師器が約20点出土している。時期は10世紀前半頃である。この遺跡で須恵器の割合が少ないことを考えると、時期的特徴である可能性も考えられる。



第14図 角地田遺跡 墨書・刻書土器分布



第15図 下宿内山遺跡出土「臣」墨書土器

慣れた人物による可能性があり、同筆の可能性も考えられる。

154は体部外面に横位で蛇行するように墨書がなされている。何らかの文字や記号状のものが記されたとはとても考えがたい。実見された荒井秀規氏や高島英之氏も文字などの墨痕とは見なしがたく、文様や絵として墨書したものではないかというご指摘を頂いた。よって文様など文字以外のものとするか、土器という身近な媒体に対して行った落書などと推測される。

一方、積極的に意図をもって墨書されたと考えるならば、蛇行していることを重視してヘビ形木製品と関連する可能性も考えられる。平川南氏は、蛇行した墨痕が書かれている長野県屋代遺跡出土一二四号と一二五号木筒に関して、ヘビ形木製祭祀具が9世紀にいたり、その簡略形として蛇行する墨書へと移行したと推測する〔平川南2003〕。これに立脚するならば、墨書する媒体の性格の相違を超越して土器でヘビ形が代用された可能性も考えられる。何分、文字でなく単なる墨痕の蛇行では推測の幅が広く、決定的な根拠にかけるため、両案を併記することとする。

3) 「臣」の墨書土器について

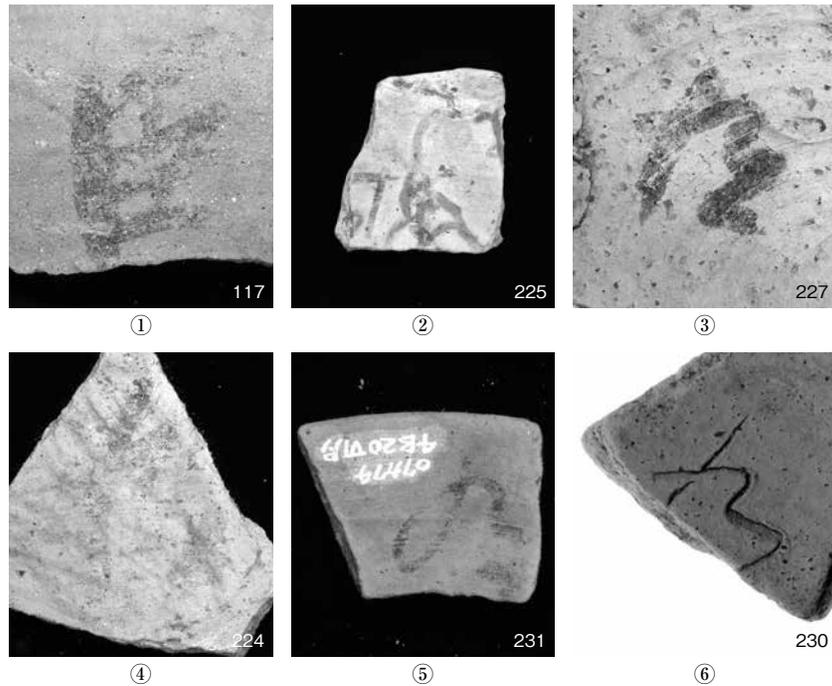
「臣」と判読した根拠の一つは117が明らかに「臣」と判読できることである。「臣」を記した墨書土器の類例は管見の限りでは多くない¹⁾。それらは、大きく3つに大別される。一つは「朝臣」を記したもので²⁾、もう一つが「中臣」を墨書したもので³⁾、さらに「臣」一文字の墨書土器である。一文字「臣」の出土例の多くは、1点だけの出土である。唯一、一定量を見いだせたのが東京都清瀬市下宿内山遺跡である。報告書によれば、集落遺跡である下宿内山遺跡の縁辺部を流れる旧柳瀬川の流路内から出土した「臣」の墨書土器の中には、第15図に示したような字体の墨書土器が見られる〔東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査会1986〕。この遺跡で出土した78や121は崩しが少ない字体でこれが元々の字形と思われる。これらに近いと思われる字体が、『五體字類』に見出されるので「臣」で問題ないであろう。おそらくこの字形が変化したものと見なし、ほかにも「臣」と報告されているのであろう。こうした字例から、本遺跡で出土した墨書土器の中でも96や224・225・227などは、第15図と類似しているといえる。よって、本遺跡の崩れた字体も「臣」と判読した。

さらに、上述のような崩れた字形を「臣」と判読されるならば、その字体の変化過程が推測される。そ

1) 墨書土器の検索には、吉村武彦氏らによる「全国墨書・刻書土器データ」（平成11～13年度科学研究費補助金（基盤研究B2）「古代文字資料のデータベース構築と地域社会の研究」による研究成果の一部）を利用した。

2) 岩手県水沢市胆沢城跡出土など。

3) 千葉県吉原三王遺跡や宮城県多賀城市耕谷遺跡などで出土。



第16図 角地田遺跡 「臣」崩し字の分類

れが、第16図である。変形部分を中心とした相違点やその分類に含まれると考えられる遺物を記すと以下の通りである。

- ①「臣」の楷書体⇒117・238・150（150はすでに崩れはじめ行書体に近いと思われるが、ここに含めた）
- ②本来第2画目になる縦画を最初に書き、横画に続けて以下の筆画を崩して記す。⇒225のみ
- ③本来の第1画・横画を書いた後に、縦画から連続して以下の筆画を崩して記す。⇒96・227
- ④本来の第1画・横画を記さず、③の縦画から崩し部分のみを記す。⇒224のみ（110もこの例カ）

※ヘラ書3点は110の類字形と考えられる。⑤への過渡的な段階として、縦画の後に筆をその右側に回す④でなく、左（外）側から回す字体と考える。

- ⑤縦画を記した後に、外（左）側から回す。崩した最終画を点で止める。⇒157・231

②は筆順の違いによって生じた可能性も推測される。すなわち、②以外の一連の崩し方では縦画から書き始め、それにつづく筆画で字体を崩すのに対して、②だけは横画に続けて崩しに入る点で、ほかと異なる。何らかの理由で筆順を誤ったために生じたイレギュラーとも考えられ、それが点数の少ない理由とも考え得る。②を③以降の文字を記したのとは別の人達と考え、集団を異にする可能性もあるが、②を後継する字体が見いだせなかつたので分別は避けた。よって、②を組み込むべきか考察の余地があるが、可能な限り数多くの字体を検討する観点から、本報告では組み入れておく。以上のような類似字体や字体の変化に立脚して、本遺跡出土の墨書土器の多くを「臣」と判読した¹⁾。

土器に記された文字資料としてヘラ書が出土している点は注目される。ヘラ書資料はその筆順が明白になる点でも重要性が見出され、3点のヘラ書によって「臣」と思われる字体が縦画から書き始めるという重要な根拠が示された。もう一つ注目されるのが、墨書土器と同じ文字（字体）がヘラ書によっても記さ

1) これに対して、土器を実見された荒井・高島氏は関東地方などの墨書土器の例から「得」ではないかご指摘頂いた。確かに、字体が類似している可能性は否定できないが、新潟県内では「得」を記した墨書土器やヘラ書土器は関東ほど多くない上、「臣」に対して一定の根拠や後述する意義などが見出せたので「得」とすることは避けた。

れ、墨書と刻書という筆記方法が異なっても共通する文字が記されていることである。同様の事例は、胎内市（旧中条町）中倉遺跡で須恵器に「王」が墨書とヘラ書で記されている。ほかに上越市上押出遺跡では須恵器蓋の内面に「大」が刻書され、また同じ遺構（SX91）から出土した土師器杯の体部外面に横位で墨書されている¹⁾。本遺跡で出土した土師器は、おそらく遺跡の近隣で焼成生産されたと考えられる。ヘラ書と墨書で同じ文字（字体）が記されているということは、筆記には同じ文字（字体）を使用する集団、もしくは人物が関わったことを示唆している。

4) 「臣」の墨書土器のまとめ

「臣」の墨書土器は現地名との関係でも示唆的な資料である。周知の通り、本遺跡の所在地は大字小見〔オミ〕である。いうまでもなく墨書土器「臣」と音通し、これが地名の由来と関わる可能性がある。しかし、小見に関する初見史料は、室町期までしか遡らず、現地名との関係を明確に示す史料はない。一方、隣接する大字鶉石の地名は『延喜兵部式』にみえる古代北陸道、鶉石駅の有力比定地であり、何より古代の地名が現在まで隣接地に残存している点で注目される。また、近隣には式内社に比定されている大神社も所在する。こうした周辺の古代に関する資料をみると、墨書土器「臣」をもって「小見」の地名が古代まで遡る可能性が見いだされる。

問題となるのは、古代の場合、『続日本紀』和銅六年（713）条「好字二字」によって、二文字で記すことが多い。墨書土器でも、二文字で地名を記した墨書土器は散見する²⁾。しかしながら、古くは一文字で地名を記したことは「コシ」で周知の通りである。すなわち、国郡名や人名などの「高志」もしくは「古志」（「コシ」）は、『日本書紀』ではすべて「越」一文字で記載されている。見附市上田遺跡出土の「山」墨書土器が当該地の郷名「夜麻」と通じる〔田中2005〕ことが認められるならば、本遺跡でも「オミ」と表音する地名を二文字で表記するほかに、一文字で表記した可能性は十分に推測される。ほかに島根県青木遺跡出土の9世紀後半の文字資料では遺跡に隣接する郷名「伊努郷」と「美談郷」を「伊」と「美」の一文字で記した木簡や墨書土器が見られ、地名を1文字で記す可能性は十分に想定される〔島根県教育庁埋蔵文化財調査センター編2006〕。

周辺に古代に関する資料が豊富で、特に隣接地に古代の地名が残存していることや、地名を一文字で表記することに問題のないこと、換言すれば、「好字二字」に限る必要のないことを勘案すると、この遺跡が存在していた10世紀頃にすでに「オミ」という地名が存在し、それに対して「臣」の文字を当てて表記した可能性は十分考えられる。こうしたことから、「臣」墨書土器は当該地・大字「小見」に関する初見資料として資料的な価値が非常に高い。

近年の頸城方面における発掘調査の成果では、現在の地名が古代に遡ることが次々と明らかになりつつある。越市大字下野田に所在する延命寺遺跡ではその出土木簡にみえる「野田村」や、上越市に所在する岩ノ原遺跡がその具体例である。後者の遺跡は付近の小字名を遺跡名としたが、出土した墨書土器によって越後国東大寺領石井荘の比定地であることが判明し、荘園名「石井（イワイカ）」が由来になった可能性が指摘されている〔高橋ほか2007〕。本遺跡の墨書土器はこれらと同様に、頸城地域の地名が古代に遡

1) 墨書やヘラ書の中には「×」や「十」が見られる。これらに関しては文字と見なす客観的な根拠に乏しい。また判読した人物の主観によりどちらとも判じがたい面もある。こうしたものは単なる窯記号などとして記された可能性もあるため、考察の対象からは除外した。

2) 例えば、長野県屋代遺跡群出土の墨書土器の中に、「屋代」や「八代」と書かれたものがある。

る可能性を示す資料としても重要である。同時に従来、中世後半期（上杉期）までが上限とされていたこの地方の地名に関して、その起源の再考を迫る資料としてもその価値が見い出される。

また、式内比定社大神社は、おそらくその読みが「オオ神社」であったと推測される。「大」をオオと表音する典型的な事例として『古事記』編纂者の「大安万呂」があり、多氏との関係やこの氏族が称したカバネ「朝臣」との関係も興味深い¹⁾。しかし、こうしたことを述べるには、十分な根拠が見出せない現状では、今後の課題としておき、「臣」墨書土器と大字小見との地名上の関連を指摘するに止めておきたい。「臣」墨書土器に関連して当該地域である能生谷に残っている歴史的な背景が垣間見られるが、こうした点については後考に期したい。いずれにしても、「臣」墨書土器が能生谷の歴史を明らかにする上で、貴重な資料であることは間違いないといえる。

1) 40ページ註3)で記した宮城県耕谷遺跡では「中臣」とともに「中」や「臣」の墨書土器が出土している。これを参考とすれば、「朝臣」の一字が墨書された可能性はある。

〔別註1〕

字体の変化と土器の編年的な関係については、明らかにし難い。よく問題となるのは、第16図1のような楷書に近い字体が土器の編年上古い時期で、崩れるに従って土器の年代が新しくなるのかという疑義である。この点について、調査担当者には土器の編年的な視点も含めて検討頂いたが、時期などが分かるすべての土器は同じ時期内に入り、それ以外のものについては小破片のため明らかにできなかった。このように土器の時期を細分できなかったこと、また、そもそも、製作に関わる年代観である編年と、土器の使用の時期とをイコールには考え難いことにも、文字の崩しと土器の年代との関係を明らかにできない要因があるように思われる。

〔別註2〕

多氏の初見史料でもある『日本書紀』天智即位前紀には「多臣蔣敷」という人名がみられる。また、平城京の住民として8世紀に、「多臣」が見出せる。『日本書紀』の参照・引用といった二次的な影響による墨書土器「臣」の可能性は否定できないが、基本的には時期が2世紀近く離れる以上、それを関連づけることは困難と思われる。

また、カバネ「臣」との関係も推測はできるが、律令期（八色の姓以降）の「臣」姓は8階中、下から3番目であり、こうした低いカバネを記したとは考えがたい。確かに、律令前代の「臣」姓は最高位であるが、遺跡の時期（10世紀後半）と3世紀以上前のカバネを墨書したとするなら、『日本書紀』などのかかなり古い史料の引用か、何らかの伝承が当時に存在したことを考える必要があるが、そのような根拠が明示できない以上、そこまで推測するのは非常に困難である。

4 自然科学分析

A はじめに

新潟県糸魚川市大字小見に所在する角地田遺跡は、能生川左岸の沖積地に面した小見川が形成した扇状地上に立地する。本遺跡は、扇状地扇端部を東西に横断するように調査区（1・2区）が設定されており、人工改変に伴う崖線を挟み、崖線下（1区）、崖線上（2区）とされている。発掘調査の結果、2区からは、10世紀後葉～11世紀頃に比定される掘立柱建物、溝等が確認されたほか、10世紀中葉と推定される自然流路（SD853）等が検出されている。

本報告では、中世およびそれ以前の古植生や本遺跡から出土した木製品の樹種の検討を目的として、自然科学分析調査を実施する。なお、樹種同定については、周辺の平遺跡の木製品についてもあわせて行った。

B 試料

試料は、1区および2区調査区の深掘りトレンチ1～3（第7図、土層断面②・⑩・⑫）に認められた土層から採取された土壌試料と本遺跡から出土した木製品等からなる。以下に、各試料の概要を示す。

1) 土壌試料

古代～中世の遺構が多数検出された2区は、V（Vc）層が遺物包含層、VI層上面が遺構検出面とされている。深掘りトレンチ1～3（第7図）では、各地点においてV層が確認されているが、V層より下位堆積物は、各トレンチにより堆積状況が異なる。深掘りトレンチ1・3（同図、土層断面⑩、⑫）では、比較的層厚のある砂礫層が確認されており、深掘りトレンチ1（同図、土層断面⑩）では最大で人頭大ほどの円～垂円礫が混じる淘汰の悪い砂礫により構成される。これに対し、深掘りトレンチ2（同図、土層断面②）は砂～砂礫が挟在するものの全体的にシルト～粘土等の泥質な堆積物からなり、暗色を呈する土層や炭化物の混じる土層も確認されている。

本分析では、上記した分析目的に基づき、遺物包含層のV（Vc）層と遺構検出面のVI層を主体として、その上・下位の堆積物を対象に分析調査を行う。分析対象とした土層は、1区 II層・III層、2区深掘りトレンチ1 IIIb層・Vc層・VI層、深掘りトレンチ2 Vc層・VI層・VII層・IX層・XIV層、深掘りトレンチ3 Vc層・VII層である。これらの土層から採取された土壌試料を対象に花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

2) 木製品

試料は、木製品19点である。なお、19点中2点（実測番号329・330）は樹皮と判断できたため、分析対象から除外したことから、分析対象試料は17点となる。試料の詳細は、結果とともに表に示す。

C 分析方法

1) 花粉分析

試料10ccを正確に秤り取り、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植

物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するすべての種類を対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は20 μ m以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表および花粉化石群集の層位分布図として表示する。微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表・図として示す。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入し、100単位とする。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学的処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤〔近藤2004〕の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。各分類群の含量は有効数字を考慮し、10の位を四捨五入し、100単位とする。合計は、各分類群の丸めない数字を合計した後に100単位とする。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位の変化から古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位の変化を図示する。

3) 樹種同定

各木製品の木取りの観察を行った後、剃刀を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東〔島地1982〕、Wheelerほか〔Wheelerほか1998〕、Richterほか〔Richterほか2006〕を参考にする。各樹種の木材組織については、林〔林1991〕、伊東〔伊東1995・1996・1997・1998・1999〕や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

D 結 果

1) 花粉分析

結果を第10表、第17図に示す。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉総数が100個体未満の試料は、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を+で表示するに留めている。花粉化石の産出状況は試料により異なるが、保存状態は全体的に

やや不良である。以下に、各地点の産状を示す。

1区 Ⅱ・Ⅲ層からは、花粉化石がほとんど検出されず、Ⅱ層からマツ属が2個体検出されたのみである。微粒炭量は、Ⅱ・Ⅲ層ともに100個未満/ccである。

2区深掘りトレンチ1 Ⅵ層からは花粉化石がほとんど検出されず、わずかに木本花粉のツガ属が1個体検出されるのみである。Vc層は、木本花粉では、ブナ属やスギ属、マツ属が多産し、このほかに、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属等を伴う。草本花粉では、イネ科が多産し、ヨモギ属、カヤツリグサ科等を伴う。Ⅲb層は、木本花粉では、マツ属とブナ属が多産し、このほかに、ツガ属、トウヒ属、コナラ亜属、タニウツギ属等を伴う。草本花粉では、イネ科が優占し、カヤツリグサ科等も認められるほか、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属等の水湿地生植物が検出される。また、Vc・Ⅲb層からは、栽培種であるソバ属の花粉も検出される。

微粒炭量は、Ⅵ層は約300個/cc、Vc層は約400個/cc、Ⅲb層は約200個/ccである。

2区深掘りトレンチ2 XⅣ・Ⅸ層は、花粉化石は1個体も検出されず、わずかにシダ類胞子が検出されるのみである。Ⅶ層も花粉化石の産出状況は不良であり、木本花粉ではマツ属やスギ属、ブナ属、草本花粉では、イネ科が1~2個体検出されるのみである。Ⅵ・Vc層から花粉化石が産出する。木本花粉では、マツ属やスギ属、ブナ属が多産し、このほかに、モミ属やツガ属、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科やサナエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属等が認められる。また、オモダカ属やミズアオイ属の水湿地性植物や栽培種のソバ属等も検出される。

微粒炭量は、XⅣ層は約100個未満/cc、Ⅸ層は約300個/cc、Ⅶ層は約200個/cc、Ⅵ・Vc層は約400個/ccである。

2区深掘りトレンチ3 Ⅶ・Vc層とも花粉化石の産出状況は不良であり、解析に有効な個体数は検出されない。Ⅶ層は、マツ属とイネ科がそれぞれ1個体ずつ検出されるのみである。Vc層は、木本花粉ではマツ属やスギ属、ブナ属、コナラ亜属等が、草本花粉ではイネ科が多く、このほかに、カヤツリグサ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ソバ属等が認められる。

微粒炭量は、Ⅶ層は約2,000個/cc、Vc層は約4,200個/ccである。

2) 植物珪酸体分析

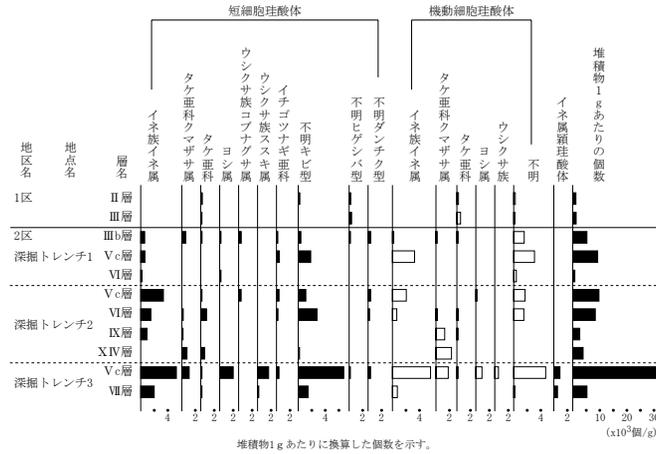
結果を第11表、第18図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められるなど、保存状態は不良である。以下に、各地点の産状を示す。

1区 Ⅱ・Ⅲ層は、植物珪酸体含量は1,200~1,300個/g程度と少ない。検出された分類群では、タケ亜科等がわずかに認められる。

2区深掘りトレンチ1 Ⅵ層は、植物珪酸体含量は約800個/g程度と少ない。検出される分類群は、ヨシ属がわずかに認められたほか、栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体が認められる。Vc層は、植物珪酸体含量は約9,200個/gと増加する。イチゴツナギ亜科がわずかに検出されたほか、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。特に、機動細胞珪酸体の産出が目立ち、含量は約3,300個/gである。Ⅲb層は、植物珪酸体含量は5,200個/gとVc層に比べ低い値を示すが、検出される分類群は本地点で最も多く、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、コブナグサ属、イチゴツナギ亜科、栽培植物のイネ属も検出される。

2区深掘りトレンチ2 XⅣ層は、植物珪酸体含量は3,800個/gであり、クマザサ属を含むタケ亜科の産

4 自然科学分析



第18図 角地田遺跡 植物珪酸体含量の層位分布

(個/g)

種 類	試 料 名	1区		2区									
		II層	III層	深掘トレンチ1			深掘トレンチ2				深掘トレンチ3		
				IIIb層	Vc層	VI層	Vc層	VI層	IX層	XIV層	Vc層	VII層	
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ族イネ属		-	-	600	600	200	3,400	1,500	900	-	-	5,300	2,000
タケ亜科クマザサ属		-	-	600	-	-	-	200	200	800	-	1,100	-
タケ亜科		200	200	200	-	-	200	900	-	600	-	200	200
ヨシ属		-	-	200	-	200	-	-	-	-	-	2,000	-
ウシクサ族コブナグサ属		-	-	400	-	-	400	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,600	200
イチゴツナギ亜科		-	-	200	400	-	400	200	-	-	-	400	-
不明キビ型		200	-	400	1,800	-	1,100	2,800	-	200	-	6,700	1,400
不明ヒゲシバ型		200	400	200	-	-	-	-	-	-	-	200	-
不明ダンチク型		-	-	400	-	-	400	200	-	-	-	400	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ族イネ属		-	-	200	3,300	-	2,000	600	-	-	-	5,600	700
タケ亜科クマザサ属		-	-	200	-	-	-	200	1,300	2,300	-	1,800	-
タケ亜科		200	500	200	-	-	-	200	200	-	-	200	-
ヨシ属		-	-	-	-	-	200	-	-	-	-	900	-
ウシクサ族		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	500	-
不明		200	200	1,600	3,100	400	1,700	1,500	-	-	-	4,700	200
珪化組織片													
イネ属類珪酸体		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	900	500
合 計													
イネ科葉部短細胞珪酸体		700	500	3,100	2,900	400	5,800	5,800	1,100	1,500	17,800	3,800	
イネ科葉身機動細胞珪酸体		500	700	2,100	6,300	400	3,900	2,600	1,500	2,300	13,800	900	
珪化組織片		0	0	0	0	0	0	0	0	0	900	500	
総 計		1,200	1,300	5,200	9,200	800	9,700	8,300	2,600	3,800	32,500	5,300	

第11表 角地田遺跡 植物珪酸体含量

出が目立つ。IX層は、植物珪酸体含量は約2,600個/gと下位のXIV層に比べ低い。クマザサ属を含むタケ亜科が認められるほか、栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体が検出される。VI層は、植物珪酸体含量は約8,300個/gと高い値を示す。クマザサ属を含むタケ亜科やイチゴツナギ亜科などが認められるほか、イネ属の含量はIX層に比べ高い値を示す。含量は、短細胞珪酸体が約1,500個/g、機動細胞珪酸体が約600個/gである。Vc層は、植物珪酸体含量は約9,700個/gと本地点で最も高い。タケ亜科やコブナグサ属、イチゴツナギ亜科などが認められるほか、イネ属の産出が目立つ。含量は、短細胞珪酸体が約3,400個/g、機動細胞珪酸体が約2,000個/gである。

2区深掘りトレンチ3 VII層は、植物珪酸体含量は約5,300個/gであり、タケ亜科やススキ属が検出される。また、イネ属も検出され、その含量は短細胞珪酸体は約2,000個/g、機動細胞珪酸体は約700個/gである。Vc層は、植物珪酸体含量は約32,500個/gと今回の分析試料中で最も高い。クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が検出されるほか、イネ属の含量が高い。イネ属の含量は、短細胞珪酸体は約5,300個/g、機動細胞珪酸体は約5,600個/gである。

3) 樹種同定(1)

角地田遺跡 結果を第12表に示す。木製品19点は、針葉樹1種類(スギ)、広葉樹4種類(クリ、モクレン属、イスノキ、キハダ)に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部

の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸~薄く、横断面では角張った楕円形~多角形、単独および2-4個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状~対列状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-40細胞高。

イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

加工の関係から木口面の切片が採取できなかった。柾目面で放射方向にほぼ同径の道管が配列していることから散孔材と判断できる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。軸方向柔組織が認められ、柾目面では放射方向に等間隔で出現する。道管、柔細胞、木繊維に黒色~茶褐色の充填物が顕著に認められる。

キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

4) 樹種同定(2)

平遺跡 結果を第12表に示す。木製品は、針葉樹1種類(スギ)、広葉樹1種類(トチノキ)に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

実測番号	地区	グリッド	遺構	器種	木取	樹種	備考
323	2区A	7B24	包含層	木簡	板目	スギ	
324	2区A	-	包含層	箸	削出棒	スギ	
325	2区A	5B5	包含層	不明	分割材	スギ	
326	2区A	7B25	P234	差歯下駄の歯	柾目	スギ	
327	2区A	6B15	包含層	差歯下駄の台	柾目	モクレン属	
328	2区A	5B4	包含層	横櫛	分割材	イスノキ	
329	2区B	8C1	包含層	綴じ皮	-	樹皮	
330	2区B	8C1	包含層	綴じ皮	-	樹皮	
331	2区A	6B3	P687	柱根	分割材	キハダ	
332	2区A	5A21	P668	柱根	分割材	キハダ	
333	2区A	5B20	P809	柱根	分割材	キハダ	
334	2区A	5C6	P638	柱根	分割材	クリ	
335	2区A	6A23	P705	柱根	分割材	スギ	
336	2区A	6A25	P843	柱根	分割材	スギ	
337	2区A	6C3	杭13	杭	芯持丸木	クリ	
338	2区A	6B17	杭18	杭	芯持丸木	クリ	
339	2区A	6C20	杭23	杭	分割材	クリ	
340	2区A	6C20	杭24	杭	半截木	クリ	
341	2区A	6C20	杭28	杭	半截木	クリ	

番号	実測番号	地区	器種	木取	樹種
W1	34	5区	杓文字(小)	柾目	スギ
W2	35	5区	杓文字(大)	柾目	スギ
W3	11	2区	漆器碗	横木地板目取	トチノキ
W4	12	2区	糸巻	削出棒状	スギ

上表 角地田遺跡 下表 平遺跡

第12表 角地田遺跡・平遺跡 樹種同定結果

4 自然科学分析

トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-10細胞高で階層状に配列する。

E 考 察

1) 古 植 生

1区および2区の基本土層の花粉分析結果では、1区 II・III層や2区の各トレンチの遺構確認面(VI層)より下位の堆積物では花粉化石が検出されない、あるいは、検出されてもわずかであった。発掘調査所見によれば、2区深掘りトレンチでは、砂礫が基盤をなす状況(トレンチ1)や泥質な堆積物中に砂礫を挟在する状況(トレンチ2・3)が観察されている。深度約4mまで掘削されたトレンチ2では、部分的に砂礫を挟在する比較的泥質な堆積物の墨重からなり、各土層の所見を参考とすると一連の堆積物とみられる粒径の変化も窺われる。また、炭化物などが混じる土層が確認されているが、Vc層のような古土壌とみられる堆積物の形成は明瞭でない。分析調査の結果、VI層より下位では植物珪酸体含量が低く、検出される種類もクマザサ属を含むタケ亜科がわずかに検出される程度であった。これらの点から、VI層より下位の土層中に花粉・植物珪酸体等の植物微化石が取り込まれにくかったことが推定される。また、VI層および上位の堆積物における花粉化石群集も、シダ類胞子が比較的多産することや検出された花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多いことから、堆積後の経年変化の影響を受けていると推定される。

2区のVI層より下位の堆積物中で産出が目立ったクマザサ属を含むタケ亜科の植物珪酸体は、これまでの研究から他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点[近藤1982、杉山ほか1986]や他の種類よりも残留しやすいことが指摘されている。また、後背地の潜在自然植生[宮脇1985]や本遺跡のVI層および上位の堆積物の花粉化石群集から、当時の森林植生はブナ林であり、その林床にはチシマザサ(クマザサ属の一種)が生育していたと推測される。本遺跡の立地を考慮すると、今回検出されたクマザサ属を含むタケ亜科は、後背地からの碎削物とともに運ばれてきたササ類の植物珪酸体や周辺に生育したササ類に由来すると考えられる。

古代~中世前半の遺構検出面とされるVI層と上位の遺物包含層とされるVc層の花粉化石群集は、木本花粉と草本花粉が同程度の割合を示し、ほぼ同様の分類群が認められた。木本類では、ブナ属やスギ属、マツ属が多く、このほかに、モミ属やツガ属、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属等が検出された。ブナ属は、コナラ亜属等とともに冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素であることから、後背の丘陵・山地部には、これらの落葉広葉樹林が分布し、部分的にモミ属、ツガ属等の温帯性針葉樹が生育していたと考えられる。また、サワグルミ属やハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属、トネリコ属等は、河畔林や湿地林を構成する分類群や適湿地を好む分類群であることから、周辺の河川沿いや河畔や低地などにはこれらの分類群が生育していたと推測される。多産したスギ属は、水分や養分の多い土壌でよく生育するとされていることや、富山県入善町の扇状地扇端の湧水部ではスギの天然林とされる杉沢の沢杉がみられることなどから、同様に遺跡周辺の低地部に林分を形成していたと推定される。

草本類では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科やサナエタデ節-ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属などが検出された。これらは明るく開けた場所を好む人里植物を含む分類群であることから、調査区周

辺に草地を形成していたとみられ、この他にススキ属なども生育したと考えられる。また、周辺の水湿地には、オモダカ属やミズアオイ属、ヨシ属が生育していたと考えられる。

Ⅲb層では、花粉化石群集組成における草本花粉の割合がやや増加する傾向が認められた。また、Ⅵ・Ⅶc層で多産していたスギ属が減少し、マツ属が顕著となる。木本類で最も多産したマツ属は、亜属まで同定できたものの多くは複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は、生育の適応範囲が広く極端な陽樹であることから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類である。マツ属は、スギ属等とともに花粉生産量が多いことから、スギの減少に伴ってその割合が強調されている可能性があるが、少なくとも、スギ等からなる林分の減少を反映しているとみられ、二次林としてのマツ属も増加した可能性がある。また、増加が認められた草本類では、イネ科の優占が認められた。このことから、イネ科をはじめとしてカヤツリグサ科やサナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属等の明るく開けた場所を好む人里植物を含む分類群からなる草地が遺跡周辺に分布していたと推定される。

なお、植物珪酸体分析結果では、栽培植物のイネ属が検出された。イネ属の短細胞珪酸体がわずかに検出されたⅨ層では、堆積物中に炭化物が混じることが明らかとされているが、遺構・遺物は確認されており、イネの由来や利用について言及することは困難である。一方、Ⅷ層および上位の堆積物では、地点によって産状は異なるが、上位に向かってイネ属の植物珪酸体含量が増加するほか、Ⅵ層より上位で多産したイネ科花粉の概査では、イネ属に類似した形態を示す個体も多く認められている。本遺跡では、調査区東半より遺構が多く検出されており、耕作溝とみられる溝も確認されていることから、土地利用の状況を反映している可能性がある。また、Ⅶc層およびⅢb層では、栽培種のソバ属が検出された。このことから、当該期には、遺跡周辺でソバ栽培が行われていたと考えられる。

花粉分析対象とした堆積物の微粒炭量は、100個/cc未満～4,200個/ccであった。微粒炭は、人間活動と密接に関係しており、遺跡周辺での火入れなどに由来するとされている〔例えば安田1987、松井ほか1992など〕。今回の調査では、2区深掘りトレンチ3のⅦ・Ⅶc層でやや高い値が認められたが、全体的に微粒炭量は少なく、その増減は明瞭捉えられないこと、トレンチ1・2において同様の傾向が認められないことから、遺跡周辺での人間活動を反映している可能性について言及することは困難である。

2) 木材利用

角地田遺跡 樹種同定を行った木製品のうち、柱根6点は10世紀後葉～11世紀の掘立柱建物跡を構成する柱穴内から出土したものであり、いずれも樹芯を外した分割材の利用が認められた。このうち、1/4～1/5分割材を利用し、加工形状が類似するP687・668・809の3点はいずれもキハダであった。また、残る3点のうち、P638やP705は面取とみられる加工も認められたが、不明瞭であったため検討が必要である。これらの試料には、スギとクリが認められた。クリは、重硬で強度・耐朽性が高い材質を有し、スギも比較的強度や耐水性が高い。一方、キハダは、強度は高くないが、耐朽性はクリに次いで高いとされる。これらの材質の特徴から、柱材は耐水性・耐朽性の高い木材の選択・利用が推定される。また、杭列の杭も芯持丸木、半裁木、分割材が混在し、加工方法は異なるが、すべてクリであった。このことから、柱材と同様に耐朽性の高い木材の利用が窺われる。

木製品は、木簡、箸、下駄、横櫓等からなる。木簡は、薄い板目板が利用され、樹種は針葉樹のスギであった。新潟県内では、浦廻遺跡（白根市）等で中世の木簡を対象とした調査事例があり、スギが多数認

4 自然科学分析

められている [パリノ・サーヴェイ株式会社2003a]。

箸は、断面六角形の削出棒状を呈し、樹種はスギであった。本遺跡周辺では調査事例が少ないが、用言寺遺跡（上越市）においてスギの箸が出土している [パリノ・サーヴェイ株式会社2007]。下駄の歯（326）は、木取りが柾目板状になることから、差歯下駄の歯とみられる。327は、柾目板状であり、遺存状態は不良であるが、残存部の特徴から差歯（露卯）下駄の台と考えられる。下駄の歯はスギ、台はモクレン属であった。モクレン属には、下駄歯によく利用されるホオノキが含まれており、比較的軽く加工が容易である。露卯下駄の台にモクレン属が利用された事例は、下沖北遺跡（柏崎市）などで確認されている [松葉2000、パリノ・サーヴェイ株式会社2003b] ほか、新潟県内では差歯下駄の台や連歯下駄にもモクレン属が認められており、様々なタイプの下駄に利用されていたことが推定される [パリノ・サーヴェイ株式会社2003a・2003c・2005、金原2006]。

一方、差歯下駄の歯にスギが認められた事例は、坂井遺跡（見附市）や馬越遺跡（加茂市）などで確認されている [パリノ・サーヴェイ株式会社2005、金原2006] ほか、差歯下駄の台では住吉遺跡（紫雲寺町）などで確認されている [植田2006]。連歯下駄にスギが利用される事例は、差歯下駄よりも多く、一之口遺跡（上越市）や細田遺跡（上越市）で確認されている [パリノ・サーヴェイ株式会社1994、株式会社古環境研究所2005]。このことから、スギは、モクレン属と同様に様々なタイプの下駄に利用されていたことが示唆される。

櫛はいわゆる横櫛であり、櫛の背が木口、歯の広い面が柾目になる木取りであったことから、分割材より削り出していることが推定される。全体的に黒色を帯び、樹種は広葉樹のイスノキであった。イスノキは、日本産広葉樹の中でも特に重硬で緻密な材質を有し、加工は困難である一方、緻密なために細かな加工に適し、櫛の用材としてツゲに次ぐ良材とされている。新潟県内におけるイスノキの櫛の出土例は、ツゲの櫛よりも多く、八反田遺跡、仲田遺跡、用言寺遺跡（上越市）などで確認されている [株式会社パレオ・ラボ2002、株式会社古環境研究所2006・パリノ、サーヴェイ株式会社2007]。このほかに、曾根遺跡（豊浦町）、馬越遺跡（加茂市）、住吉遺跡（紫雲寺町）、城田遺跡（神林村）で古代～中世の横櫛にイスノキが認められており、イスノキが広く利用されていたと推定される [川村1983、パリノ・サーヴェイ株式会社2001・2005、植田2006]。なお、イスノキは、暖温帯常緑広葉樹の構成種で新潟県に自生していないことから、これらの櫛は、木材あるいは製品として西日本地域より持ち込まれたことが推定される。

平遺跡 大（35）・小（34）2点の杓文字状を呈する板材のうち、35は柾目板、遺物番号34は板目板と木取りが異なったが、樹種はいずれもスギであった。糸巻きは、組合せ式糸巻（糸枠）の腕木と考えられる。削出棒状を呈し、同じくスギであった。スギは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易といった材質の特徴を有することから、これらの板材や削出材などに利用されたと考えられる。

漆器腕は、横木地板目取であり、広葉樹のトチノキであった。トチノキは、ブナ属やケヤキと共に漆器に多く利用される樹種の一つされるが、新潟県内における調査事例では、一之口遺跡（上越市）の古代の資料や、仲田遺跡（上越市）、下沖北遺跡（柏崎市）、大武遺跡（和島村）、住吉遺跡（紫雲寺町）の中世の資料が知られているのみである [パリノ・サーヴェイ株式会社1994・2003b、松葉2000、三村^{ほか}2003、植田2006]。中世の漆器木地については調査事例が少ないが、近世の資料ではトチノキに横木地板目取、ブナ属に横木地柾目取の資料が多く見られる。トチノキは、辺材部分（シラタ）が少ないために、シラタを効率的に利用するために丸太表面に腕を伏せたような形で木地をとる横木地板目取、樹芯まで利用可能なブナ属は狂いがより少なく、木地が多くとれる横木地柾目取が適しているとされており [北野2005]、樹

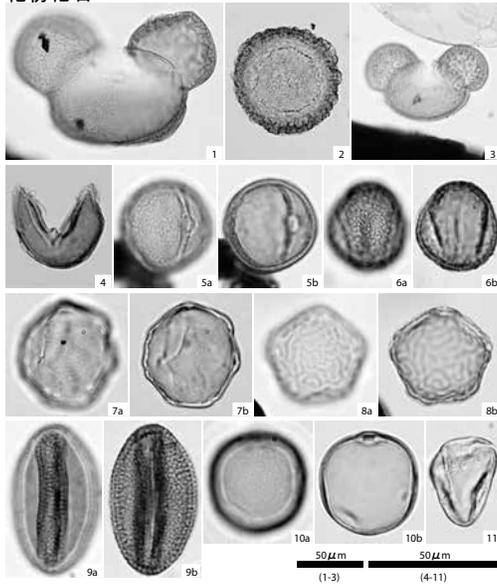
種に合わせた木取りが行われていたと推定される。

引用文献

- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ 木材研究・資料31』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ 木材研究・資料32』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ 木材研究・資料33』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ 木材研究・資料34』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ 木材研究・資料35』 京都大学木質科学研究所
- 株式会社古環境研究所 2005 「細田遺跡出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集 下馬場遺跡・細田遺跡』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 株式会社古環境研究所 2006 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集 用言寺遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 株式会社パレオ・ラボ 2002 「木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第110集 八反田・高畑遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川村恵洋 1983 「曽根遺跡出土木材の識別」『新潟大学農演報 No.16』
- 金原 明 2006 「木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第169集 坂井遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 北野信彦 2005 『近世出土漆器の研究』 吉川弘文館
- 近藤錬三 1982 「Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究」『昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書』
- 近藤錬三 2004 「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト 48』
- 松葉礼子 2000 「大武遺跡出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 大武遺跡Ⅰ(中世編)』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 松井 健ほか 1992 『土の地理学－世界の土・日本の土－』 朝倉書店
- 三村昌史ほか 2003 「仲田遺跡出土木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 仲田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 宮脇昭編 1985 『日本植生誌 中部』 至文堂
- パリオ・サーヴェイ株式会社 1994 「一之口遺跡東地区から出土した木質遺物の同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区(本文編)』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2001 「城田遺跡の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告第10 城田遺跡(本文編)』 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2003a 「木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第126集 浦廻遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2003b 「下沖北遺跡から出土した木製品などの樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第125集 下沖北遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2003c 「樋渡・堀下遺跡の自然科学分析」『神林村埋蔵文化財報告第18 樋渡・堀下遺跡』 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2007 「用言寺遺跡の自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第183集 用言寺遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2005 「平成14年度馬越遺跡の自然科学分析」『加茂市文化財調査報告14 馬越遺跡－国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書－』 加茂市教育委員会
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2006 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 三角田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- Richter H.G.ほか(編) 2006 『針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト』 海青社
- 島地 謙ほか 1982 『図説木材組織』 地球社
- 杉山真二ほか 1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定」『考古学と自然科学』 19
- 植田弥生 2006 「出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第157集 住吉遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- Wheeler E.A.ほか(編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト』 海青社
- 安田喜憲 1987 『文明は緑を食べる』 読売新聞社

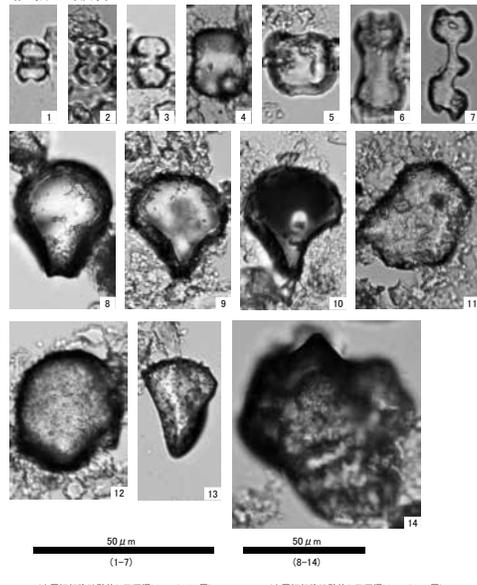
4 自然科学分析

花粉化石



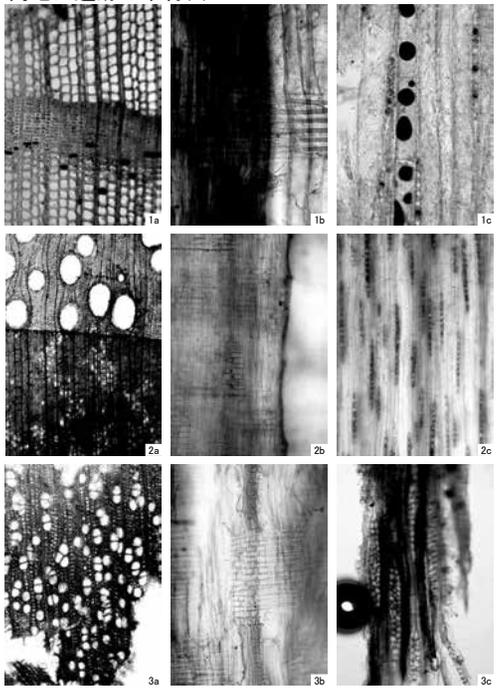
1. モミ属(2区深掘トレンチ2.VI層)
2. ツガ属(2区深掘トレンチ2.VI層)
3. マツ属(2区深掘トレンチ2.Vc層)
4. スギ属(2区深掘トレンチ1.Vc層)
5. プナ属(2区深掘トレンチ2.VI層)
6. コナラ属コナラ亜属(2区深掘トレンチ1.Vc層)
7. サワグルミ属(2区深掘トレンチ2.VI層)
8. コレ属-ヤキ属(2区深掘トレンチ2.VI層)
9. ソハ属(2区深掘トレンチ2.VI層)
10. イネ科(2区深掘トレンチ1.Vc層)
11. ガヤツツグサ科(2区深掘トレンチ2.Vc層)

植物珪酸体



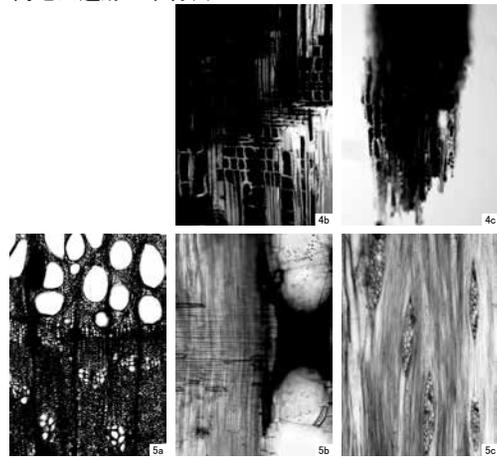
1. イネ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ1.IIb層)
2. イネ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ2.Vc層)
3. イネ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ3.Vc層)
4. クマザサ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ2.III層)
5. ヨシ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ3.Vc層)
6. コナラ属コナラ亜属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ1.IIb層)
7. ススキ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ3.Vc層)
8. イネ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ1.Vc層)
9. イネ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ2.Vc層)
10. イネ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ3.Vc層)
11. クマザサ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ2.IX層)
12. ヨシ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ3.Vc層)
13. ワクササ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ3.Vc層)
14. イネ属短細胞珪酸体(2区深掘トレンチ3.Vc層)

角地田遺跡の木材(1)



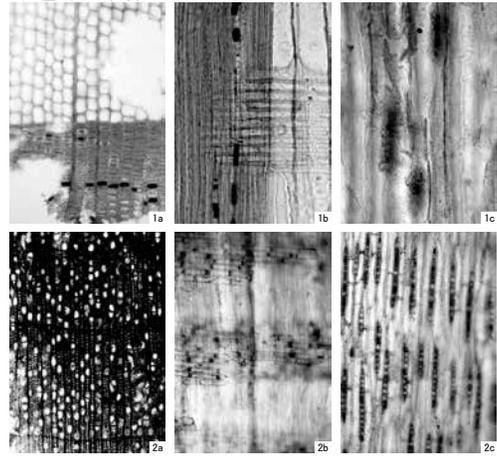
1. スギ(実測番号335)
 2. クリ(実測番号339)
 3. モクレン属(実測番号327)
- a: 木口, b: 径目, c: 板目

角地田遺跡の木材(2)



4. イスノキ(実測番号328)
 5. キハダ(実測番号333)
- a: 木口, b: 径目, c: 板目

平遺跡の木材



1. スギ(実測番号35)
 2. トチノキ(実測番号11)
- a: 木口, b: 径目, c: 板目

第19図 角地田遺跡 花粉化石・植物珪酸体・木製品の切片顕微鏡写真

5 ま と め

A 出土遺物について

本遺跡では、10世紀中葉～11世紀後葉までの土師器食膳具を主体とする土器、陶磁器が多数出土した。特に、SK1・577・698、SD853・522、SX18などの出土遺物は、比較的良好な一括資料となる可能性がある。ここでは、これらの遺構出土資料の時間的位置付けを考えてみたい。

1) 10世紀の土器・陶磁器

SD853出土土器 本遺構からは、食膳具の土師器無台碗を主体とする土器が多数出土した。特に食膳具の主体をなす無台碗は、外反傾向にあるⅡ類を主体として、器形的に無台杯に近いⅣ類や、外反が顕著なⅢ類などが伴うものであった。それらは、口径は12cm～13cm、底径は5.5cm～6.5cm前後で、底径が大きい特徴がある。Ⅱ類には、器高指数27～31前後のものと、33～35のものがある。

以上のような食膳具において須恵器が極めて少なく、土師器無台碗をその主体とする器種組成は、10世紀前葉以降の様相と考えられる。土師器無台碗の法量は、頸城平野で10世紀中葉とされる保坂遺跡SX2〔笹沢1998〕出土資料に近いもので、Ⅳ3期の須沢角地SI227〔土田ほか1988、春日1998〕のものより底径が大きく、身も浅くなる傾向がある(第20図)。また、春日編年のⅦ2期〔春日1999〕とされる10世紀後半の上越市四ツ屋遺跡SE25出土資料〔中村ほか1988〕より、若干口径と器高が高くなっている傾向があることから、本遺構の土師器無台碗の位置付けは、10世紀中葉と考えておきたい。

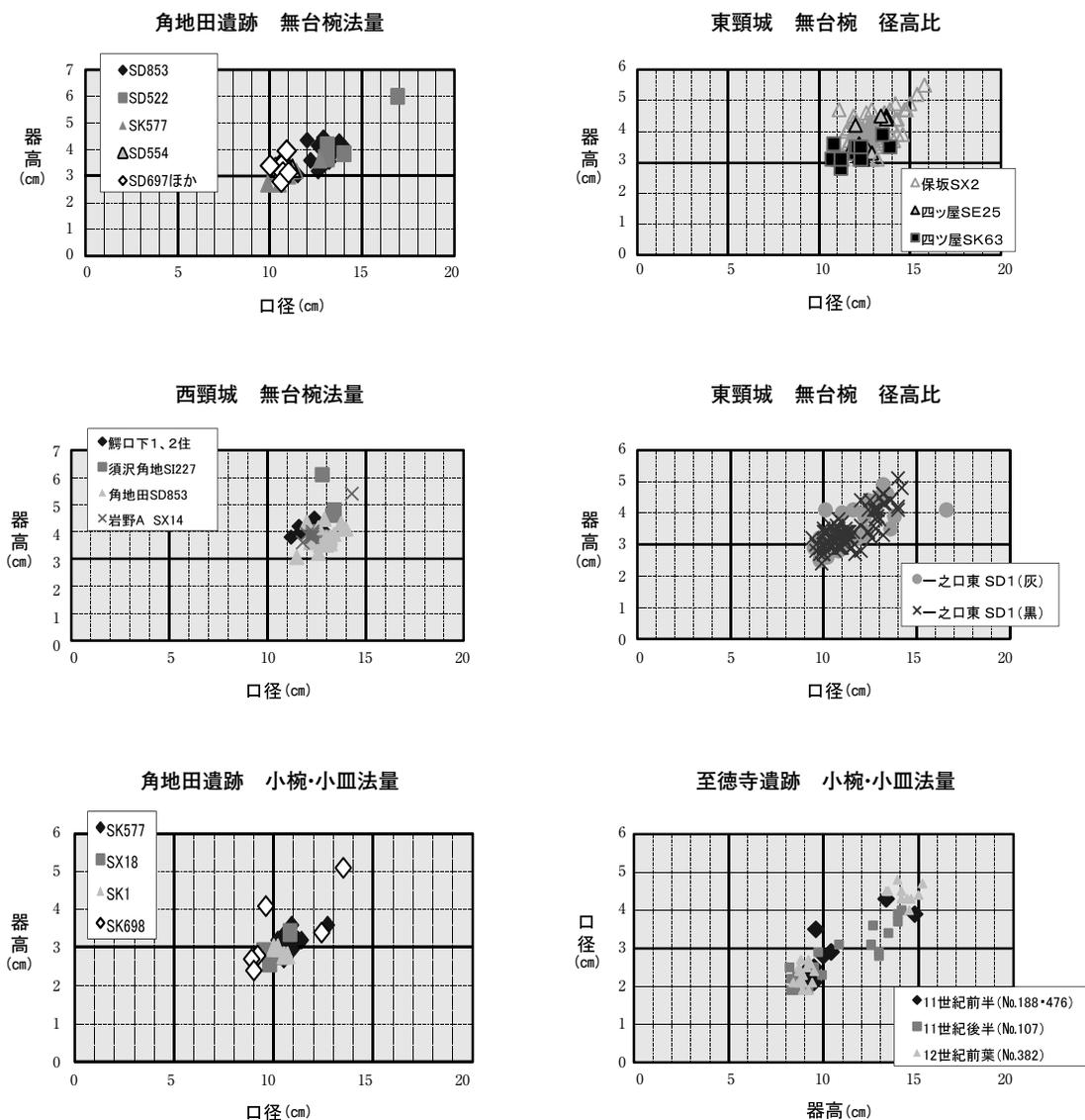
なお、本遺構では、こうした土師器無台碗のほかに、良好な残存状況の双耳瓶(165)が伴出する。本資料に類似のものは、本県では少なく、本遺跡周辺では名立町松原B遺跡〔戸根ほか1987〕に、本遺跡の資料と類似の耳を持ち凸帯が付されるものがある。いずれも北陸西部を産地とする可能性があるが、本資料は、南加賀窯跡群などに見られるものにも類似する。特に、口縁部が摘上がらず三角形状となっている点や板状の耳の形状、やや胴部が短い器形といった特徴は、Ⅵ2～3期(10世紀前葉～中葉頃)の同窯群の小型品にも認められる〔望月1999〕。

その他の資料 SD522やSD554に比較的良好なまとまりがある。前者はSD853の覆土埋没後形成された遺構だが、出土遺物の様相はSD853と大差なく、ほぼ同時期の遺物であると考えられる。したがって、本遺構の出土遺物は、SD853覆土の遺物が再堆積した可能性を考える必要がある。

また、SD554では、口径11cm前後の土師器小碗Ⅰa類に分類した3個体がある。器形的特徴や器壁が薄いなど、後述のSK577の小碗Ⅰb類よりやや古い様相がある。法量では10世紀後半の上越市四ツ屋遺跡SK63〔中村ほか1988〕に同様の法量をもつ一群があり、SD853より新しく位置付けられる(第20図)。

以上のほかに、包含層で出土している土師器無台碗220・221・223が該期のものと考えられ、特にⅢ類とした221・223に見られる顕著な外反は、新しい傾向と考えられ、10世紀後半(春日Ⅶ2期並行)に降る可能性もある〔春日1997・1999、笹沢1998〕。また、こうした土師器以外で特筆される資料として、越州窯系の青磁の大碗(288)は、10世紀中葉の特徴を持つものである〔山本2000〕。

なお、本遺跡の墨書土器は「臣」と読めるものも含めて、すべて10世紀後半までに収まるものと考えられる。遡る可能性があるのは須恵器無台杯の238で、その底径から9世紀中葉以降と考えられる。



第20図 角地田遺跡 食膳具の法量

2) 11世紀代の土器

SK577出土資料 本遺構では、土師器食膳具のうち、小碗Ⅰb類が主体的に出土している。小碗Ⅰb類は、口縁部が外反しないが、底部は厚底の傾向を示し、その形状は垂直方向に立上がるようなものとなり、中世的様相を示しつつある。法量が口径10～11cm前後と小さく、器高は3cm前後のもので占められ、42のように2cm台の浅いもの含まれている。こうした特徴は、11世紀前葉前後とされる上越市一之口東遺跡SD1'1・2層出土資料〔水沢2005〕の法量に近いもので、底部の器形や器高がやや低くなる点で、より新しい様相を帯びた可能性もある。この時期の型式学的な変化の方向性としては、皿化していく過程であり、口径・器高が徐々に小形化していく。加えて、法量が大小2法量の器種の分離傾向を強める時期であり〔鈴木1994、春日1997、笹沢2003〕、本遺構でも口径が13cm前後の無台碗Ⅱ類も組成し、器種分化している様相が認められる。一之口東遺跡SD1'では相対的に分化が明瞭でなく〔春日1997〕、その点でも新しくなる可能性がある。

以上から、本遺構の小碗Ⅰb類に代表される様相は、11世紀前葉に位置付け、一之口遺跡SD1'1・2層

に並行するかそれより新しい時期のものと考えておきたい。

本遺跡では、ほかに該期の遺構資料としてSK188やSD697・803などがあり、これらからも小椀Ⅰb類が主体的に出土している。ほかの小椀を出土する大半の遺構もSK577に代表される11世紀前葉と考えられる。

SK1とSX18周辺出土資料 SK1とSX18周辺では、小椀Ⅱa類とⅢ類を代表とする土師器食膳具が出土している。これらは外反傾向が強いもので、Ⅱa類は胴部が括れる形状を呈するが、Ⅲ類は口縁部が直線化し、より中世の小皿へと型式学的な傾斜を示している。これらには、少量の小椀Ⅰb類が伴うが、SX18では口径9cm台のⅠb類を含んでいる。法量では、前述のSK577のⅠb類主体の様相と比較しても、口径10cm前後、器高3cm以下と小皿化が進行している。したがって、SK1とSX18周辺出土資料の位置付けは、少なくとも前述したSK577（11世紀前半）より新しいものと考えられる。

また、11世紀代の資料がまとまっている至徳寺遺跡の資料群〔水沢2005〕（第20図）との比較では、11世紀前半の遺構群（No188・476遺構）より身が浅く、後半の遺構群（No107遺構）よりも相対的に口径も大きく身が深い傾向が認められる。したがって、SK1とSX18周辺の位置付けは、11世紀前半～後半期への移行期と考えられ、おそらく11世紀中葉を前後する時期のものとして推測されるものである。本遺跡では、以上のほかに、SD11やSD15などの出土遺物がこの時期と考えられる。

SK698出土資料 SK698では、さらに小口径化した小椀・小皿が出土している。口縁部が外反するもので、胴部で鈍く屈曲する小椀のⅡb類や小皿Ⅱ類、口縁部が直線的となった小椀のⅢ類など、より中世的な様相を見ることが出来る。法量では口径9cm台が多く、器高も浅いものが見られるなど、上記したSK1やSX18などより相対的に新しい様相を帯びている。以上のほかに、器種分化した口径12～14cmの無台椀も見られる。また、器種組成の上でも、上述の小椀・小皿のほかに、土師器や黒色土器などの有台器種が定量伴う特徴が認められる。

上越市至徳寺遺跡〔水沢2003・2005〕には、11世紀～12世紀の遺構出土資料があるが、本遺構の出土資料は、11世紀後半（No107遺構）～12世紀第1四半期（No382遺構）の法量に近い。しかしながら、12世紀のNo382遺構では有台器種（柱状高台以外）が見られない〔水沢2005〕。したがって有台器種が存在する本遺構の時的的位置付けは、11世紀後葉と考えられる。なお、伴出資料には灰釉陶器の有台椀（66）があり、底部の糸切り痕を雑に残し、胴部内外面は無釉とする。丸石2号窯式に並行する可能性がある。

本遺跡では本遺構のような該期のまともは少なく、本遺構以外では、P330の195（Ⅲa類）、遺物包含層の212（Ⅲb類）や213（Ⅲa類）などに少量の該期の遺物が見られる。

B 検出遺構と遺跡の性格

1) 遺構の時的変遷

ここでは、前述の土器・陶磁器の位置付けや、遺構の重複関係や切合い関係をもとに、古代～中世の遺構の変遷を整理する。時期区分はⅠ期を9世紀～10世紀前葉、Ⅱ期を10世紀中葉～後葉、Ⅲ期を11世紀前葉、Ⅳ期を11世紀中葉～後葉、Ⅴ期12世紀以降とする。

I 期（9世紀～10世紀前葉）

SX104やSX647がⅠ期の遺構と考えられる。これに加えてSX3はこの時期以降に形成された可能性がある。いずれも自然形成と考えられるものである。遺物包含層でも少量の遺物が確認でき、明瞭な遺構形成が無い時期と考えられる。墨書土器の須恵器無台杯（238）は、この時期のものと考えられる。



第21図 角地田遺跡 遺構変遷図(1)

II 期 (10世紀中葉～後葉)

おおむね10世紀中葉～後葉に相当し、10世紀中葉をIIa期、後葉をIIb期とする。II期は、本遺跡が集落として明確化する時期であり、特にIIb期にそれが顕著となる。

IIa期 Vd層とした礫層を覆土にもつSK514やSD728・729・853・867・869(溝A群)、SS2が本期の遺構と考えられる。以上のうち、SD853の立上がり付近には、SS2が形成され、SD853の覆土で埋没していた。したがって、SS2はSD853が開口しているときには存在していたと考えられる。SS2の東には東西方向に幅1.8mの間隔を置いて2条の溝(SD867・869)が走る。位置関係からSD867とSD869の終点(あるいは基点)が、SS2やSD853であった可能性がある。SD853やSD728・729は、プランや遺構基底面が不整形で



第22図 角地田遺跡 遺構変遷図(2)

起伏に富むことから、自然形成の遺構と推測される。以上のほかにSK514も本時期に含めておく。これらの遺構のうち、SD853は、出土遺物の位置付けから10世紀中葉と考えられる。

II b期 II a期の遺構を埋没させたV d層上面、あるいはVI層で検出された遺構のうち、SB 9（掘立柱建物2群）、耕作溝（SD541～543・571～574）やそれらと長軸方向を同じくするSD532やSD545、あるいは屈折して方向を同じくするSD554を本期とした。これに加えて、管状土錘が多数出土したSD523も本期と考えられる。

このうちSB 9は、面積約42㎡の中型の総柱建物であり、出土遺物から本期に位置付けたが、長軸方向はIII b期の掘立柱建物2群の軸に近く、III期まで時期が降る可能性もある。溝では、耕作溝のSD571が、III期のSD575（SB1の雨落溝の可能性があり）に切られており、III期以前と考えられる。また屈折して長軸方向を同じくするSD554には、10世紀後葉の土師器（105～107）が出土しており、本期に帰属すると考えられる。以上のほかに、上記したSD545・532に沿って杭23・24・28・29が検出され、これらの杭も本期と推測される。

なお、10世紀後葉～11世紀後葉を出土する包含層出土遺物（V c層）の分布傾向（本章1C参照）からは、SD853のプラン周辺に遺物分布が及ばない傾向があり、SD853埋没後（本期以降）も、SD853周辺が区画的性質を帯びていた可能性が考慮される。

以上のように、掘立柱建物の位置付けには課題を残すが、本期は掘立柱建物と耕作溝などからなる

集落の居住域や耕地として利用された可能性が考えられる。

III 期（11世紀前葉）

SK577から出土した小椀I b類に代表される11世紀前葉に相当する。掘立柱建物の長軸方向によって大きく2分され、SB1（1群）などからなるIII a期とSB2（2群）からなるIII b期とに細分される。本期は、大型の掘立柱建物を伴う集落の居住域の形成が明確で、出土遺物等から検出遺構の大半を本期と推測する。

III a期 長軸方向が西偏87～90°の掘立柱建物1群の一部（SB1・5・8）を充てる。掘立柱建物には、面積83㎡の大型のSB1があり、これに長軸方向がほぼ同様の小型（面積30㎡以下）のSB5とSB8が伴うものと推測している。これに加えてSD575・576、SK577が本期の遺構と考えられる。SD575（SB1の雨落溝

5 ま と め

の可能性がある)がⅢb期のSB2に切られており、SB1などの掘立柱建物1群とSB2に代表される掘立柱建物2群との前後関係が把握される。本期は、SB1とSK577との切合いなどから、少なくとも2時期に細分される可能性がある。

Ⅲb期 長軸方向が西偏80~70°の掘立柱建物2群やそれに近い長軸方向を示す遺構などを考えている。SB2・9・10、SA1・2、SD803、SK188が本期のものであろう。SB1の雨落溝(SD575)をSB2が切って存在しているため、掘立柱建物2群をⅢb期に位置付けた。

本期の掘立柱建物は、面積約73㎡の大型のSB2があり、これと長軸方向が同一となる小型のSB10も同期と推測した。SB2とSA1やSB9とSB10の切合い関係から、本期も2時期に細分される可能性がある。SK519は出土した灰釉陶器皿(52)が、10世紀中葉~11世紀前葉頃までの年代幅を含んでおり、Ⅱb期に遡る可能性もある。これらに加えP512・519なども本期に帰属する可能性がある。ただし、P519は出土遺物の様相からⅣ期以降に降る可能性もある。

Ⅳ 期 (11世紀中葉~後葉)

11世紀中葉から後葉にかけての時期に相当する。引き続き掘立柱建物が検出され、集落の居住域を形成しているが、時期が明瞭な遺構はⅢ期よりも減少している。中葉をⅣa期、後葉をⅣb期とする。

Ⅳa期 SB6・12、SK1、SX18、SD11・15、杭12~20・25などが本期の遺構と考えられる。掘立柱建物には4群のSB6・12がある。このうちSB6は、東偏87°を示し、その出土遺物からⅣa期に考え、それとほぼ同軸のSB12も同期と推測した。SB6の示す軸と直交するSD599も本期と考えたが、おおむねそれと並行して検出された杭12~20・25(以下「杭列」と略す)も同様の時期と推測される。この杭列のうち、杭18は、後述するSD247溝群のSD548(少なくともⅢa期以降)より新しいものと判断される。本期は、SB6などを中心として、長軸方向を東偏87°とそれと直交する軸をもつ杭列などで構成された可能性がある。ここではこれらⅣa期の東偏する一群を東群と仮称する。

ほかに、本期には西偏87°の長軸方向をもつSD15やそれと直交する軸のSD11・12などがあり、これらは、調査区西側に分布している(西群と仮称する)。こうした東群と西群は、SB6とSD15の重複や、両群の長軸方向などに差異が認められ、本期が細分される可能性を示している。いずれかが新しくなると考えられるが、東群の長軸方向が、Ⅳb期の掘立柱建物4群の示す方向に近いことから、東群が新しくなる可能性を考えておきたい。このほか、本期には、一括遺物を出土したSK1やSX18が位置付られる。しかしながら、両者のうち東群または西群のいずれかに属すかは明らかではない。

なお、SD247・248・521・522・548の溝(以下「SD247溝群」と略す)は、そのうちのSD522がSB9(Ⅱb期)を切っているため、Ⅲ期以降の帰属を推測した。しかしながら、Ⅲ期には、SD247溝群が示すのと同様の長軸方向をもつ掘立柱建物がないため、ここではⅣ期に示した。なお、SD247溝群の帰属はあくまでも推測であり、時期がⅢa期まで遡る可能性もある。時期が遡る場合、SD247溝群より切合いが古いSD559も同時に遡ることとなる。

Ⅳb期 出土遺物の時期や遺構同士の切合い関係から、SB7、SK698を本期に位置付けた。このうち、掘立柱建物1群のSB7は西偏86°を示すもので、Ⅳa期のSX18を切って構築されている。同群のSB4もほぼ同様の長軸方向をとり、Ⅳa期のSD559より新しいことが、切合い関係から確かめられている。しかしながら、SD559はSD247溝群などとⅢ期に遡る可能性もあり、SB4の位置付けも流動的である。

なお、SD248溝群はレンズ状をなして堆積するVc層相当の覆土の上に、Ⅲb層までが堆積している掘込みが深い溝で、Vc層堆積終了後もしばらく開口していた可能性が高い。

V 期（12世紀以降）

珠洲焼や青磁、白磁、青白磁などで構成される12世紀と15世紀を一括したが、明確な遺構形成がなされていないため、該期の様相は不明である。

2) 遺跡の性格

古代の角地田遺跡 本遺跡は、前述の検出遺構の変遷や出土遺物の様相から、11世紀（Ⅲ以降）を主体とする集落遺跡である。この時期は、掘立柱建物を明確に検出し、1～3棟の掘立柱建物や土坑、溝によって構成される。特に、Ⅲa期、Ⅲb期には70㎡を越す大型の掘立柱建物が存在し、それに1～2棟前後の30㎡未満の小規模な掘立柱建物が伴うものと推測される。こうした大型の掘立柱建物が伴う集落遺跡は、現状では、有力者の居宅などといった性格が想定されており〔春日1995〕、Ⅲ期の本遺跡はこのような階層（在地有力者）の集落であったことが推測される。

また、特筆すべきは10世紀中葉に帰属する越州窯系の青磁大椀が本遺跡に存在していることである。平安時代にこのような輸入陶磁器を保有する遺跡は、県内では少数事例に限られる。頸城郡では有力者層や官人の居宅が想定されている上越市四ツ屋遺跡〔中村^{ほか}1988・笹沢2003〕や同市五反田遺跡〔渡邊^{ほか}2005〕などが知られている。したがって、この点でも本遺跡がこうした有力者階層の集落であることが想定される。しかしながら、越州窯系の青磁椀が示す年代のⅡ期前後（10世紀後半）の本遺跡は、上越市の上記遺跡のような円面硯・腰帯石袴といった特殊な遺物の出土はなく、検出遺構も配石遺構や並行するSD867・869（Ⅱa期）や、中型の掘立柱建物や耕作溝（Ⅱb期）などの検出に留まっている。

このことは、大型掘立柱建物に代表される11世紀の集落への伝世を考える必要があるものの¹⁾、その一方で、10世紀の本遺跡周辺に、輸入陶磁器を保有可能な集落が存在した可能性も考えなくてはならない。現状では、越州窯系青磁椀が本遺跡において10世紀中葉に帰属するか否かは今後の課題とせざるを得ないが、いずれにせよその存在は本遺跡がそれを保有できる集落であったことを示すものであろう。

本遺跡の性格と関連して、本遺跡の近辺は、10世紀初頭の『延喜式』に見られる北陸道の駅路が通過し、鶉石駅が存在した可能性が高い地域である。10世紀は駅制の終末期であり、少なくとも10世紀後半にその制度が衰退するといわれるが、その実態は明らかではない〔中村2000〕。

今回の発掘調査では、こうした駅路や駅家を明瞭に示す遺構の検出には至らなかったが、本遺跡の存続期間や大型の掘立柱建物の検出、輸入陶磁器などが示す本遺跡の性格は、古代北陸道などを含めた官道との関連を完全に否定するものではない。本遺跡の性格については、こうした古代官道との関連も含めて、より詳細に検討する必要があるだろう。しかしながら、能生谷での古代遺跡の発掘調査はほかに例がなく、古代官道や集落の地域的様相などは明らかでない。本遺跡と古代官道との関連など、調査の進展を待ち、再度検討したい。

12世紀以降の角地田遺跡 本遺跡では、少量の珠洲焼や輸入陶磁器などの12世紀以降の遺物も出土している。しかしながら明確な遺構形成はなかった。本遺跡の近隣には、十二平遺跡〔秦^{ほか}1990〕や平遺跡（後述）でも中世の遺物が出土しており、遺跡は皆無ではない。本遺跡を含めた12世紀以降の様相は、今後の調査に委ねたい。

1) 五反田遺跡の白磁椀の事例では伝世が考えられている〔渡邊2005〕。

第IV章 平 遺 跡

1 調査の概要

平遺跡は糸魚川市大字小見字横枕258番地ほかに所在し、海岸から約2.6km内陸に入った能生川左岸の沖積地に立地する。本発掘調査対象地は、遺跡南側の丘陵裾部から北東方向へと伸びる台地状の微高地縁辺である。現況は、整地されたやや高い面と下段の水田面に分かれ、高い面は畑地として利用されていた。標高は40.0～35.3mを測る。

A 調査区と調査方法

調査区の設定 調査区は、北陸新幹線法線の199K230m～199K620mの区間のうち、199K230m～250mの範囲と199K470～620mの範囲である。

排土置場の関係から、基本的にこの範囲の法線南側に沿ってトレンチを設定した。トレンチの設定場所・長さは、隣接耕作地に合わせて都合5か所とした(第23図)。199K470m～199K620mの範囲には101～104区があり、畑となっていたやや高い面のトレンチを101区、その西側の水田面のトレンチを102～104区とした。199K230m～199K250mの範囲には、水田面に105区を設定した。

調査方法 上述のトレンチで重機と人力による掘削及び遺構確認を行なった。記録は土層の堆積状況、トレンチの位置、遺構・遺物の検出状況等を野帳・図面・写真等にとどめた。

出土遺物の取上げは、基本的には各トレンチ単位とした。しかしながら、102区ではⅢb層から遺物がやや多く出土したため、調査区内に5×5mのグリッドを設定し、グリッド単位で取り上げた。グリッドは、調査区の南東隅部から5m北側の東西ラインを基準にした。グリッド名は南東隅を1とし、以後東から西に割りつけた。各グリッドには1～16の番号を付した(第23図)。

B 基本層序

平遺跡の基本層序(第23図、図版65、第13表)は、もともとの地形や過去の耕地整理の影響から西側(101～104区)と東側(105区)では異なっていた。したがって、西側(101～104区)と東側(105区)に分けて基本層序を記述する。

101～104区の基本層序 大別6層、細別13層に区分できる。I層は耕作土あるいは客土で、Ia層が耕作土、Ib～Id層が圃場整備で搬入された客土である。Ib層は砂を敷詰め転圧された状態の床土と考えられ、102区東側に存在する。II層は、I層と遺物包含層のⅢ層の間に堆積す

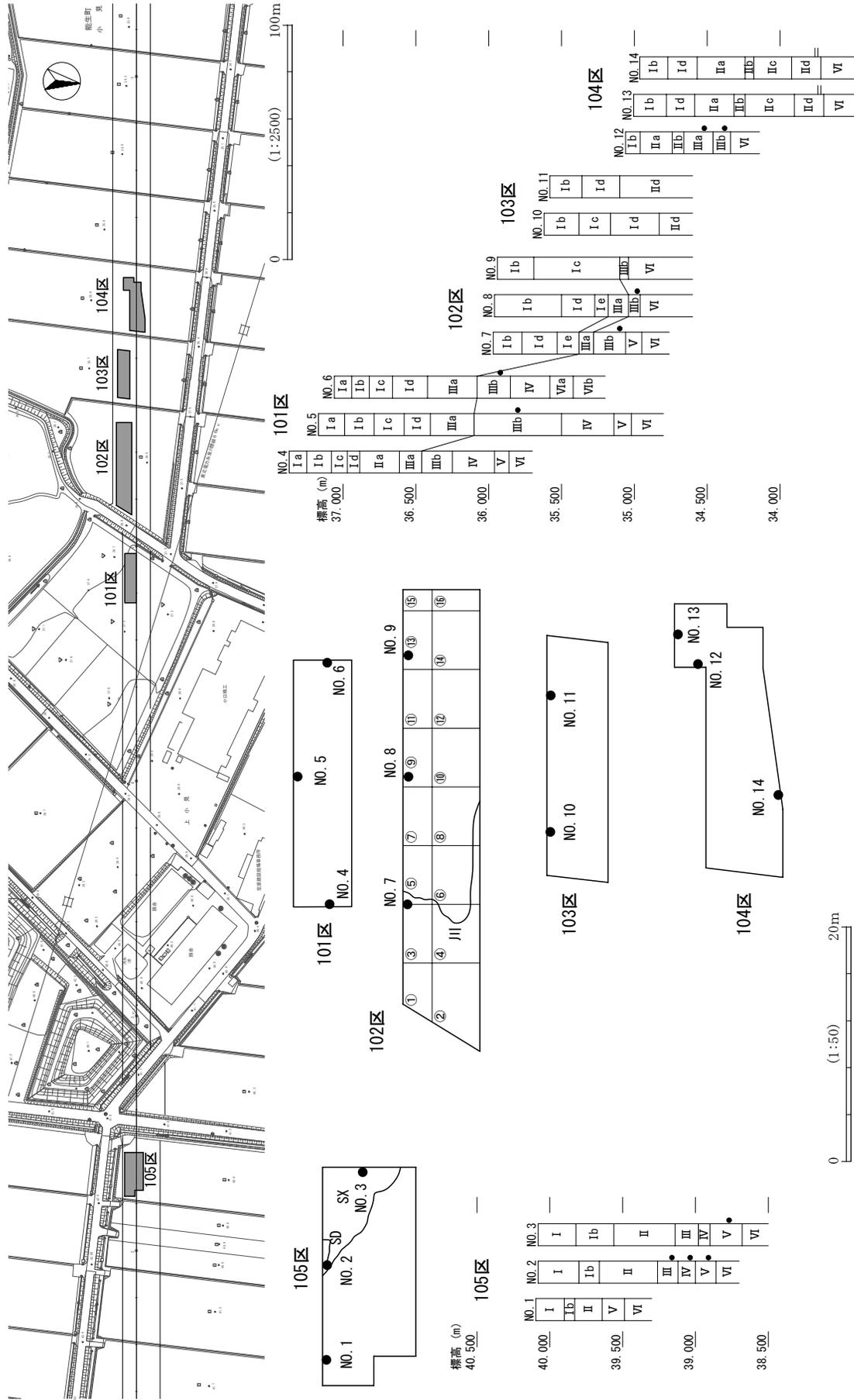
101～104区の土層説明

層位	色	調	しまり	粘 性	土層の所見
I a層	褐灰色	10YR4/1			耕作土
I b層		—			整地客土
I c層		—			整地客土
I d層		—			整地客土
II a層	灰褐色	5YR4/2			旧耕作土
II b層		—			整地客土
II c層		—			整地客土
II d層		—			整地客土
III a層	緑灰色	5YR5/1	あり	あり	粘質シルト 遺物包含層
III b層	緑灰色	7.5GY5/1	あり	あり	粘質シルト 遺物包含層
III c層	暗褐色	7.5GY6/1	ややあり	あり	粘/砂質シルト 遺物包含層
IV層	灰褐色	7.5YR4/2	ややあり	ややあり	砂 粒子は微粒
V層	褐灰色	7.5GY4/1	なし	なし	砂 粒子は粗め
VI層	暗灰色	N3/0			砂礫

105区の土層説明

層位	色	調	しまり	粘 性	土層の所見
I a層	褐灰色	10YR4/1			耕作土
I b層	褐灰色	—			砂 整地客土
II層	灰褐色	5YR4/2	あり	あり	粘質シルト
III層	灰褐色	10YR4/2	ややあり	あり	砂質シルト
IV層	褐灰色	7.5YR4/1	あり	あり	粘質シルト 遺物包含層
V層	青灰色	5BG6/1	あり	あり	粘質シルト 遺物包含層
VI層	緑灰色	7.5GY5/1	あり	あり	粘質シルト
VII層	暗灰色	N3/0			砂礫

第13表 平遺跡 土層説明



第23図 平遺跡 基本層序

1 調査の概要

る旧耕作土や客土を一括したもので、Ⅱa層は旧耕作土、Ⅱb層は石灰を敷きつめた床土である。Ⅱc～Ⅱd層は旧圃場整備による客土で103・104区の西側に存在する。Ⅲa～Ⅲc層は遺物包含層である。このうちⅢa・Ⅲb層は砂を含む粘土シルト層で、101区・102区・104区の西側に存在する。Ⅳ・Ⅴ層は灰褐色・褐灰色の砂層である。Ⅳ層は砂礫の基盤層と考えられる。なお、Ⅲ層以下は河川堆積層である。

105区の基本層序 7層に分層した。Ⅰ層は耕作土あるいは客土で、西地区のⅠ層に類似している。特にⅠb層は102区と同様に圃場整備によって砂が敷詰められた床土と推測される。Ⅱ層以下は河川堆積層で、Ⅱ～Ⅴ層は砂を含む粘質シルト層である。Ⅳ層・Ⅴ層は炭化物を含む遺物包含層で、Ⅴ層では炭化物が多く含まれている。Ⅵ層は砂礫の基盤層である。

C 遺構と遺物の検出状況

102区で川跡や103区で護岸の木組みや柵（しがらみ）が検出された。しかし、木組みや柵は後述のように近世・近代以降に構築されたもので、中世以前の遺構は検出されなかった。出土遺物には古代～中世・近世の土器・陶磁器がある。しかし、これらが出土する遺物包含層は、砂の挟在が見られる粘質シルト層で、その形成が洪水に由来する。したがって、これらの出土遺物は再堆積による可能性が高く、周辺からの流れ込みと判断した。ここでは、こうした101～105区の遺構と遺物の検出状況を説明する。

101区（第23図、図版65） 試掘調査（18-8T、第3図）で遺物が若干出土した地点である。調査面積は104.37㎡で、標高は37.3～37.0mを測る。農道を挟んだ102区とは1.2m程の比高差がある。遺構確認面（Ⅳ層上面）での検出遺構はなく、遺物はⅢa層から須恵器有台杯（1）などが若干出土した。

102区（第23図、図版65） 101区の西側の一段低い水田に設定された。調査面積は237.27㎡で、標高は36.1mを測る。本区ではⅢa層とⅢb層の堆積があり、Ⅲa層上面で川跡が確認された。川跡はⅢa層を切るもので、漆器椀・糸巻きの杵が出土した。Ⅲb層では、その上面から15cmの深さで遺物が出土した。遺物の分布は5・6～11・12グリッドに集中し、平安時代の須恵器無台杯（2・3）、土師器無台椀（4・5）・甕等（8・9）、漆器椀（11）などが出土した。Ⅵ層上面で遺構確認を行ったが、遺構は認められなかった。

103区（第23図、図版65） 調査面積は110.7㎡で、標高は35.6mを測る。遺物包含層や遺構は検出されなかった。出土遺物には須恵器甕（13）、土師器無台椀（14）、染付椀（15）がある。

104区（第23図、図版65） 試掘調査で河川や用水の護岸と考えられる木組みを検出した地点である。伴出遺物がないため構築時期が不明であり、再度確認調査が必要となった地点である。調査面積は113.2㎡で、標高は35.3mを測る。調査は最初に、平成15年度の試掘トレンチ15-30T（第3図）を掘削し、木組み部分の確認を行った。しかしながら、木組みはその後の排水口掘削で既に処理されていたため、対岸での構築を想定して、その南側での調査を開始した。その結果、Ⅱd層で柵（しがらみ）を検出した。この柵は東西方向に約45cm間隔で直径3～5cmの杭を打並べ、粗朶（そだ）を絡めたものである。さらに90cm南側にも並行して同様の柵を検出した。また、木組みの西側から直径3～5cmの杭と雑木を確認し、その東側にもやはり護岸と考えられる杭列の一部を検出した。直径6～7cmの杭を70～80cm間隔で東西方向に2列に打込み、その上に廃材を並べ、廃材の隅は5cmの角杭、あるいは丸杭で固定していた。

これら本区で検出された木組みや柵付近の遺物には、その直下（Ⅱb層最下面）で出土した越中瀬戸壺（26・27）や近世陶磁器（28）がある。このような出土遺物や木組みの角材から、木組みや柵は近世・近代以降の遺構と判断した。なお、Ⅵ層上面で遺構確認を行ったが、ほかに遺構の検出はなかった。

以上のほかに、同区東側の遺物包含層から遺物が出土している。平安時代の須恵器甕（21～22）、無台

杯 (17)、瓶類 (18・19)、土師器甕 (23・24)、製塩土器 (25)、中世土師器無台碗 (16) がある。

105区 調査面積は134.8㎡で、標高は約40.0mである。Ⅱ層からⅥ層までは東から西に急傾斜している。遺物包含層は3層で確認され、Ⅲ層から木製品の杓子 (34・35)、Ⅳ層から須恵器杯 (29)、Ⅴ層からは土師器甕 (30～33) などが出土した。遺構確認はⅥ層上面で行ったが、認められなかった。

2 遺 物

出土遺物は土器・木製品があり、浅箱コンテナで2箱になる。土器は、平安時代の9世紀代を主体とし、中世や近世の遺物が伴出する。以下、調査区ごとに出土遺物を説明する。

101区出土遺物 (図版34・66-1) 1は須恵器食膳具で、器形から有台杯と推測される。

102区出土遺物 (図版34・66-2～12) 2・3は須恵器無台杯で、いずれも底径7cm未満と小さく、口縁部の立上がりは緩い。胎土から佐渡小泊産と考えられる。4・5は土師器無台碗で、このうち4は径口指数24と身が浅く、底径が大きい特徴がある。6・7は須恵器貯蔵具で、6は甕の口縁部、7は長頸瓶の底部と推測される。8～10は土師器甕の口縁部資料である。8・9はロクロ成形で、口縁部先端の摘み上がりは微弱である。10はハケメが施された非ロクロ成形の資料である。11～12は木製品で、11は漆器碗で、内外面とも黒色漆を施し、厚手の輪高台を持つ。12は糸練り杵で、十字の軸に嵌め込む杵である。

103区出土遺物 (図版34・66-13～15) 13は須恵器甕の胴部破片である。14は土師器無台碗で、底部に糸切り痕をもつ。15は伊万里焼の染付け碗で、近世以降の所産である。

104区出土遺物 (図版34・66-16～28) 16は土師器碗で、器形・調整から中世の可能性はある。17～22は須恵器で、17は無台杯、18・19は長頸瓶、20～22は甕に分類される。このうち17の須恵器無台杯は、胎土から佐渡小泊産と考えられる。また、20・21は胎土から同一個体の可能性が高い。23・24は土師器煮炊具で、23は小甕の底部、24は内面にハケメをもつ土師器甕の体部資料である。25は製塩土器で、輪積痕が顕著である。26・27は越中瀬戸の壺で、接合はしないが胎土・焼成から同一個体の可能性がある。28は染付け碗で、伊万里焼の所謂「くらわんか碗」で、19世紀の所産と考えられる。

105区出土遺物 (図版34・66-29～35) 29は須恵器食膳具で、器形から有台杯と考えられる。30～33は土師器煮炊具で、いずれも甕の破片資料である。このうち30・33はロクロ成形で、30の口縁部先端の摘み上がりは顕著である。31・32は非ロクロ成形で、32には内外面にハケメが施されている。34・35は木製品である。いずれも杓子で、共に柄に比べて身が短い。35は身の先端が炭化している。

3 ま と め

遺構は、104区で木組みや柵 (しがらみ) が検出されたが、その帰属時期は近世・近代以降の構築と判断した。したがって、中世以前の遺構は検出できなかった。一方、遺物は比較的多く出土し、9世紀代の須恵器 (2・3・21など) や土師器 (4・8・9・30など) が主体をなす。ほかに中世土師器 (16)、越中瀬戸の壺 (26・27)、伊万里焼 (28) などの近世陶磁器、漆器碗 (11) などの木製品がある。しかしながら、いずれも出土層位との関係から、河川による再堆積と推測される。本遺跡の上流部東側の丘陵裾部周辺からの流入を考えている。本遺跡自体の様相は中世以前の遺構もなく、遺物も再堆積と判断されることから、不明瞭と言わざるを得ない。遺物散布地と考えられる。

要 約

角地田遺跡

- 1 角地田遺跡は糸魚川市大字小見字木ノ下に所在し、能生川に注ぐ小見川の右岸に形成された扇状地に立地する。標高は30.5～33.0mで現況は水田である。
- 2 北陸新幹線建設に伴い、平成19年度に2,135㎡を発掘調査した。
- 3 遺構の大部分は平安時代に属し、検出状況や出土遺物から10世紀中葉～後葉と11世紀代の大きく2時期に分けられる。10世紀中葉～後葉の遺構は、溝7条、配石遺構1基である。遺物は土師器の食膳具を主体とし、須恵器の大甕、双耳瓶、墨書土器等が出土している。11世紀前葉～後葉を主体とする遺構は、掘立柱建物12棟、柵2列、土坑15基、耕作溝を含む溝94条、性格不明遺構8基、配石遺構1基、ピット363基である。掘立柱建物には、7間×4間の大型の総柱建物が存在する。
- 4 遺物は平安時代を中心に土器が大量に出土した。土器の内訳は土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、製塩土器等で、主体は土師器食膳具である。以上のほかに、中世の12世紀代の珠洲焼、16世紀後半の瀬戸・美濃焼の天目茶碗などがある。
- 5 出土した陶磁器には、10世紀後半に位置付けられる越州窯系の青磁碗が1点存在する。
- 6 管状土錘が多数出土し、SD523では狭い区域にまとまって出土している。
- 7 出土遺物は、土器・陶磁器以外にも、鉄関連遺物の椀形鍛冶滓、石製品の砥石、木製品の下駄、櫛などがある。
- 8 出土した文字資料には、「臣」と墨書・刻書された須恵器や土師器のほかに、呪符木簡を記した木簡が出土した。「臣」墨書は、本遺跡が所在する現在の地名「小見」と推測される。
- 9 本遺跡は、11世紀を中心とする集落跡で、面積70㎡におよぶ大型の掘立柱建物の検出や越州窯系青磁碗の出土から、在地有力者が居住する集落と推察される。10世紀後葉の遺構・遺物も少なくなく、掘立柱建物や溝などからなる集落と考えられる。

平 遺 跡

- 1 平遺跡は糸魚川市大字小見字横枕に所在し、能生川左岸の沖積地に立地する。標高は35～40mで現況は畑・水田である。
- 2 北陸新幹線建設に伴い、平成19年度に700㎡を発掘調査した。
- 3 中世以前の遺構は検出されなかった。
- 4 出土遺物は土器と木製品がある。土器は平安時代（9世紀代）の須恵器・土師器を主体とし、佐渡小泊産の須恵器無台杯の出土がある。ほかに中世16世紀末の越中瀬戸の壺、近世の伊万里焼の椀などがある。木製品は漆椀・糸繰り杵・杓子・箸が出土したが、土器が伴わないため時期は不詳である。
- 5 遺物は出土層位から洪水等による周辺からの流れ込みと推定される。

引用・参考文献

- 相沢 央 2004 「第Ⅲ部古代 第Ⅱ章第5節 人々の往来と頸城群」『上越市史 通史編1 自然・原始・古代』新潟県上越市史編さん委員会
- 相羽重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する粗描－県内出土の報告例から－」『研究紀要』第4号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木重孝 1976 「第6編 上世の構築・第7編 乱世の兆」『糸魚川市史1 自然・古世・中世』糸魚川市
- 伊藤信太郎^{ほか} 1975 「名立タラバ発見の六個一組の珠洲焼」『越佐研究』35 新潟県人文研究会
- 出越茂和 1997 「北陸古代後半における椀・皿食器(後)」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 歌代 勉^{ほか} 1976 「第1編 地の構図」『糸魚川市史1 自然・古世・中世』糸魚川市
- 大宮司朗 2002 『道教秘伝 霊符の呪法』学習研究社
- 荻野正博 1983 「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』第16号 新潟史学会
- 荻野正博 1986 「第6章 第2節 荘園と国衙領」『新潟県史 通史編1 原始・古代』新潟県
- 春日真実 1995 「古代集落の展開－越後を事例として－」『研究紀要』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1998 「頸城地域における古代土器様相」『研究紀要』2号 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2007 「新潟県上越市名立沖揚陸須恵器水瓶について」『新潟県考古学談話会会報』第32号 新潟県考古学談話会
- 金子拓男 1990 「第6章 第5節 交通と交通路」『柏崎市史 上巻』柏崎市
- 木下 良 1994 「古代道路の地表遺構」『季刊考古学』第46号 雄山閣出版
- 木下 良 1996 「1 古代道路研究の成果」『古代を考える 古代道路』吉川弘文館
- 金坂清則 1996 「5 北陸道－その計画性および水運との結びつき－」『古代を考える 古代道路』吉川弘文館
- 小島幸雄^{ほか} 1983 『平畑遺跡発掘調査報告書』新潟県能生町教育委員会
- 小林健太郎 1978 「第4章 北陸道 第7節 越後の国」『古代日本の交通路Ⅱ』大明堂
- 斎藤秀平 1937 『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第7輯 新潟県
- 斎藤孝正 1994 「Ⅳ 生産地 1 東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代土器の研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器』古代の土器研究会
- 坂井秀弥 1986 「第5章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 一之口遺跡西地区』新潟県教育委員会
- 笹沢正史 1998 「Ⅷ.付編」『新潟県上越市 保坂遺跡発掘調査報告書』新潟県上越市教育委員会
- 笹沢正史 2003 「第5章 古代 第1節 時代概説」『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市史編さん委員会
- 品田高志 1991 「越後の中世土師器－編年の研究の現状と課題－」『新潟県考古学談話会会報』第8号 新潟県考古学談話会
- 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター編 2006 『青木遺跡. 2(弥生－平安時代編) 国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3』
- 鈴木郁夫 1981 『新潟県上越地域 土地分類基本調査 高田西部』新潟県農地部農村総合整備課
- 鈴木郁夫 1982 『新潟県上越地域 土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部農村総合整備課
- 鈴木俊成^{ほか} 1988 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 小出越遺跡』新潟県教育委員会
- 鈴木俊成 1993 「第Ⅵ章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区(本文編)』新潟県教育委員会
- 関 雅之 1990 「古代細型管状土錘考」『北越考古学』第3号 北越考古学研究会
- 高野徹雄^{ほか} 1986 「第1章 能生町の山なみと自然、第2章 地すべりの多い能生町」『能生町史 上巻 自然編』新潟県能生町史編さん委員会
- 高橋典幸 2004 「第1部 第2章 第4節 地頭と御家人」『上越市史 通史編2 中世』新潟県上越市史編さん委員会
- 高橋保雄^{ほか} 2007 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田嶋明人^{ほか} 1986 『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

- 田中一穂 2005 「見附市上田遺跡出土の文字資料について」『上田遺跡』新潟県見附市教育委員会
- 土田孝雄 1986 『糸魚川市史 資料集1 考古編』新潟県糸魚川市
- 土田孝雄^{ほか} 1988 『須沢角地A遺跡 発掘調査報告書』新潟県西頸城郡青海町教育委員会
- 寺崎裕助 1987 「能生町井ノ上遺跡出土の縄文時代早期の土器」『越佐補遺些』第2号 越佐補遺些の会
- 寺崎裕助^{ほか} 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第54集 鰯口下遺跡 美山遺跡』新潟県教育委員会
- 東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査会 1986 『下宿内山遺跡』本文編
- 戸根与八郎^{ほか} 1987 『新潟県埋蔵文化財調査報告書47集 宮ノ平遺跡ほか9遺跡』新潟県教育委員会
- 中村太一 2000 『日本の古代道路を探す 律令国家のアウトバーン』平凡社新書045
- 中村美恵子^{ほか} 1988 『四ツ屋遺跡発掘調査報告書』四ツ屋遺跡調査団
- 長原四郎 1969 「6 まとめ」『奴奈川史』糸魚川市教育委員会 県立糸魚川商工高等学校社会科クラブ
- 日本大蔵経編集会 2000 『修験道章疏』第1・2巻
- 花ヶ前盛明 1976 「西頸城郡の荘・保」『かみくひむし』23
- 花ヶ前盛明 1987 「第2章 古代から中世まで」『名立町史』新潟県名立町史編さん委員会
- 秦 繁治^{ほか} 1990 『十二平遺跡発掘調査報告書』新潟県能生町教育委員会
- 秦 繁治^{ほか} 1996 『大イナバ遺跡発掘調査報告書』新潟県名立町教育委員会
- 平川 南 2003 「屋代遺跡群木簡のひろがり」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館
- 藤田邦雄 1989 「中世土器素描－加賀地方の土器を中心にして－」『北陸の考古学』Ⅱ
- 藤田邦雄 1992 「加賀における様相－土師器－」『第5回北陸中世土器研究会 中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』シンポジウム実行委員会
- 水澤幸一 2003 「至徳寺遺跡(至徳寺館跡・至徳寺跡)」『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市史編さん委員会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 水澤幸一 2007 「越後の中世漆器－椀・皿を中心にして－」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 宮田進一 1992 「越中における中世土師器の編年」『第5回北陸中世土器研究会 中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』
- 室川右京^{ほか} 1986 「第1章 原始古代 第2章 中世」『能生町史上巻 自然編』新潟県能生町史編さん委員会
- 室岡 博 1972 『頸城地方の海と海底・海浜遺跡』
- 望月清司 1999 「越前・南加賀地域の須恵器貯蔵具」『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 山里純一 2004 『呪符の文化史』三弥井書店
- 山田英雄 1986 「第5章 第2節 国郡制の成立・整備」『新潟県史 通史編1 原始・古代』新潟県
- 山田邦明 1987 「第2章 第2節 3 国人と守護」『新潟県史 通史編2 中世』新潟県
- 山本信夫 2000 『大宰府条坊跡XⅤ－陶磁器分類編－』大宰府市教育委員会
- 八峠 興 2001 「柱状高台考」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』中世土器研究会
- 吉岡康暢 1980 「中世陶器流通の画期と地域性」『日本海域の土器・陶磁[中世編]』六興出版
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 横田健次郎^{ほか} 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年－」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 四柳嘉章 1992 「能登における中世土師器の編年について(補遺)」『第5回北陸中世土器研究会 中世前期の遺跡と土器・陶磁着器・漆器』北陸中世土器研究会
- 米沢 康 1976 「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』第28巻第5号 信濃史学会
- 米沢 康 1980 「大宝2年の越中国四郡の分割をめぐって」『信濃』第32巻第6号 信濃史学会
- 渡邊裕之 2005 「第七章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第138集 上の台遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事団

角地田遺跡 掘立柱建物(SB) 観察表

遺構名	グリッド	構造		面積 (㎡)	桁行 (m)	梁行 (m)	方位	他遺構との切合い	遺構 図版	出土遺物	備考
		型式	桁(間)× 梁(間)								
SB1	4B、5B	総柱	7×4	83.0	12.1	6.8	N-89°-W	SK577・SD576・SD867・869より新しい	図版8	図版20-1~4 図版33-332	P668・P663に柱根、SD575が雨落溝として伴う可能性がある
SB2	4B、4C、5B、5C	総柱	4×2	72.8	11.9	6.1	N-81°-W	SD575・SX647より新しい	図版9	図版20-6~8 図版33-334	P638に柱根
SB3	5B、6B	側柱	2×1	6.5	3.7	1.7	N-6°-W	SD575・SD576より新しい	図版10	図版20-9 図版33-333	P579・P809に柱根
SB4	6A、6B、7B	側柱	5×3	46.3	9.1	5.2	N-87°-W	SK698より古く、SD559・SD680・SD696・SD853より新しい	図版10	図版20-10・11、 図版33-331	P896・P687に柱根
SB5	6A、6B	側柱	4×1	28.4	7.9	3.8	N-88°-W	-	図版10	図版33-335・336	P705・P843に柱根
SB6	7B、8B	総柱	3×2	30.4	5.9	5.1	N-87°-E	SD853・P234より新しい	図版11	図版20-20	
SB7	8B、9B	側柱	3×3	35.6	6.4	5.7	N-86°-W	SD11・SX18より新しい	図版11	図版20-13	
SB8	8B、9B	側柱	2×2	16.9	5.1	3.3	N-87°-W	SD248より古い	図版11	-	
SB9	7B、7C、8B、8C	総柱	3×2	42.0	7.2	5.8	N-70°-W	SD522より古い	図版12	図版20-14 図版27-210・217	
SB10	7B、7C、8B、8C	側柱	3×2	27.9	7.0	4.1	N-75°-W	SD221・P214より新しい	図版12	-	
SB11	8B、8C	側柱	3×1	16.5	6.6	2.6	N-6°-W	SD248より古い	図版12	-	
SB12	8C	-	3×(1)	-	5.0	-	N-86°-E	-	図版12	-	

掘立柱建物の柱穴(P) 観察表(1)

SB1

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P580	5B20	63.0	48.7	-	図版8	-	
P590	5B19	42.0	58.4	-	図版8	図版20-2	
P593	5B17・18	70.0	48.1	-	図版8	-	
P599	5B17	40.0	52.5	-	図版8	-	
P606	5B16	46.0	46.5	-	図版8	-	
P612	4B20	37.0	25.4	-	図版8	-	
P652	4B14	43.0	37.4	-	図版8	-	
P814	5B15	36.0	61.0	SD576より新しい	図版8	-	
P583	5B14	41.0	44.0	-	図版8	-	
P589	5B13	28.0	32.0	-	図版8	図版20-1・3	
P741	5B12	35.0	39.0	-	図版8	-	
P604	5B11	49.0	49.4	-	図版8	-	
P608	4B15	33.0	29.2	-	図版8	-	
P791	4B9・14	53.0	37.3	-	図版8	-	
P856	5B10	38.0	58.2	SK577・SD869より新しい	図版8	-	
P747	5B9	55.0	61.0	SD869より新しい	図版8	図版20-5	
P585	5B8	42.0	69.8	SD869より新しい	図版8	-	
P889	4B4	24.0	32.0	-	図版8	-	
P708	5B5	29.0	45.0	-	図版8	-	
P776	5B4	22.0	27.0	-	図版8	-	
P669	5B3	39.0	55.8	-	図版8	-	
P670	5A22	27.0	24.2	-	図版8	-	
P668	5A21	55.0	50.2	-	図版8	図版33-332	柱根が残存
P663	4A25	35.0	68.0	-	図版8	-	柱根が残存
P785	4A24	70.0	49.3	SD867より新しい	図版8	図版20-4	

SB2

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P890	5C8・9・13・14	48.0	25.0	-	図版9	-	
P630	5C7	38.0	48.0	-	図版9	-	
P638	5C6	32.0	50.0	-	図版9	図版33-334	柱根が残存
P645	4C4	43.0	58.2	-	図版9	-	
P848	4C3	46.0	48.4	SX647より新しい	図版9	-	
P621	5C4	38.0	57.9	-	図版9	図版20-6	
P862	5B21	34.0	38.9	-	図版9	-	
P613	4B24・25	62.0	56.8	-	図版9	図版20-7	
P651	4B18	39.0	49.4	-	図版9	-	
P738	5B19・24	80.0	61.9	SD575より新しい	図版9	-	
P592	5B18	45.0	59.1	-	図版9	-	
P739	5B16・17	56.0	48.8	-	図版9	-	
P611	4B15・20	55.0	44.0	-	図版9	-	
P653	4B14	58.0	40.6	-	図版9	図版20-8	

SB3

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P564	6B11	32.0	34.2	-	図版10	-	
P567	6B11・16	32.0	32.0	-	図版10	-	
P570	6B16・21	28.0	13.6	-	図版10	-	
P751	5B10・15	37.0	38.0	SD576より新しい	図版10	-	
P579	5B20	34.0	31.2	SD575より新しい	図版10	図版20-9	柱根が残存
P809	5B20	33.0	59.2	SD575より新しい	図版10	図版33-333	柱根が残存

掘立柱建物の柱穴(P) 観察表(2)

SB4

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P896	7B11	30.0	42.5	SD853より新しい	図版10	-	柱根が 残存
P852	6B15	32.0	32.9	-	図版10	-	
P855	6B14	38.0	44.7	-	図版10	-	
P824	6B13	42.0	29.0	-	図版10	-	
SK560	6B12	82.0	48.3	SD559より新しい	図版10	-	
P565	6B11	34.0	38.0	-	図版10	-	
P895	7B6・11	32.0	33.5	-	図版10	-	
P836	7B6	42.0	31.4	SK698より古い	図版10	-	
P871	7B1	27.0	70.0	SK698より古い	図版10	-	
P694	6B5	38.0	31.0	SD696より新しい	図版10	-	
P692	6B4	64.0	53.6	SD696より新しい	図版10	図版 20-10	
P687	6B3	57.0	46.7	SD680・SD696 より新しい	図版10	図版 33-331 図版 20-11	柱根が 残存
P681	6A22・6B2	87.0	52.0	SD559より新しい	図版10	-	
P677	6A21	23.0	28.0	-	図版10	-	

SB5

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P546	6B10	37.0	32.0	-	図版10	-	
P1013	6B8	25.0	27.0	-	図版10	-	
P678	6B1	31.0	26.8	-	図版10	-	
P876	6A25	29.0	36.7	-	図版10	-	
P843	6A24・25	26.0	21.0	-	図版10	図版 33-336	柱根が 残存
P705	6A23・24	24.0	40.0	-	図版10	図版 33-335	柱根が 残存
P683	6A22・23	39.0	41.8	-	図版10	-	
P799	6A21・22	35.0	35.0	-	図版10	-	

SB6

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P246	8B18・23	26.0	37.7	-	図版11	-	
P299	8B22	24.0	40.0	-	図版11	-	
P284	8B21	39.0	50.6	-	図版11	-	
P307	7B25	36.0	52.0	P234より新しい	図版11	-	
P177	8B13	43.0	22.0	-	図版11	-	
P183	8B12	27.0	39.0	-	図版11	-	
P225	8B11	27.0	28.0	-	図版11	図版 20-12	
P230	7B15・20	29.0	34.5	-	図版11	-	
P370	8B8	23.0	32.0	-	図版11	-	
P181	8B7	49.0	24.0	-	図版11	-	
P224	8B6	31.0	29.1	SD853より新しい	図版11	-	

SB7

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P143	9B16・17	25.0	54.6	-	図版11	-	
P276	8B15・20・ 9B11・16	24.0	30.0	-	図版11	-	
P288	8B15	19.0	35.0	-	図版11	-	
P172	8B13	39.0	53.3	-	図版11	-	

SB7

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P140	9B7・12	33.0	29.0	-	図版11	-	
P150	9B6・11	31.0	33.3	-	図版11	-	
P162	8B10	26.0	41.4	-	図版11	-	
P169	8B8	38.0	42.3	-	図版11	-	
P316	9B7	36.0	32.8	SD11より新しい	図版11	-	
P267	9B1	41.0	44.0	-	図版11	図版 20-13	
P341	9B1	34.0	54.9	-	図版11	-	
P257	8B5	32.0	24.0	-	図版11	-	
P317	8B3	29.0	48.0	SX18より新しい	図版11	-	

SB8

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P146	9B16	39.0	45.0	-	図版11	-	
P291	8B19・20	29.0	46.0	SD248より古い	図版11	-	
P274	8B18	59.0	32.0	SD248より古い	図版11	-	
P278	9B11	20.0	18.0	-	図版11	-	
P173	8B13	25.0	30.9	-	図版11	-	
P147	9B6・11	38.0	48.0	-	図版11	-	
P160	8B10	21.0	33.2	-	図版11	-	
P170	8B8	27.0	31.6	-	図版11	-	

SB9

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P305	8C11	33.0	23.0	-	図版12	-	
P315	7C10・15	35.0	32.0	-	図版12	-	
P717	7C9	43.0	36.8	-	図版12	-	
P506	7C2・3	60.0	26.0	-	図版12	-	
P210	8C6	30.0	24.0	P214より古い	図版12	-	
P287	7C5	36.0	48.0	-	図版12	-	
P726	7C4	33.0	38.0	-	図版12	-	
P827	7B23	30.0	56.0	-	図版12	図版27- 210・211	
P245	8B22	37.0	33.7	-	図版12	-	
P286	8B21	56.0	33.5	-	図版12	-	
P231	7B20・25	51.0	73.7	-	図版12	図版 20-14	
P829	7B19	96.0	64.1	SD522より古い	図版12	-	

SB10

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P202	8C13	26.0	37.2	-	図版12	-	
P207	8C12	28.0	32.2	-	図版12	-	
P216	7C10	38.0	49.0	SD221より新しい	図版12	-	
P718	7C9	42.0	31.0	-	図版12	-	
P194	8C8	27.0	14.0	-	図版12	-	
P344	8C7	27.0	35.1	-	図版12	-	
P223	7C5	27.0	27.7	-	図版12	-	
P235	8C3	28.0	41.4	-	図版12	-	
P203	8C2	26.0	25.0	-	図版12	-	
P229	8B21	23.0	42.0	-	図版12	-	
P232	7B25	30.0	28.6	-	図版12	-	

掘立柱建物の柱穴(P) 観察表

SB11

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P187	8C15	30.0	42.0	-	図版12	-	
P186	8C5	26.0	32.5	-	図版12	-	
P337	8B25	33.0	39.3	-	図版12	-	
P279	8B20	59.0	39.0	SD248より古い	図版12	-	
P192	8C13・14	35.0	38.4	-	図版12	-	
P190	8C4・9	26.0	36.3	-	図版12	-	
P351	8B23・24	31.0	37.4	-	図版12	-	
P280	8B18・19	38.0	23.0	-	図版12	-	

SB12

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P309	8C14・19	46.0	26.0	-	図版12	-	
P311	8C13・18	29.0	22.7	-	図版12	-	
P339	8C18	23.0	26.0	-	図版12	-	
P313	8C17	30.0	25.6	-	図版12	-	

角地田遺跡 柵(SA) 観察表

遺構名	グリッド	長軸 (m)	方位	他遺構との切合い	遺構図版	出土遺物	備考
SA1	5C	8.7	N-73°-W	SD545より新しい	図版9	図版20-15・16	-
SA2	9C	7.4	N-72°-W	SD12より古い	図版11	-	-

角地田遺跡 柵の柱穴 観察表

SA1

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P617	5C10・15	56.0	51.4	SD545より新しい	図版9	図版20-16	
P620	5C9	65.0	59.0	-	図版9	-	
P626	5C2・3・7・8	57.0	50.0	-	図版9	図版20-15	
P644	5C1	72.0	33.0	-	図版9	-	

SA2

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P135	9B19	39.0	62.8	-	図版11	-	
P136	9B18	32.0	37.0	-	図版11	-	
P142	9B12	30.0	45.5	SD12より古い	図版11	-	
P151	9B11	36.0	17.6	-	図版11	-	

角地田遺跡 土坑(SK) 観察表

遺構名	グリッド	遺構の形態			規模(m)			他遺構との切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		平面	断面	立上がり	長軸	短軸	深度				
SK1	2C10・15	不整形	弧状	緩やか	3.32	1.24	0.22	-	図版4・13	図版20-17~27	
SK188	8C8・9・10・14・15	楕円形	台形状	急斜度	2.50	0.96	0.23	-	図版6・13	図版20-28・29	
SK514	7B22	楕円形	台形状	急斜度	(1.24)	0.99	0.21	SD521より古い	図版6・13	-	
SK577	5B4・5・9・10	円形	台形状	急斜度	2.26	2.20	0.30	SB1より古い、SD576・SD867・SD869・P819より新しい	図版5・14	図版20・21-30~50	
SK582	5B19・24	楕円形	台形状	急斜度	0.82	0.40	0.09	P759より古い	図版5・13	図版21-51	
SK591	5B23・24	楕円形	弧状	緩やか	1.48	1.04	0.11	-	図版5・13	図版21-52	52はP626(SA1)と接合
SK698	7B1・2・6	円形	台形状	急斜度	2.44	2.32	0.36	SB4・SD697・SD699より新しい	図版6・14	図版21・22-53~66	

角地田遺跡 配石遺構(SS) 観察表

遺構名	グリッド	規模(m)		他遺構との切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		長軸	深度				
SS1	4B20・25	1.54	1.41	-	図版5・15	図版22-67~69	
SS2	7B6・7・11・12	3.84	1.83	SD853と同時期か新しい(SD853の覆土で埋没)	図版6・15	図版32-318	

溝(SD) 観察表 (1)

遺構名	グリッド	遺構の形態		規模(cm)		他遺構との切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		断面	立上がり	最大幅	深度				
SD11	9B6・7・11	弧状	緩やか	40.0	5.0	SB7 (P316)より古い	図版6・15	図版22-70~74	
SD12	9B7・12・17	弧状	緩やか	28.0	3.0	SA2 (P142)より新しい	図版6・15	図版22-75・76	
SD14	8A21・22、8B2・7・12・16・17	台形状	急斜度	56.0	8.0	SD15・853より新しい	図版6・15	図版22-77~80	
SD15	7A22・23、7B3・9・10・15、8B11・17・23、8C3・4	台形状	急斜度	52.0	16.0	SD14より古く、SD853より新しい	図版6・15	図版22-81~86 図版31-299	Vc層直下の形成、Vd層を切る
SD103	11B21、11C1	弧状	緩やか	86.0	4.0	SX102より古い	図版7・18	-	
SD221	7C10・15、8C6・11・16・17	台形状	急斜度	92.0	16.0	SB10 (P216)より古い	図版6・15	図版23-87	Vc層直下の形成、Vd層を切る

別 表

溝(SD) 観察表 (2)

遺構名	グリッド	遺構の形態		規模(cm)		他遺構との切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		断面	立上がり	最大幅	深度				
SD247	8B23・24・25	弧状	緩やか	99.0	17.5	-	図版6・15	-	SD521・522・548・248の覆土と類似
SD248	8B18・19・20	台形状	急斜度	136.0	28.0	SB8 (P274・291)、SB11 (P279) より新しい	図版6・15	-	SD521・522・547・247の覆土と類似
SD521	7B16・17・18・19・21・22・23・24	半円状	急斜度	124.0	33.5	SD853より新しい	図版6・15	図版23-88~90	SD522・548・247・248の覆土と類似
SD548	6B13・14・16・17・18・19・20	弧状	急斜度	114.0	17.0	SD554、SD559より新しい	図版5・15	図版23-103・104	SD521・522・247・248の覆土と類似
SD522	6B20、7B11・12・13・14・16・17・18・19	半円状	急斜度	138.0	37.0	SB9 (P829)、SD853より新しい	図版6・15	図版23-91~98、図版32-317	SD521・548・247・248の覆土と類似
SD523	7B8・9・13・14	台形状	急斜度	74.0	6.0	SD853より新しい、SD15・SD522より古い	図版6・15・16	図版23-99~102 図版31-300~304	SD15との切合いは図版15の断面図参照
SD541	5B25、6B21、6C1・2	台形状	急斜度	38.0	9.0	SD575より古い	図版5・16	-	本遺構とSD542・543・571~574は耕作溝を構成
SD542	5B25、5C5、6C1・2	半円状	急斜度	36.0	14.0	-	図版5・16	-	本遺構とSD541・543・571~574は耕作溝を構成
SD543	5C5、6C7・6	台形状	急斜度	24.0	12.0	-	図版5・16	-	本遺構とSD541・542・571~574は耕作溝を構成
SD545	5C1・6・7・8・9・15、6C11・13・18・19・20	弧状	緩やか	29.0	5.0	SA1 (P617) より古い、SD729・853より新しい	図版5・16	-	
SD571	5B20、6B16・17・18・22・23	半円状	急斜度	44.0	9.0	SD575より古い	図版5・16	図版23-108・109	本遺構とSD541~543・572~574は耕作溝を構成
SD572	5B20、6B16・17・22	半円状	急斜度	32.0	10.0	SD575より古い	図版5・16	-	本遺構とSD541~543・571・573・574は耕作溝を構成
SD573	5B20・25、6B21・22	半円状	急斜度	36.0	12.0	SD575より古い	図版5・16	-	本遺構とSD541~543・571・572は耕作溝を構成
SD574	5B25、6B21・22	半円状	急斜度	27.0	13.0	SD541・575より古い	図版5・16	-	本遺構とSD541~543・571~573は耕作溝を構成
SD575	5B10・15・20・24・25、6B6	弧状	緩やか	80.0	12.5	畝状小溝(SD541~543・SD751~754)・SD869より新しい、SB3 (P579・P809) より古い	図版5・16	図版24-114~116	SB1の雨落溝の可能性あり
SD576	4A25、5B5・10・12・13・14・15・17・19・20	弧状	緩やか	58.0	11.0	SB1 (P814) SB3 (P751)・SK577より古い、SD869・867より新しい	図版5・16	図版23・24-110~113、 図版32-319	
SD532	6C13・14・19・20、7C16	台形状	急斜度	24.0	4.0	SD729・SD853より新しい	図版5・16	-	
SD550	6B7・8・9	弧状	緩やか	40.0	7.0	SD554より新しく、SD559より古い	図版5・16	-	
SD554	6B8・13・14・18・23	弧状	緩やか	34.0	4.0	SD548・SD550より古く、SD729・SD869より新しい	図版5・16	図版23-105~107	
SD559	6A22、6B2・7・12・17	台形状	急斜度	38.0	8.0	SB4 (P681・SK560)・SD548より古い、SD550・696・869より新しい	図版5・16	-	
SD650	4B18・19	台形状	急斜度	48.0	13.5	-	図版5・16	図版24-118	
SD646	4B23・24、4C3・4	台形状	急斜度	30.0	17.5	-	図版5・16	図版24-117	
SD680	6A23、6B3	半円状	急斜度	24.0	7.0	SB4 (P687)・SD696より古い、SD689より新しい	図版5・16	図版24-119	
SD689	6B23・24	半円状	急斜度	38.0	8.5	SD680より古い	図版5・16	-	
SD696	6B2・3・4・5	台形状	急斜度	34.0	5.0	SB4 (P694・692・687)・SD559より古い、SD680より新しい	図版5・16	-	
SD697	7A21・22、7B1・2	弧状	急斜度	44.0	9.0	SK698・SD699より古い	図版6・14	図版24-120~125	
SD699	7A21、7B1	台形状	急斜度	60.0	11.0	SK698より古い、SD697より新しい	図版6・14	-	
SD715	5C17・18	弧状	急斜度	34.0	10.0	-	図版5・16	図版24-126~129	Vc層直下の形成、Vd層を切る
SD728	7C1・2・6・7・12・13・18	弧状	緩やか	79.0	20.0	P512より古い、SD729との新旧は不明	図版5・6・16	-	SD853の覆土と類似、Vc層直下の形成(図版17-117参照)

溝(SD) 観察表 (3)

遺構名	グリッド	遺構の形態		規模(cm)		他遺構との切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		断面	立上がり	最大幅	深度				
SD729	6C5・9・10・13・14・17・18、7B21・22、7C1・6	弧状	緩やか	68.0	18.0	SD545・532・P519より古い、SD728との新旧は不明	図版5・16	図版24 - 130 ~ 132	SD853の覆土と類似、Vc層直下の形成(図版17-117参照)
SD867	4A24・25	台形状	急斜度	40.0	15.0	SK577・SD576・P819より古い	図版5・16	-	SD869・SD853の覆土と類似
SD803	7C14・15	台形状	急斜度	54.0	8.0	-	図版6・16	図版24 - 133・134	
SD869	4B3・4・5、5B1・8・9・10、6B6・7・8	台形状	急斜度	44.0	10.5	SB1 (P856・747・585)・SK577・SD559・554・575・576より古い	図版5・16	-	SD867・853の覆土と類似
SD853	5C20、6B15・20・24・25、6C3・4・5・7・8・9・10・11・12・13・16・17、7A25、7B3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・21・22、7C1、8A21・22・23、8B1・2・6	台形・階段	急斜度	372.0	50.0	SB4 (P896)、SB6 (P224)、SD14・15・521 ~ 523、532、545より古い、SS2より古いか同時期	図版5・6・17	図版24 ~ 26 - 135 ~ 168、図版32 - 318	SD728・729・867・869の覆土と類似、Vc層直下の形成(図版17-117・118参照)、本遺構の覆土にSS2が埋没する

角地田遺跡 性格不明遺構(SX) 観察表

遺構名	グリッド	遺構の形態			規模(m)			他遺構との切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		平面	断面	立上がり	長軸	短軸	深度				
SX2	9A24・25、9B4・5・9・10、10A21	-	V字状	緩やか	3.86	3.88	0.78	-	図版7・17	-	
SX3	10A23・24、11C4・5	-	弧状	緩やか	(10.40)	(5.04)	0.44	-	図版7・17	図版26 - 169 ~ 174	
SX17	8B4・5	(楕円形)	(弧状)	緩やか	0.99	0.52	0.08	-	図版6・18	図版27 - 184	
SX18	8A23、8B3・4	(不整形)	(弧状)	緩やか	1.44	0.92	0.06	SB7・P330より古い	図版6・18	図版26 - 175 ~ 183	
SX102	10B19・20・24・25、10C4・5・9・10、11B21、11C1・6	楕円形	階段状	緩やか	5.82	3.98	0.18	SD103より新しい	図版7・18	-	土師器を主とする細片が出土
SX104	10B22・23、10C2・3	不整形	弧状	緩やか	3.76	2.30	0.16	P121より古い	図版7・18	図版27 - 188	自然形成の落込みの可能性あり
SX647	4B17・18・22・23、4C2・3・7・8・12・13・19	-	(弧状)	緩やか	(4.75)	(2.37)	0.47	SB2より古い	図版5・17	図版27 - 185・187	東側が大きく攪乱をうける

角地田遺跡 柱穴(P) 観察表

遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との切合い	遺構図版	出土遺物	備考	遺構名	グリッド	規模(cm)		他遺構との切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		最大長	深度							最大長	深度				
P759	5B19	25.0	27.0	SK582より新しい	図版5・13	-	1類	P256	8A24	136.0	28.0	P369より新しい	図版6・18	図版27 - 192・193	1類
P819	5B5	(25.0)	22.0	SK577より新しい	図版5・14	図版21 - 35	1類	P319	7C15	24.0	20.0	-	図版6・19	図版27 - 319	1類
P330	8B4	(39.0)	9.0	SX18より新しい	図版6・18	図版27 - 195	1類	P512	7C7	68.0	48.0	SD728より新しい	図版6・19	図版27 - 196 ~ 197	2類、柱根
P163	8B9	26.0	26.0	-	図版6・18	図版27 - 190	1類	P519	6C10、7C6	67.0	44.0	SD729より新しい	図版6・19	図版27 - 198 ~ 202	2類
P214	7C5	36.0	50.0	P287 (SB9)より新しい	図版6・18	図版27 - 214	1類	P622	5C4	64.0	10.0	-	図版5・19	図版27 - 204 ~ 206	3類
P121	10C2	68.0	8.0	SX104より新しい	図版7・17	図版27 - 189	3類	P624	5B22	58.0	6.0	-	図版5・19	図版27 - 203	3類
P234	7B25	36.0	38.0	SB6 (P307)より古い	図版6・18	図版32 - 326	1類	P629	5C7・12	58.0	20.5	-	図版5・19	図版27 - 207 ~ 209	3類
P369	8A24	37.0	26.0	P256より古い	図版6・18	-	1類								

別 表

角地田遺跡 土器観察表(1)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考
							口径	底径	器高	含有物	色調				
1	20	07㏻P 589	SB1 (P 589)	土師器	無台碗		11.6			石・長・チャ・雲	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ		6/36	炭化物付着
2	20	07㏻P 590	SB1 (P 590)	土師器	有台碗			6.8		石・長・チャ・雲	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		
3	20	07㏻P 589	SB1 (P 589)	土師器	長甕		11.8			石・長・チャ・雲・砂	灰黄褐 10YR 6/2	ロクロナデ		2/36	
4	20	07㏻P 785	SB1 (P 785)	須恵器	甕	Ⅲ				石・長	灰 N 5/0	胴部外面タタキメ、胴部内面あて具痕、その他ロクロナデ			
5	20	07㏻P 747	SB1 (P 747)	製塩土器						石・長・礫	橙 5YR 7/6	外面輪稜痕、内面刷毛調整			
6	20	07㏻P 621	SB2 (P 621)	土師器	無台碗		10.6			石・長・チャ	にぶい黄橙 10YR 6/3	ロクロナデ		6/36	
7	20	07㏻P 613・1層	SB2 (P 613)	土師器	無台碗			6.0		石・長・チャ・砂	灰黄褐 10YR 5/2	ロクロナデ、底部糸切り	右		
8	20	07㏻P 653	SB2 (P 653)	土師器	鍋	I	30.0			石・長・チャ・砂	橙 5YR 7/6	胴部外面カキメ、その他ロクロナデ		3/36	
9	20	07㏻P 687	SB3 (P 687)	土師器	無台碗			4.4		石・長・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		
10	20	07㏻P 692	SB4 (P 692)	土師器	無台碗			5.4		石・長・雲・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		
11	20	07㏻P 687	SB4 (P 687)	土師器	有台碗		12.8			石・長	橙 5YR 7/6	ロクロナデ		4/36	
12	20	07㏻P 225	SB6 (P 225)	土師器	小碗	Ⅳ	9.4	4.2	3.2	石・長・雲	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36	
13	20	07㏻P 267	SB7 (P 267)	土師器	無台碗			4.8		石・長・チャ・雲	灰白 10YR 8/2	ロクロナデ、底部糸切り	右		
14	20	07㏻P 231	SB9 (P 231)	土師器	無台碗	Ⅵ	12.8			石・長	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ		4/36	
15	20	07㏻P 626	SA1 (P 626)	土師器	小碗	I b	10.7	4.6	3.0	石・長・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り		12/36	
16	20	07㏻P 617	SA1 (P 617)	土師器	小碗	I b	10.7	4.5	3.7	石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	19/36	
17	20	07㏻SX1・No65	SK1	土師器	小碗	Ⅱ a	10.2	5.2	3.0	長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	29/36	
18	20	07㏻SX1・No8	SK1	土師器	小碗	Ⅱ a	10.5	5.9	2.8	石・長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	11/36	
19	20	07㏻SX1・No7	SK1	土師器	小碗	I b	10.7	5.8	2.8	石・長・チャ	灰白 10YR 8/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	27/36	
20	20	07㏻SX1・No3	SK1	土師器	小碗	Ⅲ	10.0	4.9	3.0	石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36	
21	20	07㏻SX1・No17	SK1	土師器	有台碗			8.4		長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右		
22	20	07㏻SX1・No32	SK1	土師器	無台碗			5.8		石・長・チャ・雲・礫	灰白 10YR 8/2	ロクロナデ、底部糸切り	右		
23	20	07㏻SX1・1層	SK1	土師器	無台碗			6.2		石・長・礫	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		
24	20	07㏻SX1・1層	SK1	黒色土器	無台碗		15.8			石・長・チャ	灰黄 2.5Y 7/2	口縁外面ミガキ、内面ミガキ、その他ロクロナデ		2/36	
25	20	07㏻SX1・No39	SK1	黒色土器	有台碗					石・長・チャ・雲・骨	にぶい黄橙 10YR 7/3	内・外面ミガキ、底部糸切り→ナデ	右		
26	20	07㏻SX1・No42	SK1	土師器	小甕		12.6			石・長・雲・骨	褐灰 10YR 5/1	ロクロナデ		5/36	
27	20	07㏻SX1・No43	SK1	土師器	鉢		20.9			長・チャ・雲・砂	橙 5YR 7/6	ロクロナデ		2/36	
28	20	07㏻SK188・No1	SK188	土師器	小碗	I b	11.0	5.4	3.2	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	29/36	
29	20	07㏻SK188・No4 + No5	SK188	土師器	有台碗		15.3	7.7	7.0	石・長・チャ・雲・礫	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部ナデ		22/36	
30	20	07㏻SD577・No80	SK577	土師器	無台碗	Ⅵ	14.9	9.0	4.0	石・長・チャ・雲・礫	浅黄橙 10YR 8/4	ロクロナデ		7/36	
31	20	07㏻SD577・No77・No83 ~ 85	SK577	土師器	小碗	I b	10.9	5.4	3.6	長・チャ・雲・礫	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	21/36	
32	20	07㏻SD522・No9 ~ 12	SK577	土師器	無台碗	Ⅱ a	12.7	6.0	3.6	石・長・チャ・雲	橙 5YR 7/6	ロクロナデ、底部糸切り	右	16/36	
33	20	07㏻SD577・No12 + SD577	SK577	土師器	小碗	I b	10.6	4.8	3.4	長・チャ・砂	橙 5YR 7/6	ロクロナデ、底部糸切り	右	2/36	
34	20	07㏻SD577・No87	SK577	土師器	小碗	I b	10.3	4.3	3.2	石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	36/36	
35	21	07㏻P 819・No1	SK577 (P 819)	土師器	小碗	Ⅲ	9.9	4.9	2.7	石・長・雲・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	36/36	炭化物付着
36	21	07㏻SD577・No34 + No35 + No81 + SD577	SK577	土師器	小碗	I b	10.2	5.0	3.2	石・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36	内面に漆付着

角地田遺跡 土器観察表(2)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考	
							口径	底径	器高	含有物	色調					
37	21	07㏻SD577・No19+SD577	SK577	土師器	小椀	I b	11.2	5.2	3.2	石・チャ・砂	褐灰 10YR 5/1	ロクロナデ、底部糸切り	右	17/36		
38	21	07㏻SD577・No2	SK577	土師器	小椀	I b	10.4	5.0	3.1	石・チャ・雲・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	7/36		
39	21	07㏻SD577・No71	SK577	土師器	小椀	I b	11.4	5.7	3.2	石・長・チャ・雲・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36		
40	21	07㏻SD576・No1	SK577 (SD576)	土師器	小椀	I b	10.6	5.1	3.2	長・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	17/36		
41	21	07㏻SD577・No46	SK577	土師器	小椀	I b	11.0	5.6	3.0	チャ・雲・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	6/36		
42	21	07㏻SD577	SK577	土師器	小椀	I b	10.5	4.6	2.7	石・長・チャ・雲	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36		
43	21	07㏻SD710	SK577 (SD710)	土師器	小椀	I b	11.2	4.4	3.2	石・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36		
44	21	07㏻SD710	SK577 (SD710)	土師器	無台椀			6.8		石・チャ・砂	橙 5YR 7/6	ロクロナデ、底部糸切り				
45	21	07㏻SD577・No76+No79+SD577	SK577	土師器	有台椀			13.7		チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ	右	2/36		
46	21	07㏻SD577・No72	SK577	土師器	有台椀			13.6		石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ		7/36		
47	21	07㏻SD710	SK577 (SD710)	土師器	鉢			10.0		チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右			
48	21	07㏻SD577・No6+No37+5B V c層	SK577	土師器	鍋					石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	外面タタキメ、内面あて具痕				
49	21	07㏻SD577・No16	SK577	須恵器	甕					石・長・白	灰 N 5/0	外面タタキメ、内面あて具痕				
50	21	07㏻SD577	SK577	灰釉	長頸瓶			12.4		石・長	灰白 N 8/0	ロクロナデ		4/36		
51	21	07㏻SD582	SK582	土師器	無台椀	II a	12.0	4.3	3.5	石・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	7/36		
52	21	07㏻SK591・No1+P626+5B22 V c層+5C2 V c層+5C13+5C+表採	SK591 (P626)	灰釉	皿			11.4	5.9	2.3	石・長・白	灰白 N 8/0	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ	右	17/36	内面に墨痕、釉薬つけかけ
53	21	07㏻SK698+SK698・No10	SK698	土師器	小椀	II b	9.2	5.5	2.8	石・長・雲	にぶい黄橙 10YR 7/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	12/36		
54	21	07㏻SK698+SK698・No1	SK698	土師器	小椀	III	8.9	4.0	2.7	石・長・チャ・雲・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	16/36		
55	21	07㏻SK698・No27~29	SK698	土師器	小皿	II	9.0	4.6	2.4	石・長・チャ・雲・砂	にぶい黄橙 10YR 7/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	7/36		
56	21	07㏻SK698+SK698・No37	SK698	土師器	小椀	IV	9.6	5.2	4.1	石・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	13/36		
57	21	07㏻SK698・No14	SK698	土師器	無台椀	V	12.4	5.2	3.4	石・長・チャ・雲	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り		6/36		
58	21	07㏻SK698+SK698・No11+No12	SK698	土師器	有台椀			13.5	6.8	5.1	石・長・雲・骨	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ		3/36	
59	21	07㏻SK698+SK698・No22+No38+No39	SK698	土師器	有台椀			13.6			石・長・雲・砂	灰黄褐 10YR 6/2	ロクロナデ、底部ロクロナデ		11/36	
60	21	07㏻SK698+SK698・No6+No35	SK698	土師器	有台椀						石・長・雲	にぶい橙 7.5YR 6/4	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ	右		
61	21	07㏻SK698+SK698・No7+No20	SK698	黒色土器	有台椀			6.5			石・長・チャ	にぶい橙 7.5YR 7/4	内面ミガキ、底部糸切り →ロクロナデ、その他ロクロナデ	右		
62	21	07㏻SK698+SK698・No8	SK698	土師器	小甕			8.6			石・長・チャ	灰白 2.5Y 8/2	ロクロナデ、底部糸切り (2回とも)	右(2回とも)		底部調整2回
63	22	07㏻SK698・No23	SK698	須恵器	甕			30.0			石・長・礫	灰 N 6/0	ロクロナデ		1/36	
64	22	07㏻SK698・No49	SK698	灰釉	長頸瓶						石・長	灰白 N 8/0	ロクロナデ			
65	22	07㏻SK698・No19	SK698	須恵器	甕						石・長・チャ・礫	灰 N 6/0	外面タタキメ、内面あて具痕			
66	22	07㏻SK698・No30	SK698	灰釉	有台椀						石・長	灰白 N 8/0	胴部下半ロクロケズリ、底部糸切り →ロクロナデ、その他ロクロナデ			
67	22	07㏻4B25・SS1	SS1	黒色土器	有台皿			11.8			石・長・チャ・雲	浅黄橙 10YR 8/3	口縁外面ミガキ、内面ミガキ、底部ロクロナデ、その他ロクロナデ		2/36	
68	22	07㏻SS1・No56~No58+SS1	SS1	須恵器	甕						石・長	灰 5Y 6/1	外面タタキメ、内面あて具痕			

別 表

角地田遺跡 土器観察表(3)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考
							口径	底径	器高	含有物	色調				
69	22	07㉿SS1・No55	SS1	須恵器	甕				石・長・白	灰 10YR 6/1	外面タタキメ、内面あて具痕				
70	22	07㉿9B6・SD11・1層	SD11	土師器	小椀	II a	10.8	6.2	3.0	石・長・チャ・雲・礫	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36	
71	22	07㉿9B6・SD11・1層	SD11	土師器	小皿	II	10.4	5.6	2.4	石・長・チャ	灰黄 2.5Y 7/2	ロクロナデ、底部糸切り		4/36	
72	22	07㉿9B6・SD11・1層	SD11	土師器	小椀	II a	10.6	5.9	2.7	石・長	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	3/36	
73	22	07㉿9B6・SD11・1層	SD11	土師器	有台椀			7.2		石・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ	右	5/36	
74	22	07㉿9B11・SD11・1層	SD11	黒色土器	無台椀			6.0		石・長	浅黄橙 10YR 8/3	内面ミガキ、その他ロクロナデ			
75	22	07㉿9B7・SD12・1層	SD12	土師器	無台椀		9.4	4.8	2.3	石・長・礫	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り		4/36	
76	22	07㉿9B12・SD12	SD12	須恵器	甕					石・長・チャ	灰 N 6/0	外面タタキメ、内面あて具痕			
77	22	07㉿8B12・SD14	SD14	土師器	無台椀			4.6		石・雲	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		
78	22	07㉿SD14	SD14	土師器	有台椀		22.0			石・長・チャ・砂	灰褐 7.5YR 6/2	ロクロナデ		3/36	
79	22	07㉿8B12・SD14・1層	SD14	土師器	甕	III	17.0			石・長・雲・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ		3/36	
80	22	07㉿8B17・SD14	SD14	須恵器	甕					石・長	灰 5Y 5/1	外面タタキメ、内面あて具痕			
81	22	07㉿SD702	SD15(SD702)	土師器	小椀	II a	10.6	5.2	2.7	石・長・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	8/36	
82	22	07㉿SD15・No1	SD15	土師器	小椀	II a	10.0	5.8	2.7	石・長・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	11/36	
83	22	07㉿SD702	SD15(SD702)	土師器	小椀	II b'	9.6	3.6	3.7	石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36	
84	22	07㉿7B15・SD15・1層 + 8B11・SD15	SD15	土師器	無台椀	V	13.2	6.2	3.4	石・長・チャ・雲・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	10/36	口縁外面炭化物付着
85	22	07㉿7B15・SD15	SD15	土師器	有台椀		8.3			石・長	淡橙 5YR 8/4	ロクロナデ			
86	22	07㉿8B20・SD248・1層 + 8C9・SD15	SD15(SD248)	須恵器	無台杯			6.3		石・長・チャ・骨	灰 N 6/0	ロクロナデ、底部ヘラ切り	右		佐渡小泊
87	23	07㉿SD221	SD221	土師器	無台椀			6.0		石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		
88	23	07㉿7B22・SD521	SD521	須恵器	無台杯		10.0			石・長	灰 N 6/0	ロクロナデ		5/36	
89	23	07㉿SD521・No3	SD521	土師器	無台椀	III a	13.2	4.6	4.1	石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	12/36	
90	23	07㉿SD521・No9	SD521	須恵器	甕					石・長	灰 N 6/0	外面タタキメ、内面あて具痕			内面炭化物付着
91	23	07㉿7B17・SD522 + SD522・No4	SD522	土師器	無台椀	I	13.1	5.5	3.7	石・長・チャ・雲・砂	橙 7.5YR 7/6	ロクロナデ、底部糸切り	右	8/36	
92	23	07㉿7B17・SD522 + SD522・No2 + No3	SD522	土師器	無台椀	I	13.1	5.8	4.2	石・長・チャ・雲・骨・砂	にぶい黄橙 10YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	13/36	
93	23	07㉿7B16・SD522・3層 + SD522・No8	SD522	土師器	無台椀	II b	14.0	7.4	3.9	石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36	
94	23	07㉿7B16・SD522・3層 + SD522・No13 ~ 18	SD522	土師器	無台椀	II c	16.9	7.8	6.0	石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	24/36	
95	23	07㉿7B17・SD522	SD522	土師器	無台椀		13.2			石・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ		3/36	墨書「口」
96	23	07㉿SD522・No15	SD522	土師器	無台椀					石・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ			墨書「得カ」
97	23	07㉿7B17・SD522 + SD522・No1	SD522	土師器	無台椀	II a	13.0	6.4	3.7	石・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36	
98	23	07㉿7B17・SD522	SD522	須恵器	長頸瓶		15.8			石・長・チャ	灰 5Y6/1	ロクロナデ		5/36	
99	23	07㉿SD523・No10 + 7B13・SD523	SD523	土師器	無台椀		10.8			石・チャ	灰白 10YR 8/2	ロクロナデ		6/36	口縁内・外面炭化物付着
100	23	07㉿7B14・SD523・上層	SD523	土師器	無台椀			5.2		石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り			

角地田遺跡 土器観察表(4)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考
							口径	底径	器高	含有物	色調				
101	23	07㉿SD523・No1 + No2	SD523	土師器	鍋	Ⅲ	38.5			石・長・チャ・雲・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	外面ロクロナデ→タタキメ→ケズリ、内面ロクロナデ→あて具痕→ケズリ		5/36	
102	23	07㉿7B13・SD523	SD523	須恵器	甕					石・長	灰 N 6/0	外面タタキメ、内面あて具痕			
103	23	07㉿6B19・SX548	SK548	土師器	無台碗		12.8			石・チャ・雲・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	7/36	
104	23	07㉿SX548	SK548	須恵器	有台杯	Ⅱ		7.4		石・長	灰 N 6/0	ロクロナデ、底部糸切り	左		
105	23	07㉿SD554	SD554	土師器	小碗	I a	11.2	4.7	3.3	石・長・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36	
106	23	07㉿SD554	SD554	土師器	小碗	I a	10.5	4.8	3.3	石・長・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	14/36	
107	23	07㉿SD554	SD554	土師器	小碗	I a	10.9	4.1	3.5	石・長・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	19/36	
108	23	07㉿6B16・SD571	SD571	土師器	無台碗			5.0		石・長	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		
109	23	07㉿6B17・SD571 + 6B22・SD573	SD571 (SD573)	土師器	有台碗		14.5	7.6	5.0	石・長・チャ・砂	淡黄 2.5Y 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	1/36	
110	23	07㉿5B17・SD576	SD576	土師器	無台碗		13.0			石・チャ・雲・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ		2/36	墨書「臣カ・得カ」
111	23	07㉿SD576	SD576	土師器	無台碗			5.2		石・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		
112	23	07㉿SD576	SD576	土師器	鉢		38.0			石・長・チャ・雲・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ		1/36	
113	24	07㉿5B12・SD576	SD576	須恵器	甕					石・長	灰 N 6/0	外面タタキメ、内面あて具痕			
114	24	07㉿5B25・SD575 + 6B16・SD571	SD575(SD571)	土師器	無台碗		13.4			石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ		4/36	
115	24	07㉿5B25・SD575	SD575	土師器	無台碗			5.2		石・長・チャ	灰白 10YR 8/2	ロクロナデ、底部糸切り	左		
116	24	07㉿5B25・SD575	SD575	土師器	鍋		34.2			石・長・チャ・砂	灰黄褐 10YR 5/2	ロクロナデ		2/36	
117	24	07㉿SD646	SD646	土師器	無台碗		12.6			石・長・チャ・雲	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ		6/36	墨書「臣」
118	24	07㉿SD650	SD650	土師器	有台碗					石・長・チャ・雲・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ			
119	24	07㉿SD680	SD680	土師器	小碗	I b	10.3	5.2	3.3	石・チャ・砂	橙 5YR 7/6	ロクロナデ、底部糸切り	右	14/36	
120	24	07㉿SD697・No1	SD697	土師器	小碗	I b	10.7	4.8	3.0	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	10/36	
121	24	07㉿SD699・No2 + No17 + No18 + SK698	SD697 (SD699,SK698)	土師器	小碗	I b	10.6	4.6	3.4	石・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36	
122	24	07㉿SD697・No2	SD697	土師器	鍋					石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	外面タタキメ、内面あて具痕			
123	24	07㉿SD699・No1	SD697 (SD699)	土師器	小碗	I b	10.7	5.5	3.2	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	36/36	
124	24	07㉿SD697・No4	SD697	土師器	有台碗			7.0		石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り→ロクロナデ			
125	24	07㉿SD699・No3 + No6 + No7 + No19	SD697 (SD699)	土師器	有台碗			6.6		石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り→ロクロナデ			
126	24	07㉿SD715	SD715	土師器	無台碗		10.8			石・長	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ		6/36	
127	24	07㉿SD715	SD715	土師器	無台碗			5.8		石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右		
128	24	07㉿SD715	SD715	土師器	有台碗		13.6			石・長・砂	にぶい黄橙 10YR7/3	ロクロナデ		6/36	
129	24	07㉿SD715	SD715	土師器	有台碗			7.5		石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ			内・外面炭化物付着
130	24	07㉿6C14・SD729	SD729	須恵器	無台杯		15.0			石・長	灰 N 6/0	ロクロナデ		3/36	
131	24	07㉿SD729・No1	SD729	土師器	無台碗			5.2		石・チャ・砂	にぶい褐 7.5YR 6/3	ロクロナデ、底部糸切り→ロクロナデ			
132	24	07㉿7C1・SD729	SD729	須恵器	長頸瓶	I				石・長	灰 N 5/0	ロクロナデ			
133	24	07㉿SD803・No1	SD803	土師器	小碗	I b	10.5	4.6	3.4	石・長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	33/36	
134	24	07㉿SD803・No2	SD803	土師器	小碗	I b	10.9	5.2	4.0	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	35/36	
135	24	07㉿SD853・No25	SD853	土師器	無台碗	Ⅳ	13.0	6.8	3.7	石・長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	36/36	

別 表

角地田遺跡 土器観察表(5)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考
							口径	底径	器高	含有物	色調				
136	24	07カクチSD853・No13+6B25・SD853・上層	SD853	土師器	無台碗	Ⅲa	12.7	5.6	3.5	石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	8/36	
137	24	07カクチSD853・No26+6C16・SD853	SD853	土師器	無台碗	Ⅱb	13.8	6.0	4.3	石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	17/36	
138	24	07カクチSD853・No24+7B17・SD853・上層	SD853	土師器	無台碗	Ⅱa	12.9	4.8	4.5	石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	20/36	
139	24	07カクチSD853・No24+7B17・SD853・上層+7B13・SD853・上層+7B16・SD853・上層+7B17・SD853・上層	SD853	土師器	無台碗	Ⅱa	12.0	5.6	4.4	石・長・チャ	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36	
140	24	07カクチ7B16・SD853・上層+7B17・SD522	SD853 (SD522)	土師器	無台碗	Ⅱa	12.6	5.7	4.2	石・長・チャ	淡橙 5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	10/36	
141	25	07カクチ7B17・SD853・上層	SD853	土師器	無台碗	Ⅱa	13.0	5.8	3.5	石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	1/36	
142	25	07カクチSD853・No23+7B18・SD853	SD853	土師器	無台碗	Ⅱa	13.2	5.4	3.8	石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	18/36	
143	25	07カクチ6C9・SD853・下層	SD853	土師器	無台碗	Ⅱb	14.0	6.8	4.1	石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	2/36	
144	25	07カクチ6C9・SD853・上層	SD853	土師器	無台碗	Ⅱb	13.9	6.0	4.1	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	23/36	
145	25	07カクチSD853・No3+No4+6C8・SD853・下層+6C9・SD853・上層	SD853	土師器	無台碗	Ⅳ	13.0	5.9	3.5	石・長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	18/36	
146	25	07カクチ8B1・SD853	SD853	土師器	無台碗	Ⅵ	13.2	6.5	3.6	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	3/36	
147	25	07カクチ6C7・SD853	SD853	土師器	無台碗	Ⅲa	12.2	4.3	3.6	石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り		9/36	
148	25	07カクチ6C8・SD853+6C8・SD853・上層	SD853	土師器	無台碗	Ⅳ	12.6	5.8	3.2	石・長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	11/36	
149	25	07カクチ7B21・SD853	SD853	土師器	無台碗	Ⅳ	13.2	6.1	3.7	石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	6/36	
150	25	07カクチ7B16・SD853・上層+7B21・SD853	SD853	土師器	無台碗	Ⅱa	13.4	5.8	3.9	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	2/36	墨書「臣カ」
151	25	07カクチSD853・No11	SD853	土師器	無台碗	Ⅲa	13.0	5.2	3.8	石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	11/36	
152	25	07カクチ7B17・SD853・上層	SD853	土師器	無台碗					石・長・チャ・雲・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ		5/36	
153	25	07カクチ7B5・SD853	SD853	土師器	小碗	Ⅰb	11.5	4.2	3.1	石・長	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	7/36	
154	25	07カクチ6C7・SD853+6C12・Ⅵ層	SD853	土師器	無台碗			5.3		石・長	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		墨書「絵もしくは落書などカ」
155	25	07カクチ6C9・SD853・下層	SD853	土師器	無台碗			11.8		石・長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ		3/36	墨書「千」
156	25	07カクチ8A21・SD853	SD853	土師器	無台碗			13.0		石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ		1/36	墨書「口[臣カ]」
157	25	07カクチ6C16・SD853	SD853	土師器	無台碗					石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ			墨書「臣カ」
158	25	07カクチ7B17・SD853・上層	SD853	黒色土器	無台碗			6.4		石・長・チャ・雲・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	胴下部ヘラケズリ、内面ミガキ、底部糸切り、その他ロクロナデ	右		
159	25	07カクチSD853・No28	SD853	黒色土器	無台碗			6.4		石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	内面ミガキ、その他ロクロナデ、底部糸切り	右		
160	25	07カクチSD853・No14+21+7B11・SD853+7B18・SD853+6B15・Ⅴc層+6C7+7B16Ⅵ層	SD853	土師器	鉢		27.0	12.0	16.2	石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	胴外面ケズリ・ロクロケズリ、胴内面ミガキ、底部ナデ、その他ロクロナデ		10/36	
161	25	07カクチ7B13・SD853・上層	SD853	土師器	鍋					石・長・チャ・砂	黒褐 10YR 3/1	外面タタキメ、内面あて具痕			

角地田遺跡 土器観察表(6)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考	
							口径	底径	器高	含有物	色調					
162	25	07㉿㉿6C12・SD853・下層	SD853	土師器	鍋				石・長・チャ・砂	にぶい褐7.5YR 6/3	外面タタキメ、内面あて具痕					
163	25	07㉿㉿7B16・SD853・上層	SD853	土師器	鍋	II a	36.0		石・長・チャ・砂	にぶい黄橙10YR 7/3	ロクロナデ		2/36			
164	25	07㉿㉿7B11・SD853	SD853	土師器	鍋	II b	34.8		石・長・チャ・砂	橙5YR 7/6	ロクロナデ		3/36			
165	26	07㉿㉿6C9・SD853・No1+6C8・SD853	SD853	須恵器	双耳瓶		15.2	10.0	28.7	石・長・白	灰N 6/0	ロクロナデ		15/36		
166	26	07㉿㉿SD521・No2+SD616+SD853・No10+7B16・SD853・上層 他	SD853 (SD521, SD616)	須恵器	甕	I	45.2			石・長	灰N 4/0	胴部外面タタキメ、内面あて具痕、その他ロクロナデ		6/36		
167	26	07㉿㉿7B5・SD853	SD853	製塩土器			26.0			石・長・チャ・砂	にぶい褐7.5YR 6/3	内・外面輪積痕		1/36		
168	26	07㉿㉿7B5・SD853	SD853	製塩土器			32.0			石・長・チャ・砂	にぶい橙7.5YR 7/4	内・外面輪積痕		2/36		
169	26	07㉿㉿11B4・SX3・1層+11B5・Vc層	SX3	土師器	無台碗	II a	11.9	5.3	4.0	石・長・チャ・雲・砂	にぶい橙5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36		
170	26	07㉿㉿11B4・SX3・1層	SX3	土師器	長甕	I	24.2			石・長・チャ・砂	淡橙5YR 8/3	ロクロナデ		6/36		
171	26	07㉿㉿11B4・SX3・1層	SX3	土師器	長甕					石・チャ・雲・砂	にぶい黄橙10YR 7/3	胴外面ヘラケズリ・タタキメ、内面あて具痕				
172	26	07㉿㉿11B4・SX3・1層	SX3	須恵器	長頸瓶	I				石・長	灰N 5/0	ロクロナデ				
173	26	07㉿㉿11B4・SX3	SX3	須恵器	甕	I	38.0			石・長・雲・礫	灰白5Y 7/1	ロクロナデ		1/36		
174	26	07㉿㉿11B4・SX3・1層	SX3	土師器	長甕					石・長・チャ・砂	にぶい橙7.5YR 7/4	外面タタキメ、内面あて具痕				
175	26	07㉿㉿8B4・No31	SX18	土師器	小碗	II a	10.1	4.5	2.8	石・長・チャ・砂	にぶい黄橙10YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	26/36		
176	26	07㉿㉿8B3・No9	SX18	土師器	小碗	III	9.5	4.7	2.9	石・長・チャ	にぶい橙7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	12/36		
177	26	07㉿㉿8B3・No2	SX18	土師器	小碗	III	10.0	5.1	2.8	石・長・チャ	にぶい黄橙10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36		
178	26	07㉿㉿8B4・No45	SX18	土師器	小碗	I b	10.8	5.0	3.4	石・長・チャ・砂	浅黄橙10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36		
179	26	07㉿㉿8B4・No39	SX18	土師器	小碗	II a	10.3	4.7	2.8	石・長・チャ	にぶい橙7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り		10/36		
180	26	07㉿㉿8B4・No51	SX18	土師器	小碗	I b'	9.8	5.1	2.6	石・長・チャ	浅黄橙10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	6/36		
181	26	07㉿㉿8B3・No8	SX18	土師器	有台碗		12.6			石・長・チャ・砂	にぶい橙5YR 7/4	ロクロナデ		4/36		
182	26	07㉿㉿8B3・No11	SX18	黒色土器	無台碗		14.6			石・長・チャ・雲・砂	にぶい黄橙10YR 7/3	口縁外面ミガキ、内面ミガキ、その他ロクロナデ		4/36		
183	26	07㉿㉿8B4・No53	SX18	黒色土器	有台碗			8.2		石・長	浅黄橙10YR 8/3	内面ミガキ、底部糸切り→ロクロナデ、その他ロクロナデ	右			
184	27	07㉿㉿8B4・No58+No63+No64	SX17	土師器	有台碗		13.2	7.8	5.0	石・長・砂・礫	浅黄橙10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り→ロクロナデ		8/36		
185	27	07㉿㉿4C19・SX647	SX647	須恵器	無台杯	II		6.2		石・長・チャ	灰N 6/0	ロクロナデ、底部糸切り	右			
186	27	07㉿㉿4C13・SX647	SX647	須恵器	瓶類			7.8		石・長・チャ	灰白5Y 7/1	ロクロナデ、底部ヘラ切り				
187	27	07㉿㉿4B13・SX647	SX647	土師器	鍋	I	31.4			石・長・チャ・砂	にぶい橙5YR 7/4	胴外面カキメ、その他ロクロナデ		3/36		
188	27	07㉿㉿SD104・No1+No2	SX104	須恵器	無台杯	I b	11.4	6.1	3.0	石・長	灰N 6/0	ロクロナデ、底部ヘラ切り	右	16/36		
189	27	07㉿㉿P121	P121	土師器	小碗	I b	10.5	4.1	3.3	石・チャ・砂	にぶい橙7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36		
190	27	07㉿㉿P163	P163	土師器	小碗	I b	10.8	5.2	4.0	石・長・チャ・砂	にぶい橙7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36		
191	27	07㉿㉿P214	P214	土師器	小碗	I b	10.3	4.2	3.0	石・長・チャ・砂	浅黄橙10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36		
192	27	07㉿㉿P256	P256	土師器	小碗	I b	10.9	5.1	3.6	石・長・チャ・砂	にぶい橙5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	14/36		
193	27	07㉿㉿P256	P256	土師器	鉢		18.3	9.0	5.5	石・長・雲	淡赤橙2.5YR 7/4	ロクロナデ		5/36		
194	27	07㉿㉿P319	P319	土師器	小碗	II b	8.8	4.8	3.2	石・長・チャ・砂	黄灰2.5YR 4/1	ロクロナデ、底部糸切り	右	12/36		
195	27	07㉿㉿8B4・P330	P330	土師器	小皿	III a	9.8	4.4	2.2	石・長・チャ・砂	にぶい橙7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	12/36		

別 表

角地田遺跡 土器観察表(7)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考
							口径	底径	器高	含有物	色調				
196	27	07㏍P512	P512	土師器	小椀	I b'	9.8	4.4	3.3	石・長・チャ・砂	灰黄 2.5Y 7/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36	
197	27	07㏍P512	P512	土師器	小椀	I b	10.3	4.6	3.3	石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り		5/36	
198	27	07㏍P519	P519	土師器	小椀	I b	10.9	4.9	3.4	石・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	17/36	
199	27	07㏍P519	P519	土師器	小皿	III a	10.6	6.0	2.4	石・長・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36	
200	27	07㏍P519	P519	土師器	小皿	I	11.1	5.9	2.8	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り		7/36	
201	27	07㏍P519	P519	土師器	有台椀			7.5		石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ			
202	27	07㏍P519	P519	製塩土器			45.8			石・長・チャ・砂	にぶい褐 7.5YR 6/3	外面輪積痕		1/36	
203	27	07㏍P624 + P624・No1	P624	土師器	小椀	I b	11.4	4.7	3.7	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	10/36	
204	27	07㏍P622・No1 + No2	P622	土師器	小椀	I b	10.3	4.8	3.3	石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	7/36	
205	27	07㏍P622	P622	土師器	小皿	I	10.5	4.6	2.3	石・長・チャ・砂	灰黄 2.5Y 6/2	ロクロナデ、底部糸切り		1/36	
206	27	07㏍P622・No5 + No6	P622	土師器	有台椀		14.7	6.8	4.7	石・長・チャ・雲・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ、底部ロクロナデ	右	3/36	
207	27	07㏍P629・No5	P629	土師器	小椀	I b	10.6	4.5	2.8	石・長・チャ・砂	黄灰 2.5Y 6/1	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36	
208	27	07㏍P629 + P629・No2	P629	土師器	小椀	I b	10.0	5.2	3.4	石・長・チャ	褐灰 10YR 5/1	ロクロナデ、底部糸切り	右	3/36	
209	27	07㏍P629 + P629・No1 + No3	P629	土師器	小椀	I b	11.0	5.0	3.2	石・長・チャ・雲	にぶい黄橙 10YR 7/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36	
210	27	07㏍P1002	P827	土師器	無台椀	VI	12.3	5.9	3.9	石・長・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	14/36	
211	27	07㏍P1002	P827	土師器	鉢		36.6			石・長・チャ・砂	灰黄褐 10YR 6/2	ロクロナデ		3/36	内・外面炭化物付着
212	28	07㏍P562	包含層	土師器	小皿	III b	8.7	3.7	2.1	石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	21/36	
213	28	07㏍P9A21・Vc層	包含層	土師器	小皿	III a	9.4	4.5	2.5	石・長・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り		6/36	
214	28	07㏍P7B3	包含層	土師器	小皿	III a	10.2	5.2	2.6	石・長・チャ・礫	にぶい黄橙 10YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	18/36	
215	28	07㏍P11C1・Vc層	包含層	土師器	小椀	I b	9.4	3.8	2.9	石・長・チャ	灰黄褐 10YR 6/3	ロクロナデ、底部糸切り	左	4/36	
216	28	07㏍P5B・Vc層	包含層	土師器	小皿	I	10.8	6.0	2.4	石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り		18/36	
217	28	07㏍P8B1・No1	包含層	土師器	小皿	I	11.2	4.4	2.8	石・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	23/36	
218	28	07㏍P5C6・No1	包含層	土師器	小椀	I b	10.6	5.2	3.2	石・長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	28/36	
219	28	07㏍P6B4・VI層	包含層	土師器	無台椀	IV	12.0	4.8	3.4	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	13/36	
220	28	07㏍P7B・No14	包含層	土師器	無台椀	II a	11.7	7.6	3.8	石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	23/36	
221	28	07㏍P5A25	包含層	土師器	無台椀	III a	13.4	6.0	3.9	石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り		5/36	
222	28	07㏍P6B25	包含層	土師器	無台椀	II b	13.8	6.4	3.8	石・長・チャ・雲・礫	灰白 10YR 8/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	6/36	
223	28	07㏍P6C3・VI層	包含層	土師器	無台椀	III b	16.4	6.8	7.0	石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	3/36	墨書「絵もしくは落書などカ」
224	28	07㏍P5C8・Vc層	包含層	土師器	無台椀		14.8			石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ		1/36	墨書「臣カ」
225	28	07㏍P6B17・VI層	包含層	土師器	無台椀					石・長・チャ・雲	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ			墨書「臣カ」
226	28	07㏍P6B20・Va層	包含層	土師器	無台椀					石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ			墨書「千カ」
227	28	07㏍P7C2・Vc層	包含層	土師器	無台椀			5.4		石・長・チャ・雲・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		墨書「臣カ」
228	28	07㏍P4A	包含層	土師器	無台椀			5.8		石・長・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ			刻書「臣カ」
229	28	07㏍P4C	包含層	土師器	無台椀			5.4		石・長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り			刻書「臣カ」
230	28	07㏍P5B22・Vc層	包含層	土師器	無台椀			5.6		石・チャ・砂	橙 5YR 7/6	ロクロナデ、底部糸切り			刻書「臣カ」
231	28	07㏍P4B20・VI層	包含層	土師器	有台椀					石・長・チャ	にぶい黄橙 10YR 7/2	ロクロナデ			墨書「臣カ」

角地田遺跡 土器観察表(8)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考
							口径	底径	器高	含有物	色調				
232	28	07㉟㉟6A23・Na1・Vc層+6A22	包含層	土師器	有台碗		15.8	9.0	6.0	石・長・チャ・雲・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部ロクロナデ		27/36	
233	28	07㉟㉟5C1・Vc層+5C6・Vc層	包含層	土師器	有台碗		15.2	8.4	5.4	石・長・チャ・砂	浅黄橙 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部ロクロナデ		2/36	
234	28	07㉟㉟6C6・Vc層+6C7・Vc層	包含層	土師器	有台皿	I	12.8	6.7	3.8	石・長・チャ	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り→ロクロナデ	右	16/36	
235	28	07㉟㉟9C13・Vc層	包含層	土師器	有台皿	II	11.9			石・長・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ		6/36	
236	28	07㉟㉟㉟	包含層	土師器	皿		16.6			石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ		3/36	
237	28	07㉟㉟6A	包含層	須恵器	無台杯	I a	13.8	8.0	3.1	石・長	灰 N 6/0	ロクロナデ、底部ヘラ切り		2/36	
238	28	07㉟㉟11B1・Vc層	包含層	須恵器	無台杯	I b	12.2	7.0	2.8	石・長	灰 N 6/0	ロクロナデ、底部ヘラ切り		3/36	墨書匠カ、内面墨付着
239	28	07㉟㉟6A24・VI層+6B4・VI層+6B15・Vc層	包含層	須恵器	無台杯	II		6.6		石・長	灰 N 6/0	ロクロナデ、底部糸切り	右		
240	28	07㉟㉟5B・Vc層+6A24・Vc層+7A21・Vc層+7A22・Vc層	包含層	須恵器	有台杯	I		9.5		石・長・チャ	灰 5Y 5/1	ロクロナデ、底部ヘラ切り	右		
241	28	07㉟㉟6C15・Vc層+7C3・VI層	包含層	須恵器	有台杯	II		6.2		石・長	灰 N 6/0	ロクロナデ、底部糸切り	右		
242	28	07㉟㉟8C10・Vc層	包含層	須恵器	杯蓋		15.9			石・長・チャ・礫	灰 N 6/0	天井部ロクロケズリ、その他ロクロナデ		4/36	
243	28	07㉟㉟6B8・Vc層	包含層	緑釉	碗					石・長	(胎土) 灰 N 6/0	ロクロナデ			内・外面に緑釉
244	28	07㉟㉟6B19・Vc層	包含層	灰釉	有台碗		15.0			石・長	灰白 N 7/0	ロクロナデ		3/36	口縁内面沈線
245	28	07㉟㉟10C14・Vc層	包含層	灰釉	段皿		10.0			石・長	灰白 5Y 8/1	ロクロナデ		1/36	内・外面釉葉ハゲ
246	28	07㉟㉟4B5・Vc層	包含層	灰釉	有台碗			7.6		石・長	灰白 N 8/0	ロクロナデ、底部ロクロケズリ	右		内面墨付着
247	28	07㉟㉟6B15+7B11	包含層	黒色土器	無台碗			7.0		石・長	にぶい黄橙 10YR 7/2	内面ミガキ、底部糸切り、その他ロクロナデ	右		
248	28	07㉟㉟7B18・Vc層	包含層	黒色土器	無台碗			6.6		石・長・チャ	にぶい黄橙 10YR 7/3	胴下部ロクロケズリ、内面ミガキ、その他ロクロナデ			
249	28	07㉟㉟5A23・SD673	包含層	黒色土器	無台碗			5.0		石・長・チャ	淡橙 5YR 8/4	内面ミガキ、底部糸切り、その他ロクロナデ	右		
250	28	07㉟㉟5B4・Vc層	包含層	黒色土器	有台碗			6.4		石・長・チャ	浅黄橙 10YR 8/3	内面ミガキ、底部糸切り→ロクロナデ、その他ロクロナデ	右		
251	28	07㉟㉟5C18・Va層	包含層	両面黒色土器	有台皿		11.6	5.6	2.4	石・長・チャ・砂	黒 N 2/0	内・外面ミガキ		8/36	内・外面敲打痕
252	28	07㉟㉟6A22	包含層	土師器	鉢			10.4		石・長・チャ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右		
253	29	07㉟㉟4C20	包含層	土師器	長甕	III	21.0			石・長・チャ・雲・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ		1/36	
254	29	07㉟㉟12B	包含層	土師器	長甕	II	24.6			石・長・チャ・雲・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ		4/36	
255	29	07㉟㉟11B13・Vc層	包含層	土師器	長甕	II	24.0			石・長・チャ・砂	にぶい褐 7.5YR 6/3	ロクロナデ		3/36	
256	29	07㉟㉟11B4	包含層	土師器	長甕	I	23.4			石・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ		4/36	
257	29	07㉟㉟11B4・Vc層+11B9・Vc層	包含層	土師器	長甕					石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	外面タタキメ、内面あて具痕→ハケメ			
258	29	07㉟㉟11B22	包含層	土師器	長甕					石・長・チャ・礫	にぶい橙 7.5YR 7/3	外面タタキメ、内面あて具痕			
259	29	07㉟㉟11B5	包含層	土師器	小甕		11.5			石・長・チャ・砂	淡赤橙 2.5YR 7/4	ロクロナデ		3/36	
260	29	07㉟㉟5B20・VI層	包含層	土師器	小甕		14.2			石・長・チャ・砂	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ		1/36	
261	29	07㉟㉟11B5・Vc層	包含層	土師器	鍋	I	35.0			石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ		2/36	
262	29	07㉟㉟4B20・Vc層	包含層	土師器	鍋	I	33.6			石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ		2/36	
263	29	07㉟㉟5A21・VI層	包含層	土師器	鍋	I	36.4			石・長・チャ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	胴外面カキメ、その他ロクロナデ		2/36	
264	29	07㉟㉟12B6・Vc層	包含層	土師器	鍋	II a	35.6			石・長・チャ・砂	にぶい橙 7.5YR 7/3	ロクロナデ		3/36	
265	29	07㉟㉟8C2・VI層	包含層	土師器	鍋	I	40.4			石・長・チャ・砂	灰黄褐 10YR 6/2	胴外面カキメ→タタキメ、口縁内面カキメ、その他ロクロナデ		2/36	

別 表

角地田遺跡 土器観察表(9)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考
							口径	底径	器高	含有物	色調				
266	29	07㌦㌦9B7・Vc層+9B11・Vc層+9B13・Vc層	包含層	土師器	鍋					石・長・チャ・砂	にぶい橙7.5YR 7/4	外面タタキメ、内面あて具痕			
267	29	07㌦㌦7A	包含層	土師器	鍋					石・長・チャ・雲・砂	にぶい橙5YR 7/4	外面ロクロナデ→タタキメ、内面あて具痕			
268	30	07㌦㌦8B9・Va層+8B17・Vc層	包含層	須恵器	長頸瓶	I	19.6			石・長	灰N 4/0	ロクロナデ		8/36	
269	30	07㌦㌦9B1・Vc層+9B7・Vc層+9B12・Vc層	包含層	須恵器	長頸瓶	I				石・長	灰N 5/0	ロクロナデ			
270	30	07㌦㌦5C10・VI層	包含層	須恵器	長頸瓶	II				石・長	灰白N 7/0	ロクロナデ			
271	30	07㌦㌦P5・I層+4B20・Vc層+4B24・VI層	包含層	須恵器	環状把手付長頸瓶					石・長・礫	灰N 5/0	ロクロナデ			
272	30	07㌦㌦8A23・Vc層	包含層	須恵器	凸帯付四耳壺					石・長	灰N 6/0	ロクロナデ			
273	30	07㌦㌦7C14・Vc層	包含層	須恵器	甕	I	74.4			石・長・チャ・礫	灰N 6/0	ロクロナデ		2/36	口縁部外面に波状文
274	30	07㌦㌦6B19・SK548+SD554+5C5+5C9・Vc層+5B13・Vc層+6B7・Vc層 他	包含層	須恵器	甕	I	28.2			石・長	灰N 5/0	胴部外面タタキメ、胴部内面あて具痕、その他ロクロナデ		5/36	
275	30	07㌦㌦8B2・Vc層+8B15・Vc層+9B8・Vc層	包含層	須恵器	甕	I	23.0			石・長	灰N 6/0	胴部外面タタキメ、胴部内面あて具痕、その他ロクロナデ		6/36	
276	30	07㌦㌦9B7・Vc層+8A24	包含層	須恵器	甕	I	62.4			石・長	灰N 6/0	ロクロナデ		1/36	
277	30	07㌦㌦8C2・Vc層+9C7・Vc層	包含層	須恵器	甕	II	21.8			石・長・チャ	灰7.5YR 6/1	ロクロナデ		5/36	
278	30	07㌦㌦7A22・Vc層	包含層	須恵器	瓶類					石・長・砂	灰5Y 6/1	ロクロナデ			外面に線刻
279	30	07㌦㌦11B13・Vc層+11C7・Vc層	包含層	須恵器	横瓶					石・長	灰オリーブ5Y 6/2	外面カキメ、内面ロクロナデ			
280	30	07㌦㌦5B11・Vc層	包含層	灰釉	長頸瓶		20.2			石・長	灰白N 7/0	ロクロナデ		2/36	内・外面に灰釉
281	30	07㌦㌦7C12・Vc層+7C13・Vc層	包含層	製塩土器			30.4			石・長・チャ・砂	灰黄褐10YR 6/2	外面輪積痕、内面刷毛調整		1/36	
282	30	07㌦㌦9C4・Vc層	包含層	製塩土器			38.8			石・長・チャ・砂	灰黄褐10YR 5/3	内・外面輪積痕		1/36	
283	30	07㌦㌦9C4・Vc層	包含層	製塩土器						石・長・チャ・砂	灰黄褐10YR 5/2	内・外面輪積痕			
284	30	07㌦㌦9C4・Vc層+10B22	包含層	製塩土器						石・長・チャ・砂	灰黄褐10YR 5/2	内・外面輪積痕			
285	30	07㌦㌦9C4・Vc層	包含層	製塩土器						石・長・チャ・砂	灰黄褐10YR 5/2	内・外面輪積痕			
286	30	07㌦㌦11C8・Vc層	包含層	製塩土器				14.0		石・長・チャ・砂	灰褐7.5YR 4/2	ナデ			底部外面砂付着
287	30	07㌦㌦7C11・Vc層	包含層	製塩土器				23.4		石・長・チャ・砂	浅黄橙10YR 8/3	ナデ			底部外面砂付着
288	31	07㌦㌦SK648+7B5・Vc層+7C5・Vc層+8B1・Vc層+8B5・Vc層+8B11+P265 他	包含層	青磁(越州窯系)	大碗	I類2	17.8	6.9	6.5	長	灰白N 7/0	内・外面釉薬(オリーブ灰 2.5GY 6/1)		5/36	
289	31	07㌦㌦6C3	包含層	白磁	碗	IV	16.4				灰白N 8/0	内・外面釉薬(灰白 10Y 8/1)		2/36	D期
290	31	07㌦㌦T1・No1	包含層	白磁	皿	D群	10.7			長	灰白2.5Y 8/2	内・外面釉薬(灰白 2.5Y 8/2)		2/36	
291	31	07㌦㌦8B16・Vc層	包含層	青磁(龍泉窯系)	碗	I類2かI類4					灰白7.5Y 7/1	内・外面釉薬(灰オリーブ 7.5Y 6/2)			内面に片彫りによる文様
292	31	07㌦㌦表採	包含層	瀬戸焼・美濃焼	天目茶碗	-		4.0		長	灰白2.5Y 8/2	内・外面釉薬(錆釉 黒 10YR 2/1)			大窯4期
293	31	07㌦㌦5A22・Vc層	包含層	珠洲焼	片口鉢					石・長・骨・礫	灰7.5YR 6/1	内・外面ロクロナデ、内面卸し目、内面に研磨痕			V期
294	31	07㌦㌦8B8・Vc層	包含層	珠洲焼	甕			15.0		石・長・骨・砂	灰7.5Y 6/1	外面タタキメ			I期
295	31	07㌦㌦1区表採	包含層	珠洲焼	甕					石・長・骨・砂	灰N 5/0	外面タタキメ			I期

角地田遺跡 土器観察表(10)

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	分類(類)	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考
							口径	底径	器高	含有物	色調				
296	31	07㏲㏲4A23・Vc層	包含層	須恵器	壺	T種				石・長	灰N 4/0	外面タタキメ			I期
297	31	07㏲㏲5C10+6B10・Vc層+7B25・Vc層	包含層	珠洲焼	甕					石・長・チャ・骨	灰N 4/0	外面タタキメ			I期
298	31	07㏲㏲8B4・Vc層	包含層	珠洲焼	甕					石・長・チャ・骨・礫	灰N 5/0	外面タタキメ			I期

角地田遺跡 土製品観察表

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種類	法量(cm・g)					備考
					長さ	最大径	厚さ	孔径	重量	
299	31	07㏲㏲8B12・SD14・1層	SD14	管状土錘		4.9	2.0	1.3	36.1	
300	31	07㏲㏲SD523・No14+7B13・SD523	SD523	管状土錘	6.6	5.2	2.0	1.6	134.4	I類
301	31	07㏲㏲SD523・No14+No15+No17+SD550	SD523	管状土錘	7.0	5.1	2.1	1.5	133.9	I類
302	31	07㏲㏲SD523・No17+7B13・SD523	SD523	管状土錘	7.8	5.5	2.4	1.5	176.0	I類
303	31	07㏲㏲SD523・No5+No7~9	SD523	管状土錘	8.2	5.1	2.0	1.6	165.1	I類
304	31	07㏲㏲SD523・No1	SD523	管状土錘	8.5	5.2	2.2	1.4	122.7	I類
305	31	07㏲㏲8B21・Vc層+8B12+7B16・Vc層+8C9	包含層	管状土錘	7.8	5.1	2.0	1.5	133.9	I類
306	31	07㏲㏲8B12・Va層+9C10・Vc層+4B10・Vc層+4B15	包含層	管状土錘	7.5	4.6	1.9	1.4	96.4	I類
307	31	07㏲㏲6B12・Vc層	包含層	管状土錘	7.6	5.2	1.9	1.5	139.1	I類
308	31	07㏲㏲7A22・Vc層	包含層	管状土錘	8.7	4.0	1.5	1.1	60.8	II類
309	31	07㏲㏲11B14	包含層	管状土錘	5.8	4.9	1.5	2.0	66.8	III類
310	31	07㏲㏲6A24・Vc層	包含層	管状土錘	6.7	2.8	1.1	0.9	46.0	IV類
311	31	07㏲㏲2C20	包含層	管状土錘	6.2	2.7	1.1	0.8	36.1	IV類
312	31	07㏲㏲10B12・Vc層	包含層	管状土錘	5.0	2.1	0.6	0.9	18.3	V類
313	31	07㏲㏲6A24・Vc層	包含層	管状土錘	4.8	1.7	0.7	0.6	13.3	V類
314	31	07㏲㏲6B6・Vc層	包含層	管状土錘	4.6	1.8	0.7	0.5	11.2	V類

角地田遺跡 鉄関連遺物観察表

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種類	法量(cm・g)				磁着反応	備考
					長さ	幅	厚さ	重量		
315	31	07㏲㏲SX656	包含層	腕形鍛冶滓	10.6	8.3	3.7	32.0	有	下面は炉床土の剥離面
316	31	07㏲㏲6B11・Vc層	包含層	腕形鍛冶滓	6.2	6.9	3.1	8.7	有	

角地田遺跡 石器・石製品観察表

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	器種	石材	法量(cm・g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重量	
317	32	07㏲㏲SD522・No23	SD522	砥石	砂岩	25.8	12.1	7.6	3380.0	A類
318	32	07㏲㏲SS2・No18	SS2 (SD853)	砥石	砂岩	41.9	9.9	9.1	3760.0	B類
319	32	07㏲㏲SD576	SD576	砥石	砂岩	8.5	12.4	4.4	61.0	A類
320	32	07㏲㏲5A25・Vc層	包含層	砥石	砂岩	15.0	16.8	7.5	2800.0	A類
321	32	07㏲㏲5B13・Vc層	包含層	砥石	砂岩	17.3	9.2	4.1	980.0	A類
322	32	07㏲㏲5C4・Vc層	包含層	砥石	砂岩	16.5	9.4	4.8	830.0	A類

角地田遺跡 木製品観察表

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	器種	木取	法量(cm・g)			製作痕跡等の所見	備考
						長さ	幅	厚さ		
323	32	07㏲㏲7B24・Vc層	包含層	木筒	板目	13.8	3.3	0.5		墨書「(符録)急々如律X」
324	32	07㏲㏲	包含層	箸	板目	11.5	0.7	0.5	削りだし、上下端に欠損	
325	32	07㏲㏲5B5	包含層	器種不明木製品	柁目	15.7	2.9	1.8	ほぞ状の加工、工端が炭化	
326	32	07㏲㏲SK234	P234	差歯下駄(歯)	柁目	9.2	13.4	1.9	歯の上端にほぞ状の加工	
327	32	07㏲㏲6B15・Va層	包含層	差歯下駄(台)	柁目	7.8	7.3	1.2	ほぞ孔が2孔、台の後歯付近まで欠損	
328	32	07㏲㏲5B4・Vc層	包含層	横櫛	柁目	3.3	4.0	1.1	黒色漆塗り、背が馬の背状となる	
329	32	07㏲㏲8C1・VI層	包含層	綴じ皮			1.6		曲物の留具	
330	32	07㏲㏲8C1・V層	包含層	綴じ皮			1.5		端部欠損、曲物の留具	
331	33	07㏲㏲P687	P687	柱根	芯外し	39.4	12.9	10.8	分割材、下端に加工痕	
332	33	07㏲㏲P688	P688	柱根	芯外し	55.2	12.7	10.0	分割材、下端に加工痕	
333	33	07㏲㏲P809	P809	柱根	芯外し	51.1	15.0	10.8	分割材、下端に加工痕	
334	33	07㏲㏲P638	P638	柱根	芯外し	16.7	14.8	7.1	分割材	
335	33	07㏲㏲P705	P705	柱根	芯外し	27.7	7.8	7.5	分割材、下端に加工痕	
336	33	07㏲㏲P843	P843	柱根	芯外し	41.2	11.0	6.9	分割材、下端に加工痕	
337	33	07㏲㏲杭13	杭13	杭	芯持ち	72.0	7.7	4.1	丸木、下端に加工痕	
338	33	07㏲㏲杭18	杭18	杭	芯持ち	67.2	4.9	3.9	丸木、下端に加工痕	
339	33	07㏲㏲杭23	杭23	杭	芯持ち	58.5	4.9	3.6	分割材、下端に加工痕	
340	33	07㏲㏲杭24	杭24	杭	芯持ち	54.8	6.7	3.2	半裁木、下端に加工痕	
341	33	07㏲㏲杭28	杭28	杭	芯持ち	67.9	7.2	3.2	半裁木、下端に加工痕	

別 表

平遺跡 土器類観察表

報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	種別	器種	法量(cm)			胎土		調整等の所見	回転方向	口縁部遺存率	備考
						口径	底径	器高	含有物	色調				
1	34	07平101区Ⅲa	包含層	須恵器	杯類	12.2			石・雲・白	灰白 5Y 7/2	ロクロナデ		2/36	
2	34	07平102区⑧Ⅲb	包含層	須恵器	無台杯	11.9	6.9	3.2	石・雲・白	灰白 7/0	ロクロナデ	右	11/36	小泊産
3	34	07平102区⑤Ⅲb	包含層	須恵器	無台杯	11.4	6.0	2.9	石・雲・礫	灰白 N 6/0	ロクロナデ	左	3/36	小泊産
4	34	07平102区⑧Ⅲb	包含層	土師器	無台碗	12.4	6.0	4.1	石・雲・礫	灰白 7.5Y 7/2	ロクロナデ、底部糸切り		5/36	
5	34	07平102区⑧Ⅲb	包含層	土師器	無台碗		5.4		石・長・雲	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ			
6	34	07平102区⑤Ⅲb	包含層	須恵器	甕	27.0			礫・石	灰白 N 7/0	ロクロナデ		2/36	
7	34	07平102区川④	川	須恵器	長頸瓶		7.5		石・礫	灰白 N 7/0	ロクロナデ、底部糸切り	右		
8	34	07平102区⑧Ⅲb	包含層	土師器	甕	38.0			石・雲	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ		1/36	
9	34	07平102区⑥Ⅲb	包含層	土師器	甕	33.0			雲・礫	にぶい黄橙 10YR 7/2	ロクロナデ		2/36	
10	34	07平102区⑥Ⅲb	包含層	土師器	甕	28.4			石・礫	にぶい褐 7.5YR 6/3	胴部外面ハケメ		2/36	古墳時代
13	34	07平103区 I b	攪乱	須恵器	甕				石	灰白 N 7/0	外面格子タタキ、内面タタキ			
14	34	07平103区 II	攪乱	須恵器	無台杯		6.0		石・礫	灰白 5Y 7/2	ロクロナデ、底部糸切り			
15	34	07平103区 I b	攪乱	磁器	碗		4.8			灰白 N 8/0		右		伊万里焼被熱
16	34	07平104区Ⅲc	包含層	土師器	無台碗	11.9	6.7	3.6	石・雲・礫	にぶい橙 5YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り		22/36	12C
17	34	07平104区Ⅲc	包含層	須恵器	無台杯		9.0		石・雲	灰白 N 5/0	ロクロナデ			小泊産
18	34	07平104区Ⅲc	包含層	須恵器	壺				石・雲・長	灰白 N 7/0	ロクロナデ			
19	34	07平104区Ⅲc	包含層	須恵器	甕				石・長	灰白 N 6/0	ロクロナデ			
20	34	07平104区Ⅲc	包含層	須恵器	甕	30.0			石・長・礫	灰白 5Y 7/2	外面格子タタキ、内面青波文タタキ		3/36	
21	34	07平104区Ⅲc	包含層	須恵器	甕				石・長・礫	灰白 5Y 7/2	外面2条の波状文			
22	34	07平104区Ⅲc	包含層	須恵器	甕				長	灰白 N 7/0	内外面タタキ			
23	34	07平104区Ⅲc	包含層	土師器	甕		6.4		石・長	にぶい黄橙 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り			中世
24	34	07平104区Ⅲc	包含層	土師器	甕				石・長・礫	灰黄褐 10YR 6/2	外面タタキ、内面ハケメ			
25	34	07平104区Ⅲc	包含層	土師器	製塩土器	39.0			石・長・礫	にぶい橙 7.5YR 7/4	外面輪積痕		1/36	
26	34	07平104区カヲ	攪乱	陶器	壺	11.8			石・長	浅黄 7.5Y 7/3	ロクロナデ、内・外面鉄釉		4/36	越中瀬戸16c末
27	34	07平104区 II a	攪乱	陶器	壺		10.6		石・長・礫	浅黄 7.5Y 7/3	底部糸切り、外面鉄釉			越中瀬戸16c末
28	34	07平104区 II a	攪乱	磁器	碗		3.6			灰白 N 8/0		右		伊万里焼
29	34	07平105区 IV	包含層	須恵器	杯	12.8			石	灰白 N 6/0	ロクロナデ		3/36	
30	34	07平105区 V	包含層	土師器	甕	30.0			石・長・礫	浅黄 2.5Y 7/3	ロクロナデ		2/36	
31	34	07平105区 V	包含層	土師器	甕		4.0		石・礫	にぶい黄 2.5Y 6/3				古墳時代
32	34	07平105区 V	包含層	土師器	甕				長	にぶい黄橙 10YR 7/4	内・外面ハケメ			古墳時代
33	34	07平105区 V	包含層	土師器	甕				礫・石	灰褐 7.5YR 6/2	内外面カキメ、外面胴部タタキ			

平遺跡 木製品観察表

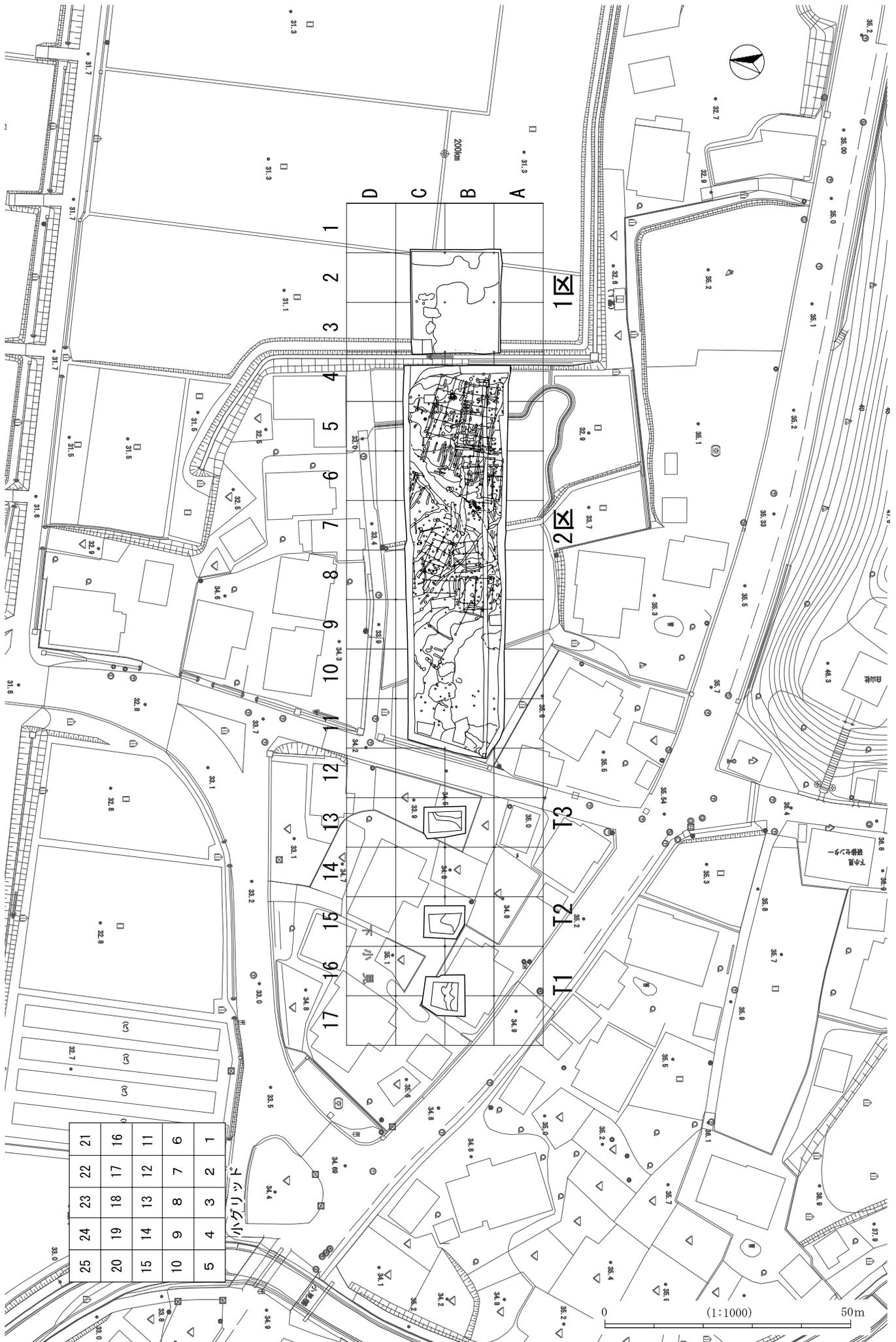
報告書No	図版(挿図)	注記No	出土地点	器種	木取り	法量(cm・g)				製作痕跡等の所見	備考
						長さ・口径	幅	厚さ・底径	重量		
11	34	07平102区川⑧	川	碗	板目	15.5		8.2		ロクロ左回転	内・外面黒漆塗
12	34	07平102区川⑤	川	糸巻	板目	24.0	2.6	2.2		両端細身	ほぞ穴先端にくぼみ
34	34	07平105区Ⅲ	包含層	杓子	板目	13.5	3.4	0.5		削りだし、身の部分欠損	
35	34	07平105区Ⅲ	包含層	杓子	柾目	25.2	4.5	0.7		削りだし、身の部分欠損	身の先端部焦げ

図 版

凡例

- 1 土器の断面は、須恵器は塗りつぶし、施釉陶器はアミをかけて示した。それ以外は全て白抜きとした。
- 2 土器の付着物などは、黒色処理は 、炭化物付着範囲は 、墨痕は 、黒色漆は  で示した。
- 3 鉄関連遺物の炉床粘土は、  で示した。
- 4 石製品の砥面は 、炭化部分は  で示した。
- 5 木製品の黒色漆 、炭化部分は  で示した。

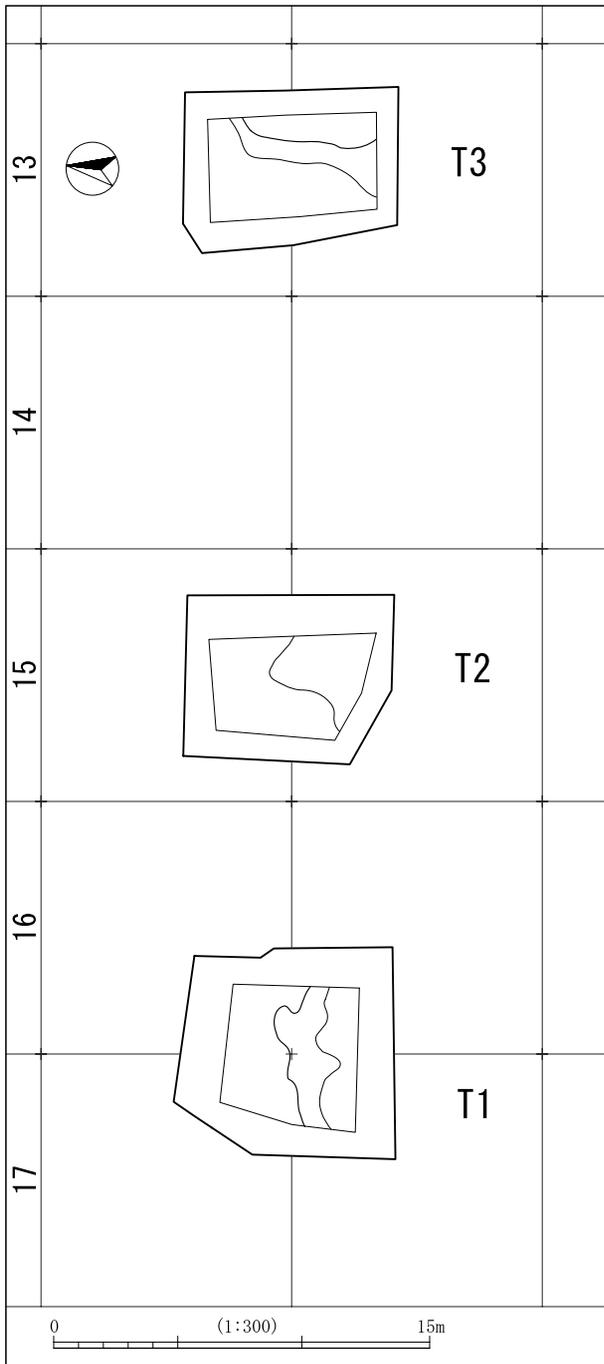
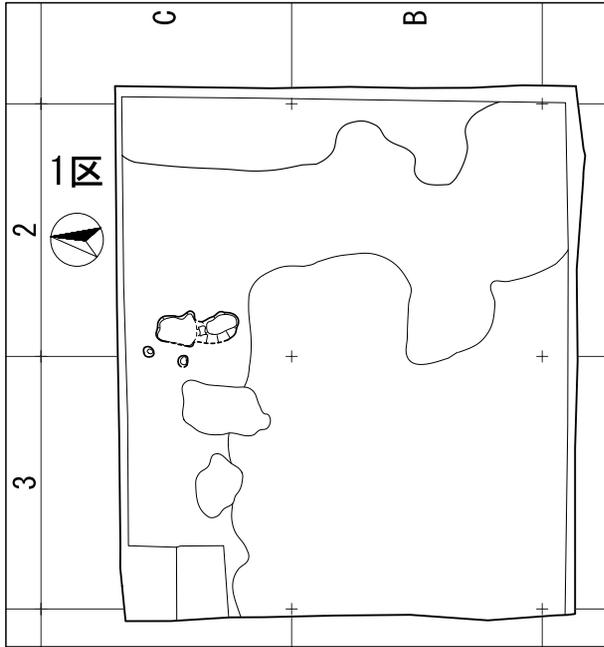


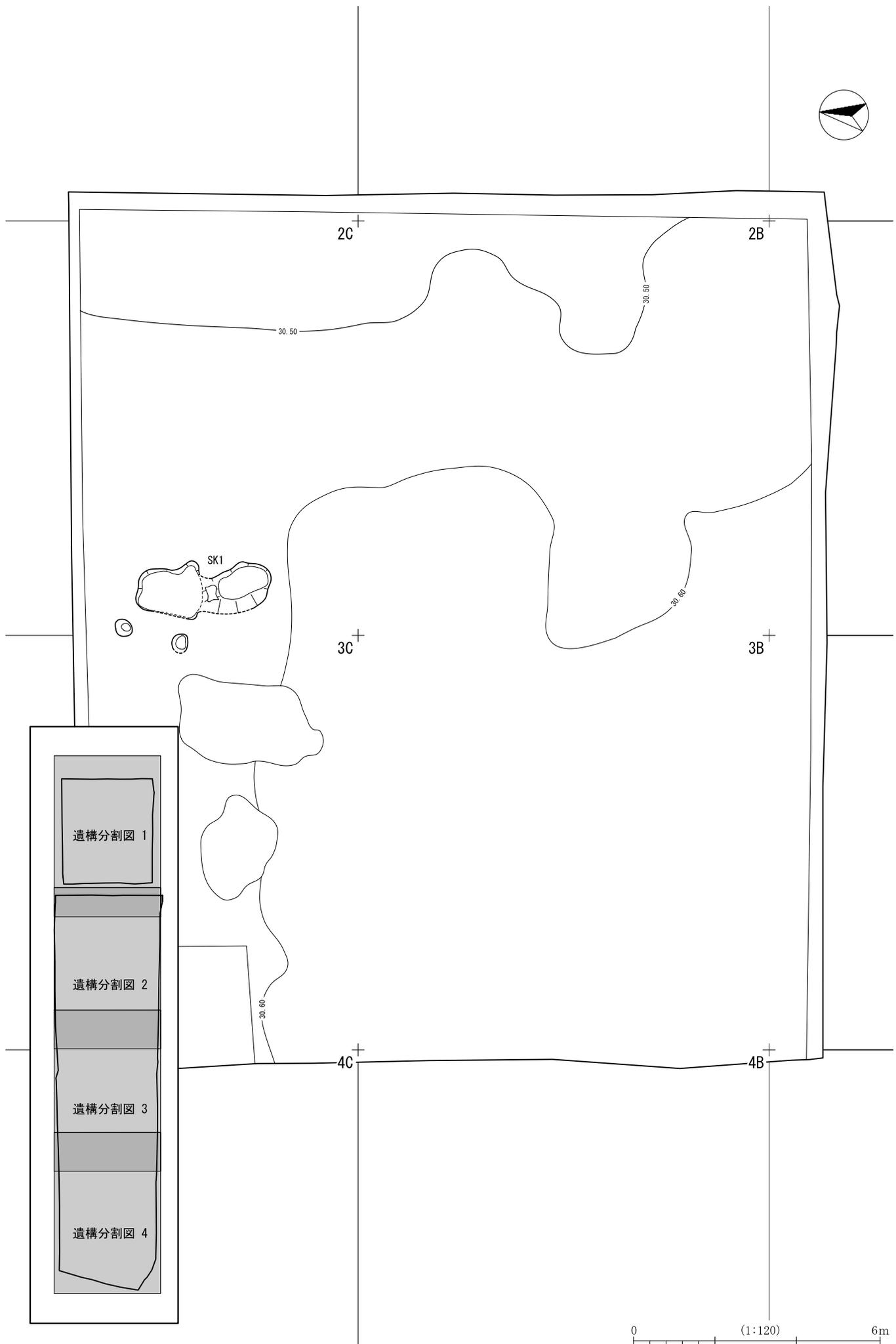


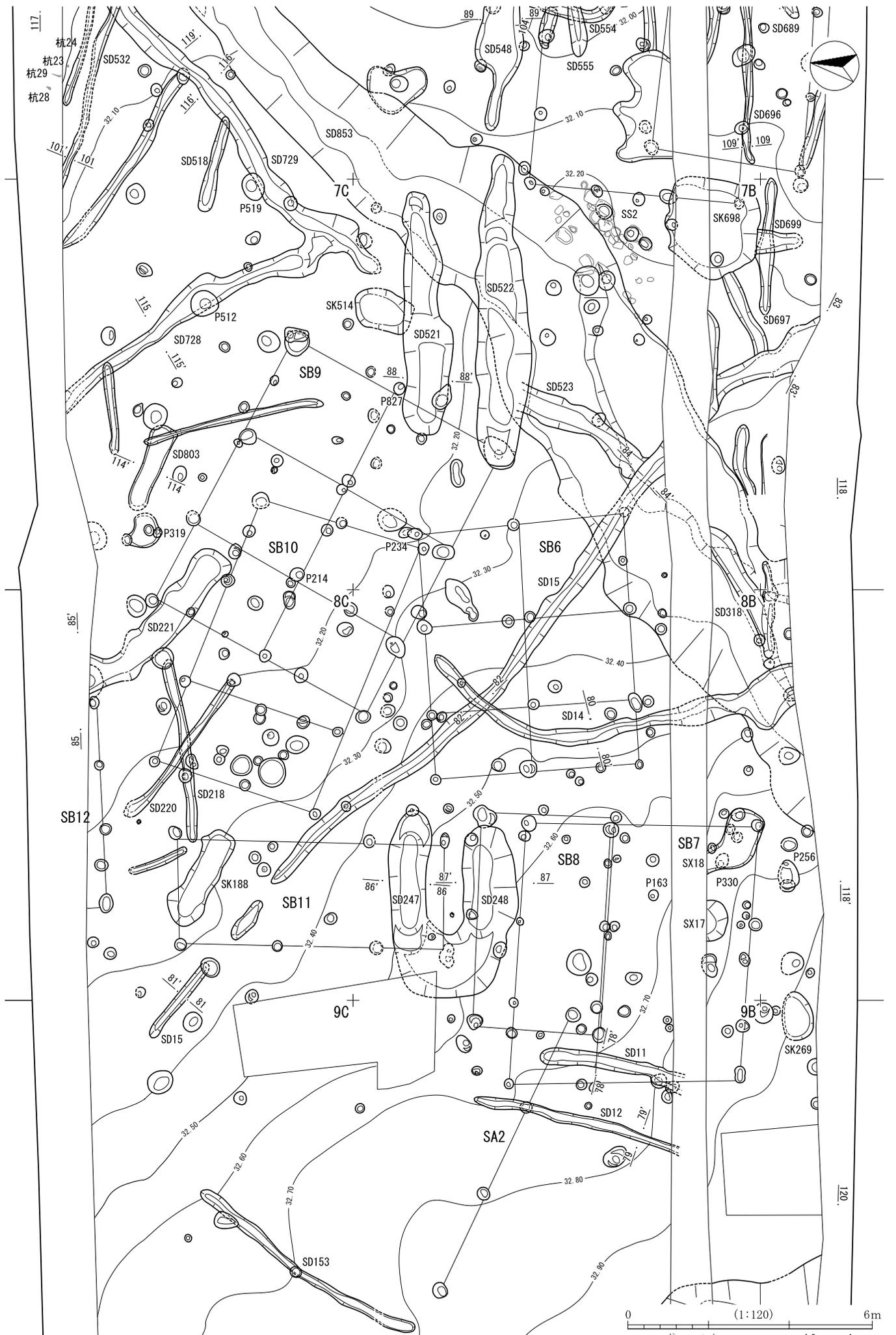
25	24	23	22	21
20	19	18	17	16
15	14	13	12	11
10	9	8	7	6
5	4	3	2	1

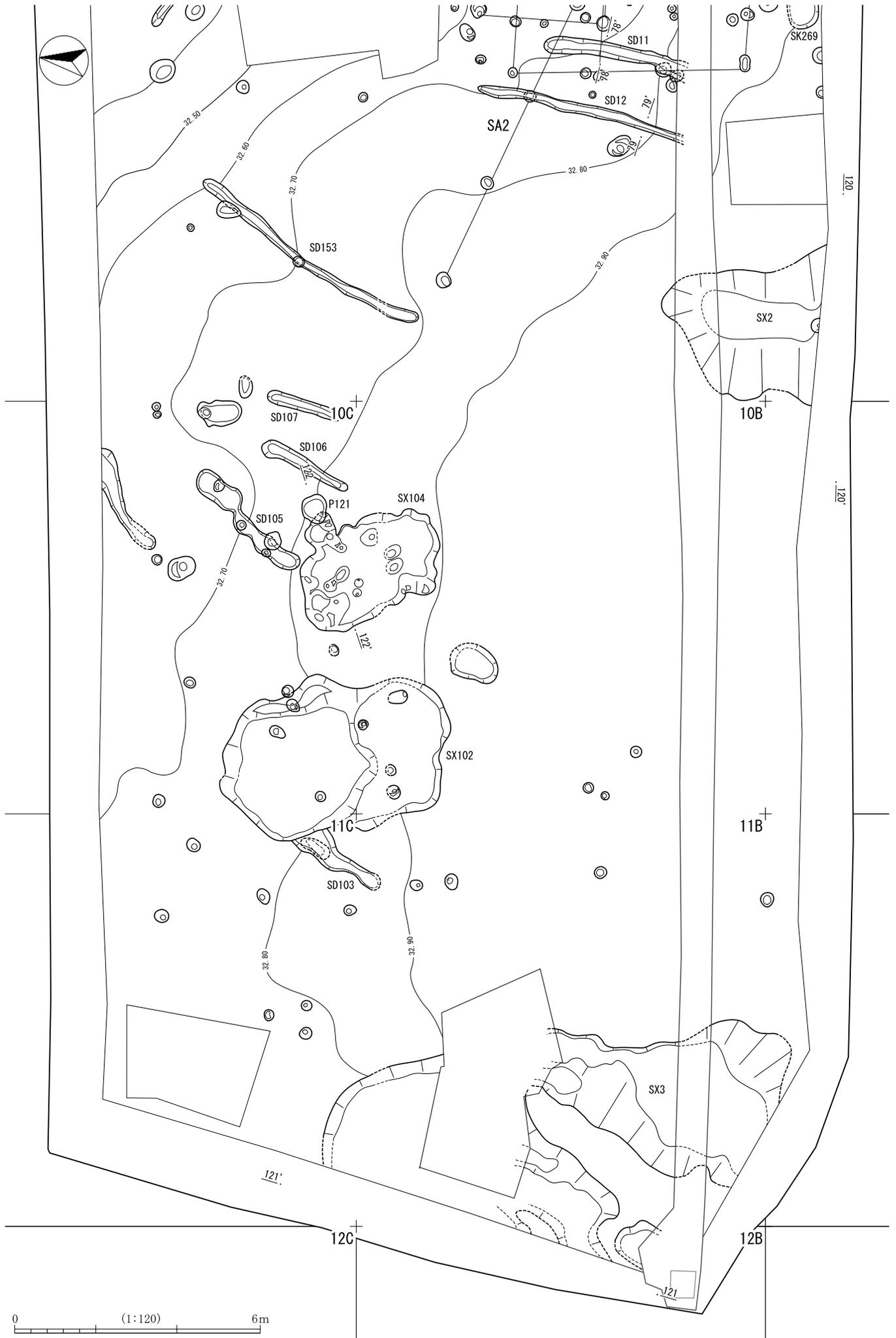
小ナリグット

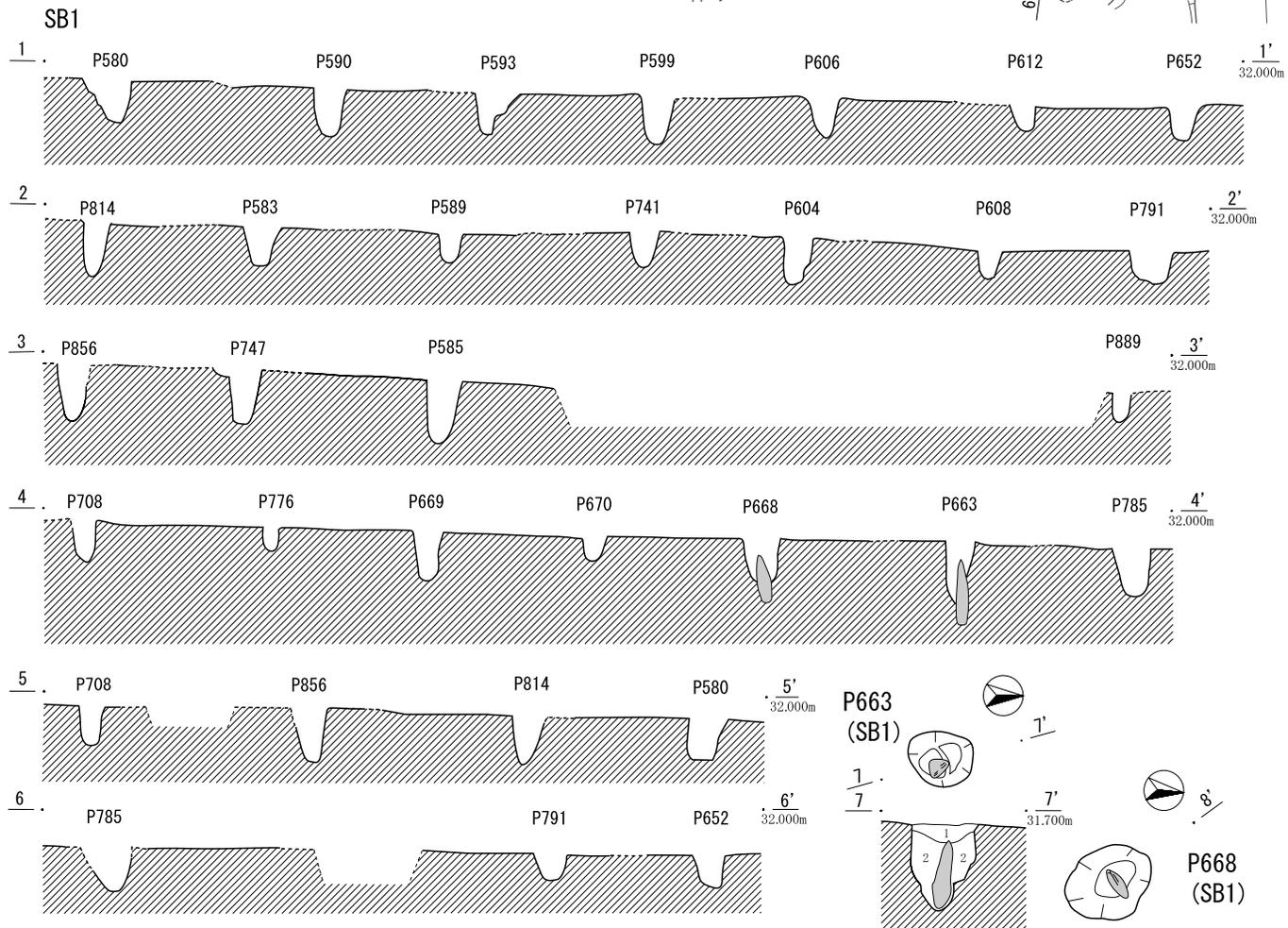
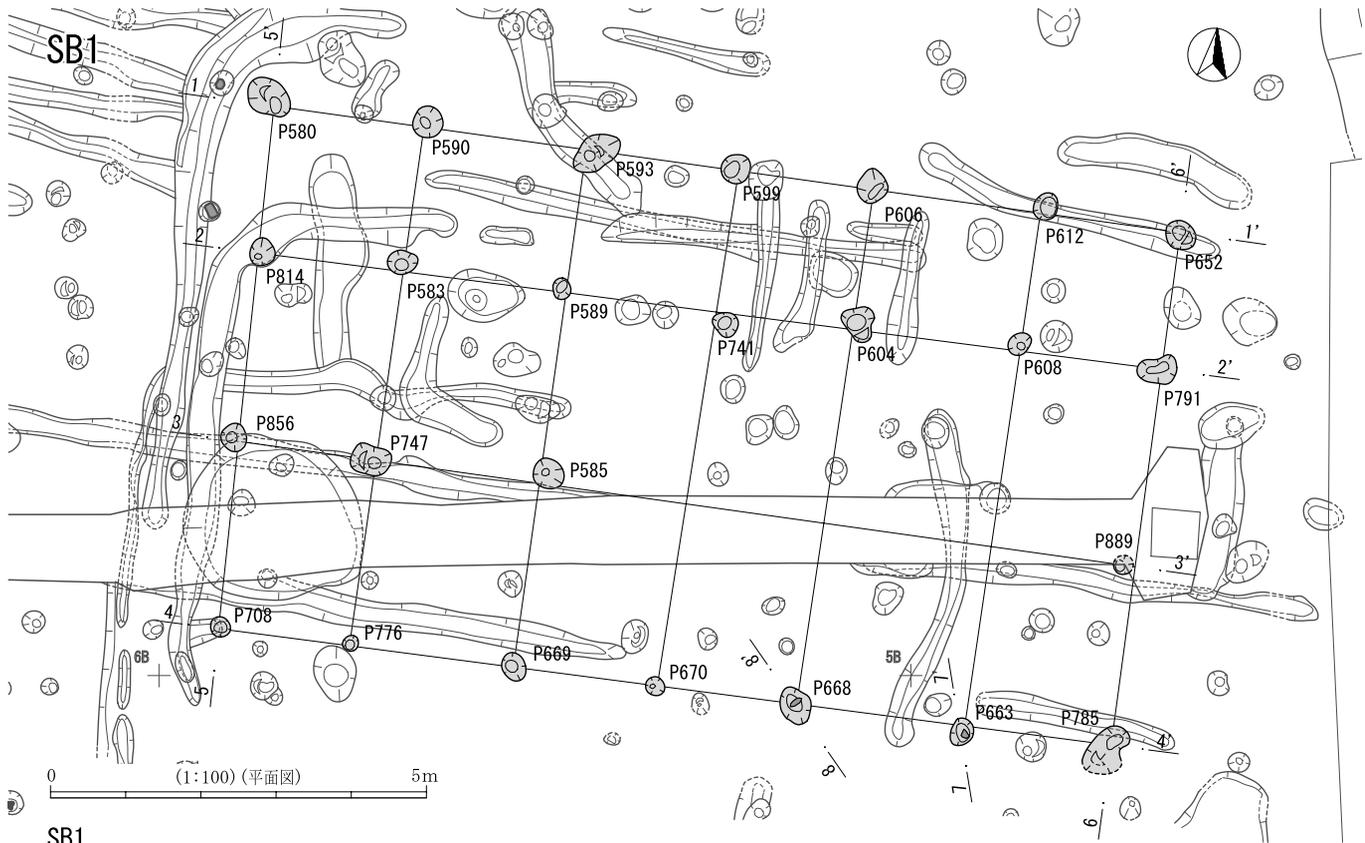
(1:1000) 50m



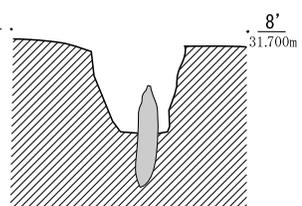
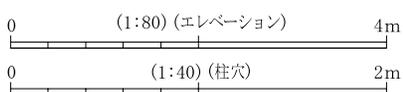


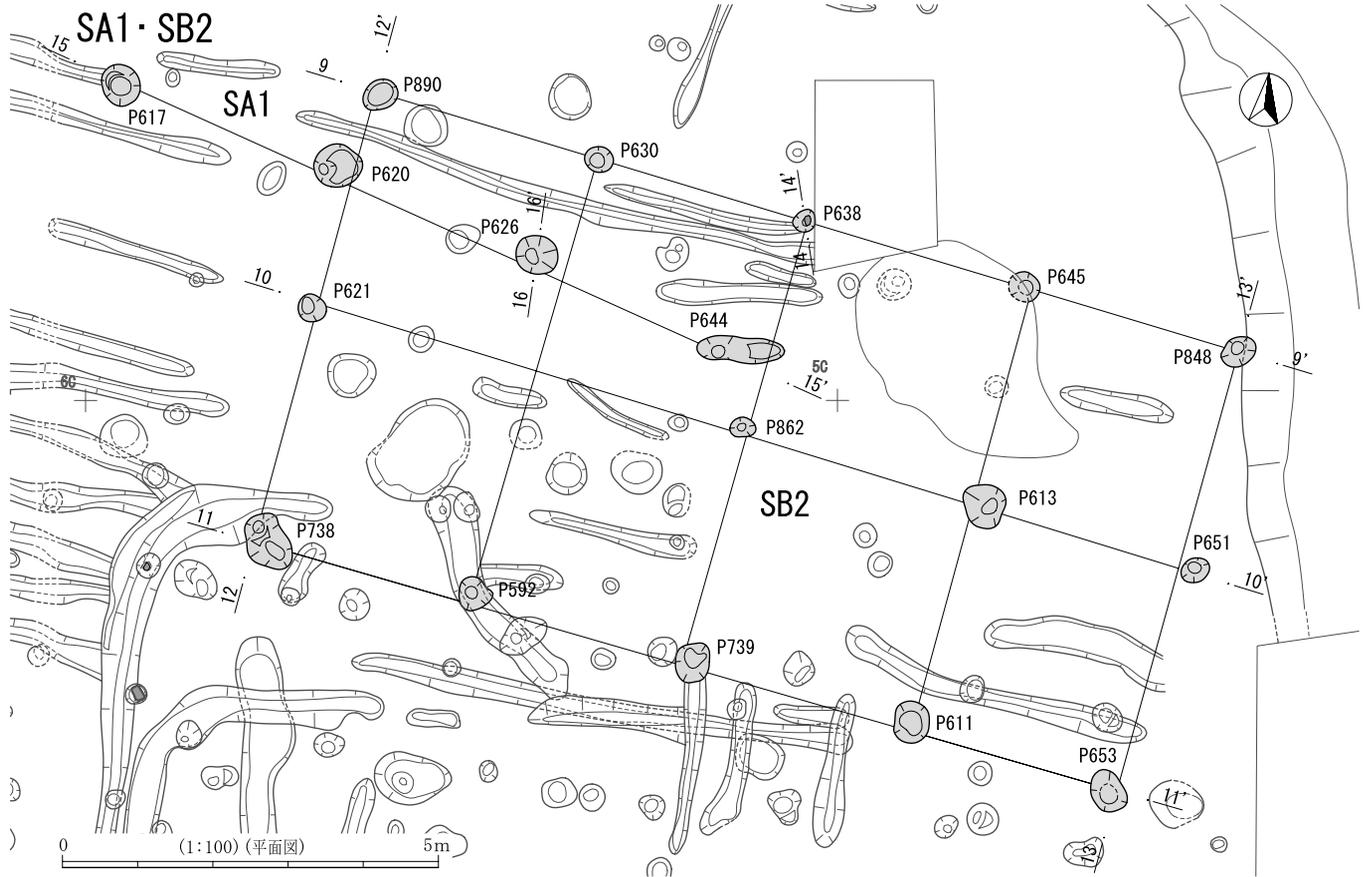




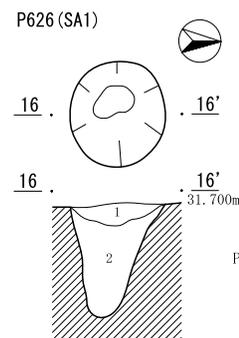
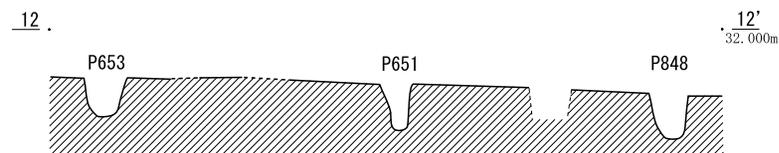
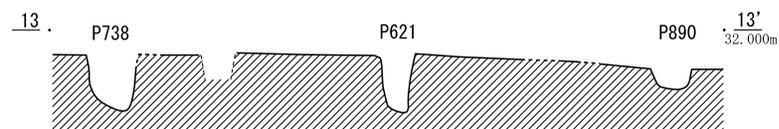
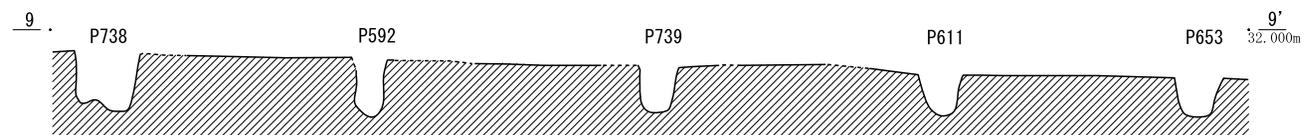
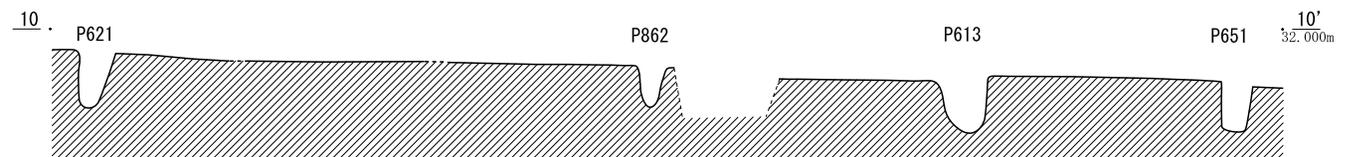
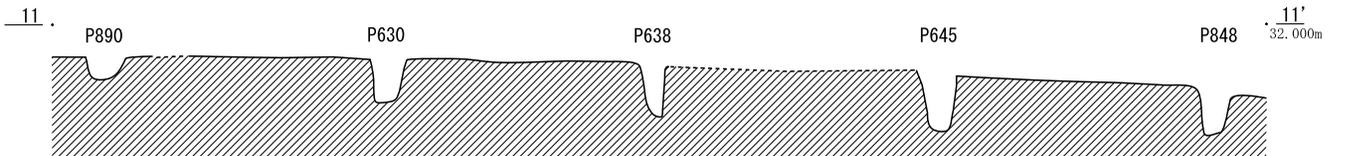


P663
 1 暗オリーブ灰色土(2.5Y3/1)
 粘質土
 2 暗緑灰色土(7.5GY3/1)
 粘質土



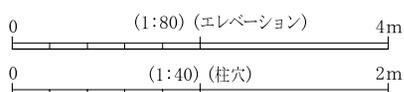
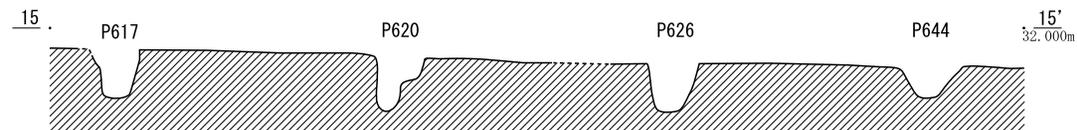


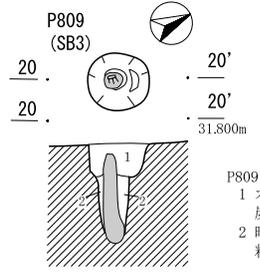
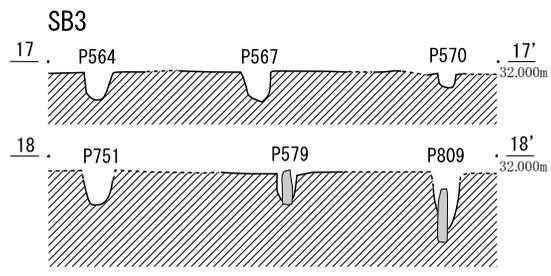
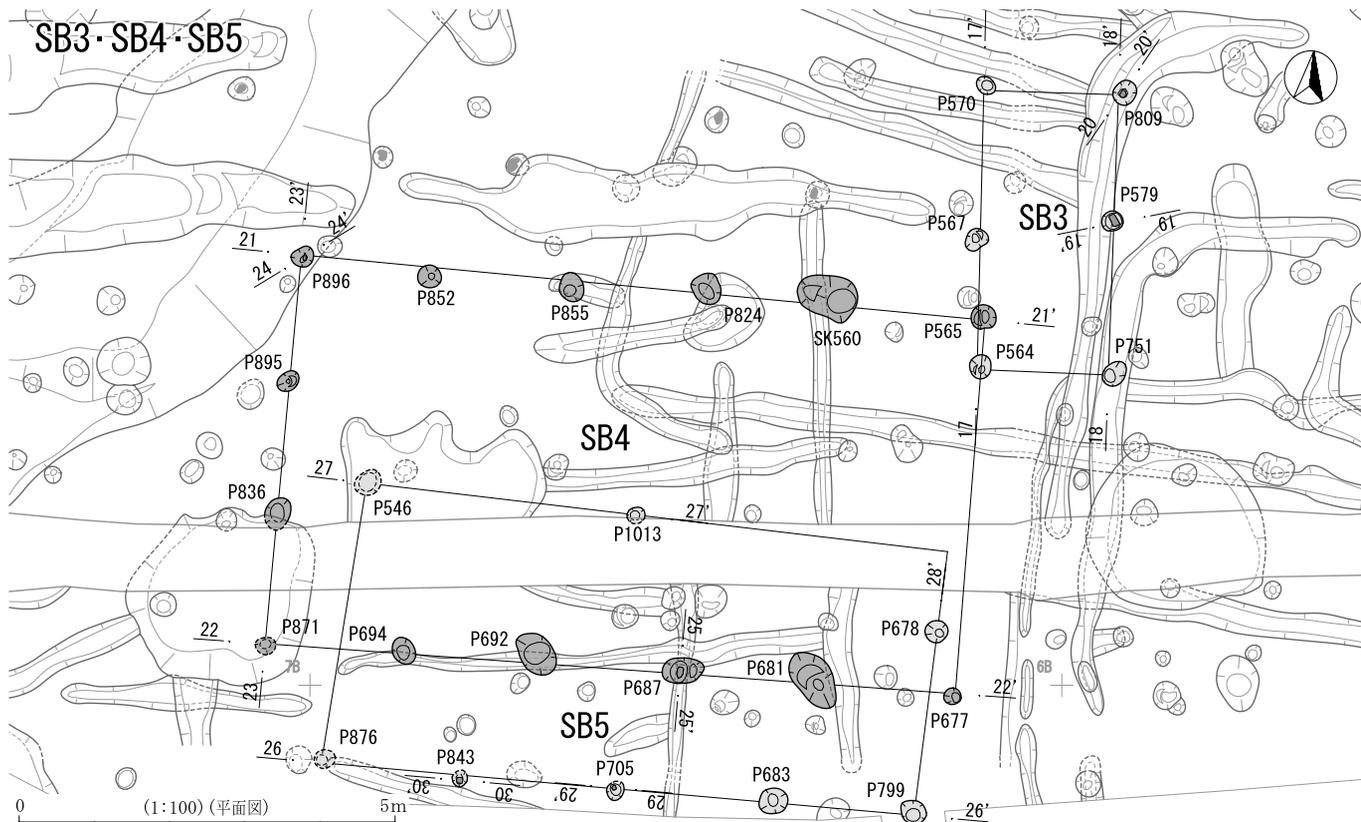
SB2



- P626
- 1 オリーブ黒色土 (5Y3/1) 粘質土 炭化物を多量に含む
 - 2 オリーブ黒色土 (10Y3/1) 粘質土 炭化物を少量含む

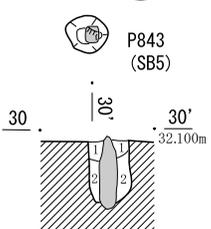
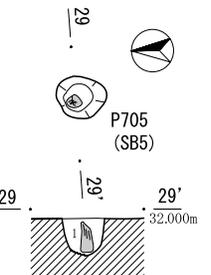
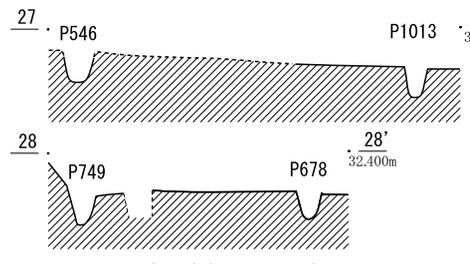
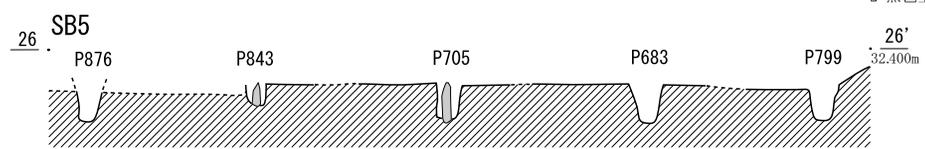
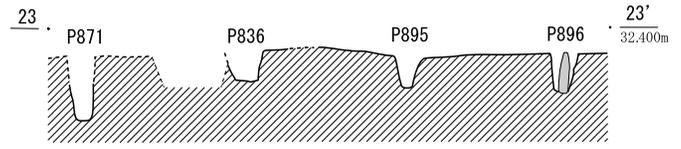
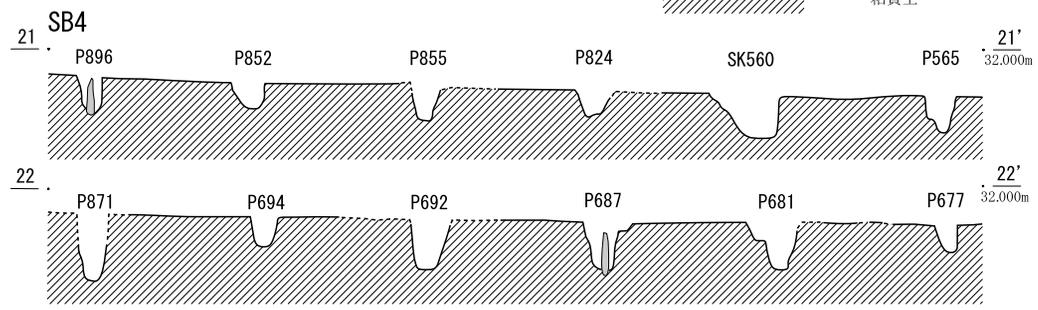
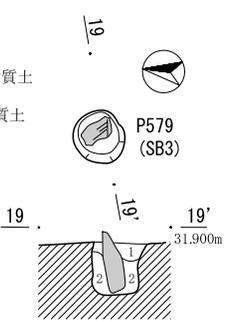
SA1





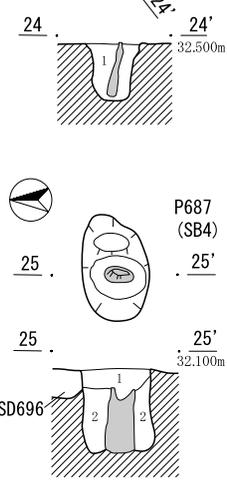
P579
1 オリーブ黒色土(5Y3/2) 粘質土
炭化物を少量含む
2 暗緑灰色土(7.5GY4/1) 粘質土

P809
1 オリーブ黒色土(10Y3/1) 粘質土
炭化物を微量含む
2 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1) 粘質土



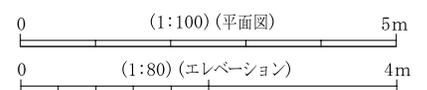
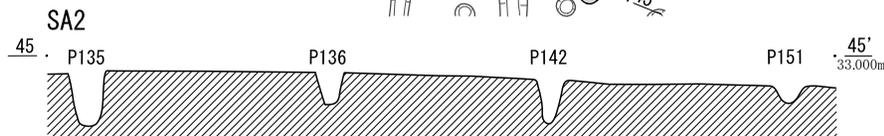
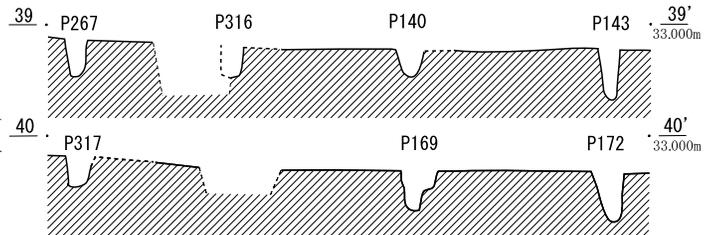
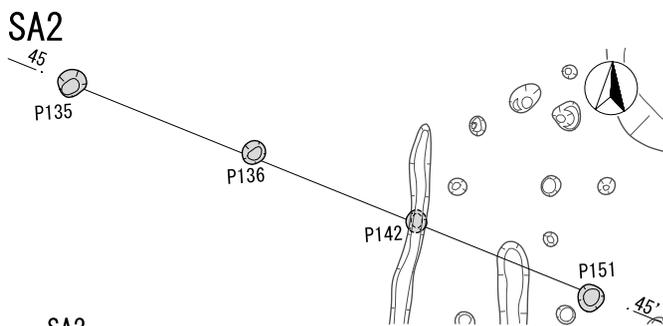
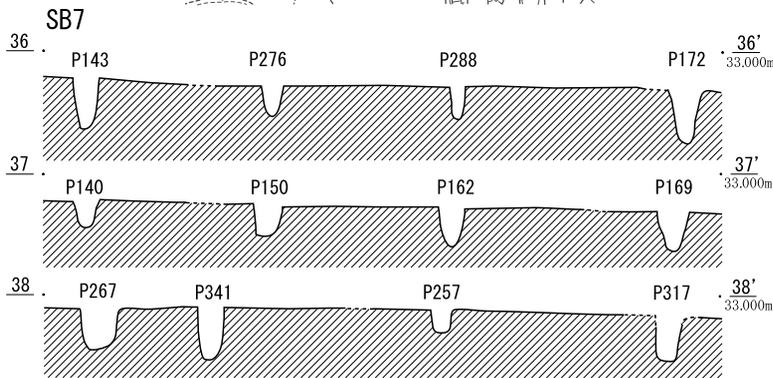
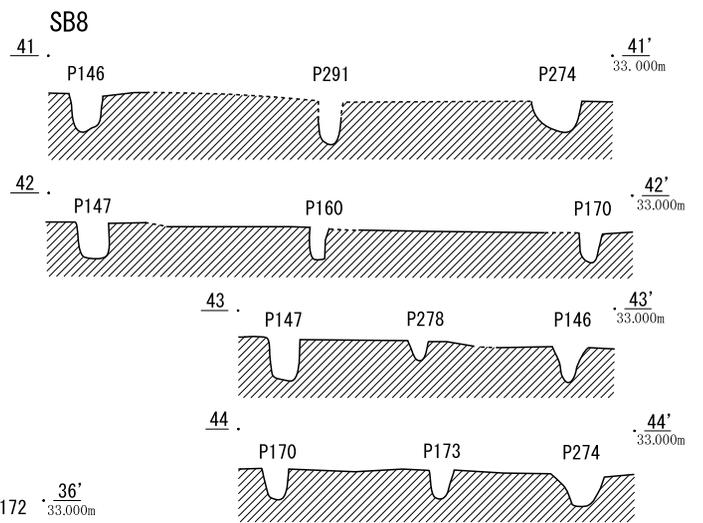
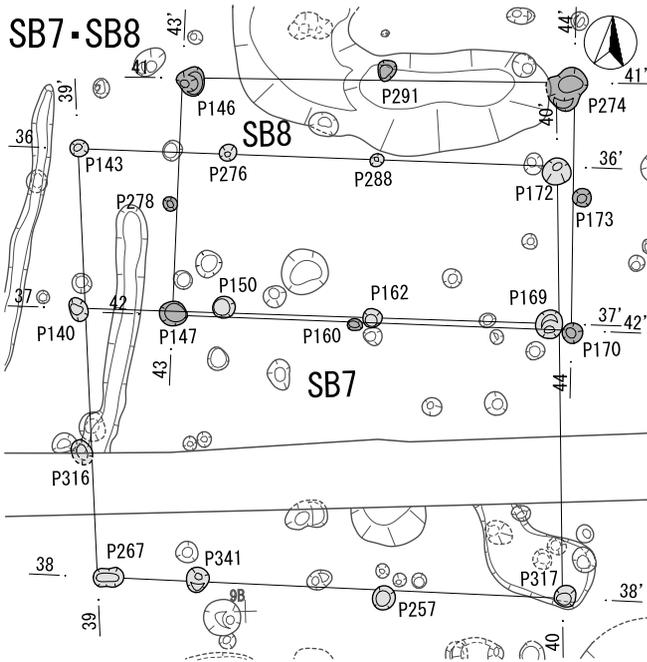
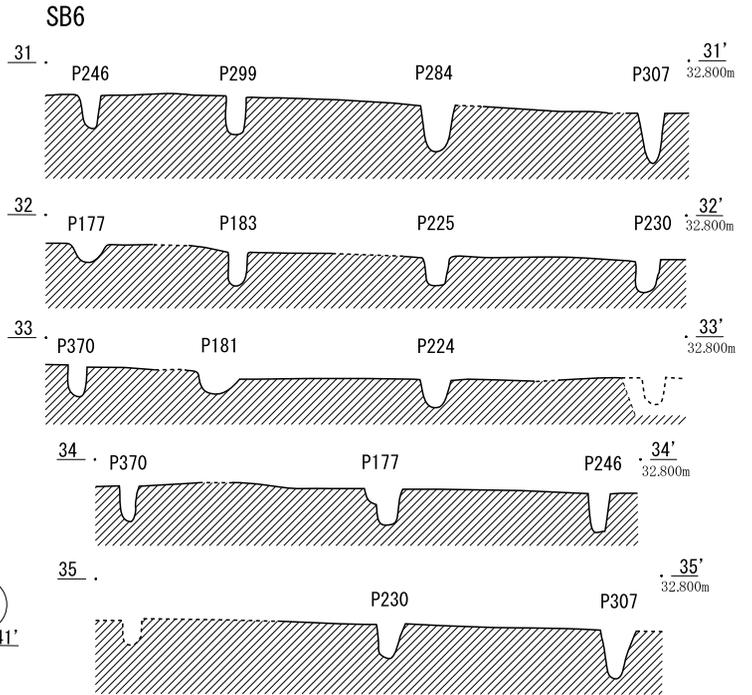
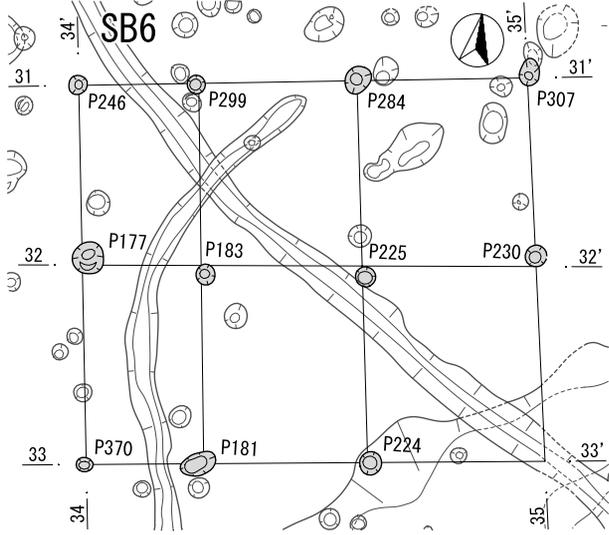
P705
1 オリーブ黒色土(7.5Y3/1) 粘質土

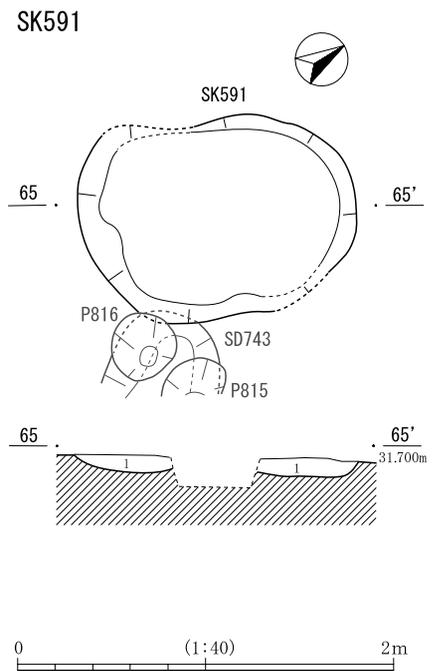
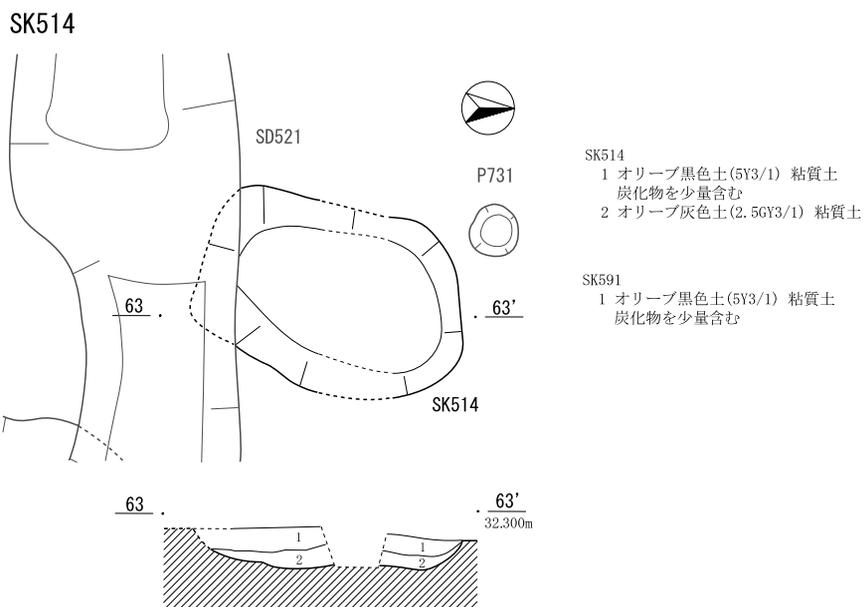
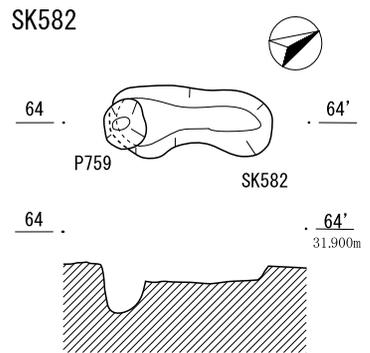
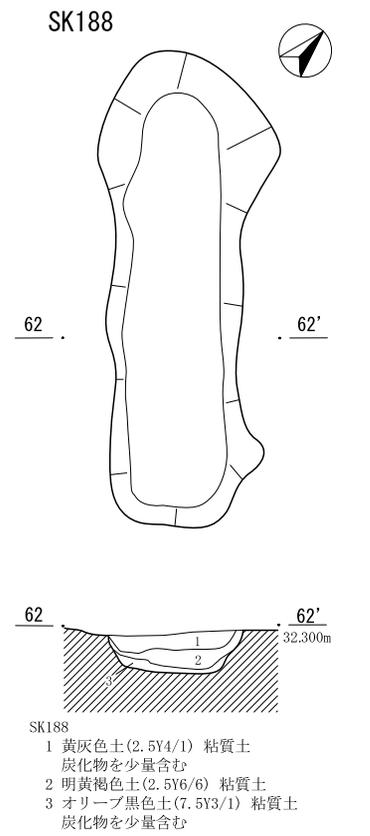
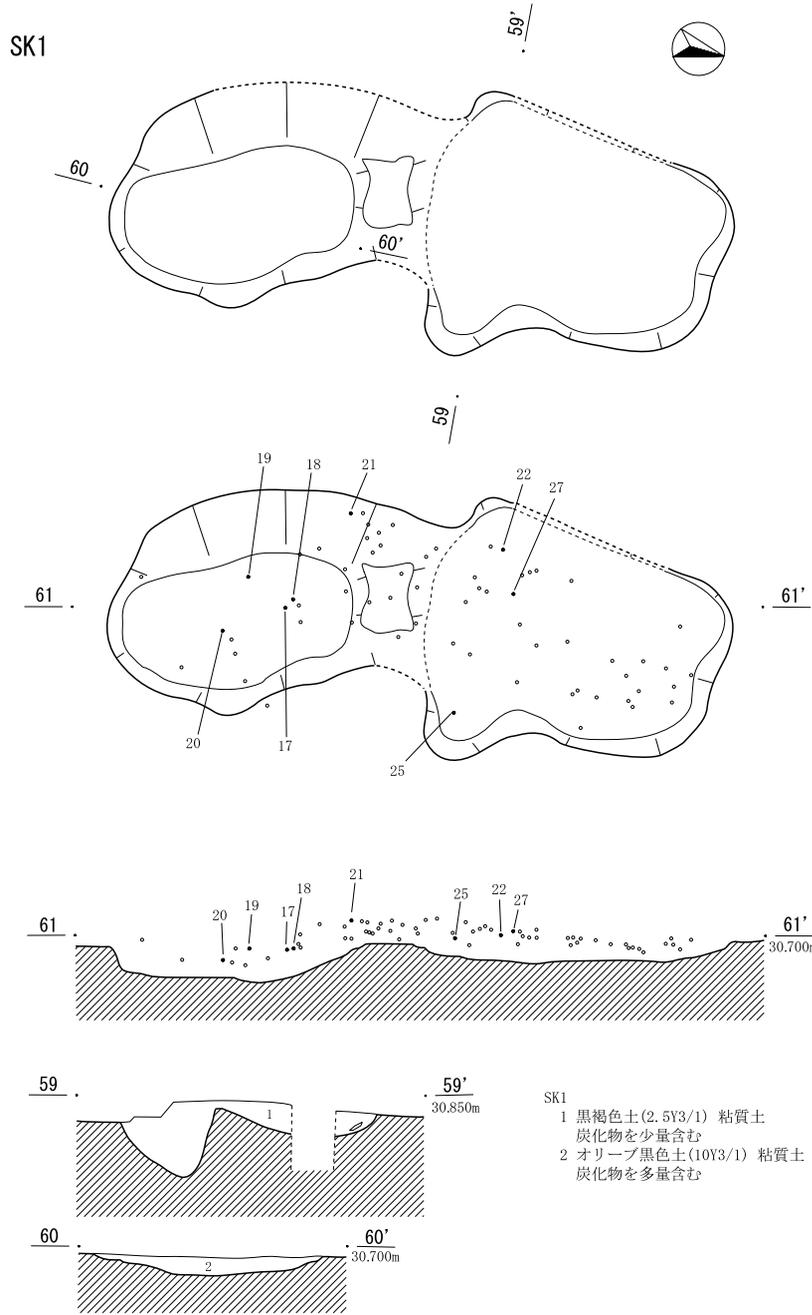
P843
1 オリーブ黒色土(10Y3/1) 粘質土
2 暗オリーブ灰色土(5GY4/1) 粘質土



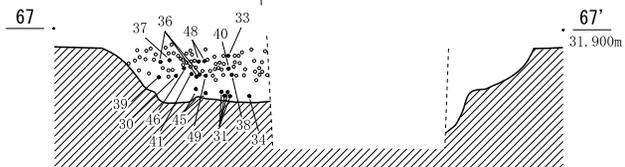
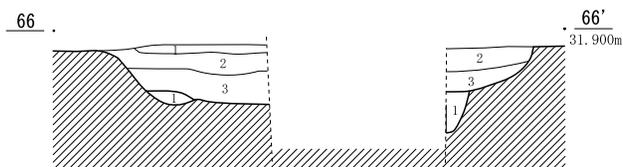
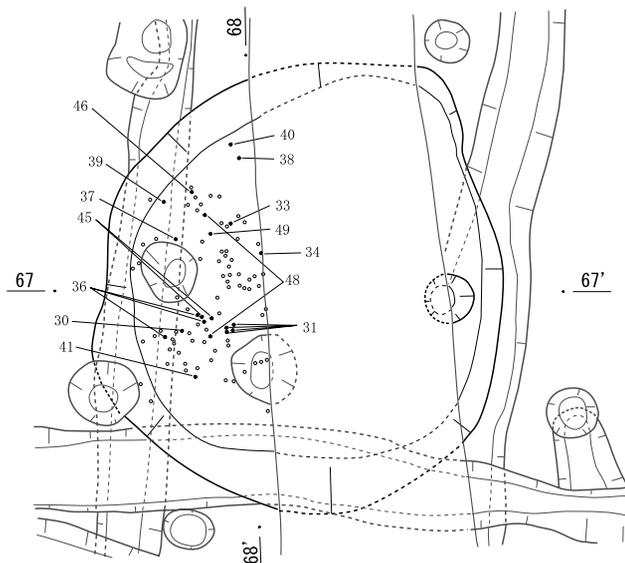
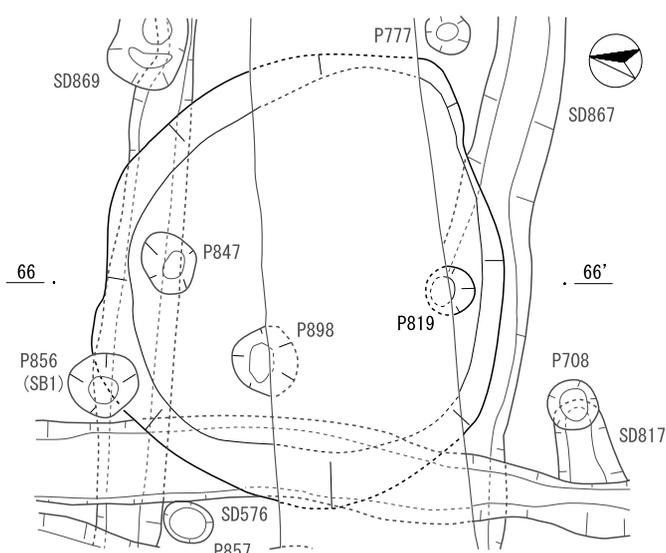
(1:80) (エレベーション) 4m

(1:40) (柱穴) 2m





SK577・P819



SK577

- 1 灰色土 (7.5Y5/1) 粘質土
- 2 オリーブ黒色土 (7.5Y3/1) 粘質土
炭化物を少量含む
- 3 オリーブ黒色土 (5Y3/1) 粘質土
炭化物を多量含む

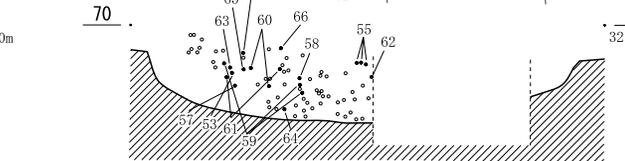
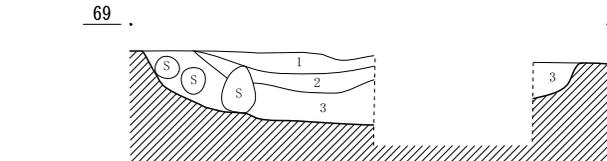
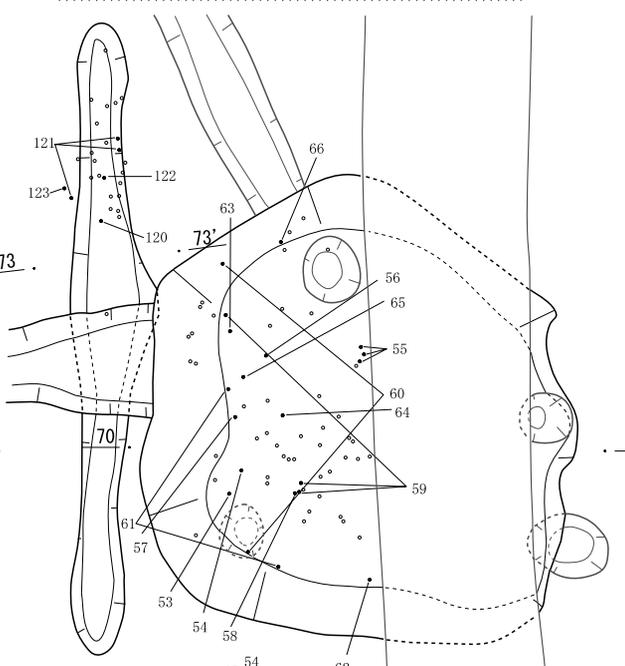
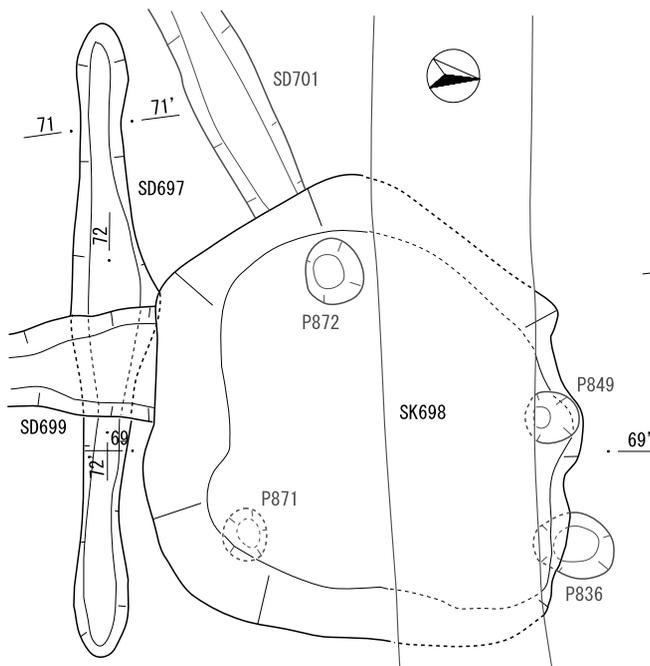
P819

- 1 黒色土 (5Y2/1) 粘質土
炭化物を多量含む

P847

- 1 オリーブ黒色土 (7.5Y2/1) 粘質土
炭化物を少量含む

SK698・SD697・SD699



SD697

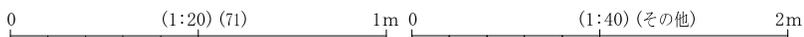
- 1 暗オリーブ灰色土 (5GY4/1) 粘質土
炭化物を微量含む

SD699

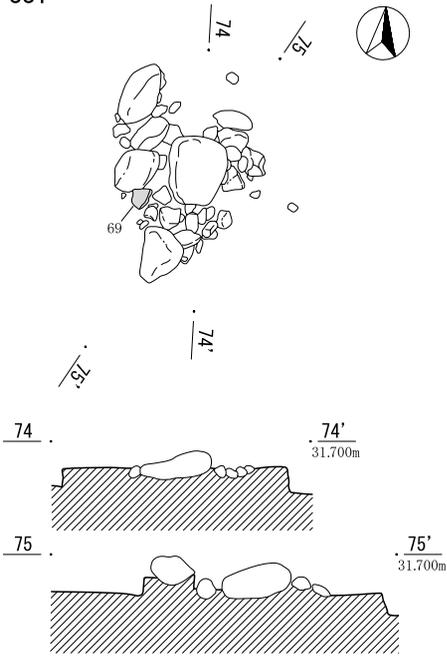
- 1 オリーブ黒色土 (10YR3/1) 粘質土
炭化物を微量含む

SK698

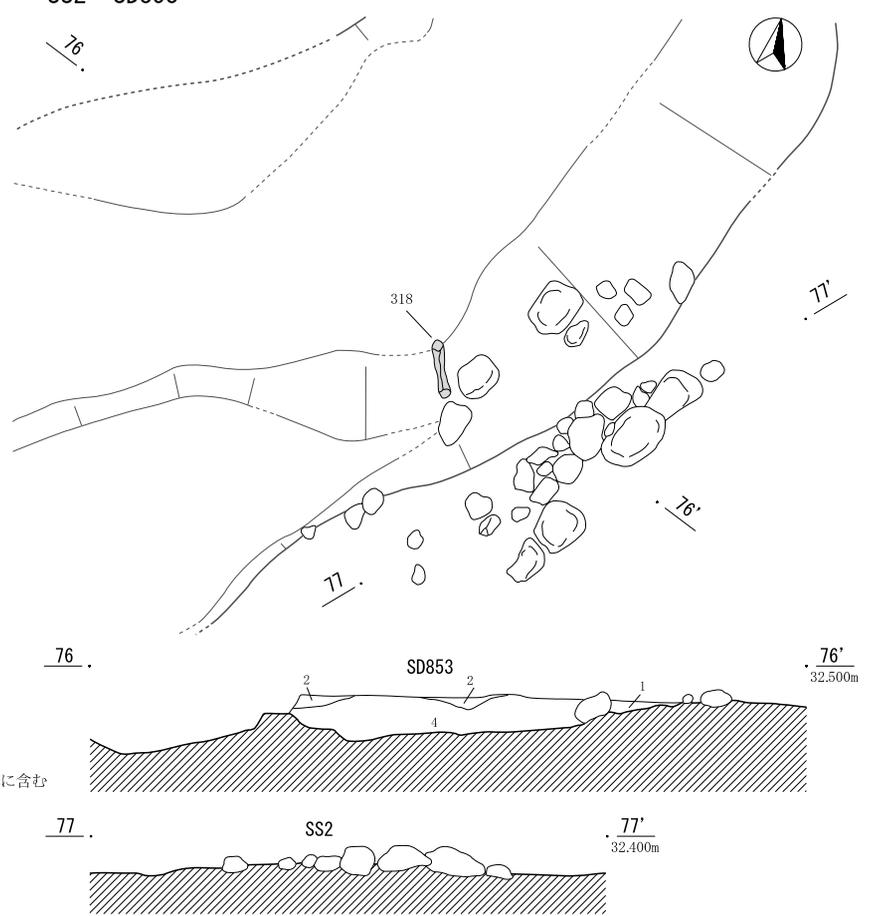
- 1 オリーブ黒色土 (5Y3/1) 粘質土
炭化物を微量含む
- 2 黒色土 (7.5YR3/1) 粘質土
炭化物を微量含む
- 3 暗オリーブ灰色土 (2.5GY3/1) 粘質土



SS1

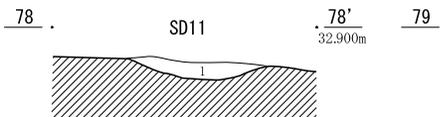


SS2・SD853

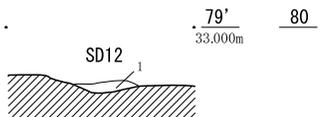


- SD853
 1 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質土 細砂を含む
 2 暗黄灰色土(2.5Y5/2) 砂礫土
 4 暗黄灰色土(2.5Y5/2) 砂礫土 礫を多量に含む

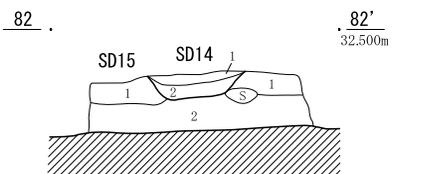
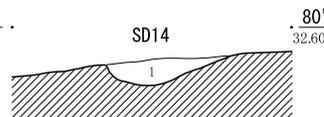
0 (1:60) (SS1, SS2, SD853平面図) 3m



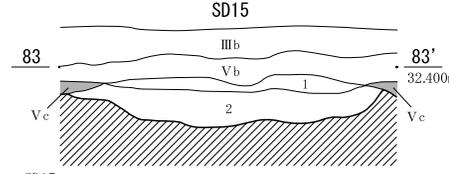
- SD11
 1 暗緑灰色土(5G3/1) 粘質土
 炭化物を少量含む



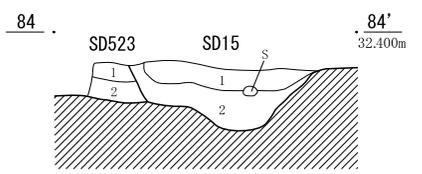
- SD12
 1 暗緑灰色土(5G2/1) 粘質土
 炭化物を少量含む



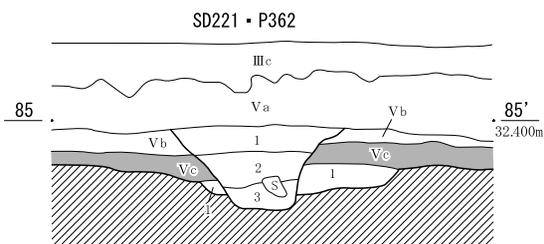
- SD14
 1 灰オリーブ色土(5Y4/2) 粘質土
 炭化物を少量含む
 2 暗緑灰色土(7.5GY4/1) 粘質土 礫を少量含む



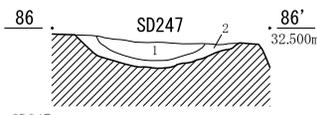
- SD15
 1 オリーブ黒色土(5Y3/1) 粘質土
 炭化物を少量含む
 2 灰色土(7.5Y4/1) 粘質土 炭化物を少量含む



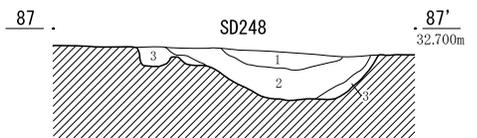
- SD523
 1 オリーブ黒色土(10Y3/2) 粘質土
 炭化物を少量含む
 2 暗緑灰色土(7.5GY4/1) 粘質土



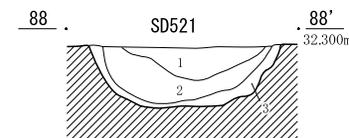
- SD211
 1 オリーブ黒色土(10Y3/1) 粘質土 炭化物を少量含む
 P362
 1 オリーブ黒色土(5Y3/2) 粘質土 炭化物を少量含む
 2 暗緑灰色土(7.5GY4/1) 粘質土
 3 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1) 粘質土



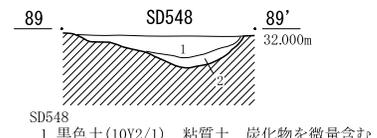
- SD247
 1 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1) 粘質土
 炭化物を少量含む
 2 オリーブ黒色土(10Y3/1) 粘質土
 炭化物を少量含む



- SD248
 1 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1) 粘質土
 2 暗緑灰色土(10GY4/1) 粘質土
 3 オリーブ黒色土(10Y3/1) 粘質土



- SD521
 1 灰オリーブ色土(7.5Y4/2) 粘質土 白色砂粒を少量含む
 2 灰色土(10Y4/1) 粘質土
 3 黒色土(10Y2/1) 粘質土 炭化物を微量含む

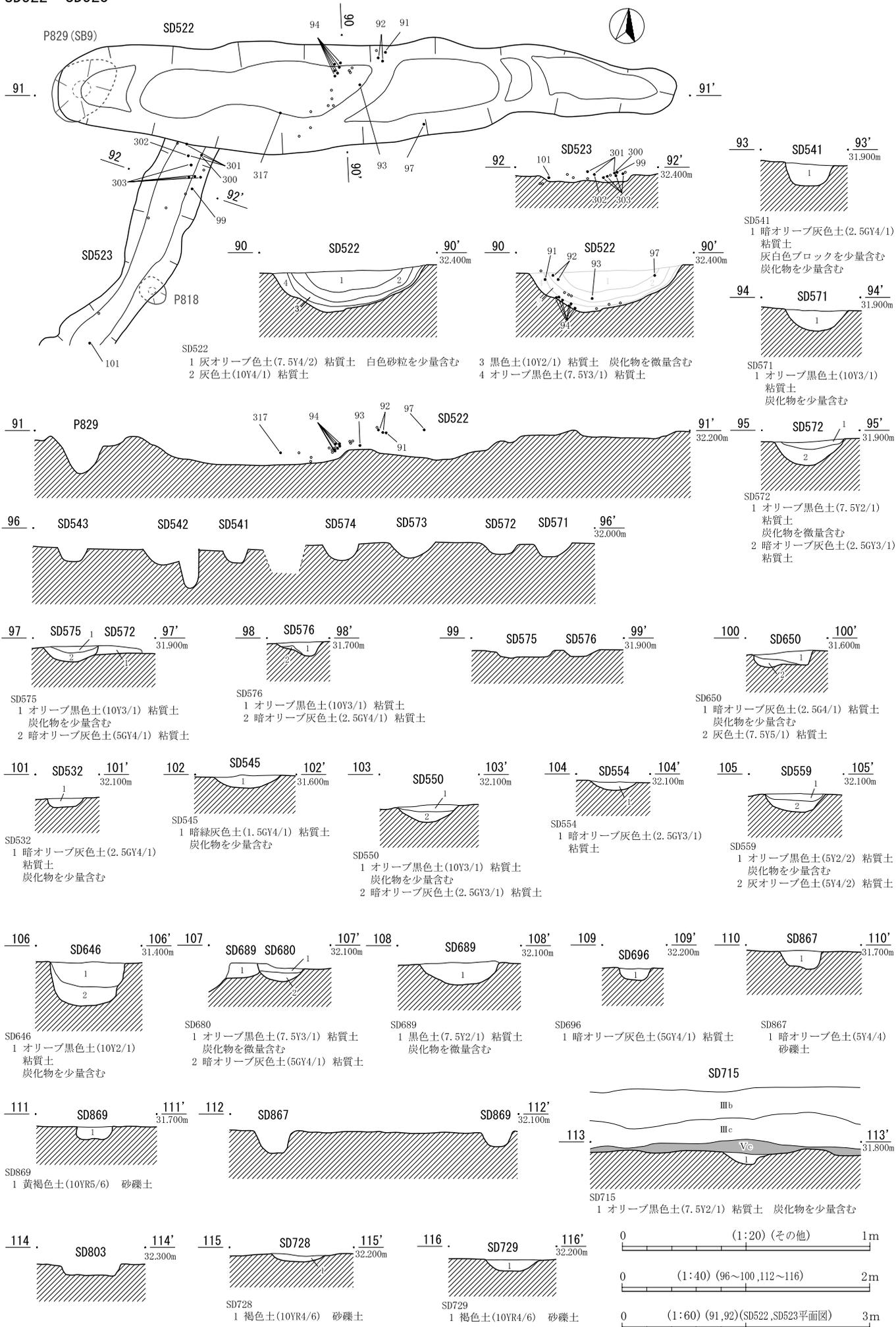


- SD548
 1 黒色土(10Y2/1) 粘質土 炭化物を微量含む
 2 暗オリーブ灰色土(2.5GY3/1) 粘質土

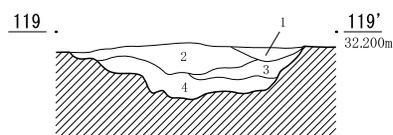
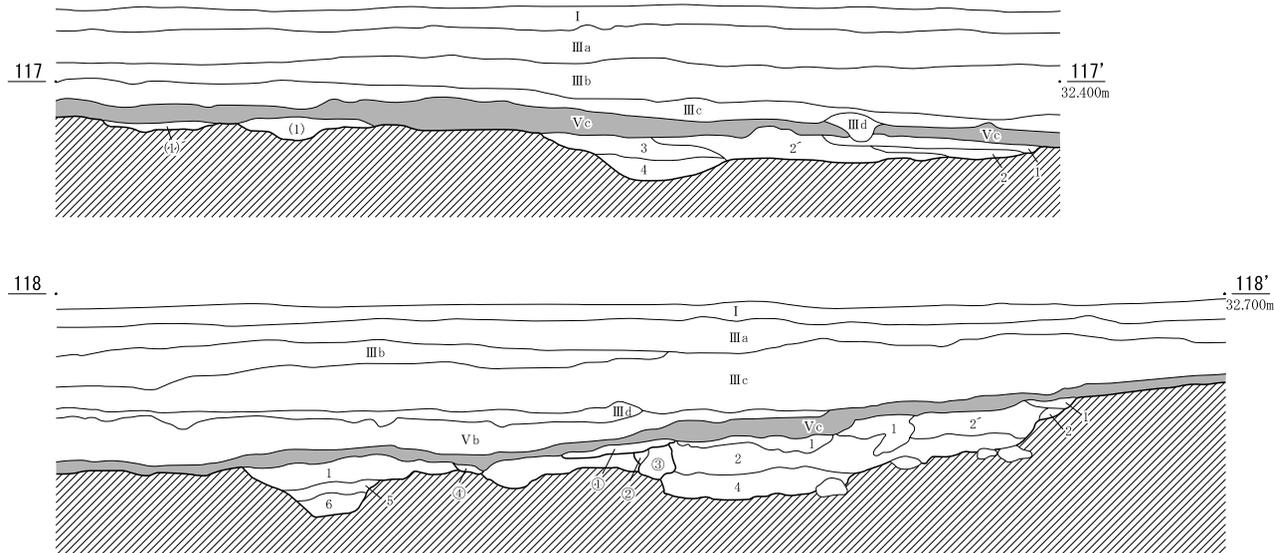
0 (1:20) (78~82.84) 1m

0 (1:40) (その他) 2m

SD522・SD523



SD853

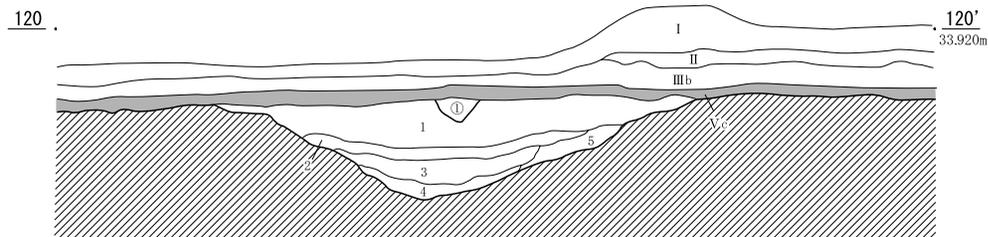


SD853

- 1 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質土 細砂を含む
- 2 暗黄灰色土(2.5Y5/2) 砂礫土
- 2' 2層より礫を多く含む
- 3 黄灰色土(2.5Y5/1) 粘質土 細砂を含む
- 4 暗黄灰色土(2.5Y5/2) 砂礫土 礫を多量に含む
- 5 褐灰色土(10YR5/1) 粘質土
- 6 褐灰色土(10YR4/1) 粘質土 礫を少量含む

- (1) SD729-1層
- (1)' SD729-1層
- ① SD14-1層
- ② 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘質土
- ③ 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘質土 礫を含む } (=P366)
- ④ 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘質土 炭化物を少量含む } (=P365)

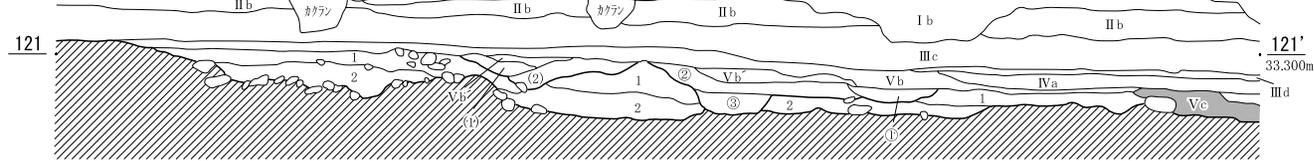
SX2



SX2

- 1 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘質土 炭化物・灰白色ブロックを微量含む
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土 炭化物を微量含む
- 3 青灰色土(5B5/1) 粘質土
- 4 暗青灰色土(5B4/1) 粘質土
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土
- ① 黒褐色土(7.5YR3/1) 粘質土 (=P368)

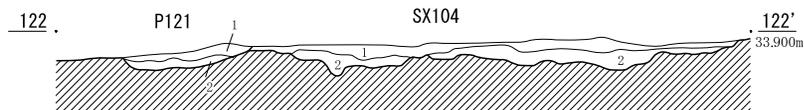
SX3



SX3

- 1 褐灰色土(5Y4/1) 粘質土 細礫を含む
- 2 黄灰色土(2.5Y4/1) 粘質土 礫を含む
- (1) 褐灰色土(10YR5/1) 粘質土
- (2) 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘質土
- ① 褐灰色土(10YR5/1) 粘質土 礫を含む
- ② 灰黄褐色土(10YR6/2) 粘質土
- ③ 褐灰色土(10YR4/1) 粘質土 礫を含む

SX104・P121



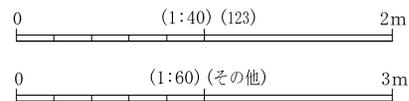
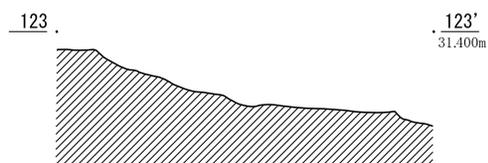
SX104

- 1 暗緑灰色土(10G4/1) 粘質土 炭化物・灰色ブロックを少量含む
- 2 緑灰色土(5G5/1) 粘質土 炭化物を少量含む

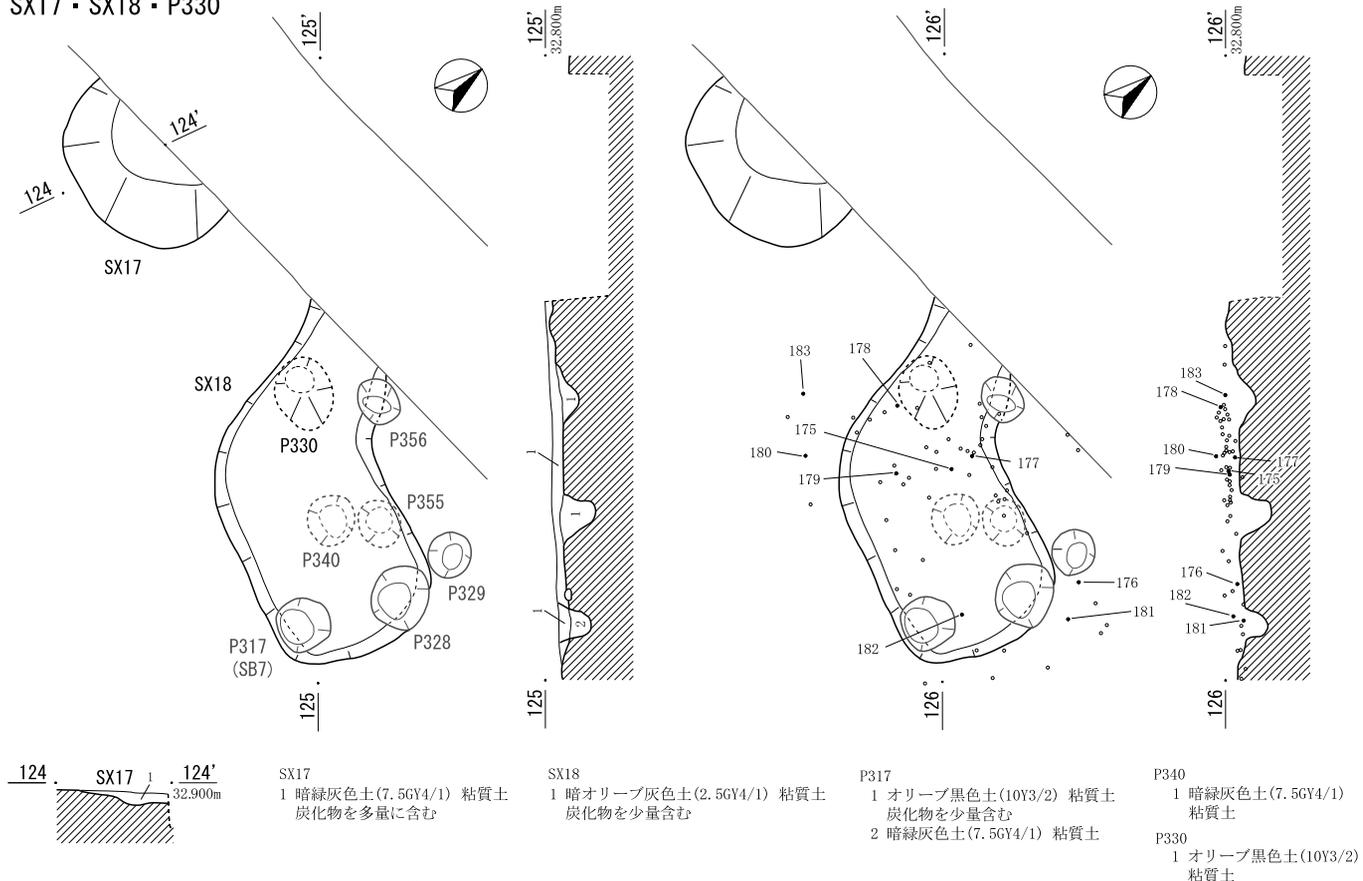
P121

- 1 オリーブ黒色土(10Y3/1) 粘質土
- 2 暗オリーブ灰色土(2.5GY4/1) 粘質土

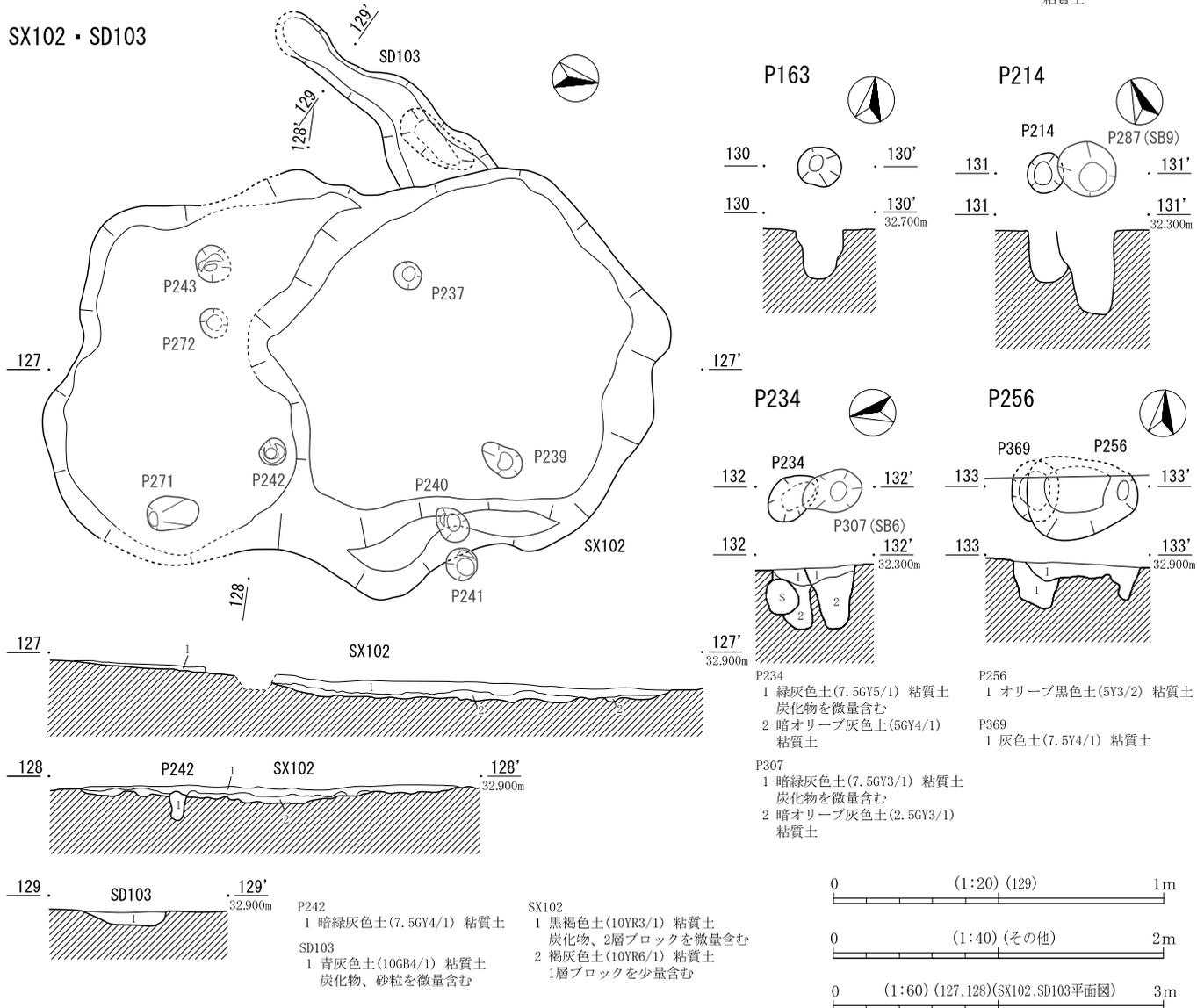
SX647

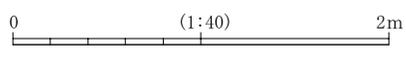
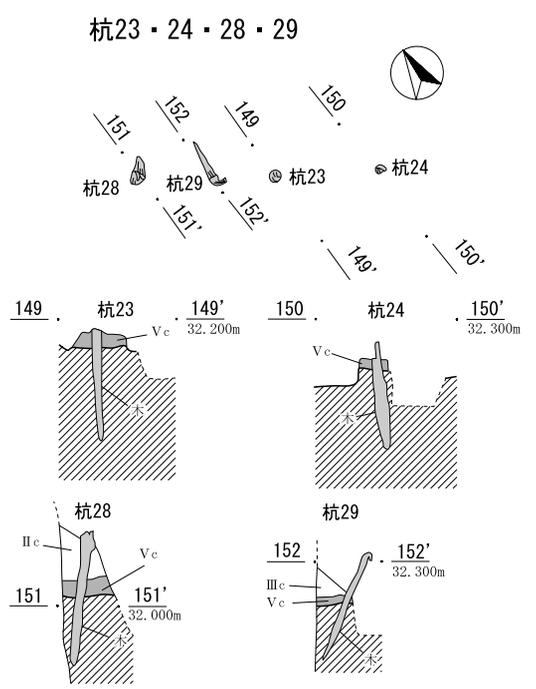
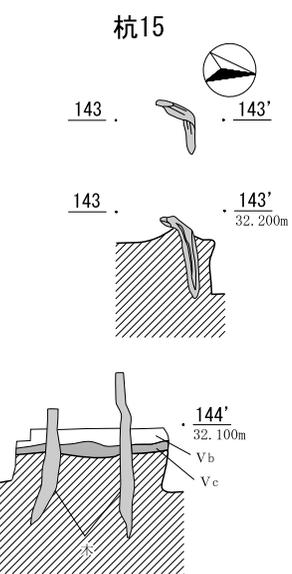
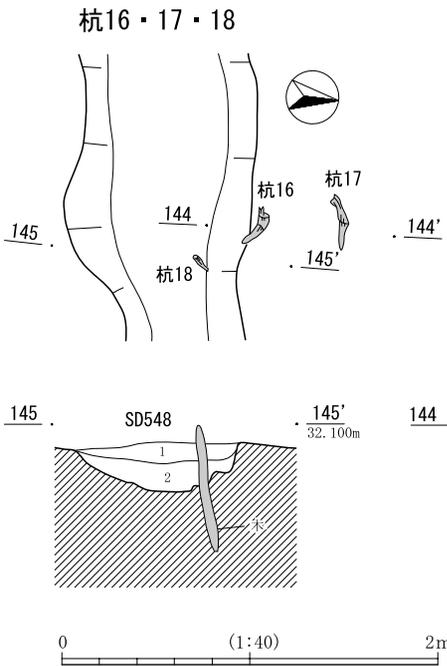
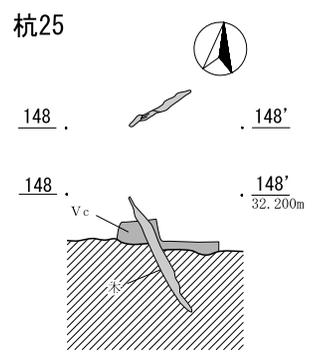
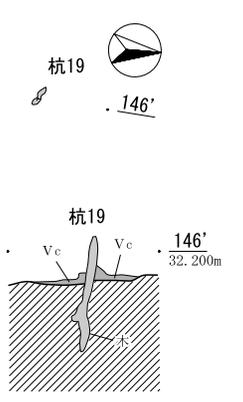
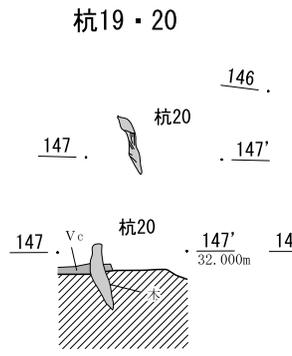
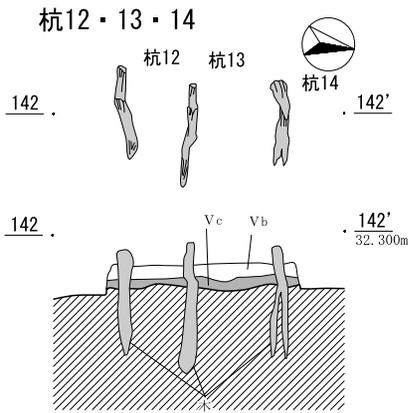
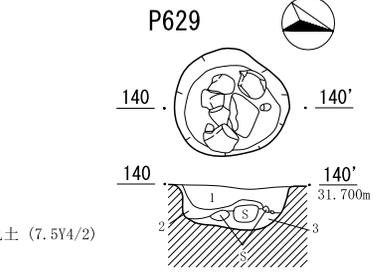
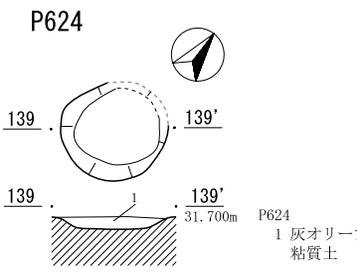
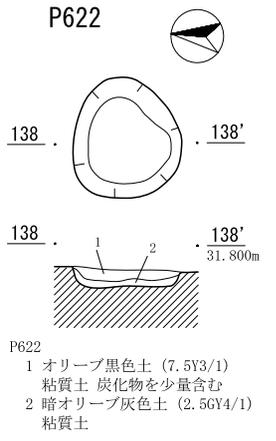
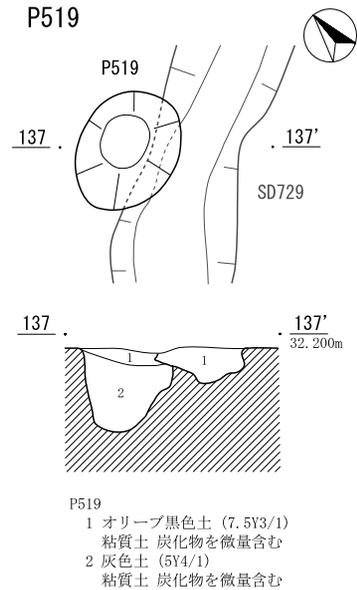
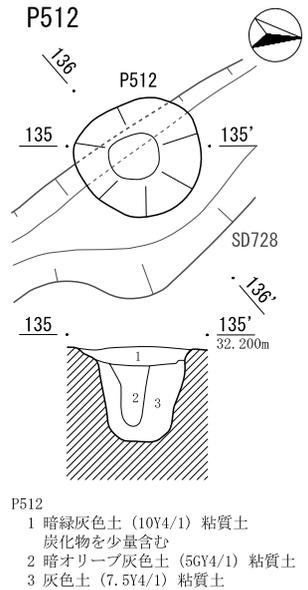
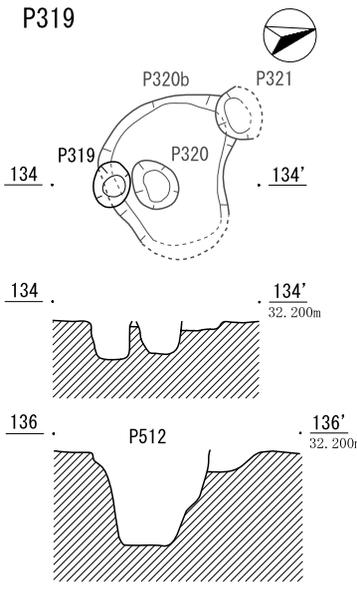


SX17・SX18・P330

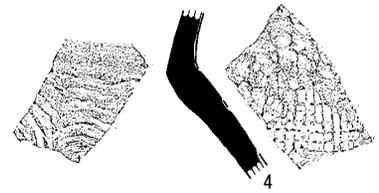
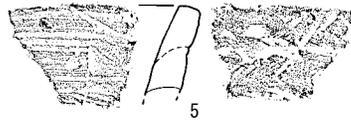
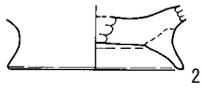
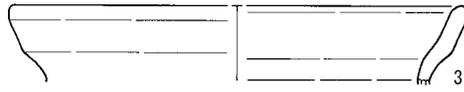
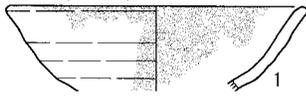


SX102・SD103

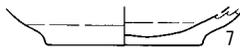
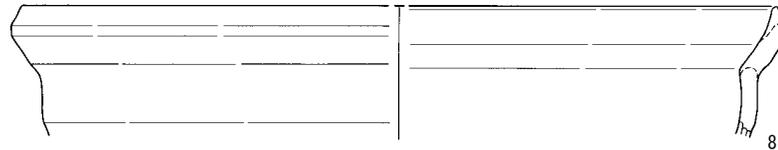




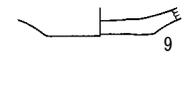
SB1 (1~5)



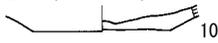
SB2 (6~8)



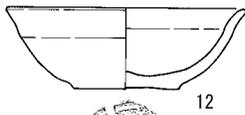
SB3 (9)



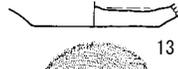
SB4 (10・11)



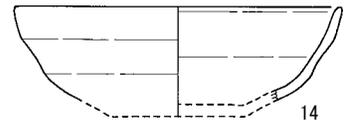
SB6 (12)



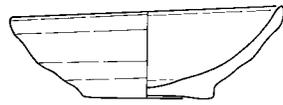
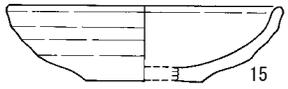
SB7 (13)



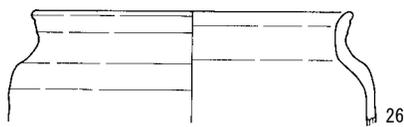
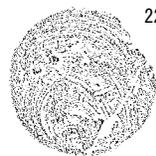
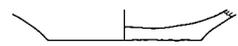
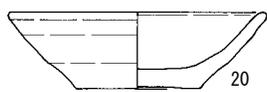
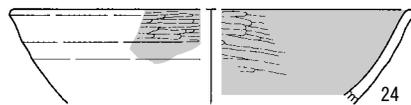
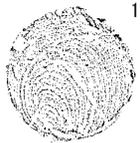
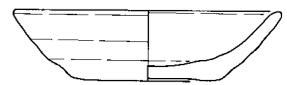
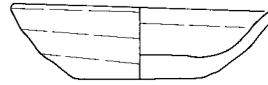
SB9 (14)



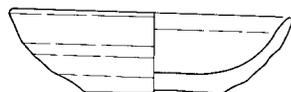
SA1 (15・16)



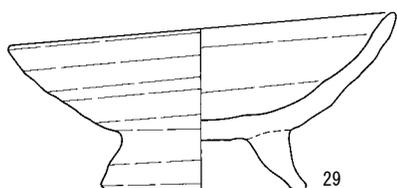
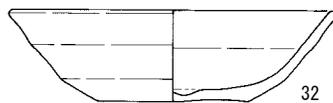
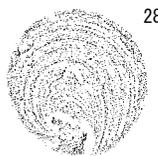
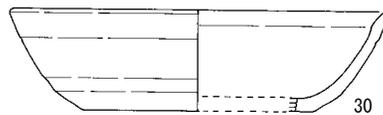
SK1 (17~27)



SK188 (28・29)

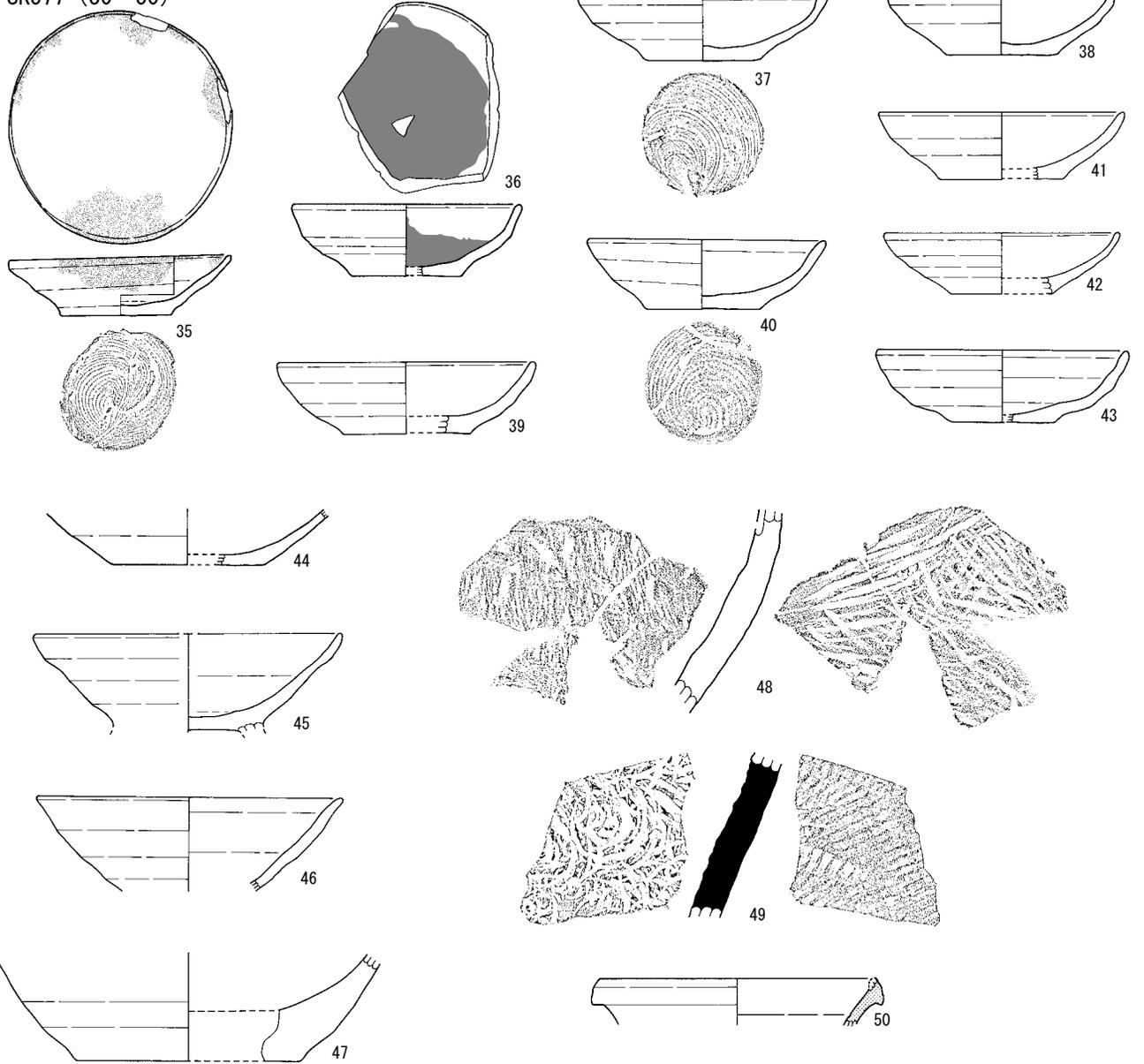


SK577 (30~50)

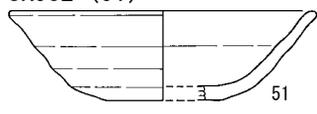


0 (1:3) 15cm

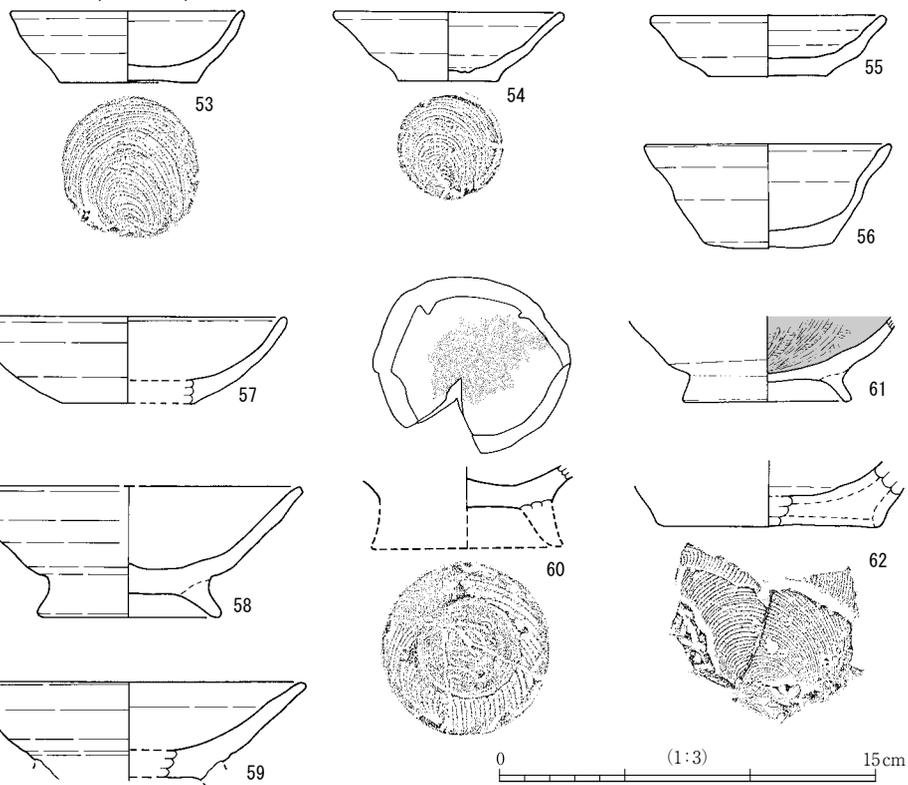
SK577 (30~50)



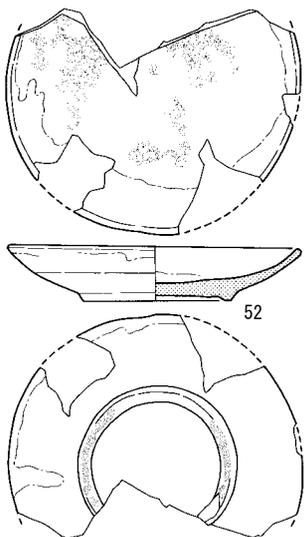
SK582 (51)



SK698 (53~66)



SK591 (52)



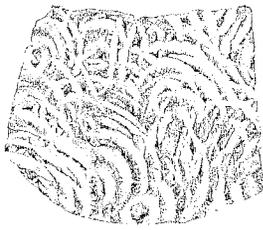
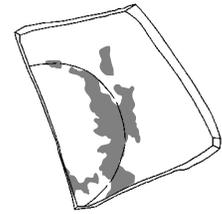
SK698 (53~66)



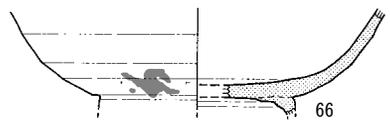
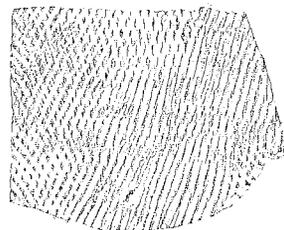
63



64



65

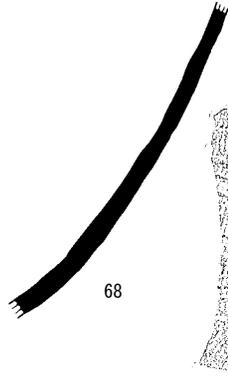
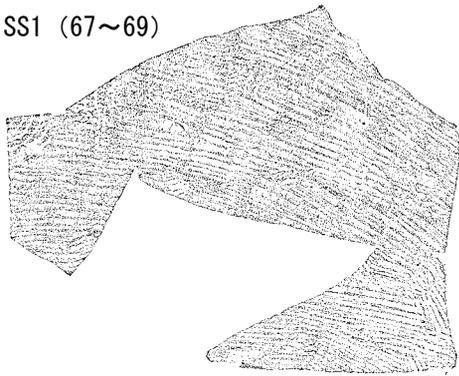


66

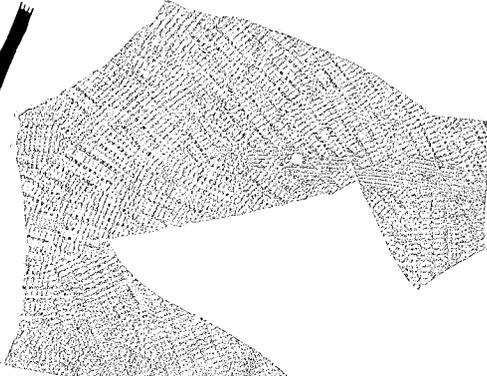


67

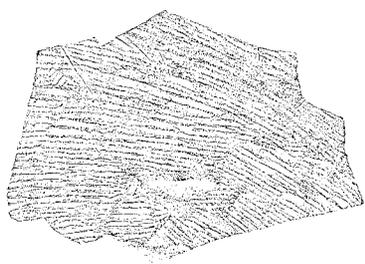
SS1 (67~69)



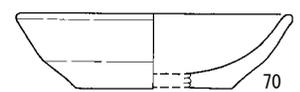
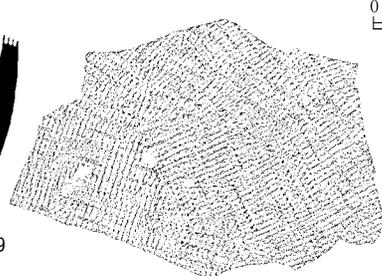
68



0 68-69 (1:4) 20 cm



69



70

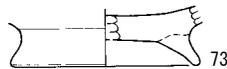


71

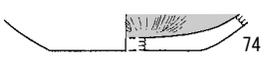
SD11 (70~74)



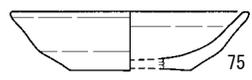
72



73

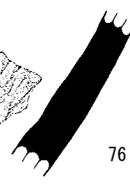


74



75

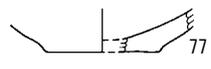
SD12 (75・76)



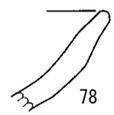
76



SD14 (77~80)



77



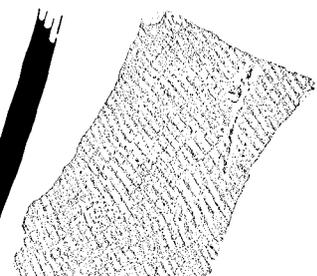
78



79



80



SD15 (81~86)



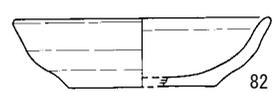
81



83



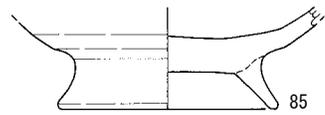
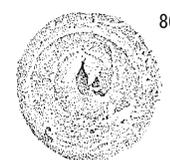
84



82



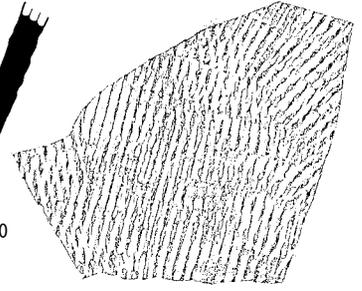
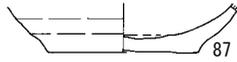
86



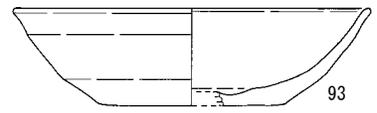
85

0 68-69以外(1:3) 15cm

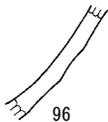
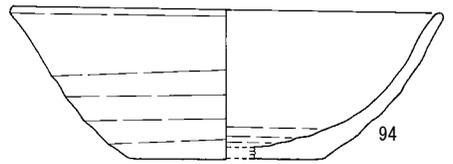
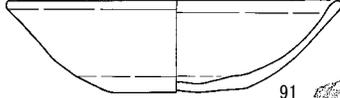
SD221 (87)



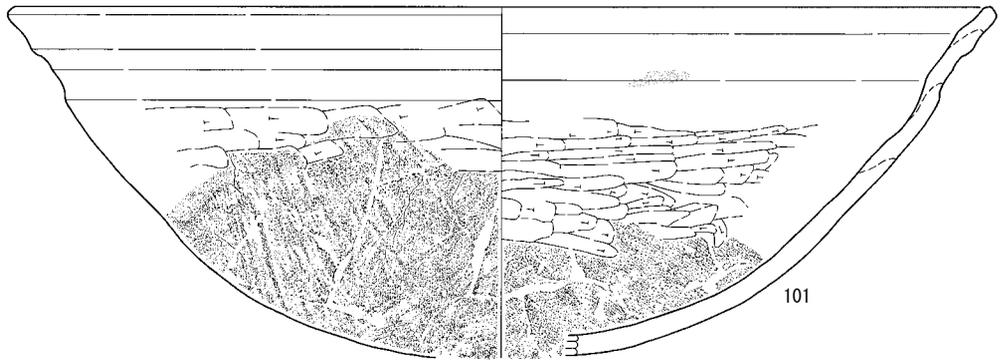
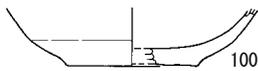
SD521 (88~90)



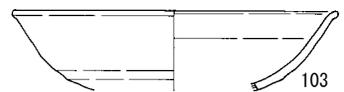
SD522 (91~98)



SD523 (99~102)



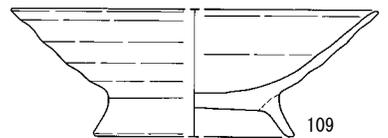
SD548 (103・104)



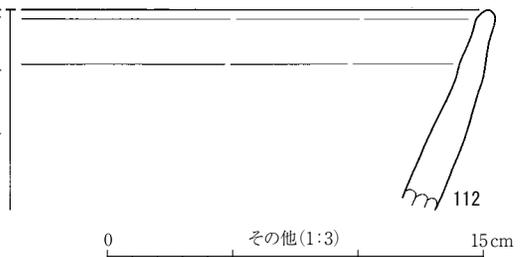
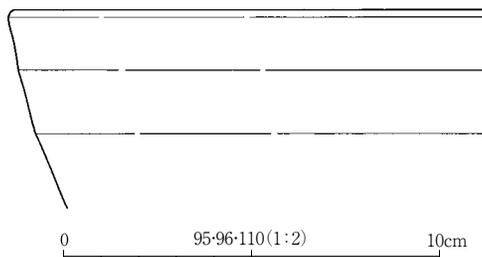
SD554 (105~107)



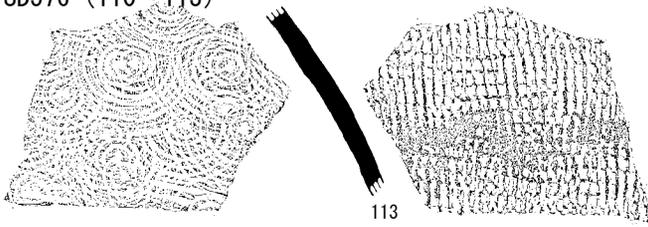
SD571 (108・109)



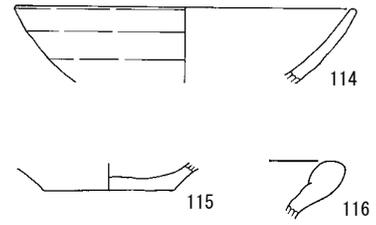
SD576 (110~113)



SD576 (110~113)



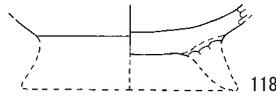
SD575 (114~116)



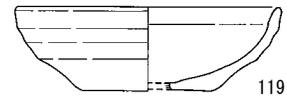
SD646 (117)



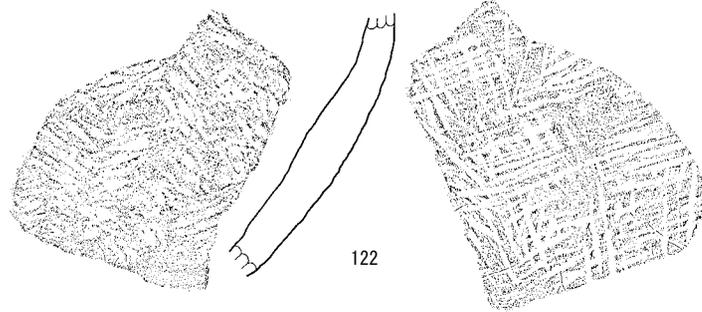
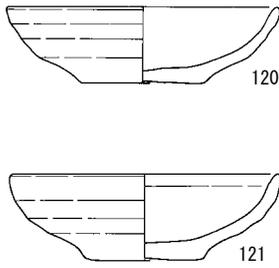
SD650 (118)



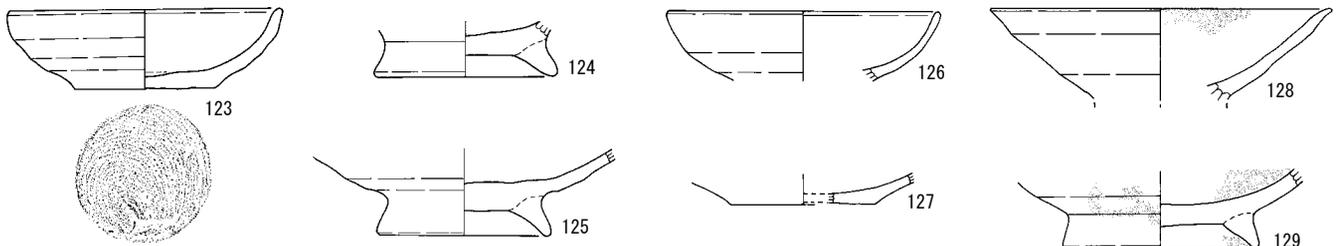
SD680 (119)



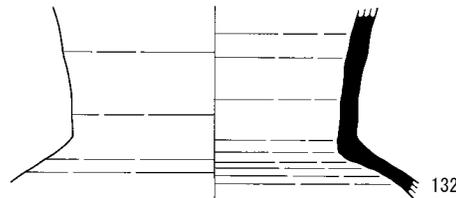
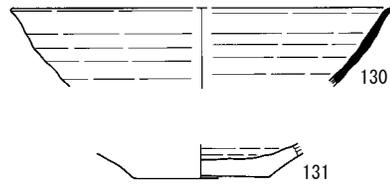
SD697 (120~125)



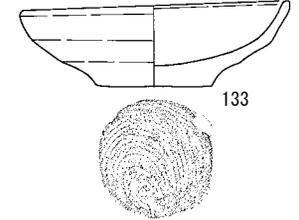
SD715 (126~129)



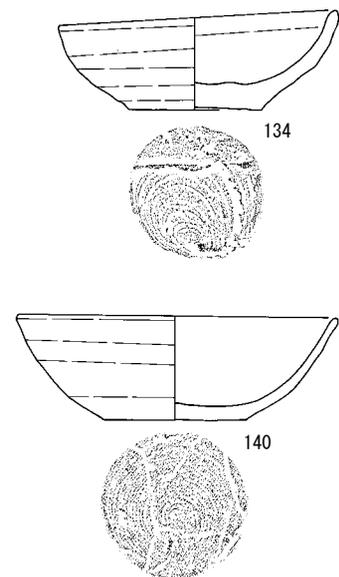
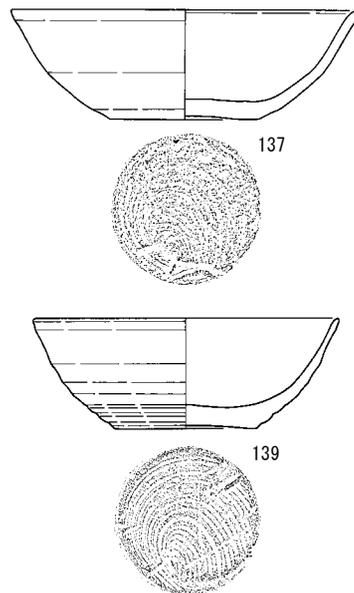
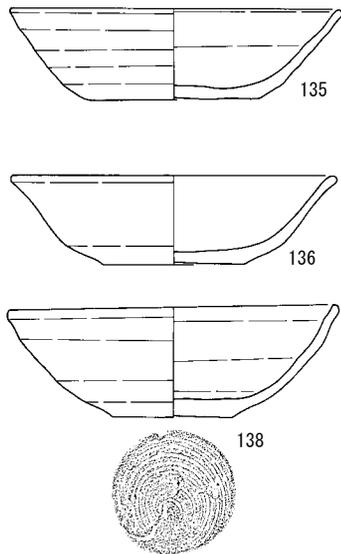
SD729 (130~132)

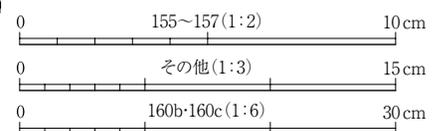
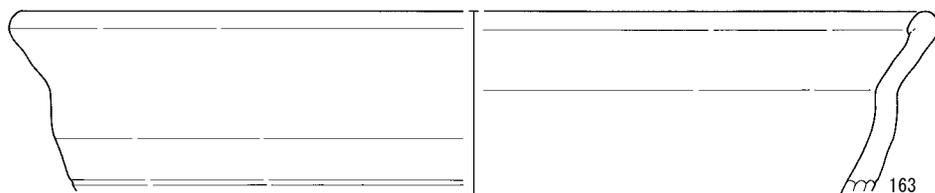
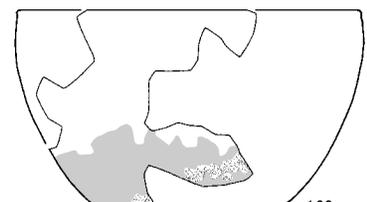
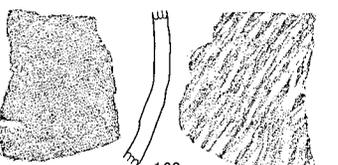
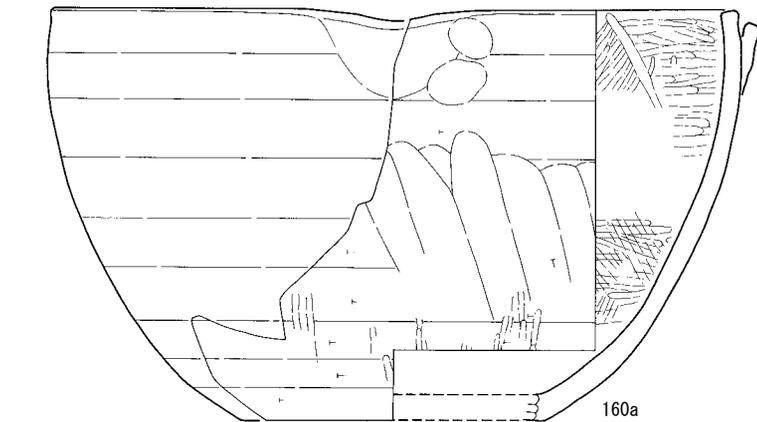
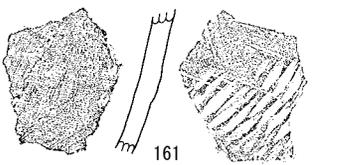
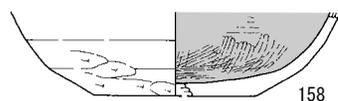
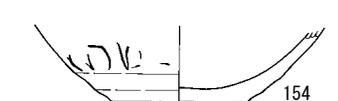
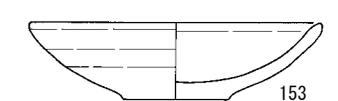
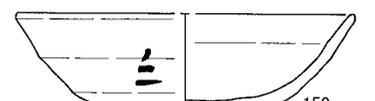
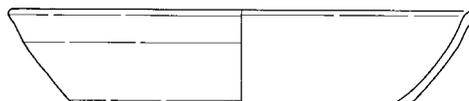
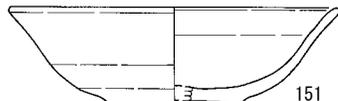
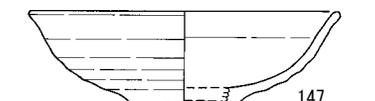
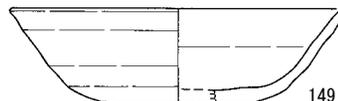
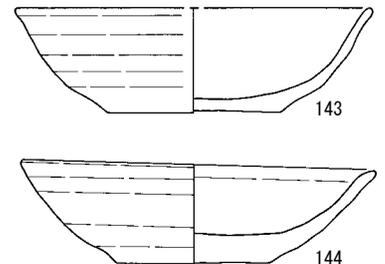
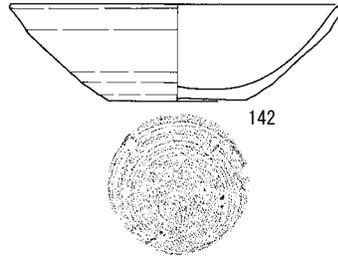
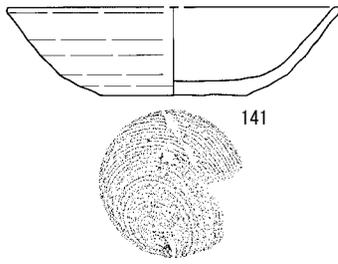


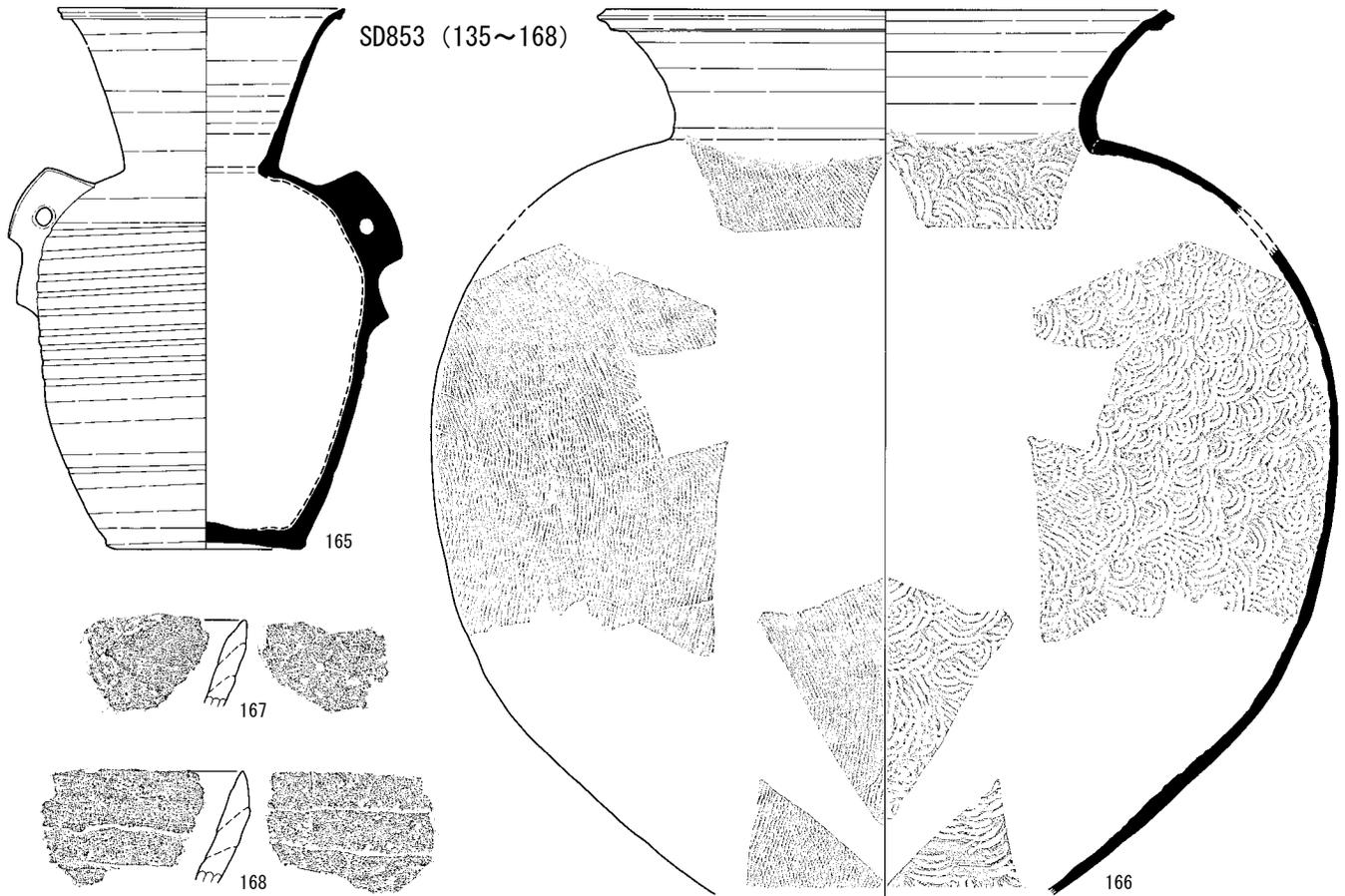
SD803 (133・134)



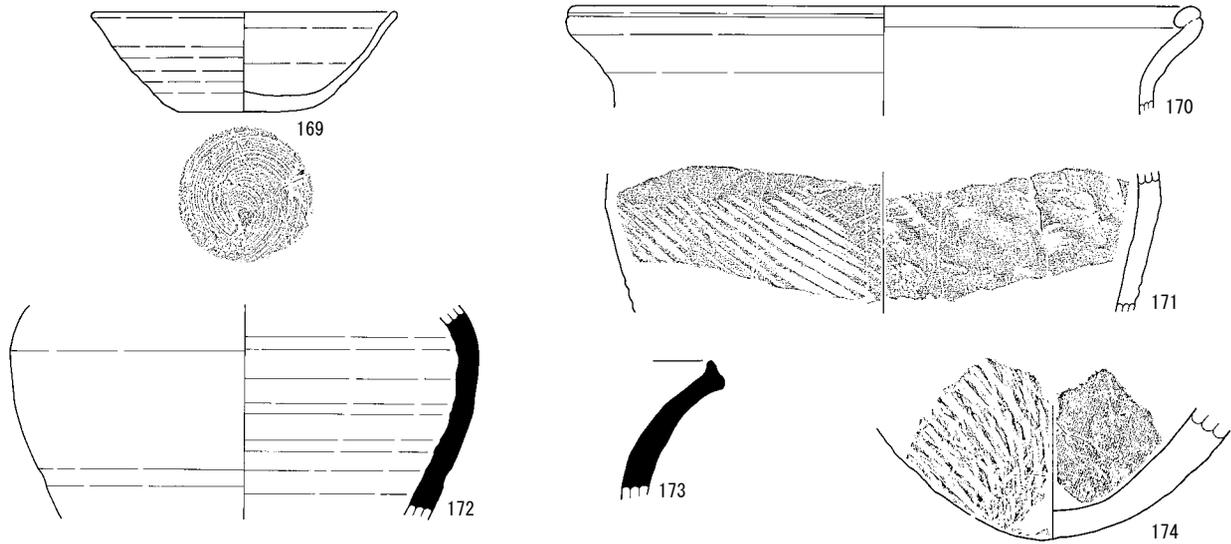
SD853 (135~168)



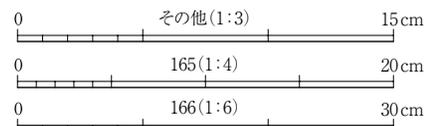
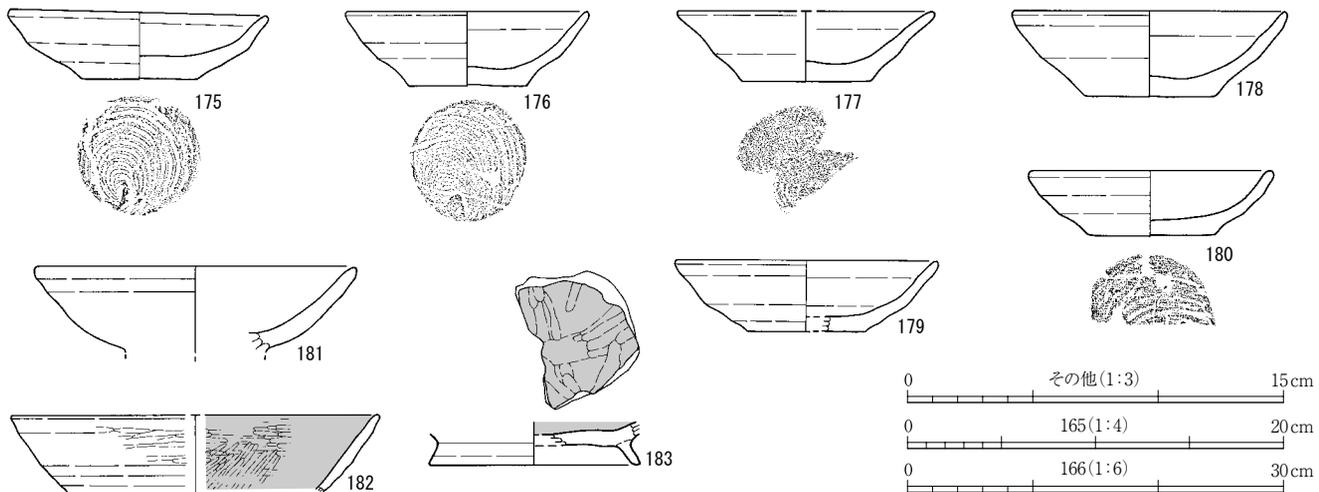




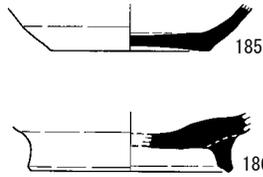
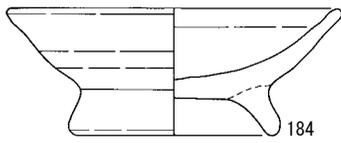
SX3 (169~174)



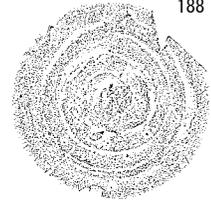
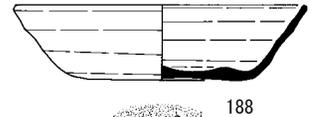
SX18 (175~183)



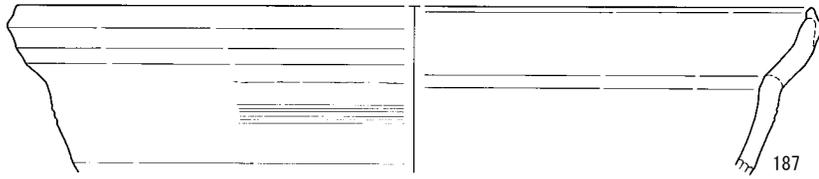
SX17 (184)



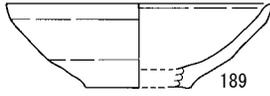
SX104 (188)



SX647 (185~187)



P121 (189)



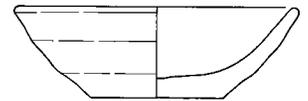
P163 (190)



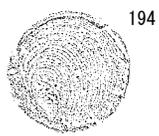
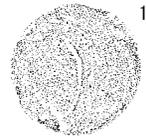
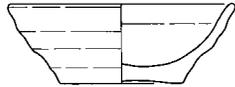
P214 (191)



P256 (192・193)



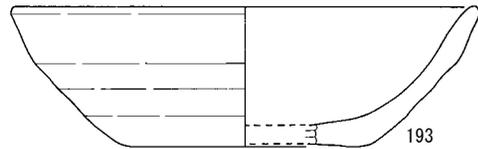
P319 (194)



P330 (195)



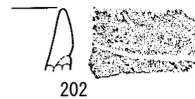
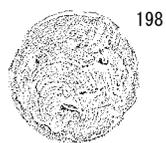
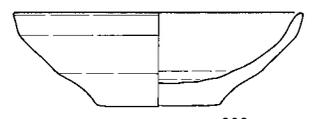
P512 (196・197)



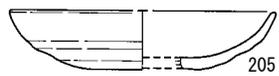
P519 (198~202)



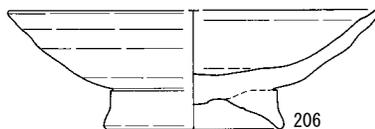
P624 (203)



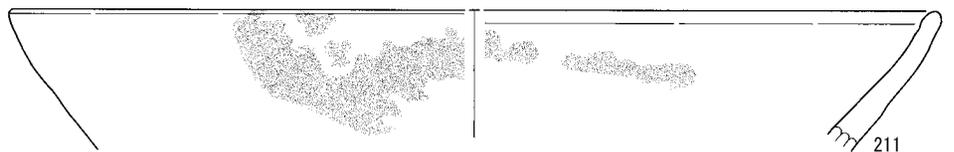
P622 (204~206)



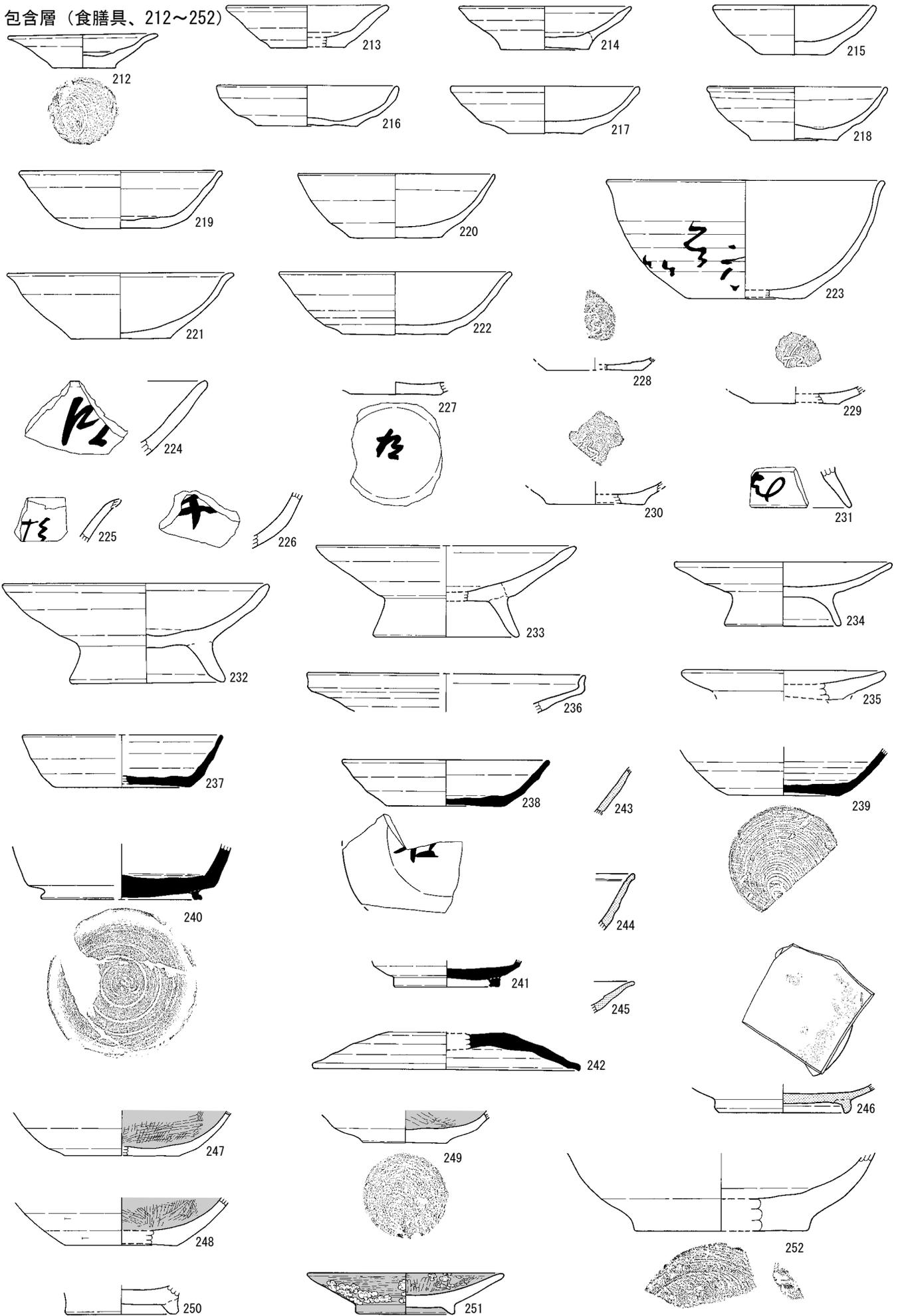
P629 (207~209)



P827 (210・211)



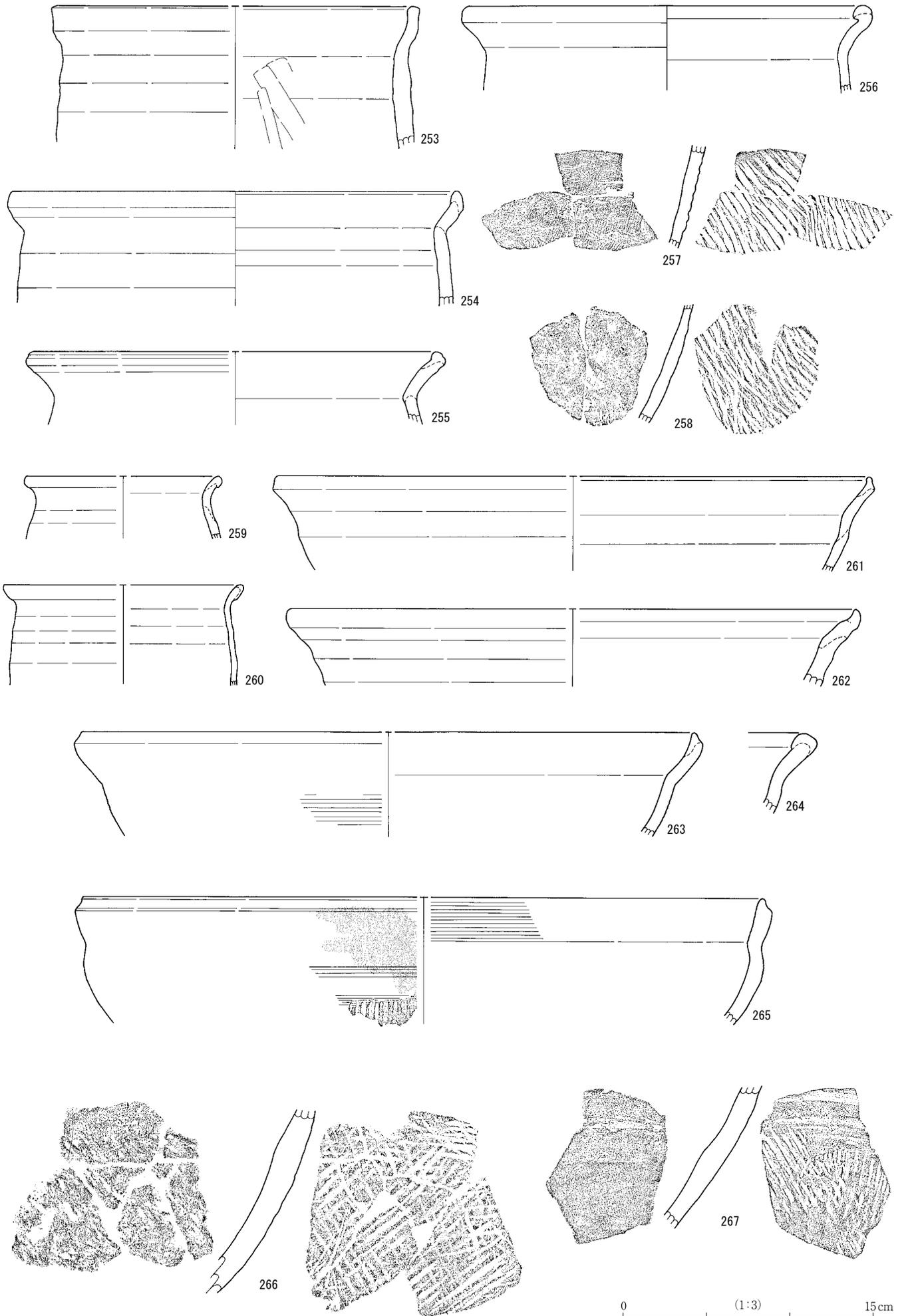
包含層 (食膳具、212~252)



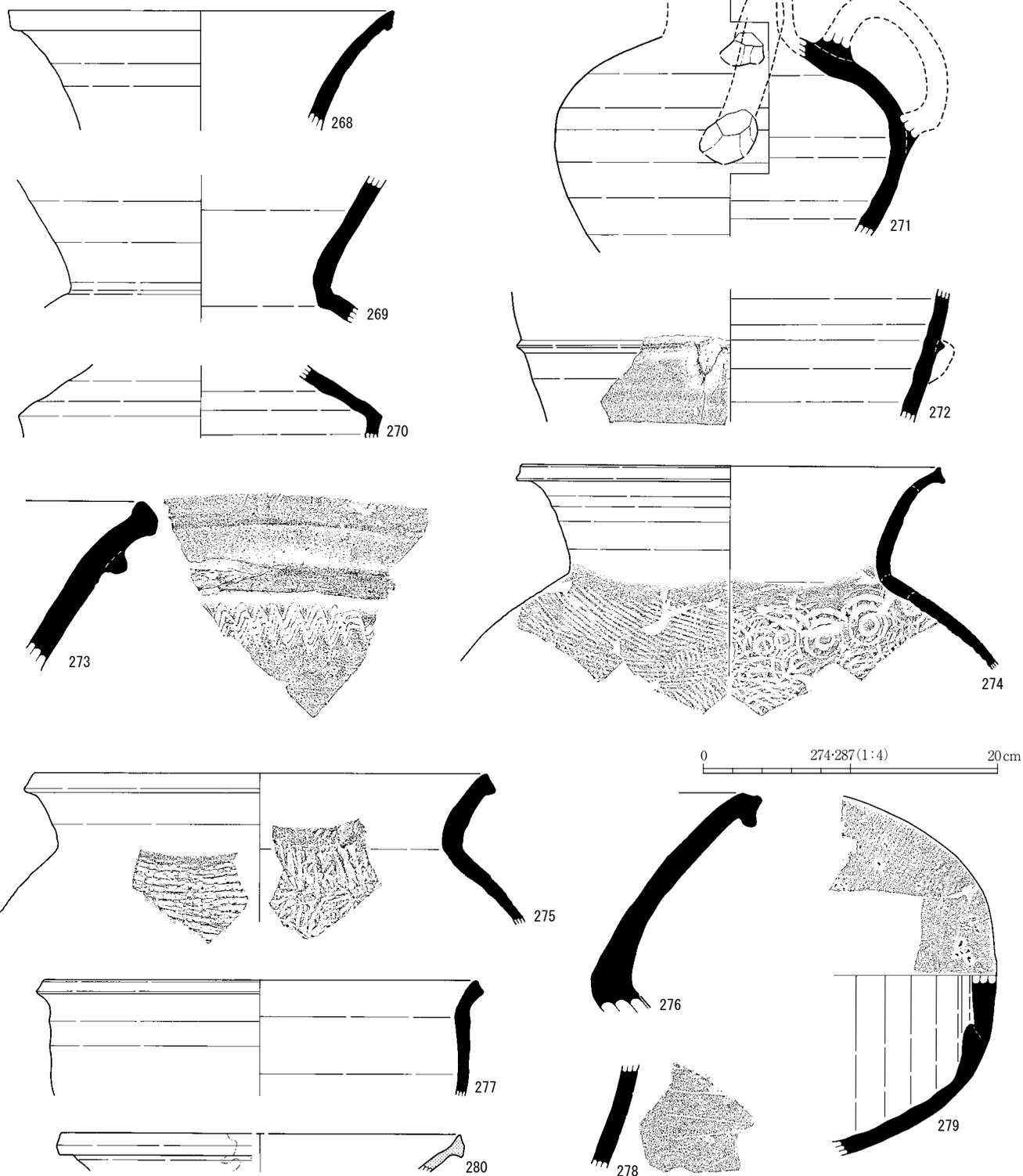
0 224~226(1:2) 10cm

0 その他(1:3) 15cm

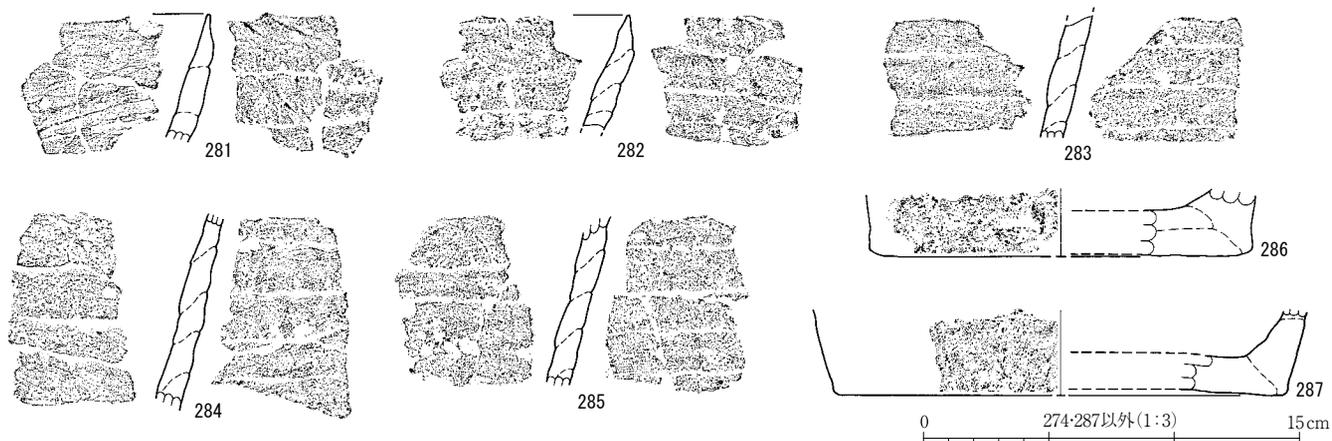
包含層 (煮炊具、253~267)



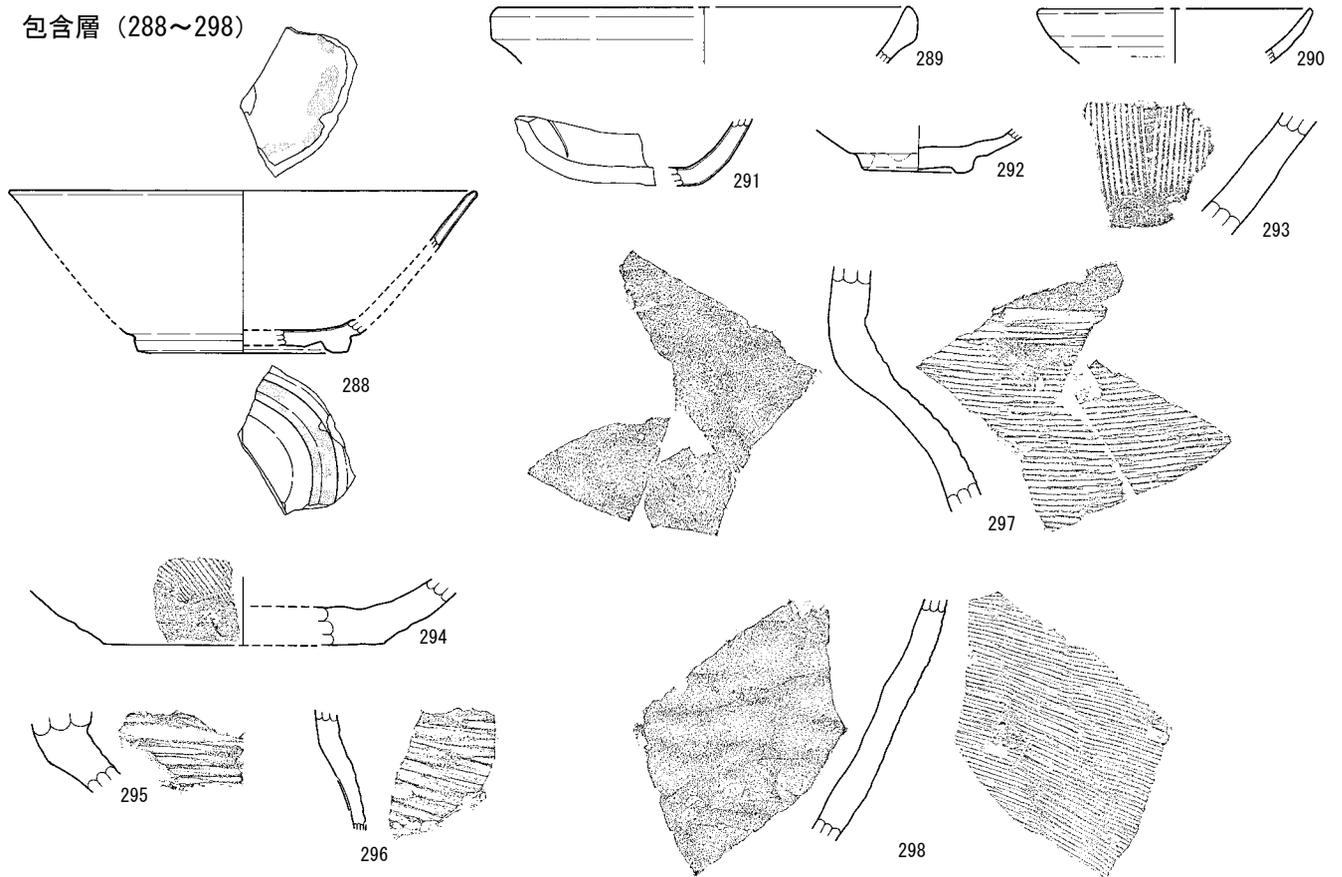
包含層 (貯蔵具、268~280)



包含層 (製塩土器、281~287)



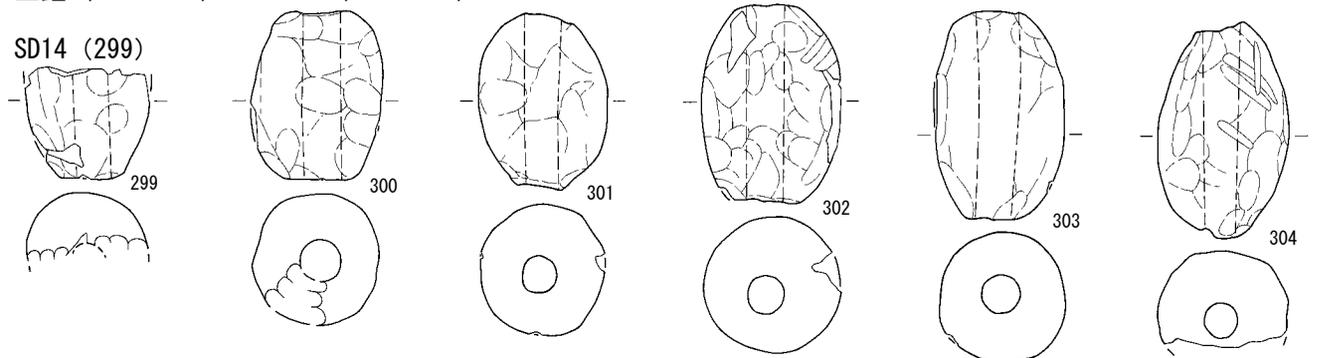
包含層 (288~298)



土錘 (299~314)

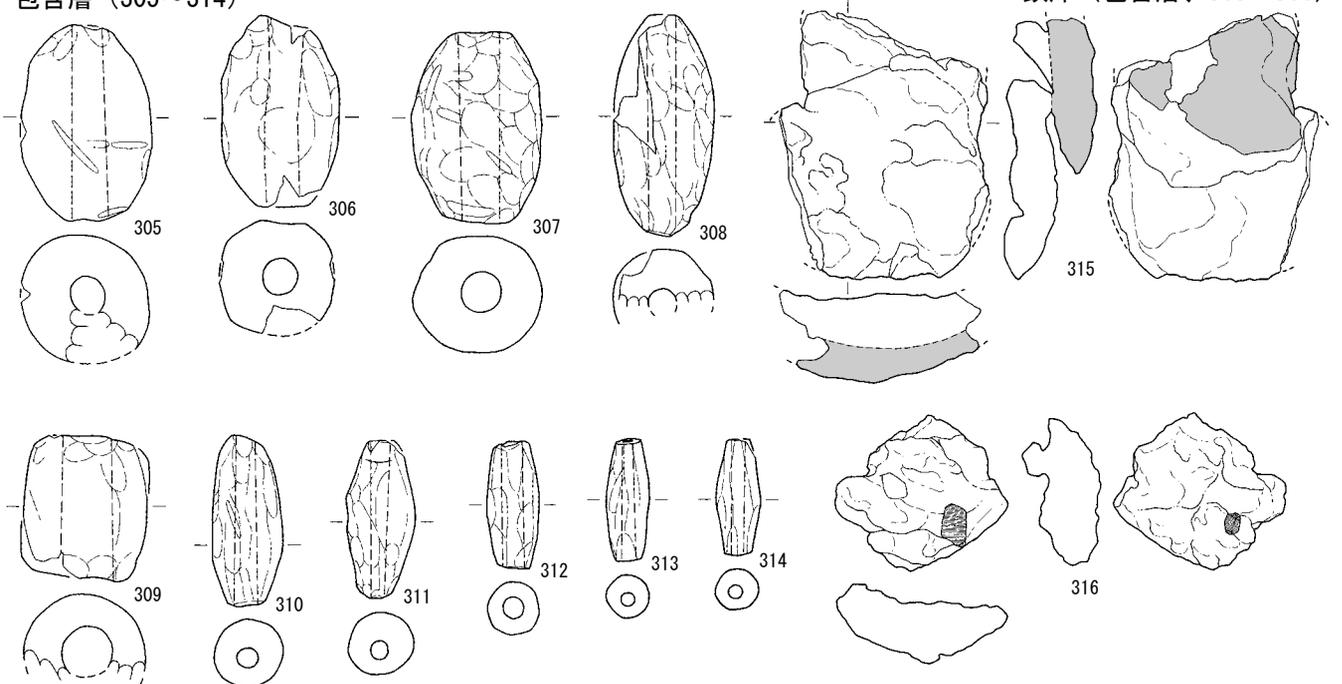
SD523 (300~304)

SD14 (299)



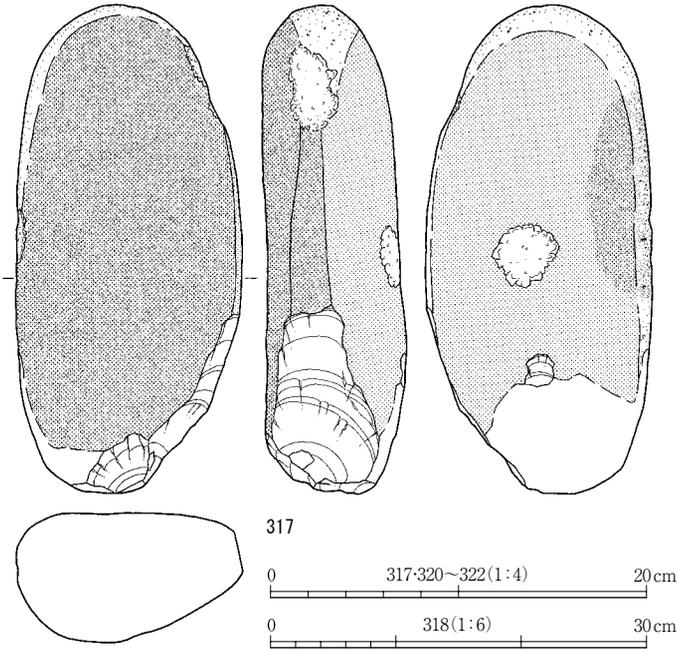
包含層 (305~314)

鉄滓 (包含層、315・316)

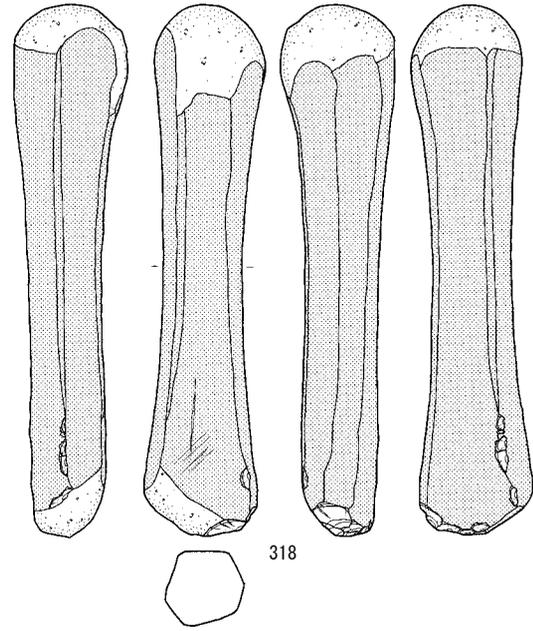


石製品 (317~322)

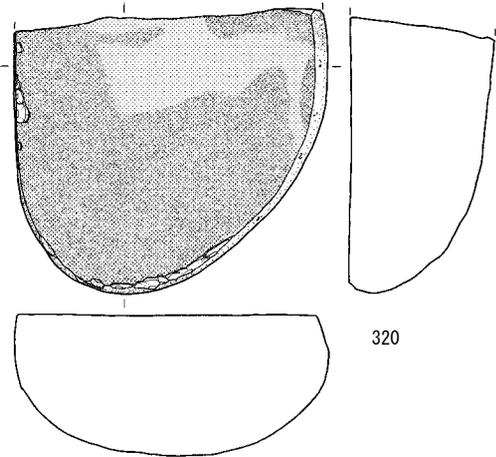
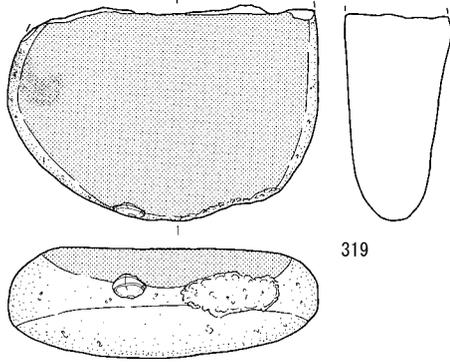
SD522 (317)



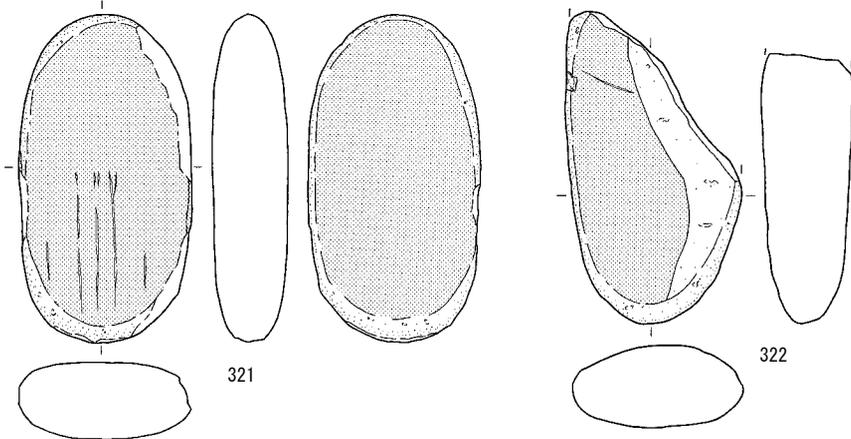
SD853 (318)



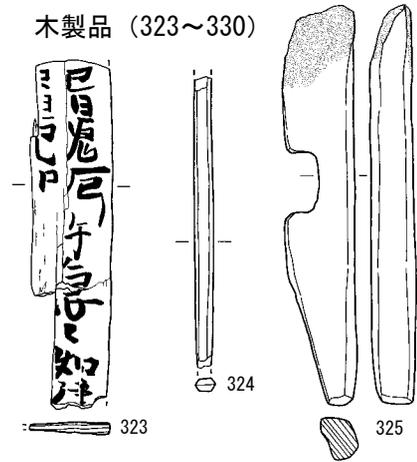
SD576 (319)



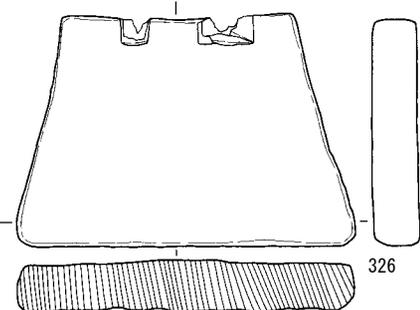
包含層 (320~322)



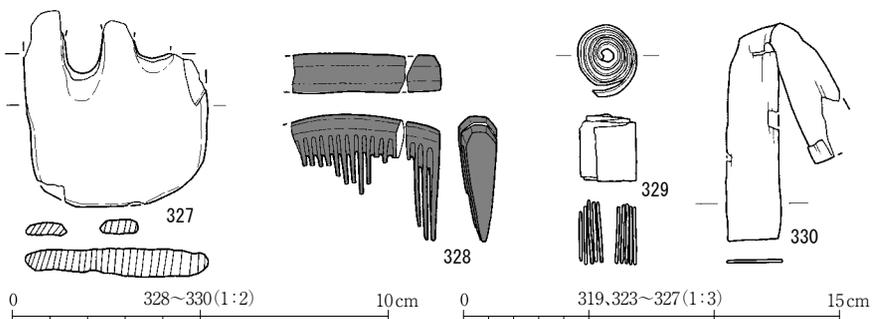
木製品 (323~330)



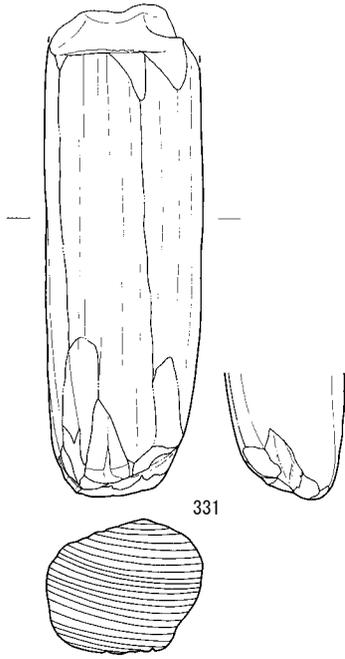
P234 (326)



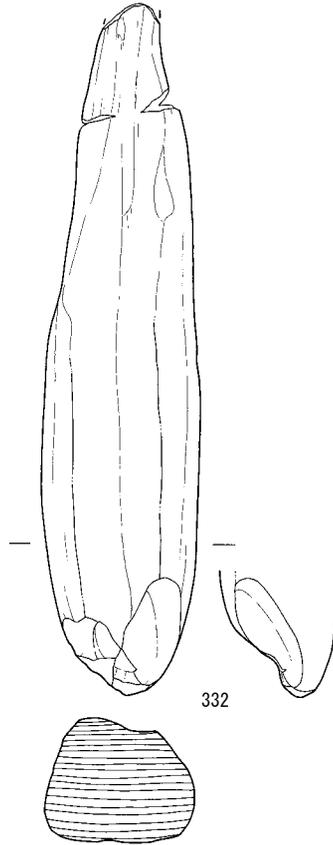
包含層 (323~325、327~330)



柱根・坑 (331~341)
P687 (331)



P668 (332)

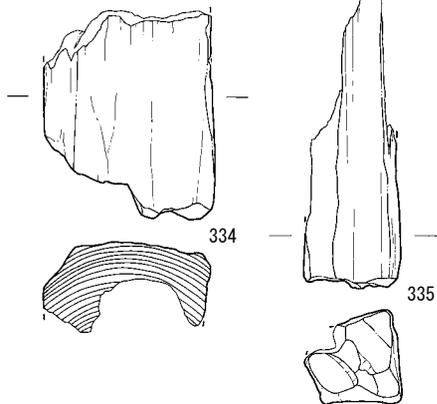


P809 (333)

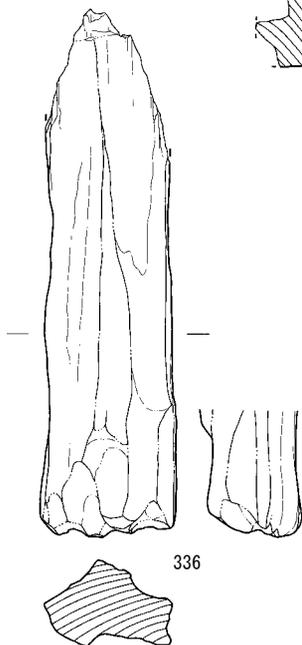


P705 (335)

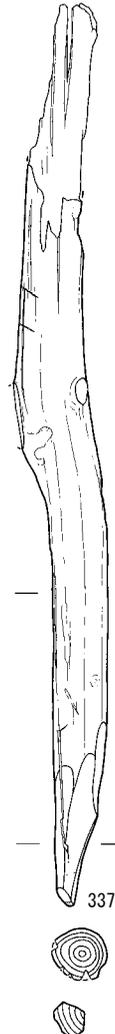
P638 (334)



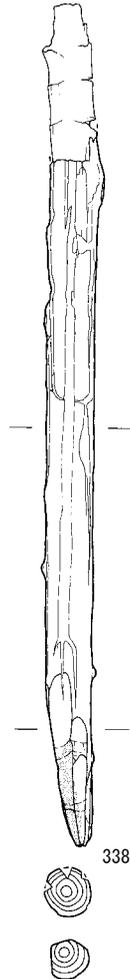
P843 (336)



坑13 (337)



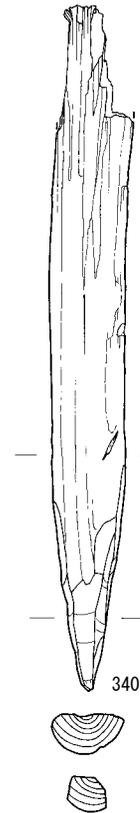
坑18 (338)



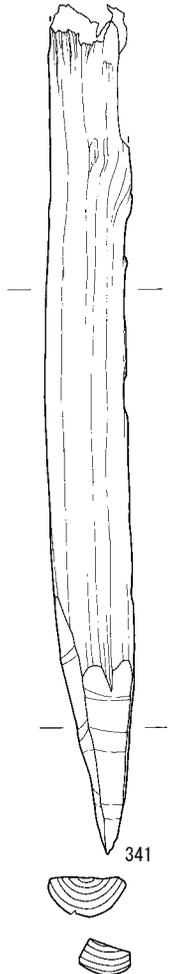
坑23 (339)



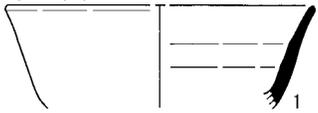
坑24 (340)



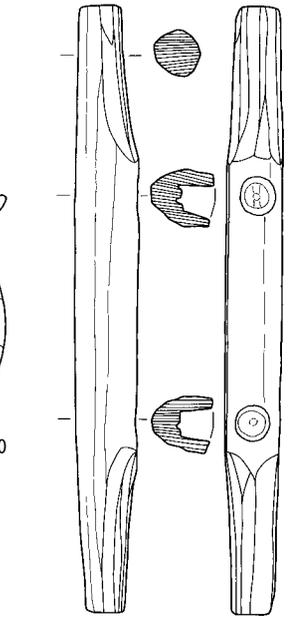
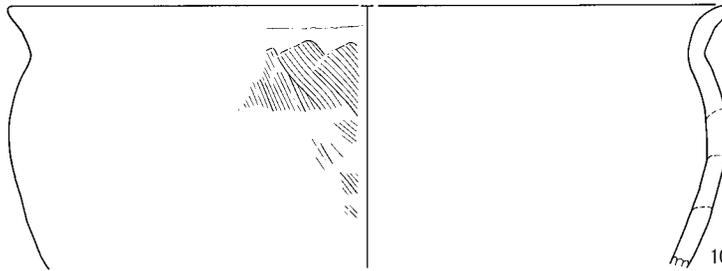
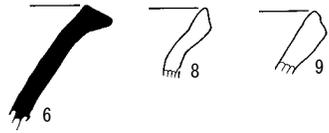
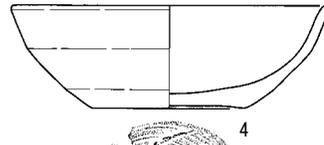
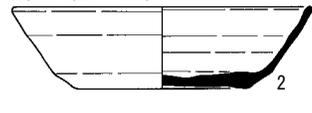
坑28 (341)



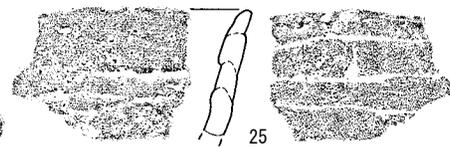
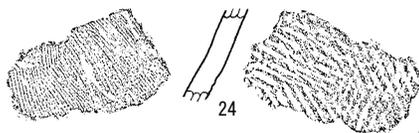
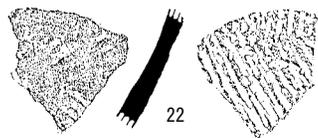
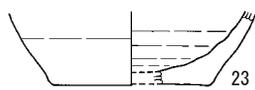
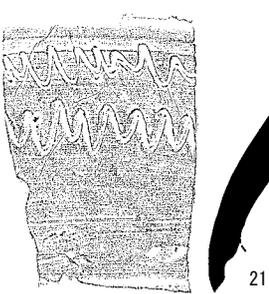
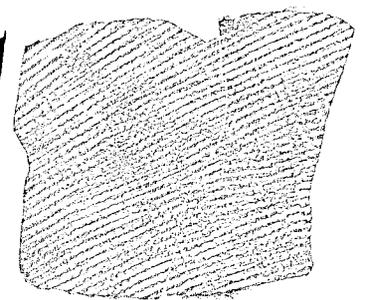
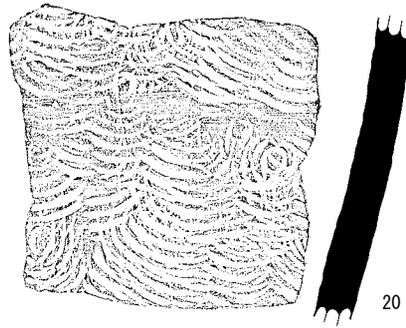
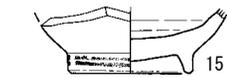
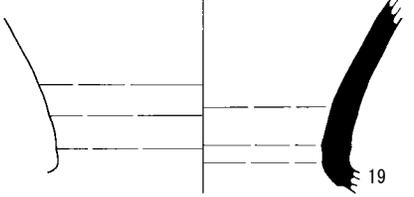
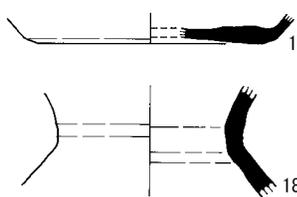
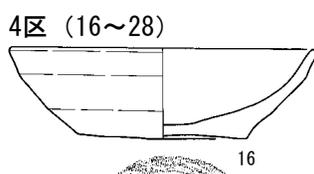
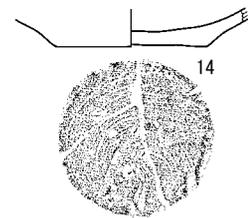
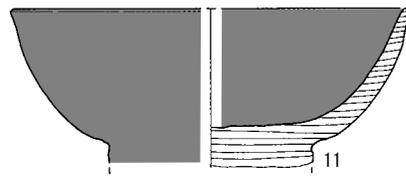
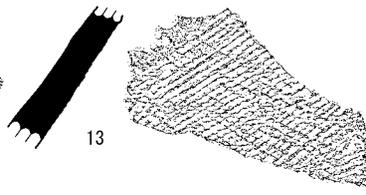
1区 (1)



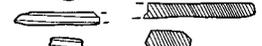
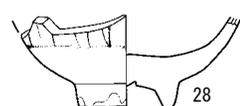
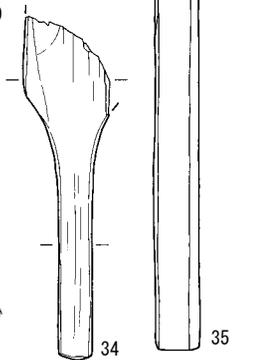
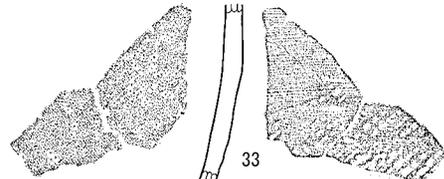
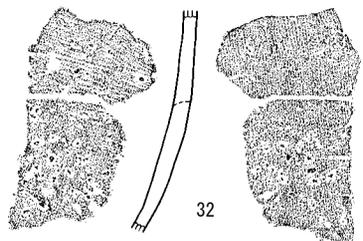
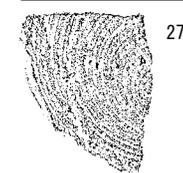
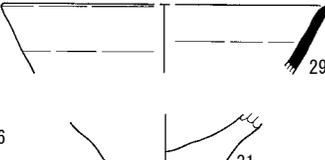
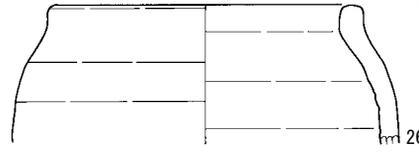
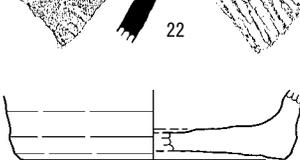
2区 (2~12)



3区 (13~15)



5区 (29~35)





角地田遺跡 遠景（東から）



角地田遺跡 近景（南東から）



角地田遺跡 全景 (真上から)



基本層序② (8C) (南から)



基本層序④ (5C) (南から)



基本層序⑪ (11C) (南から)



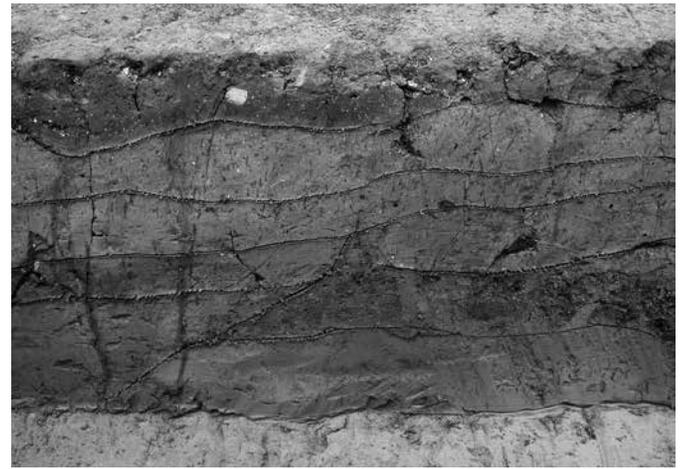
角地田遺跡 近景 (北から)



角地田遺跡 全景 (北東から)



1区 完掘 (南から)



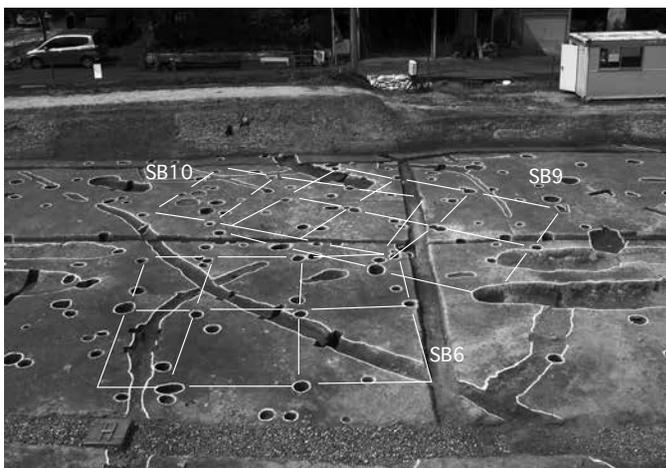
基本層層序⑤ (1区) (南から)



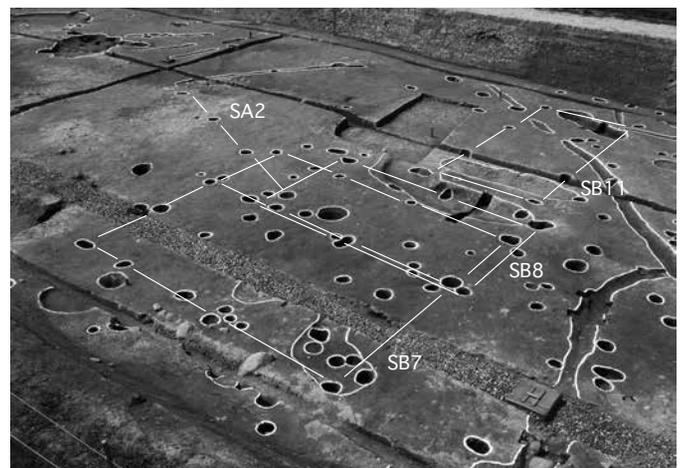
掘立柱建物 (SB1~3) 完掘 (南西から)



掘立柱建物 (SB3~5) 完掘 (南西から)



掘立柱建物 (SB6・9~12) 完掘 (南から)



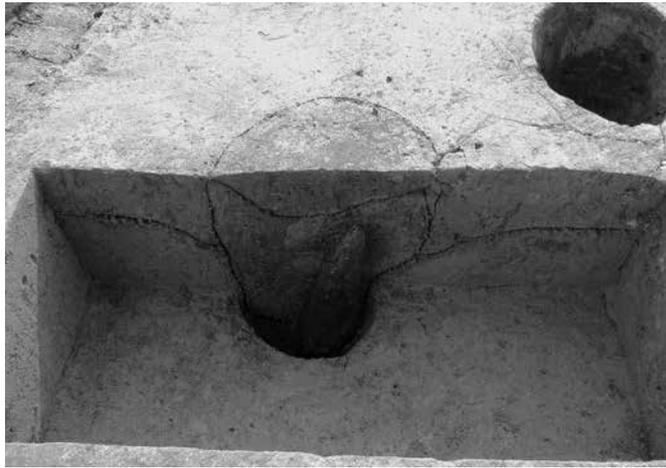
掘立柱建物 (SB7・8) 完掘 (南東から)



掘立柱建物 (SB1~5、SA1) (真上から)



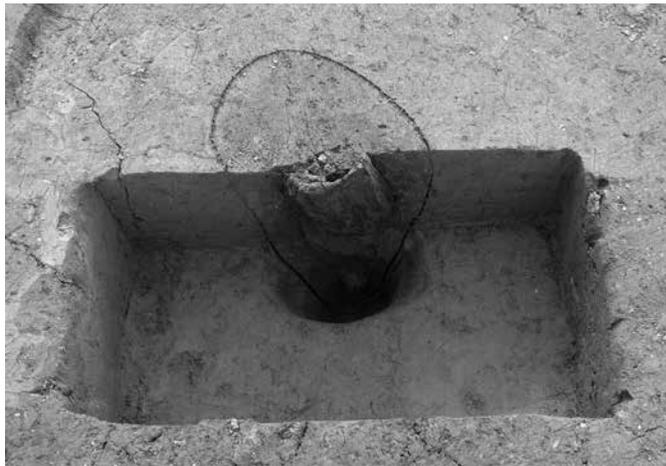
掘立柱建物 (SB6~12) (真上から)



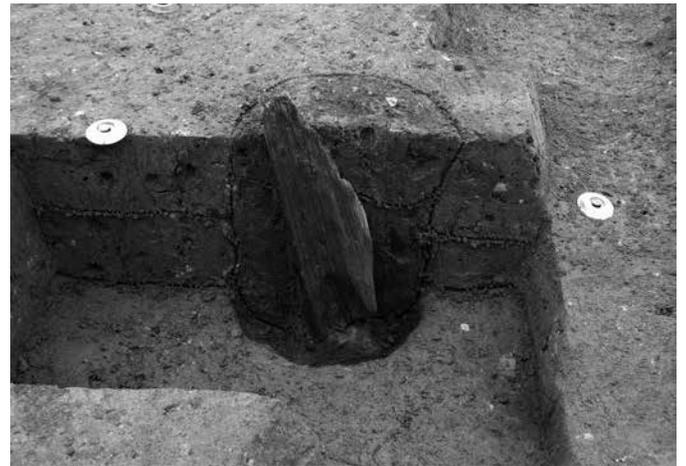
P663 (SB1) 断面 (7-7') (東から)



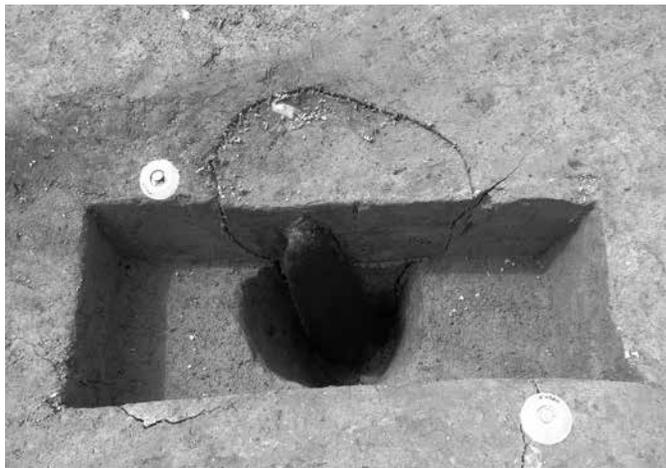
P668 (SB1) 柱根検出状況 (東から)



P638 (SB2) 断面 (東から)



P579 (SB3) 断面 (19-19') (北から)



P809 (SB3) 断面 (20-20') (南東から)



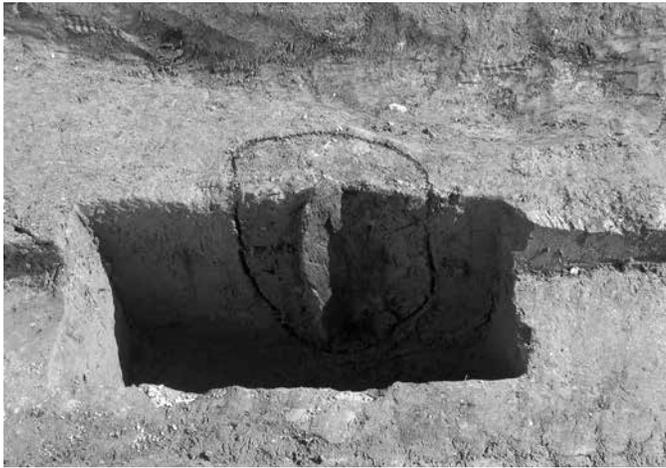
P687 (SB4) 断面 (25-25') (西から)



P896 (SB4) 柱根検出状況 (南東から)



P705 (SB5) 柱根検出状況 (北から)



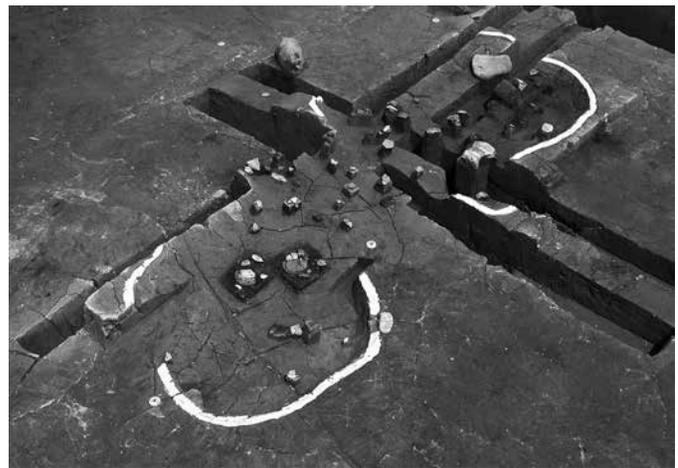
P843 (SB5) 断面 (30-30') (南から)



P266 (SA1) 断面 (16-16') (東から)



SK1 完掘 (南から)



SK1 遺物出土状況 (南東から)



SK1 断面 (60-60') (東から)



SK1 断面 (59-59') (北から)



SK188 完掘 (北西から)



SK188 遺物出土状況 (東から)



SK188 断面 (62-62') (北から)



SK514 完掘 (東から)



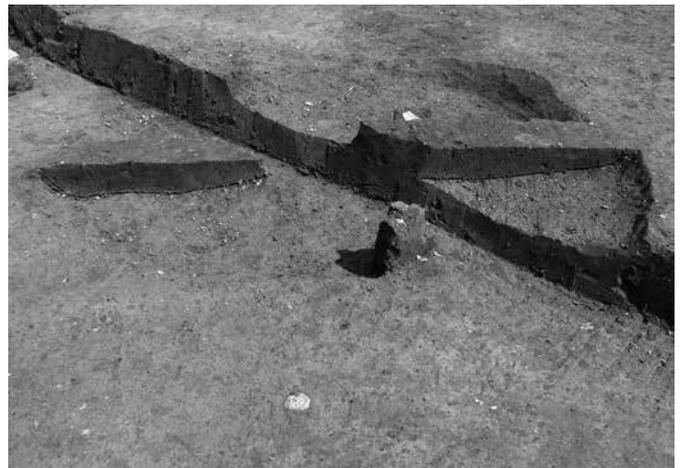
SK514 断面 (63-63') ① (東から)



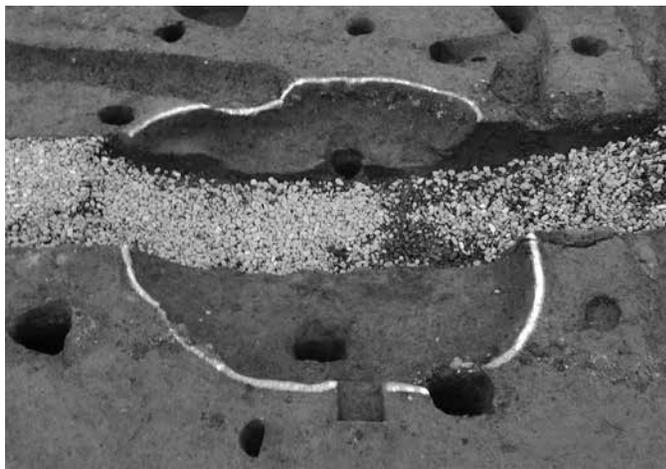
SK514 断面 (63-63') ② (西から)



SK591 完掘 (西南から)



SK591 断面 (65-65') (東から)



SK577 完掘 (北から)



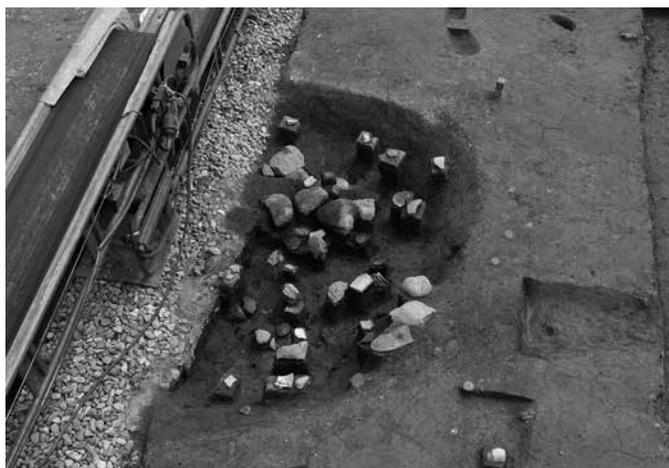
SK577 遺物出土状況 (北東から)



SK577 断面 (66-66') (西から)



SK698 完掘 (北から)



SK698 遺物出土状況 (東から)



SK698 断面 (69-69') (東から)



SS1 完掘 (東南から)



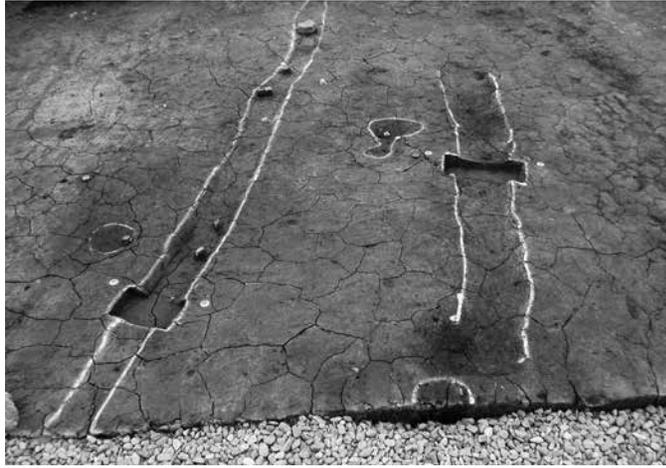
SS2 完掘 (北東から)



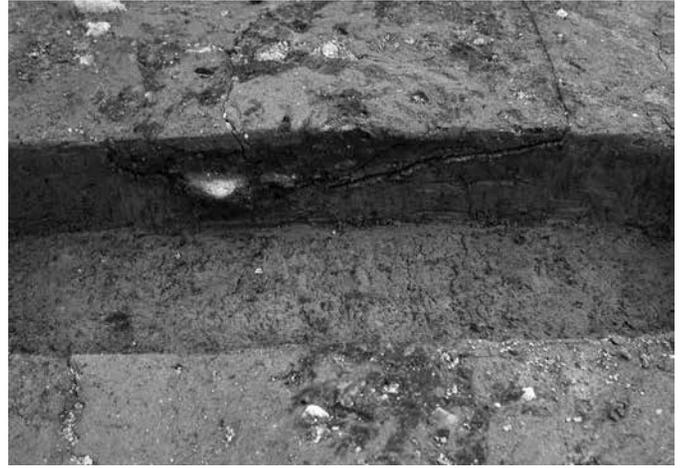
SS2・SD853 断面 (76-76') (北東から)



SS2 検出状況 (SD853覆土内埋没状況) (北東から)



SD11・12 完掘 (南から)



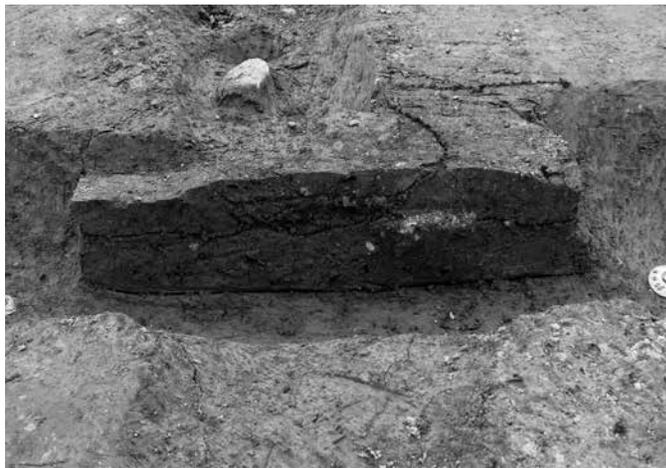
SD14 断面 (80-80') (北から)



SD15・523 完掘 (南東から)



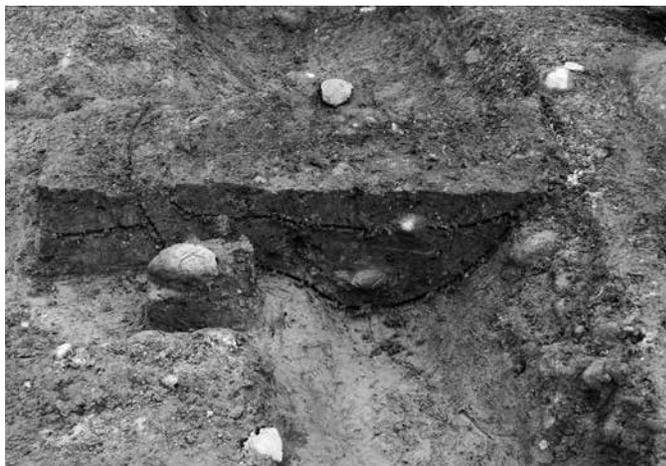
SD15 断面 (81-81') (南から)



SD14・15 断面 (82-82') (北から)



SD15 断面 (83-83') (北から)



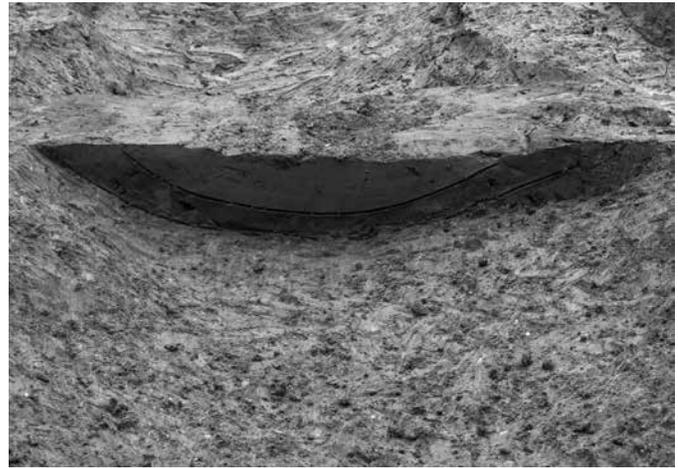
SD15・523 断面 (84-84') (北西から)



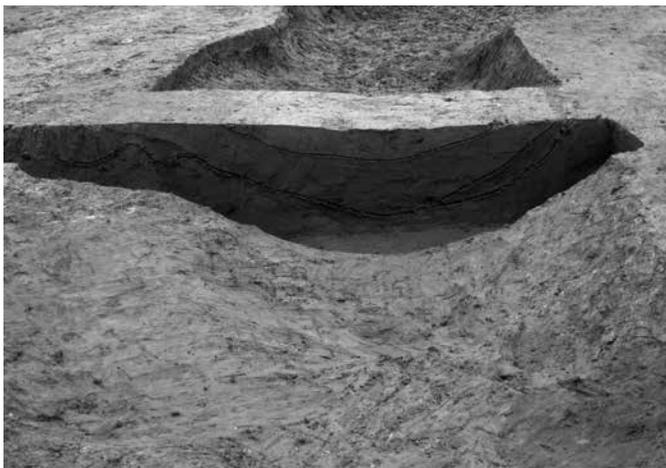
SD221 完掘 (北西から)



SD221・P362 断面 (85-85') (南から)



SD247 断面 (86-86') (東から)



SD248 断面 (87-87') (東から)



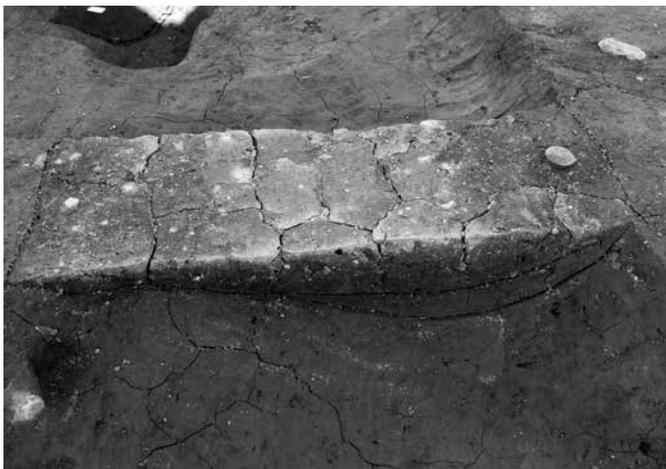
SD521・522 完掘 (南から)



SD521 断面 (88-88') (西から)



SD522 断面 (90-90') (西から)



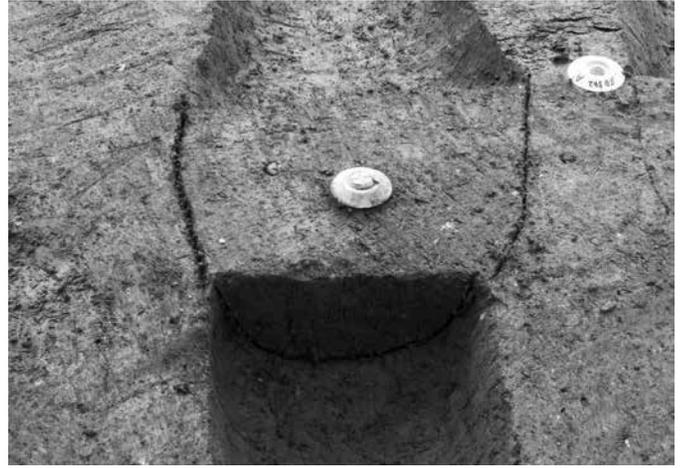
SD548 断面 (89-89') (西から)



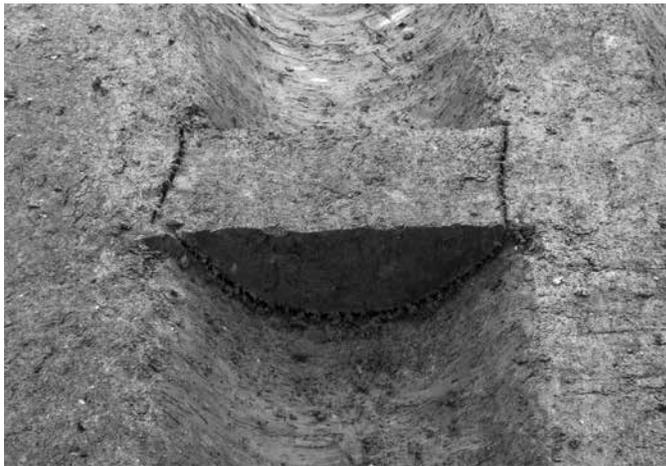
SD523 土鍾出土状況 (東から)



耕作小溝 (SD541~543、571~574) (南西から)



SD541 断面 (93-93') (東から)



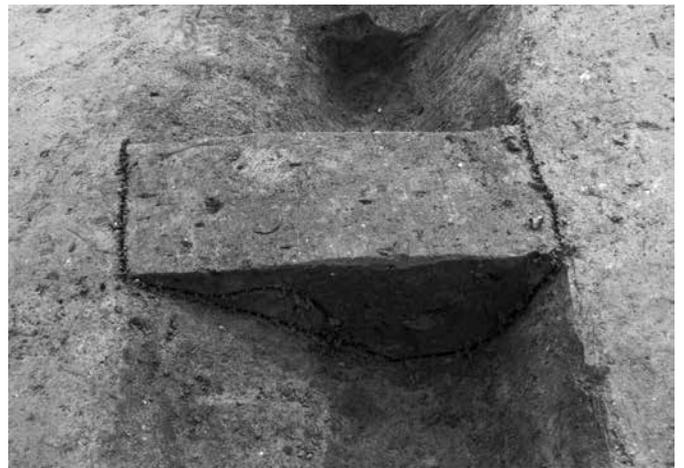
SD571 断面 (94-94') (東から)



SD572 断面 (95-95') (西から)



SD575・572 断面 (97-97') (北から)



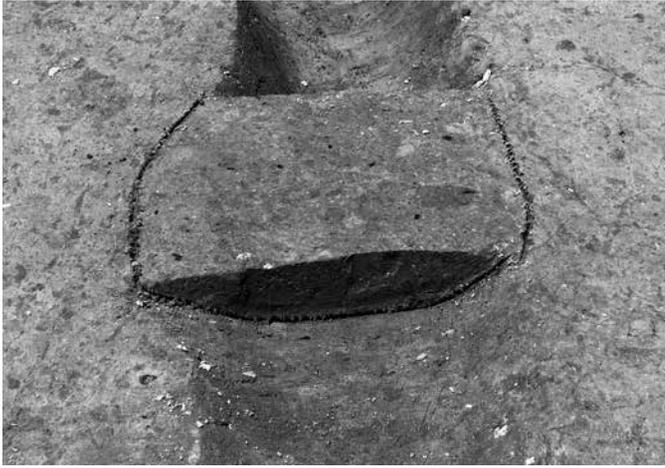
SD576 断面 (98-98') (西から)



SD532・544・545 完掘 (北西から)



SD532 断面 (101-101') (東南から)



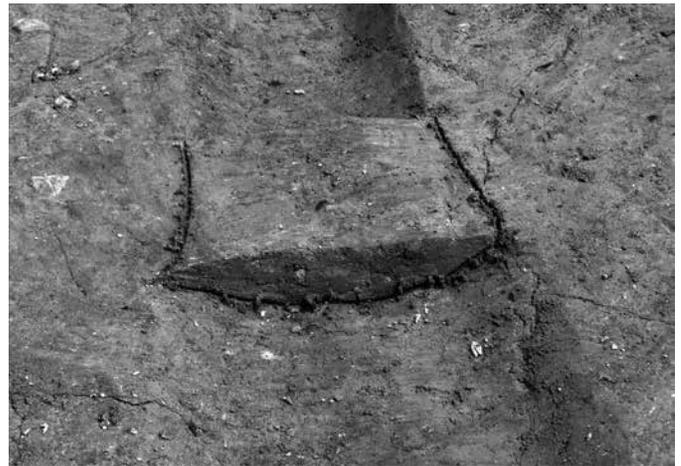
SD545 断面 (102-102') (東から)



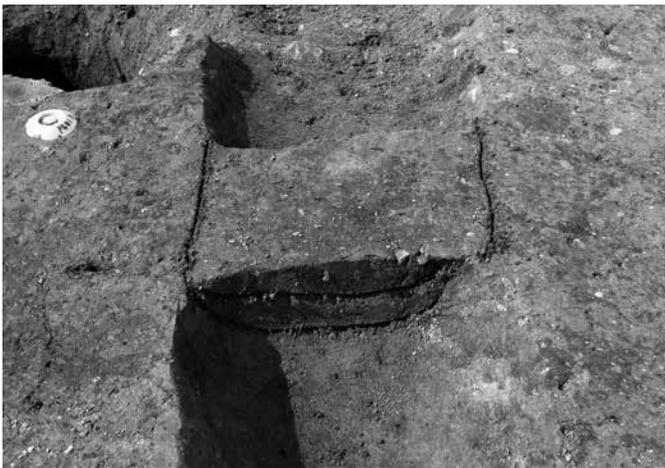
SD550・554・559など 完掘 (南から)



SD550 断面 (103-103') (西から)



SD554 断面 (104-104') (南から)



SD559 断面 (105-105') (南から)



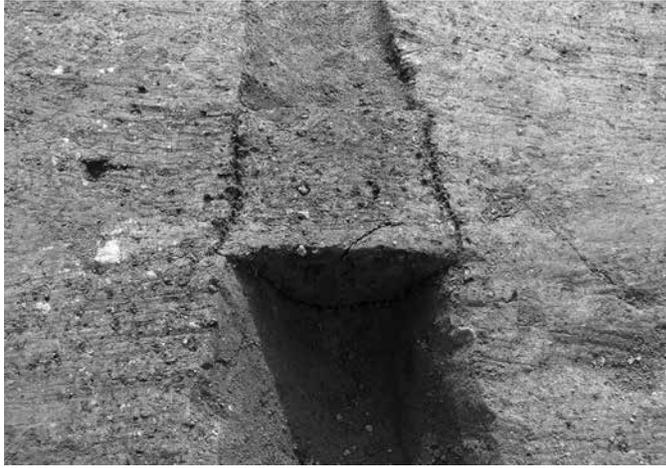
SD646 断面 (106-106') (西から)



SD680・689 断面 (107-107') (南から)



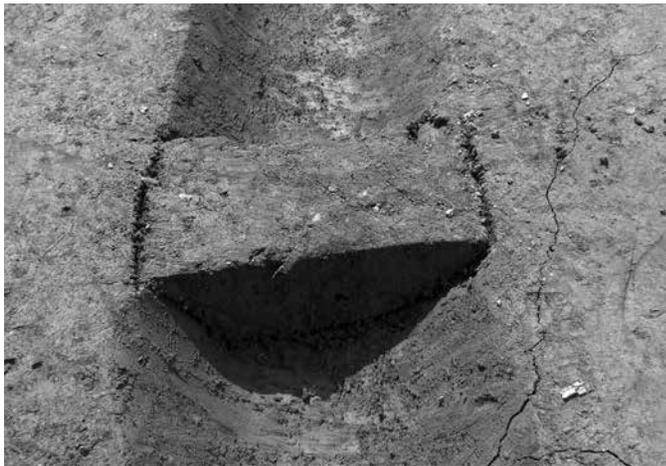
SD689 断面 (108-108') (西から)



SD696 断面 (109-109') (西から)



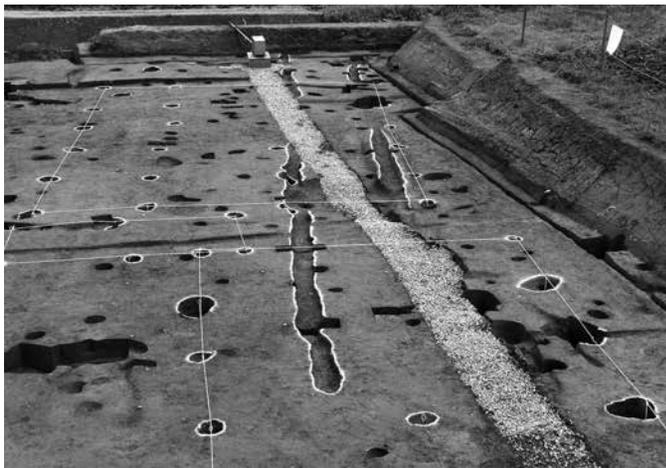
SD699 遺物出土状況 (北西から)



SD697 断面 (71-71') (東から)



SD697・699 断面 (72-72') (北から)



SD867・869 完掘 (西から)



SD869 断面 (111-111') (東から)



SD867 断面 (110-110') (東から)



SD853 断面 (119-119') (北東から)



SD853・728・729 完掘 (南西から)



SD853 遺物出土状況 (南東から)



SD853 断面 (117-117') ① (南から)



SD853 断面 (117-117') ② (南から)



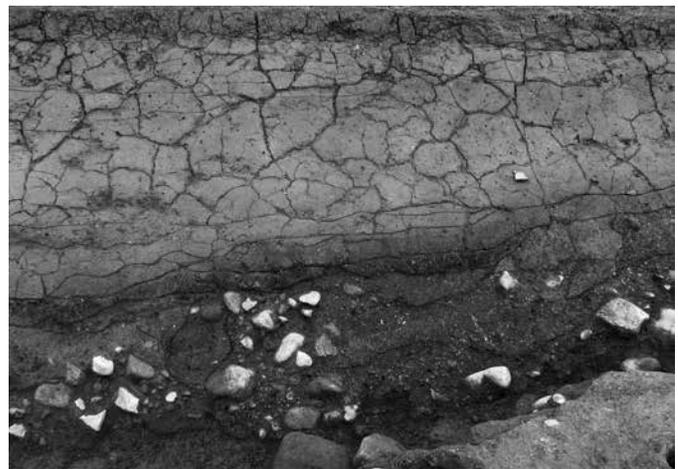
SD853 断面 (117-117') ③ (南から)



SD853 (118-118') (北から)



SD853 断面 (118-118') ① (北から)



SD853 断面 (118-118') ② (北から)



SD728 断面 (115-115') (北から)



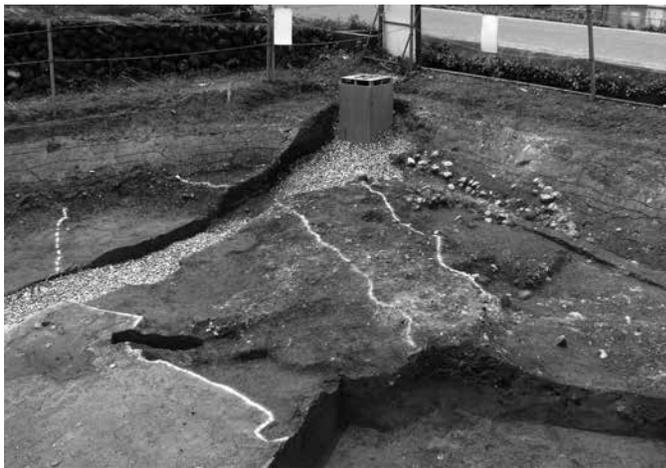
SD729 断面 (116-116') (南から)



SX2 完掘 (南から)



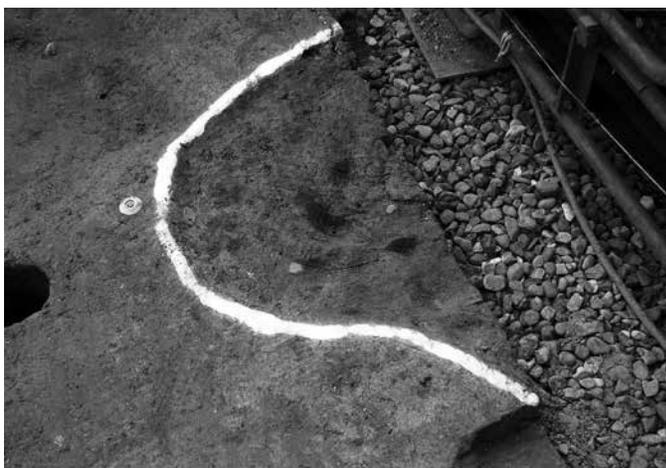
SX2 断面 (120-120') (北から)



SX3 完掘 (北東から)



SX3 断面 (121-121') (東から)



SX17 完掘 (東から)



SX17 断面 (124-124') (東から)



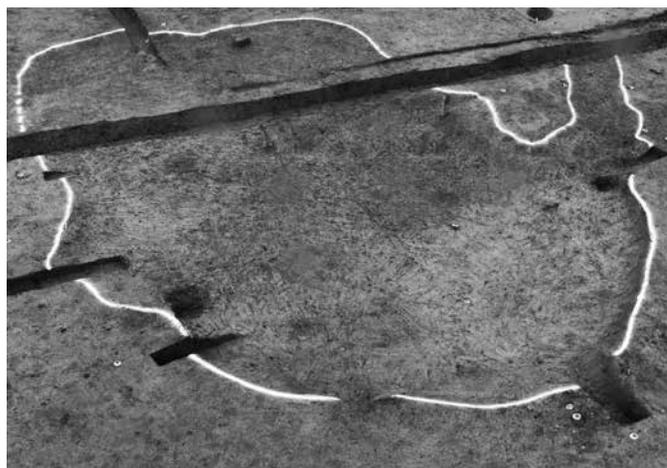
SX18 完掘 (北東から)



SX18 断面 (125-125') (東から)



SX18周辺 出土状況 (北から)



SX102・SD103 完掘 (北東から)



SX102 断面 (127-127') (北東から)



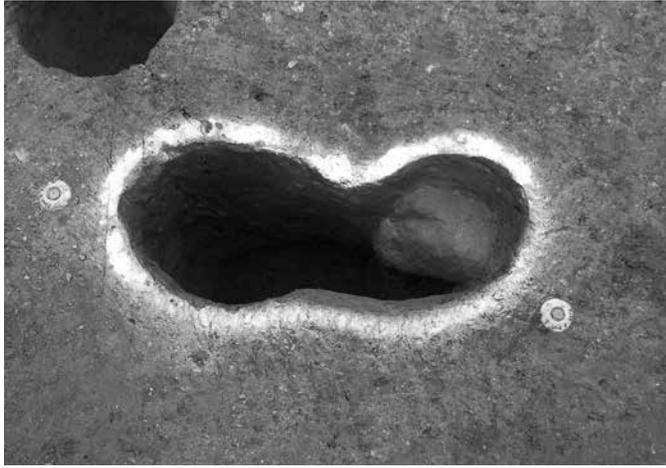
SD103 断面 (129-129') (北から)



SX104 断面 (122-122') (北西から)



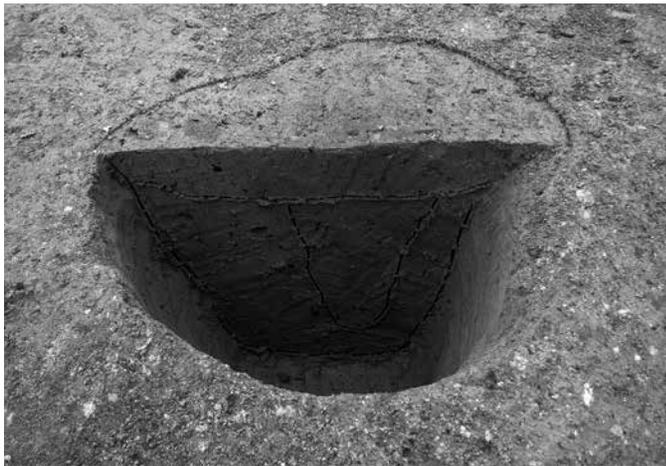
SX647 完掘 (北西から)



P234・307 完掘 (東から)



P256 完掘 (北から)



P512 断面 (135-135') (東から)



P519・SD729 断面 (137-137') (西南から)



P622 断面 (138-138') (西から)



P624 断面 (139-139') (南東から)



P629 礫出土状況 (東から)



P629 断面 (140-140') (東から)



杭 (12~20) 検出状況 (北東から)



杭12~14 断面 (142-142') (東から)



杭15 断面 (143-143') (東から)



杭16・17 断面 (144-144') (西から)



杭18 断面 (145-145') (東から)



杭19 断面 (146-146') (東から)



杭20 断面 (147-147') (東から)



杭23 断面 (149-149') (東から)



杭 (23・24・28・29) 検出状況 (東から)



杭24 断面 (150-150') (東から)



杭28 (151-151') (東から)



杭29 (152-152') (東から)



T1 完掘 (東から)



T2 完掘 (西から)

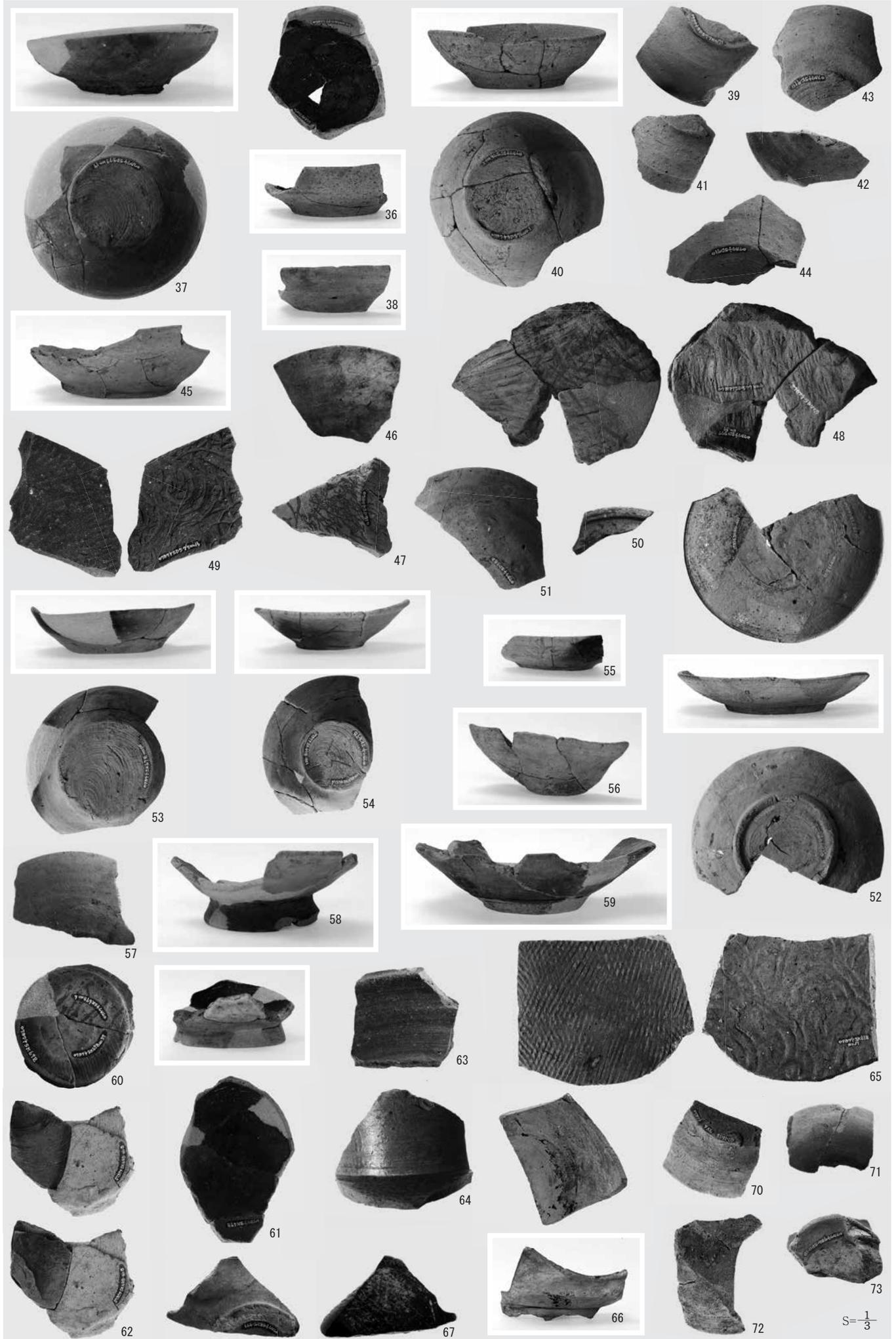


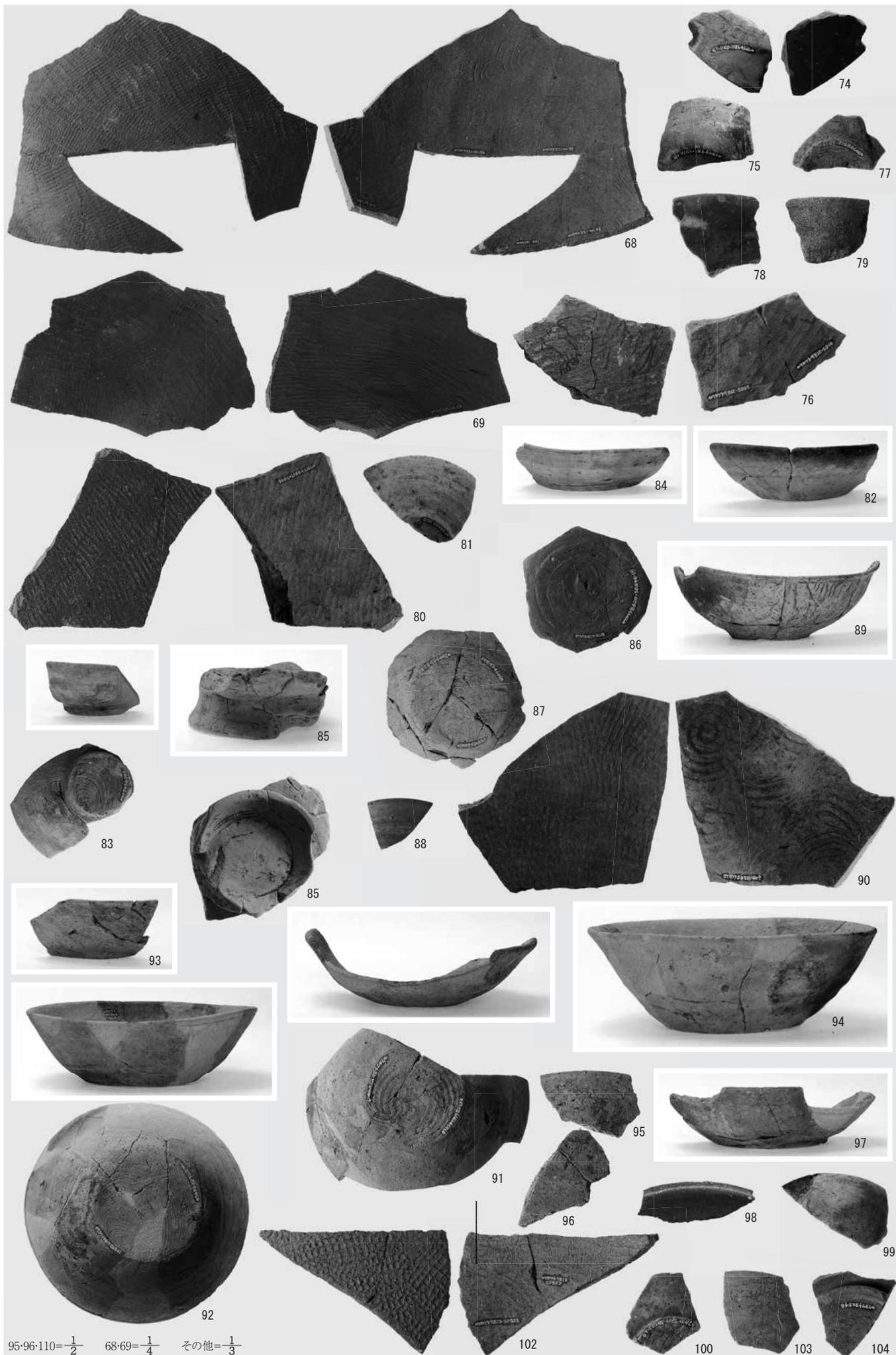
T3 完掘 (西から)



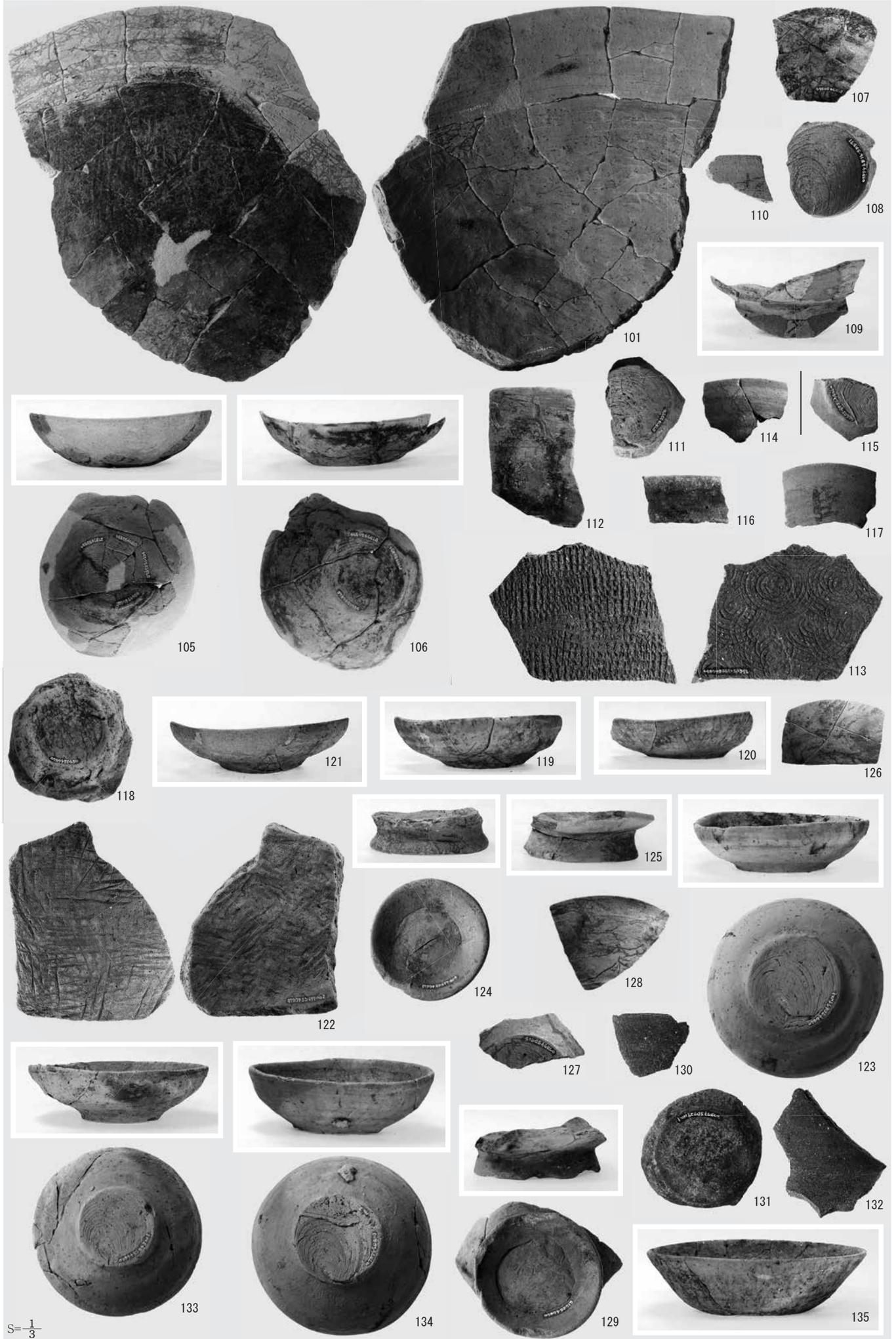
基本層序 (T3) (南から)



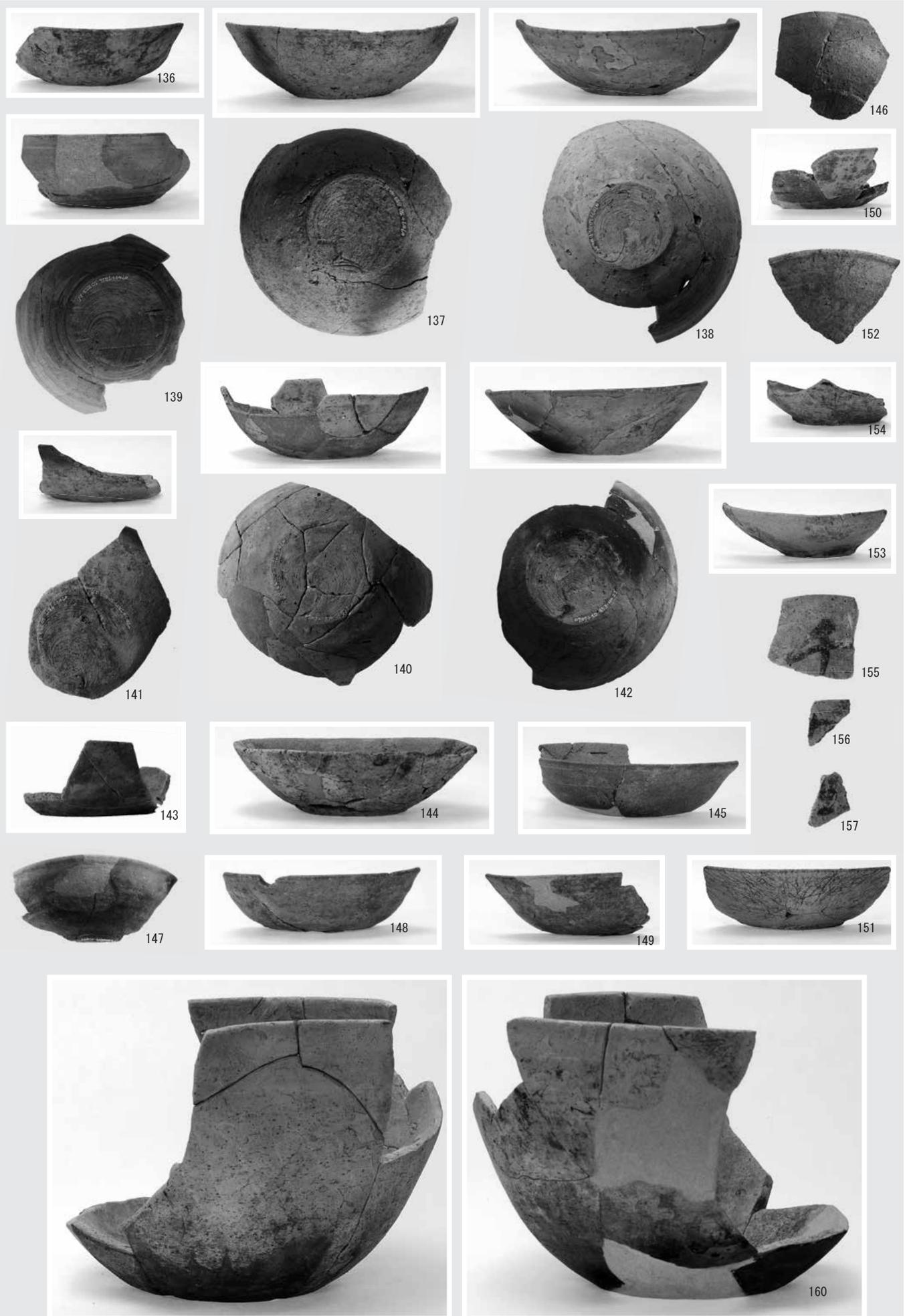




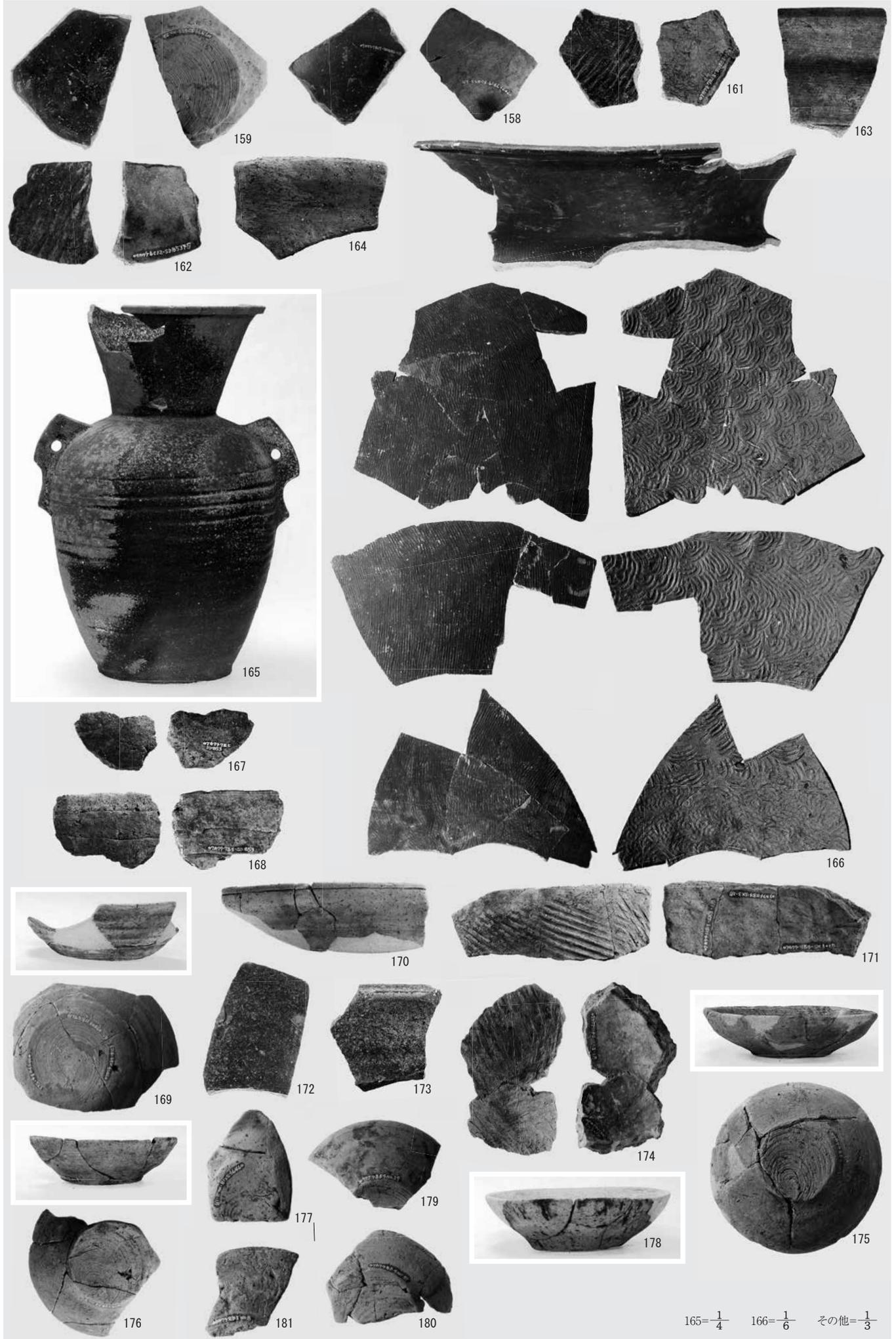
95-96・110 = $\frac{1}{2}$ 68・69 = $\frac{1}{4}$ その他 = $\frac{1}{3}$



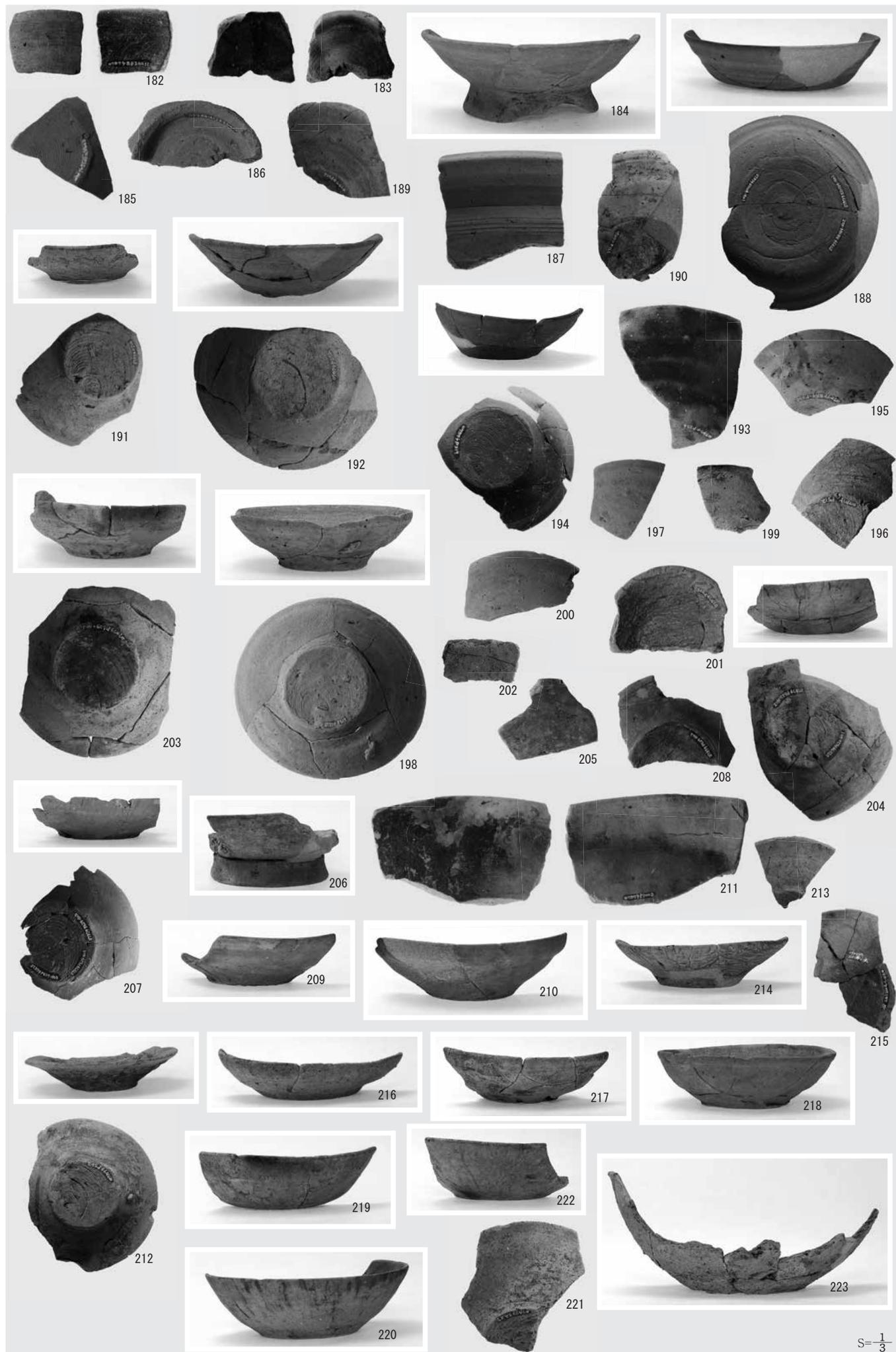
S=1/3

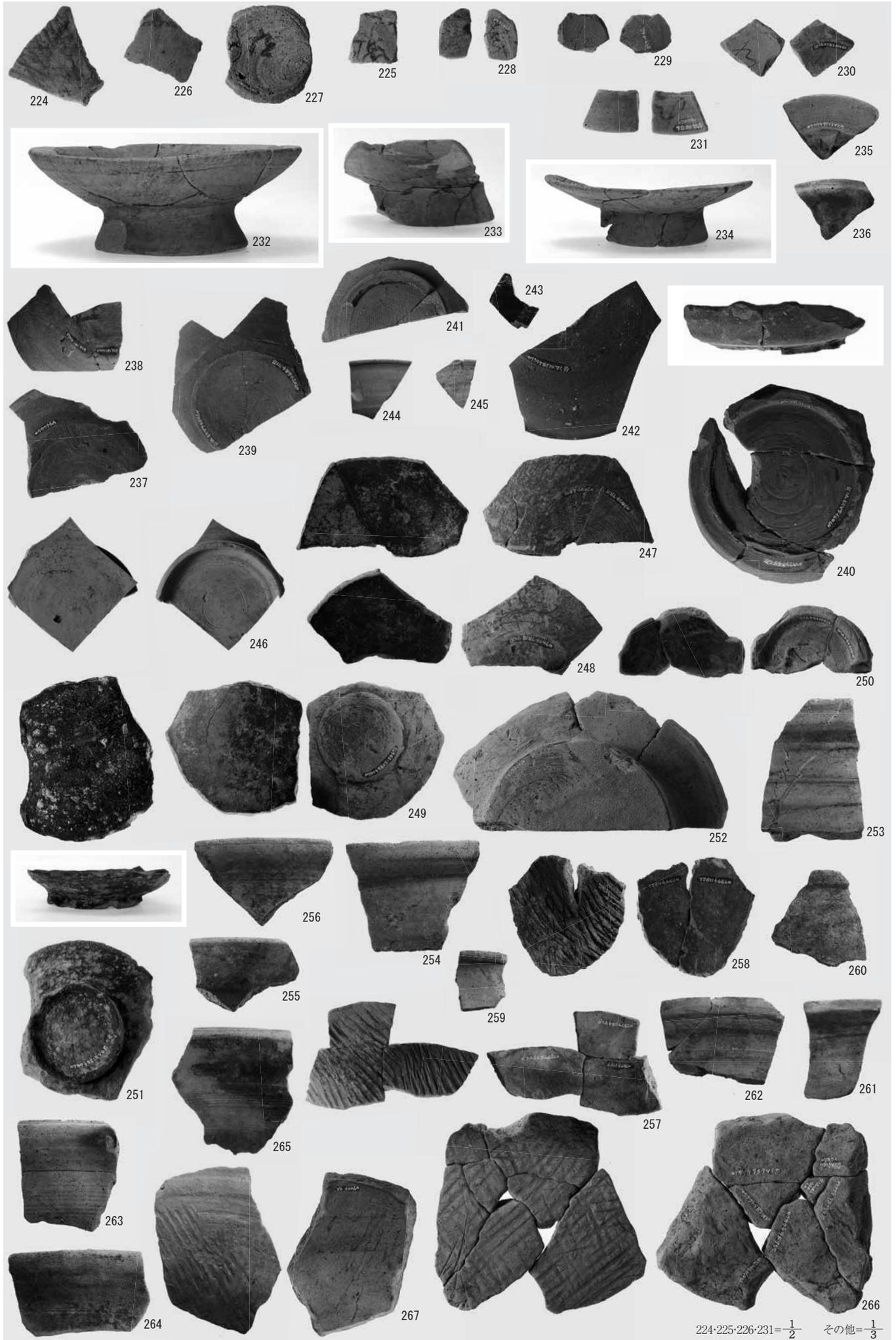


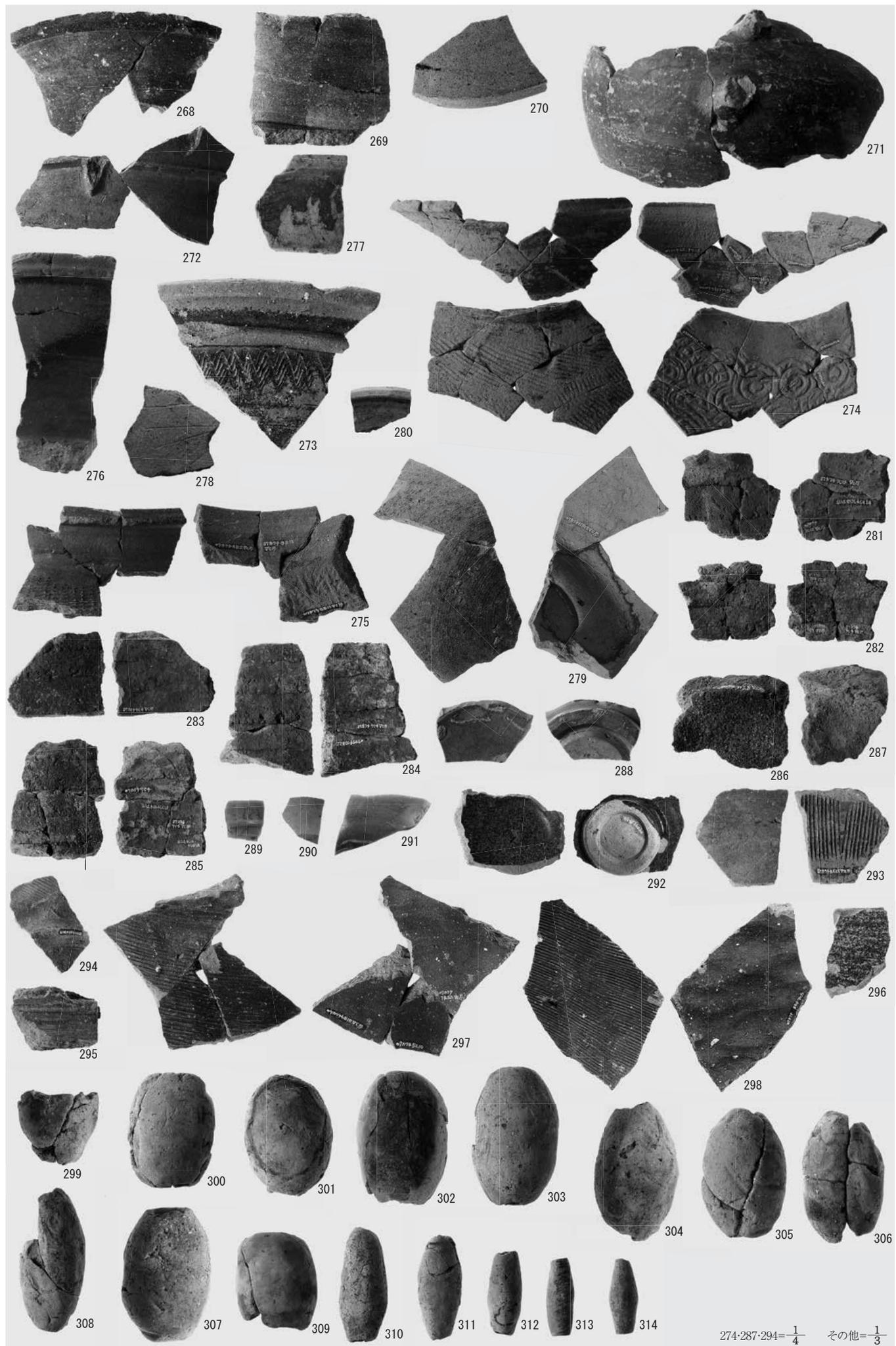
155・156・157 = $\frac{1}{2}$ その他 = $\frac{1}{3}$



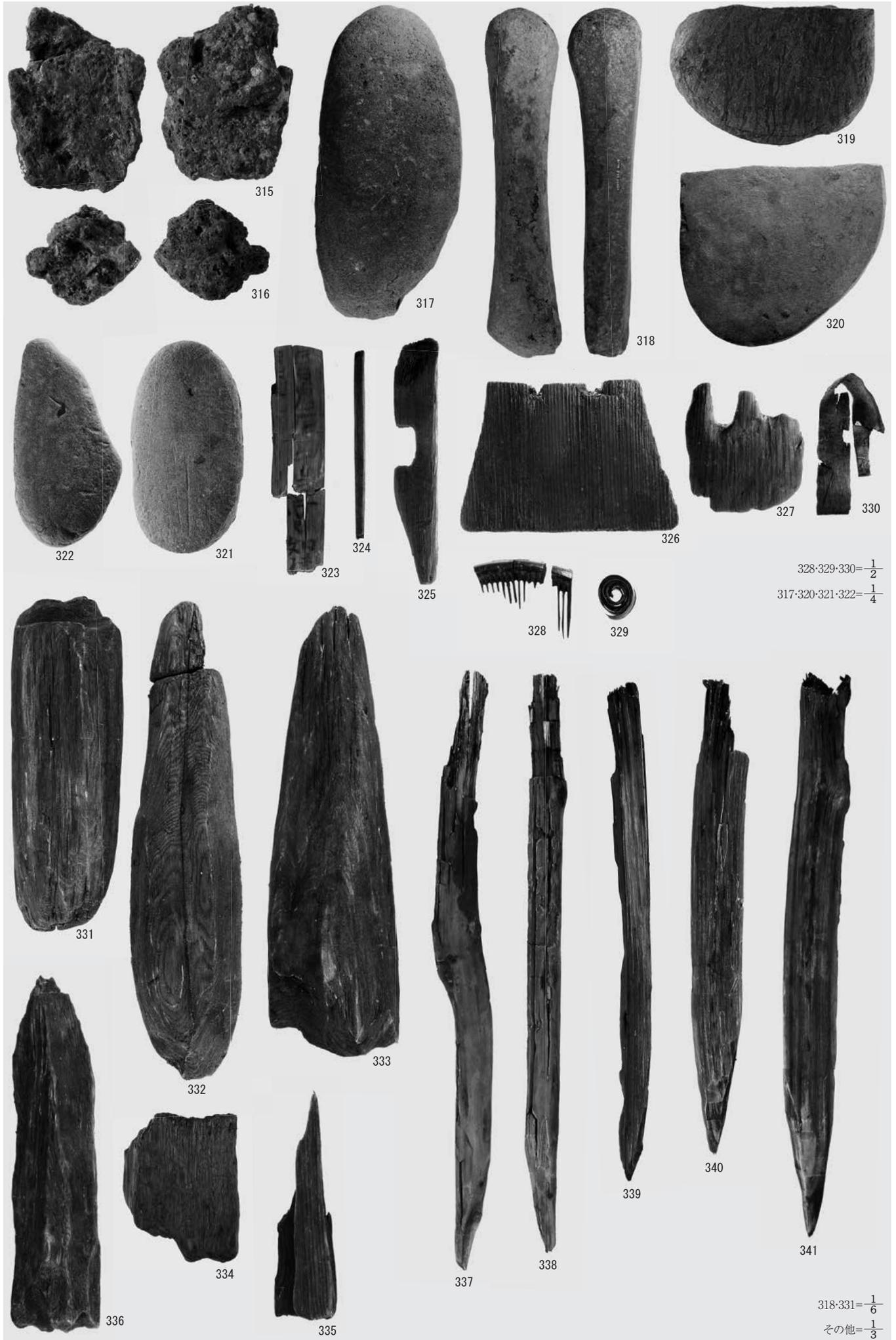
165= $\frac{1}{4}$ 166= $\frac{1}{6}$ その他= $\frac{1}{3}$





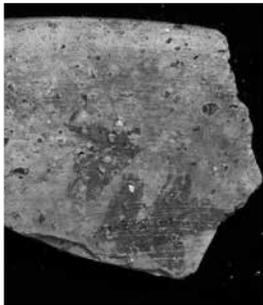


274・287・294 = 1/4 その他 = 1/3

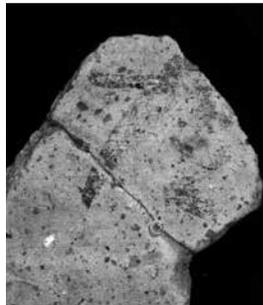


328-329-330 = $\frac{1}{2}$
 317-320-321-322 = $\frac{1}{4}$

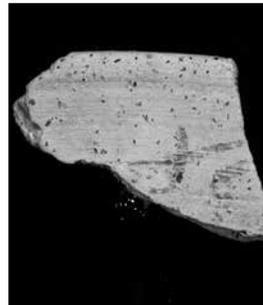
318-331 = $\frac{1}{6}$
 その他 = $\frac{1}{3}$



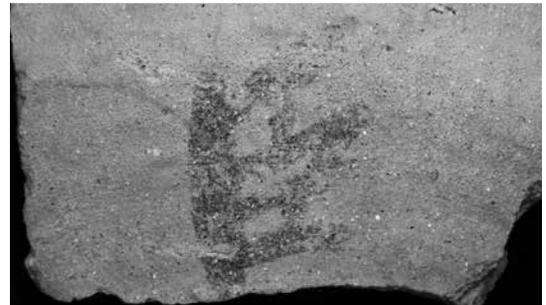
95 「口」



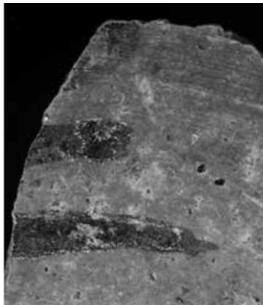
96 「得カ」



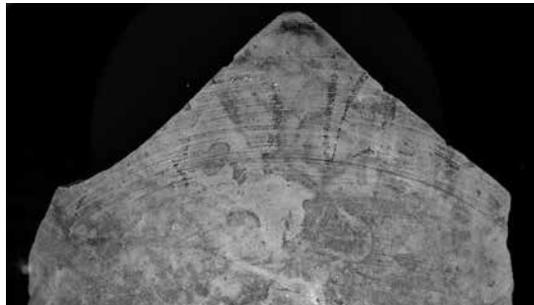
110 「臣カ・得カ」



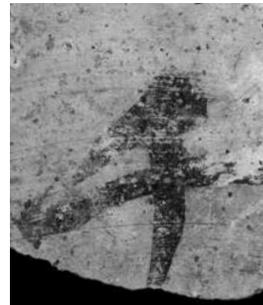
117 「臣」



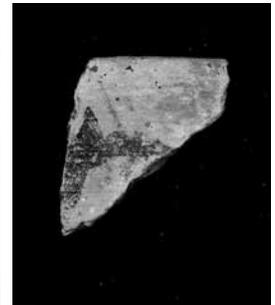
150 「臣カ」



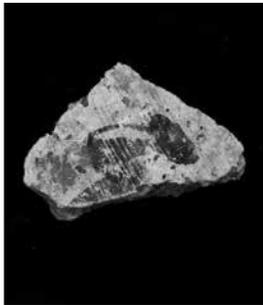
154 「絵もしくは落書などカ」



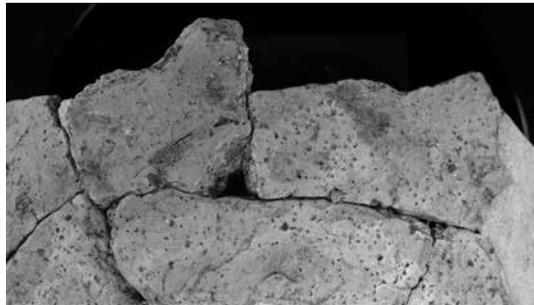
155 「千」



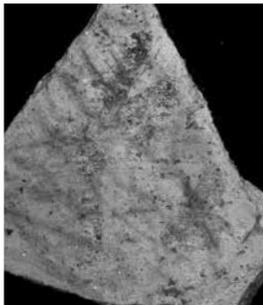
156 「口〔臣カ〕」



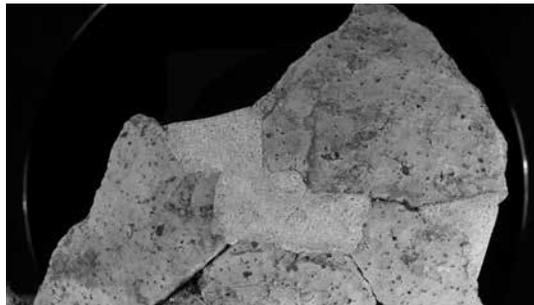
157 「臣カ」



223a 「絵もしくは落書などカ」



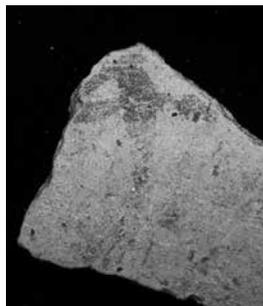
224 「臣カ」



223b 「絵もしくは落書などカ」



225 「臣カ」



226 「千カ」



227 「臣カ」



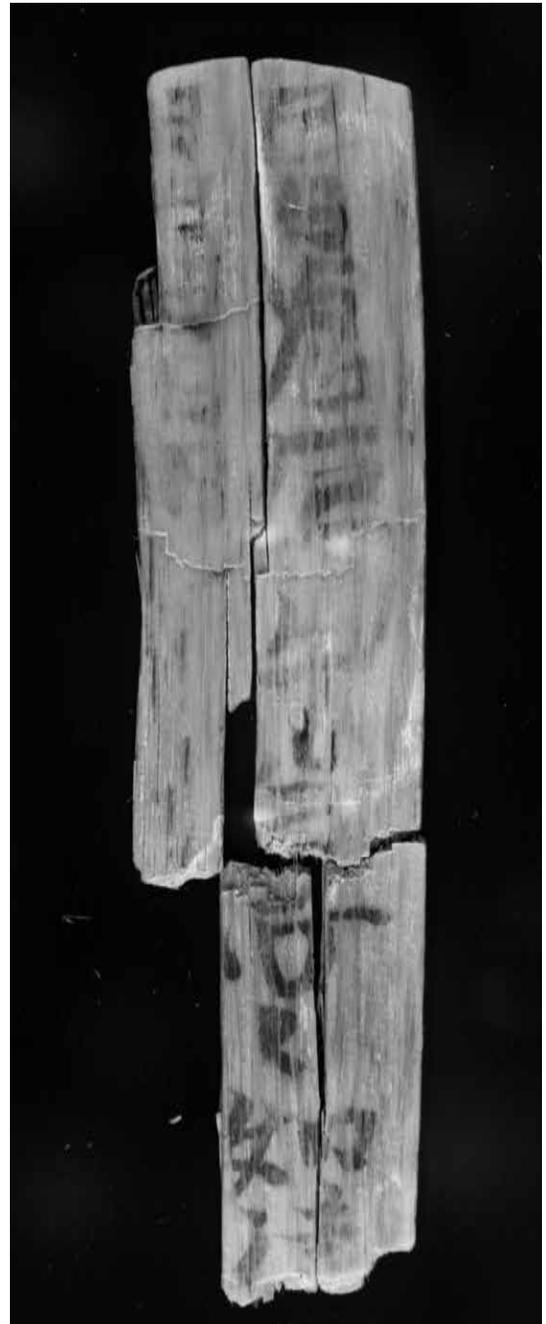
238 「臣カ」



231 「臣カ」



230 「臣カ」



323 「(符籙) 急々如律×」



101区 基本層序 No.5 (北から)



102区 基本層序 No.8 (北から)



102区 遺物出土状況 (東から)



102区 遺物出土状況 (西から)



102区 漆器出土状況 (南から)



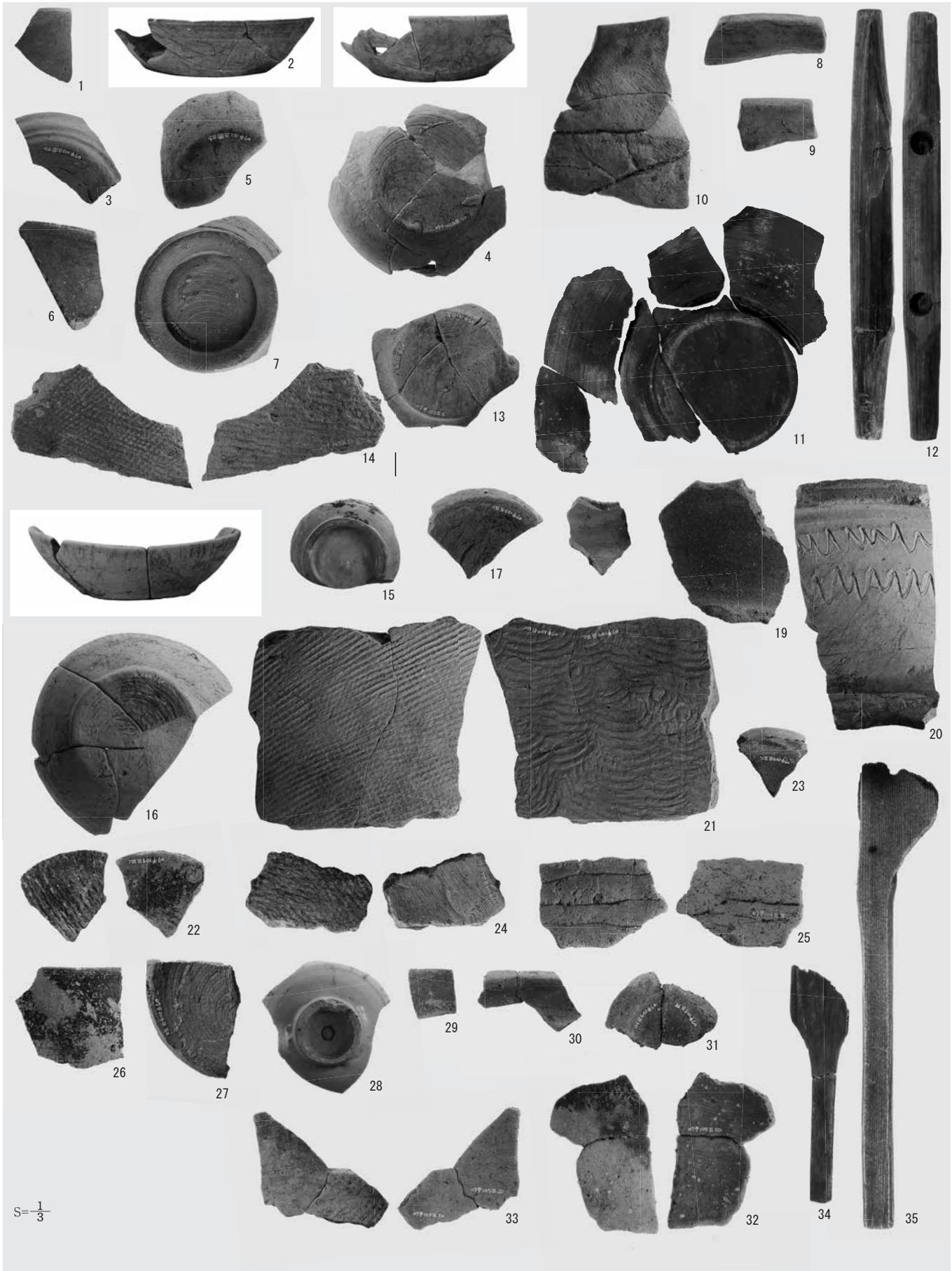
104区 遺物出土状況 (南から)



105区 基本層序 No.3 (東から)



105区 完掘 (東から)



S=1/3

報告書抄録

ふりがな	かくちだいせき たいらいせき							
書名	角地田遺跡 平遺跡							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
巻次	IX							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第191集							
編著者名	實川順一・長澤展生・桑原 健（以上、株式会社みくに考古学研究所）・高橋保雄・田中一穂（以上、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）・斉藤崇人・馬場健司・高橋 敦（以上、バリノ・サーヴェイ株式会社）							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社みくに考古学研究所							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒949-6437 新潟県南魚沼市中野23番地1 TEL 025 (782) 4550 株式会社みくに考古学研究所							
発行年月日	西暦2009（平成21）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かくちだいせき 角地田遺跡	にいがたけん いと いがわし おお 新潟県 糸魚川市 大 あざ おみ あざ きのした 字 小見字 木ノ下132 ばん ち 番地 1 ほか	15216	217	37度 05分 08秒	138度 00分 14秒	20079501) 20070906	2,135㎡	北陸新幹線 建設
たいらい 平遺跡	にいがたけん いと いがわし おお 新潟県 糸魚川市 大 あざ おみ あざ よこまくら ばん 字 小見字 横枕258番 ち 地ほか	15216	243	37度 05分 11秒	138度 00分 45秒	220070515) 20070801	700㎡	北陸新幹線 建設
所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
角地田遺跡	集落跡	古代	掘立柱建物(12棟)柵(2基) 土坑(15基) 溝(101基) 性格不明遺構(8基) 配石遺構(2基) 柱穴(363基)	土師器(碗、甕、鍋、鉢ほか) 須恵器(杯、甕、双耳瓶ほか) 黒色土器(碗、皿) 灰釉陶器(碗、皿、瓶) 緑釉陶器(皿) 青磁(碗) 製塩土器・管状土錘 鉄関連遺物(碗形鍛冶滓) 石製品(砥石) 木製品(差歯下駄、櫛ほか)		土師器小碗・小皿などの食膳具 越州窯系青磁碗 佐渡小泊産須恵器 頸城丘陵産須恵器 呪符木簡 「臣」墨書土器(遺跡所在地の地名である小見の可能性が有る)		
	散布地	中世		珠洲焼(甕、壺、鉢) 瀬戸・美濃焼(天目茶碗) 青磁(碗)・白磁(碗)				
平遺跡	散布地	古代、中・近世		土師器、須恵器、越中瀬戸伊万里焼、木製品				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第191集 北陸新幹線関係発掘調査報告書IX 角地田遺跡・平遺跡	
平成21年3月30日印刷 平成21年3月31日発行	発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1 電話 025 (285) 5511 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986
印刷・製本	株式会社第一印刷所 〒940-0864 長岡市川崎5丁目442番地1 電話 0258 (34) 6300

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第191集『角地田遺跡 平遺跡』 正誤表追加2

2021年11月追加

	位置	誤	正
図版56	上から5段目	84	82
図版56	上から5段目	82	84
図版66	上から3段目	13	14
図版66	上から3段目	14	13

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第191集『角地田遺跡 平遺跡』 正誤表追加

2019年9月追加

頁	位置	誤	正
抄録	平遺跡 東経	138度00分45秒	138度00分36秒
抄録	角地田遺跡 調査期間	20079501～	20070501～
抄録	平遺跡 調査期間	220070515～	20070515～

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第191集 『角地田遺跡 平遺跡』 正誤表

頁	行	誤	正
57P	上から10 行目	至徳寺遺跡の資料群	一之口東遺跡や至徳寺遺跡の資料群
57P	上から11 行目	11世紀前半の遺構群 (No.188・476遺構)	11世紀前半の遺構群 (一之口東遺跡SD1 1・2層、至徳寺遺跡No.188・476遺構)